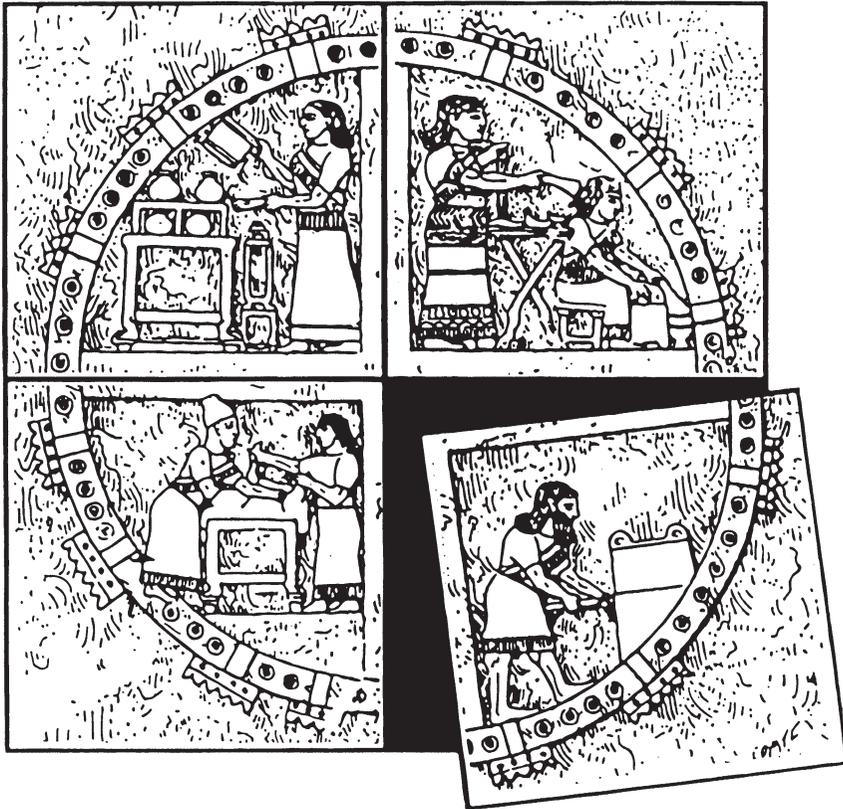


日本女子大学 総合研究所紀要

24



目 次

日本女子大学・附属校の服装規範の変遷

—女子学生の服装と制服、イギリス、フランスの「女らしさ」と比較して—

The Transformation of Sartorial Rules in the Affiliated High School of

Japan Women's University: A Study of School Uniforms and Comparison with British
and French Femininity

……………研究課題 (68) 研究代表者 坂 井 妙 子 …… 1

日本女子大学の草創期における欧米思想の受容

—女性の自立と平和の結びつきをめぐって—

Western Thought and the Foundation of Japan Women's University:

A Study of Women's Independence and Peace

……………研究課題 (70) 研究代表者 高 梨 博 子 …… 63

アジアの女性の自立に向けた調査研究

—家政学からのアプローチ—

Asian Women's Independence through the Perspective of Home Economics

……………研究課題 (71) 研究代表者 天 野 晴 子 …… 141

日本女子大学・附属校の服装規範の変遷
—女子学生の服装と制服、イギリス、
フランスの「女らしさ」と比較して—

The Transformation of Sartorial Rules in the Affiliated High School of
Japan Women's University: A Study of School Uniforms and Comparison with
British and French Femininity

坂井 妙子 SAKAI Taeko
(日本女子大学人間社会学部教授)

佐々井 啓 SASAI Kei
(日本女子大学名誉教授)

三神 和子 MIKAMI Yasuko
(日本女子大学名誉教授)

米今 由紀子 KOMIIMA Yukiko
(日本女子大学家政学部非常勤講師)

佐藤 恭子 SATO Kyoko
(岩手県立大学盛岡短期大学部准教授)

鈴木 幹子 SUZUKI Mikiko
(日本女子大学附属中学校教諭)

目 次

日本女子大学・附属校の服装規範の変遷 —女子学生の服装と制服、イギリス、フランスの「女らしさ」と比較して	坂井 妙子
I 研究の概要	坂井 妙子
II 19世紀イギリスの女子学生の制服 —色彩論から	坂井 妙子
III 日本女子大学校・附属高等女学校の服装 —アメリカのセーラー服の影響—	佐々井 啓
IV 吉屋信子『花物語』 —〈少女〉の精神的制服	三神 和子
V 少女雑誌にみる女学生の服装規範について	米今由紀子
VI フランス女子教育における服装規範の役割	佐藤 恭子
VII 附属校における服装規定について —セーラー服への思い	鈴木 幹子

日本女子大学・附属校の服装規範の変遷
女子学生の服装と制服、イギリス、フランスの「女らしさ」と比較して

The Transformation of Sartorial Rules in the Affiliated High School of
Japan Women's University: A Study of School Uniforms and
Comparison with British and French Femininity

坂井 妙子
SAKAI Taeko

2018年4月より三年間、女学生の服装を「女らしさ」から研究してきた。研究の中心は日本女子大学・附属校の制服規範の変遷であるが、日本よりも早く女学校に制服が導入されたイギリスやフランスとの比較を行うことで、様々な知見を得てきた。中でも、講演をお願いした講師の先生方（2018年度：日本大学商学部准教授、刑部芳則先生、2019年度：お茶の水女子大学生活科学部准教授、難波知子先生、2020年度：東京家政学院大学現代生活学部助教、太田茜先生）との懇談は刺激的で、まだまだ掘り当てていない宝の山がこの研究領域にあることがわかった。本報告書はしたがって、3年間の研究成果であると同時に、さらに先へ進むための土台であり、今後、それぞれの研究員が精進することを前提としている。以下、各研究員の研究項目を挙げておく。佐々井、米今、鈴木は日本女子大学・附属校の制服の調査を含む日本を中心に、三神は少女文化、坂井は1900年代までのイギリスの女学校を担当し、佐藤がフランスの女学校を調査した。佐々井は上記に加え、アメリカの女学校の制服も調査した。

19世紀イギリスの女子学生の制服 —色彩論から—

Girl's School Uniforms in Nineteenth-century Britain —Based on the Colour Theory—

坂井 妙子
SAKAI Taeko

1. はじめに

イギリスの女子学生の制服については、1975年に B.T. Batsford から出版されたエリザベス・ユーイングによる著書、『ウィミン・イン・ユニフォーム』で概略されている。ユーイングによると、イギリスでは女子学生の制服は19世紀後半に現れ、以下の3つの影響が大きいという¹⁾。1 孤児院の制服、2 服装改革との関係、3 男性服の影響。これらはそれぞれ独立しているわけではなく、主に「効率」という点で共通する。ここで言う効率とは、動きやすさ、低価格、メンテナンスのしやすさ（経済性）、そして量産しやすさである。さらに、制服は他のグループや社会層との差別化を図るために、女子学生の間にも導入されたことが指摘されている。

上記3点の中で、2 服装改革 (Dress reform) との関係は佐々井研究員、米今研究員がすでに研究を行っている²⁾。したがって、本研究では1と3を、ヴィクトリア朝期の「女らしさ」で重視されていた色彩論との関係から考察する。

2. イギリス人の色彩音痴と色彩論学習の重要性

まず、なぜ色彩論が「女らしさ」と結びつくのか説明する必要があるだろう。やや突飛に聞こえるかもしれないが、これはイギリス人の色彩コンプレックスと深く関わる。実は、19世紀半ばごろのイギリス人は自他共に認める色彩音痴だった。これを克服する有効な手段として、色彩論を系統立てて学ぶことが盛んに説かれた³⁾。広く知られた例としては、イギリス人の文筆家、メアリ・フィラデルフィア・メリフィールド (1804~89) が1851年に著したエッセイ、「色のハーモニー」を挙げることができる。このエッセイは『クリスタルパレス展覧会、イラスト付きカタログ』(1851年)⁴⁾に寄稿したものである。周知の通り、クリスタルパレス展覧会とは大英博覧会のことで、1851年に世界で初めて行われた万博である。イギリスの工業的発展を世界中に喧伝する役割を担っていた。

メリフィールドは、この博覧会に出品されたイギリスの工業製品を見て、次のように説いた。イギリス人は科学、芸術の両方で他国に優るが、色のアレンジに関しては、特にフランスと比べて、劣る。これを克服するためには、製造業者が色のコントラストやハーモニーの法則を学ぶ必要がある⁵⁾。具体的には、ミッシェル・ウジェーヌ・シェブルールの色彩論⁶⁾を学ぶべきであると主張した。シェブルールはフランス人で、染料化学者であり、色彩論の専門家である。メリフィールドはイギリス人の色彩音痴を素直に認めた上で、フランス人であるシェブルールの著書を参考に、イギリスでよく見られる悪い配色例、同じ色を使った改善例を示すなどした。図1右が「不愉快な色のコンビネーション」。左が「コントラストの法則」にしたがって、色をアレンジし直した例である(図1)。さらに、色のコントラストとコンビネーションの法則を学習し、実行することで、恩恵を



図1 不愉快な色のコンビネーションと改善例

得る産業は多岐にわたると主張する。服飾、家具産業、卸売り、小売業に携わる人々、室内装飾業者、家屋塗装業者、室内塗装業者、壁貼師、彼等の下で働く職人たちなどである⁷⁾。実際に商品を生産したりサービスを提供する労働者の色彩感覚の向上も期待できると考えたようだ。

シェプルーの色彩論はイギリスの工業製品改善のために参照されただけでなく、1850年代以降、広く英米のファッション誌にも取り上げられ、英語で書かれた配色のアドバイスにも影響を与えたと言われている⁸⁾。19世紀後半に出版されたイギリスのエチケツブックやファッション誌でよく見かけるアドバイスとは、次のようなものである。

色調や色合いを選ぶという立ち入った問題を思いきって持ち出すならば、あなた自身の〔年齢と顔色に合う〕色に注意を払うべきでしょう。色白の人は、大変若い場合を除き、明るい色に身を任せてはいけません⁹⁾。

顔色が悪く、もはや若くはない人には、ピンクは苦しい。健康的な色艶がないことを蔑むからだ¹⁰⁾。

明るい顔色でない人は、グリーンを試すべきではない。明るい色は着る人の顔色を悪く見せる¹¹⁾。

特定の顔色にふさわしい色とそうではない色をわかりやすく解説している。そして、いずれのアドバイスでも、女性を若く、美しく、感じよく見せるために、色彩論を援用している。別の言い方をすれば、当時理想とされていた「女らしさ」を効果的に示すために、色彩論が使われたのである。

以上、概略ではあるが、シェプルーの色彩論が19世紀後半におけるイギリス人の色彩教育、さらには女性らしさの実践に役立てられたことがわかった。したがって、色彩論が女子学生の着るも

のの色にも影響を与えたと推測することは妥当と思われる。

3. シェブルールの色彩論における制服の色

では、シェブルールの色彩論を具体的に考察しよう。彼が制服の色について論じたのは第3部、第1章「紳士服の配色について」の項においてである。特に、経済性を重視している。

周知のように、制服というものは長期に亘って着用され、見る人々から品格よく感じられるような様々な配色や服地で構成されている。もしもある制服が単色の無地でも、切り替えがらの配色でも、どこか肘なり身頃なり、全体を構成する一部分が損耗した時には、それと同色の服地で補修しなければならない。するとその部分には、よかれあしかれ色彩対比による現象が必然的に現れざるをえない。(中略) その結果、どんなカラーコーディネートが制服にとって、大きな経済的なメリットがあるかを考察したい¹²⁾。

上記を踏まえ、個々の配色の説明が続くが、本研究に関係する部分を抜き出すと、1「補色色相による制服の配色法」、2「補色色相でない場合の極めて対照的な色相で配色した制服」、3「単色と白による配色の制服について」、4「2色配色の制服に白を組み合わせる方法」である。1では、赤と緑の補色関係からはじまり、橙系と青系、青紫系と黄緑系、紺系と橙黄系の組み合わせの効果を説明し、単色の無地よりも経済性に優れていると結論する。しかし、青系に関して、次のように注意を促している。

ただ唯一の欠点は、青紫系の耐候性にある。この色はコチニール（動物性染料の紅色）と、インディゴ（植物性のインド藍）の混合槽で染められるが、あまり明るく浅いトーンにすると、変褪色の悪影響が出やすいので、青紫系はなるべく深い色調に仕上げるべきである¹³⁾。

濃紺が薄い青紫系よりも損耗による色落ちが目立たず、優れていると指摘している。

次に2では、青と黄、青と赤、緑と黄の組み合わせが推薦される。例えば、青と黄の組み合わせでは、「この2つの色相は極めて相性がよく、お互いの調和感が高い」¹⁴⁾、青と赤の組み合わせでは、「ディープ・ブルーと朱赤系の組み合わせは、制服にとって好ましい配色である。」¹⁵⁾と指摘する。3「単色と白による配色の制服について」でも、「赤、橙、黄、緑、青、青紫の各色相に白を合わせる2色配色の提示法は、制服の配色に対しても適性が高く、何も付け加える点もないほど効果的である」¹⁶⁾と述べ、太鼓判を押している。

しかし、シェブルールがふさわしいと主張するこれらの配色は、男性用の制服である点を留意しなければならない。では、女性服の配色に関して、彼はどのように分析しているだろうか。男性の制服に続く第2章で、主に肌の色合いと顔映りから論じている。例えば、現在でも女学生の制服に採用されることが多い紺（シェブルールでは青）、または黒と顔色の相性を逆引きすると、次のように解説されている。

青いドレス：青は、肌色を橙系に染める色である。したがって、青い服を着れば、色白の人や、かなり明るい肌色の人には好ましい強調効果がある。特に、オレンジ系の明るい肌色の人にとっては、かなり血色の良い健康肌に見せることができる。ブロンドの髪の女性にとっても、

青系統はよく映えるであろう。だが、ブルネットの場合は、すでに髪色の中にオレンジ色を十分含んでいるため、それをあえて青系統で強調する必要はないであろう¹⁷⁾。

黒いドレス：黒いドレスは、それと配色されるどんな有彩色でも、トーンを低減させて濃いめに見せる傾向がある。ただ、色味のあまり目立たない肌色に対しては、かなり色白に見せる効果が期待できる¹⁸⁾。

19世紀後半のイギリスでは、色白で肌のキメが細かく、血色が良いことが美しさの基準になっていた¹⁹⁾、青いドレスは若く健康な白人女性に多いであろう「かなり明るい肌色」を一層美しく見せる効果があったと思われる。黒いドレスは顔色が特別悪い場合を除けば、色白に見せる効果が期待できる。

4. 初期の女学校と孤児院の制服の色

前節までの知識を踏まえ、初期の有名女学校、孤児院の制服の配色を分析する。もっとも、初期の女学校では通学服ではなく、体操着として着用されたことをあらかじめ断っておく。まず、1890年にノース・ロンドン・コレジエイト・スクール²⁰⁾を卒業したある生徒は、「ブルーのジャージ、スカート、幅の広い赤のサッシュを胴に結んで、とても誇りにしていた²¹⁾」と回想している。また、同校で同年に開かれた運動会では、「少女はそれぞれ、膝までの明るい色のスカート、白のブラウスをウエストでゆったりベルトで締め、青いストライプが入った帽子は芸術系の生徒、赤いストライプが入った帽子は科学系の生徒が被った²²⁾」とも記録されている。青と赤の組み合わせ、また、単色に白を組み合わせることは、先に見たシェブルールの色彩論（男性用の制服）で推奨された配色である。

ノース・ロンドン・コレジエイト・スクールと同時期に開校したチェルトナム・レディース・カレッジも先進的な女子教育を行った女学校として有名だが²³⁾、同校で導入された最初の制服は「ネイビーのスカートと白いブラウス²⁴⁾」だった。また、サリー州にあったセント・モニカ校に通っていたベラ・ブリテンは、1909年当時、「冬はグリーンのフランネル製ブラウス、夏は白のフランネル製ブラウスに長いネイビー・ブルーのスカート²⁵⁾」を履いたと回想している。もっとも、20世紀に入っても、学校がスクールカラーを指定することに反対する親がいたことは指摘しておく。マンチェスター高等女学校の校長だったサラ・バースタルは1902年になってもまだ、「母親の中にはスクールカラーは娘の顔色に合わないと言うものもいたし、制服を慈善学校の印と考えて、社会的零落として反対する人もいた。」²⁶⁾と書いている。

しかし、白と青／紺の組み合わせは女学生の制服の配色として、益々認知されるようになっていった。進歩的な少女向けの雑誌『ガールズ・レラム』(Nov. 1900-Apr. 1901)は仮装用衣装として、女学生の制服——学士の標準的な帽子とガウン——は「色が欠けているために、あまり素敵に見えない」が、演劇等のポスターを参照して作った「青と白色のドレス」には「そのような欠点は見当たらない」ので、これを大いに勧めている。

例えば、スカートは白い布製で、裾周りを青布、またはお好みならばリボンで縁取る。ボディスは少し開き気味で薄いブルーででき、白い折り返し（襟）は首回りを可愛らしく包む。カレッジ・ガウンは白のシルク製で、薄いピンクの裏地付き。首回りには清教徒のような控えめなカ



図2 リードナム孤児院の少女たち

ラーが付き、小さなタッセルで留める。頭には、ピンクのタッセルがついた、粋な青い角帽を被る²⁷⁾。

白と青を基調にした衣服一式を、典型的な女学生の制服と捉えている。しかも、仮装用衣装として着るに値する話題性、人気があったと推測できる。先に見た通り、青いドレスは若く健康的な女性を美しくみせた。また、単色と白の組み合わせは「他に何も付け加える点もないほど効率的である」とシェブルールは勧めていた。白と青／紺の配色はしたがって、女子学生にとって「女らしさ」の理想に叶うだけでなく、制服に求められた効率をも実現する。

ところで、ユーイングはチェルトナム・レディース・カレッジが導入した「ネイビーのスカートと白いブラウス」を「女性の制服はまだ、男性（の制服）をコピーしていた」²⁸⁾と評している。しかし、色彩論の議論を踏まえると、この配色の女学生の制服は経済性という点で男性服から援用すると同時に、女性らしさを積極的に演出してもいたのである。このことは1900年代の人々にとって、新しい発見であったにちがいない。だからこそ、仮装用衣装にまでなって人気を得たのであろう。

孤児院の制服でも状況は同じである。ロンドンのイーストエンド、ホワイトチャペルにあったリードナム孤児院（Reedham Orphanage）では、同院に収容された女兒にホッケー用の制服（the Hockey dresses）を着用させていた。『ガールズ・レルム』誌（1912年）の記事は、以下のように報告している。

彼女らはとてもござっぱりして、スポーツマンのようなホッケー用ドレスを着ていた。それは濃紺のサージ製で、同色のブラウス、黄色の刺繍を少し付けることで[印象]を和らげている。O.R.のモノグラムがついたスクールバッジも黄色で施されている。少女たちは自分で作ったので、このホッケー用ドレスにとっても誇りを持っている²⁹⁾。(図2)

濃紺単色に、黄色の刺繍とモノグラムを組み合わせさせた制服は、先に見たシェブルールの色彩論に叶っている。クラークによると、青は最も安価な染料であるために、慈善学校の制服の色として選

ばれたともいうから³⁰⁾、価格の面でも理想的だったと考えられる。

5. まとめ

以上、色彩論から女学校の制服の色を考察した。当時の写真はモノクロなので、記述に頼るしかなく、思うように資料が集まらなかったが、それでもなお、女学校に制服を導入する際に、男性の制服の延長として、色彩論的な効果（経済性、効率）が組み込まれただけでなく、若い女性の美しさを引き立てる配色を考慮したと推測できる。濃紺のスカートに白いブラウス、赤や黄色、水色のライン、モノグラムが入った女子校の制服は現在まで引き続き着用され、また、女学生のアイデンティティと深く結びついている。特定の色の組み合わせが生き残ったのは偶然ではなく、色彩論を女性の新しい衣服にも援用することで生み出された複合的な産物と見るべきだろう。

註

- 1) Elizabeth Ewing, *Women in Uniform* (B.T. Batsford, 1975), pp. 68-80.
- 2) 佐々井啓、「19世紀末イギリスの服飾観—ダンディと新しい女」『日本家政学会誌』第66巻6号、2015年6月、262-271頁。米今由紀子、「19世紀後期イギリスにおける合理服協会の衣服改革」『日本家政学会誌』第59巻5号、2008年5月、313-139頁。
- 3) 坂井妙子『メイド服とレインコート』（勁草書房、2019年）、35-39頁。
- 4) Mary Philadelphia Merrifield, “The Harmony of Colours”, *The Crystal Palace Exhibition Illustrated Catalogue* (1851), pp. I~VIII.
- 5) *Ibid.*, p. I.
- 6) Michel Eugene Chevreul, *De la loi du contraste simultané des couleurs et de l'assortiment des objects colours* (1839) E. M. シェプルー、佐藤邦夫訳『シェプルー色彩の調和と配色のすべて』（青娥書房、2009年）。
- 7) Merrifield, op. cit., pp. I~IV.
- 8) Charlotte Nicklas, “One Essential Thing to Learn is Colour,” *Journal of Design History*, vol. 27 No. 3 (2014), pp. 218-236.
- 9) Anon, *How to Dress on £15 a Year* (Frederick Warne & Co., 1873), p. 13.
- 10) Anon, *Beauty, What It Is and How to Retain It* (Frederick Warne & Co., 1873), p. 102.
- 11) “Dress and Fashion,” *The Queen* (29 Mar. 1883), p. 353.
- 12) シェプルー、前掲書、214頁。
- 13) 前掲書、216頁。
- 14) 前掲書、216頁。
- 15) 前掲書、217頁。
- 16) 前掲書、218頁。
- 17) 前掲書、229頁。
- 18) 前掲書、230頁。
- 19) 坂井妙子、『レディーの赤面』（勁草書房、2019年）、103-111頁。
- 20) ノース・ロンドン・コレジエイト・スクールは1850年4月に、フランシス・メアリー・バスによってロンドン、カムデンタウンで創立された。
- 21) Ewing (1975), op. cit., p. 69.
- 22) *Ibid.*, pp. 69-70.
- 23) チェルトナム・レディース・カレッジは1853年に「少女のために健全なアカデミック教育を授ける」ことを目的に創立された。
- 24) Ewing (1975), op. cit., p. 71.

- 25) V. Brittain, *Testament of Youth, An Autobiographical Study of the Years 1900-1925* (Victor Gollancz Ltd., 1933), p. 34; Katrina Rolley ed., *Fashion in Photographs 1900-1920* (NPG, 1992), p. 53.
- 26) Elizabeth Ewing, *History of Children's Costume* (B.T. Batsford, 1982), p. 124.
- 27) Beatrice Barham, "The Delights of Fancy Dress," *The Girls' Realm* (Nov. 1900-Apr. 1901), p. 247.
- 28) Ewing (1975), op. cit., p. 71.
- 29) *The Girls Realm* (1912), p. 473.
- 30) Jennifer Craik, *Uniforms Exposed* (Berg, 2005), p. 59; Vivienne Richmond, *Clothing the Poor in Nineteenth-century England* (Cambridge UP, 2013), p. 246より引用。

日本女子大学校・附属高等女学校の服装 —アメリカのセーラー服の影響—

Students' clothes in Japan Women's University and the girls' high school
affiliated with J.W.U: The influence of sailor suits in the United States

佐々井 啓
SASAI Kei

1. はじめに

当時の一般的な女学生の服装であった着物に袴から、セーラー服が女学生の制服として採用されたのは、大正10（1921）年9月であるとするに指摘されている¹⁾。

日本女子大学校と附属高等女学校においては、創立時からの服装についてのさまざまな資料が残されている。そこで、本学では、どのような過程で着物から洋服へと変化していったのか、本学独自の教育理念とのかかわりにおいて検討する。

はじめに、セーラー服の着装の過程をアメリカの雑誌から明らかにし、次いで、本学の附属高等女学校にセーラー服が導入された経緯を、運動会に着装されていた体操服に着目し、考察する。

2. アメリカにおけるセーラー服

日本の女学校にセーラー服が最初に導入されたのは、金城女学校と福岡女学校である。導入のきっかけは、金城女学校はアメリカ人校主事務取扱の娘たちが着ていたセーラー服を生徒たちが自主製作して用いていたことから制服に採用されることになったといわれている。また、福岡女学校では、アメリカ人宣教師である女性校長が、運動をする際に自ら愛用していたセーラー服を生徒たちに導入したことがきっかけであるという²⁾。

このように、アメリカではセーラー服が運動服や通学服として用いられていたことから、セーラー服が日本に導入される以前のアメリカの実情について、当時の家庭向け女性雑誌の記事を以下の3点に分類し、検討する。

1) 男児・女兒のセーラー服

セーラー服は、本来海軍の水兵の制服として用いられていたものである。V字型の衿開きで四角く大きな衿が後ろに垂れる形で、実用的な目的を持っていると言われている。子供服として最初に注目された少年用のセーラー服は、19世紀後半のイギリスで皇太子が着装したことから流行するようになった、と指摘されている。やがてそれがイギリスの男児の衣服として流行したのである³⁾。とりわけ1880年代からは女性誌でセーラー服が取り上げられ、少女用もデザインされるようになったことがわかる。アメリカでも男児のセーラー服がまず流行し、1890年ごろには、いくつかの雑誌に少年のセーラー服が登場する。

図1は1892年2月にゴディズ・レディズ・ブック⁴⁾に掲載されたセーラー服姿の少年である。説明には、「ネイビー・ブルーの布で作られた少年用セーラー・スーツ」とあり、「ジャケットは白い衿があり、アンダーブラウスがついている」とある。アメリカにおいても同じような傾向がみら

れたが、今回調査した女性誌では1900年まではほぼ少年用のセーラー服であった。

図2は、1894年4月にヴォーグ⁵⁾に掲載されたセーラー服姿の少年の写真である。著名な家族の写真などにセーラー服を着ている少年がみられ、しだいに図3、図4のようにイラストで紹介される機会が多くなる。

女兒のセーラー服は、図5のように、戸外での活動に適した服装として普及する。これはヴォーグのパターンとして販売された形であり、ブラウスは衿とカフスにブレードが付き、胸当てには錨のマークがあつて、濃い色のタイが結ばれる。細かいプリーツのあるスカートが活動的な印象を与えている。図6は、レディズ・ホーム・ジャーナル⁶⁾に掲載された濃い色のセーラー・ブラウスで、衿とカフスにブレードがあり、袖には盾型紋がある。4歳～10歳までのサイズ展開がある、と記されている。図7の少女のセーラー・ブラウスは白い厚地綾織木綿であり、スカートは7枚接ぎである。セーラー衿とカフスは濃い色で胸元には錨のマーク、袖には盾型紋が付く。図8は「秋の通学服」と題した記事に少女のセーラー服がみられる。濃い色の衿にネクタイを下げた形となっている。

このスタイルは、以後、少女の通学服として定着していき、さまざまなメーカーが製作、販売を行うようになった。



図1 セーラー・スーツ 1892年2月
Godey's Lady's Book



図2 セーラー服
1894年4月 Vogue



図3 セーラー服
1899年1月 Vogue



図4 セーラー服 1901年3月 Vogue



図5 少女のセーラー服
1900年7月 Vogue



図6 セーラー・ブラウス
1905年8月 L.H.J (The
Ladies' Home Journal)



図7 セーラー・ブラウス
1907年8月 L.H.J.



図8 セーラー服
1913年9月 L.H.J.



図9 海浜用スーツ
1902年8月 Vogue



図10 少女の海水着
1906年6月 L.H.J.



図11 カレッジの球技大会
1902年1月 L.H.J.

2) スポーツ服

イギリスでの女性のセーラー・ブラウスは、水辺の装いとして登場している⁷⁾。その流れを受けて、アメリカでもまず、1891年7月のヴォーグに海浜用スーツとしてセーラー衿のジャケットと長いスカートが描かれている。やがて、1899年5月には前の衿の形が四角いが、後ろ衿がセーラー型である海水着が登場し、短いスカートの機能的な形がしばしばみられるようになった。図9は、セーラー型のパターンであり、詳細な製作の説明がある。図10は、少女の海水着として紹介されている。

次にスポーツ服として、カレッジの体操服にセーラー型の衣服が用いられている例を挙げてみよう。19世紀末からカレッジの学生が運動する場面にセーラー型衣服が着装されている写真がみられる。図11は、球技大会の折の写真であり、学生たちは一様に濃い色のセーラー・ブラウスにブルーマーズを穿いている。このスタイルは他の運動や戸外での活動の場面で用いられており、図12のボートに乗っている女学生も同様である。

そのほかのスポーツには、セーラー・ブラウスとスカートの組み合わせが一般的であり、図13では、ゴルフのクラブを手持っている姿がみられる。また、セーラー服のメーカーの広告には、テニス、ホッケー、乗馬、ハイキングなどにふさわしい、という宣伝がなされている。図14のようにバスケットボールの競技にはブルーマーズの姿も見られ、セーラー型衣服はスポーツを象徴するものとなっていたのである。



図12 ボートの女学生
1912年8月 L.H.J.



図13 セーラー・スーツ
1911年9月 Vogue



図14 セーラー服
1921年1月 L.H.J.



図15 少女のセーラー服
1905年11月 L.H.J.

3) 通学服

少年の衣服であり、スポーツ服であったセーラー服がなぜ、女学生の通学服になったのであろうか。セーラー服のメーカーの広告には、サイズ展開がなされていること、ゆったりとして着やすいこと、洗濯がしやすいことなど、活動のしやすさと同時に取り扱いの便利さを挙げている。まず少女の衣服に日常着や通学服として普及していき、やがて女学生やカレッジの学生たちのスポーツ服から通学服に普及していったと考えられる。

図15は、1905年に掲載された少女のセーラー服の製作についての記事である。ここにはパターンと共に詳しい縫製方法が掲載されている。このころから、通学服としてのセーラー服が普及しはじめたといえよう。しだいにセーラー服のメーカーも多くなり、アメリカではセーラー服が一般的になったのである。図16は少女のための麻のセーラー・スーツとして紹介されており、14、16、17、18歳のサイズがある、と記されている。図17は上着丈の長い、白いセーラー・ブラウスとプリーツスカートである。図18はセーラー・スーツの広告である。中央と右端はイギリス風セーラー・スーツで、ワンピースであると説明されている。中央は14歳から20歳、右端は8歳から14歳のサイズがあると記されている。スカートには中央のパネルにボタンが付く。図19は「女学生の正式なセーラー・スーツ」と名付けられ、ネイビー・ブルーのイギリス製サージで、衿とカフスに白い絹のブレードがあり、袖に盾型紋がついている。衿元にリボン状のシルクのタイを結び、襟元にハイネックのブラウスを着装している。スカートはボタンでウェストに留められており、14~20歳用と説明されている。図20は、Mary Lyon Schoolの1ページの紹介記事で、女学生がセーラー・スーツを着装して座っている場面であり、その下には女学校の活動のさまざまな写真が掲載されている。この図から、女学生は学校でセーラー・スーツを用いていることがわかる。

図21では、左の2人はサージのセーラー・スーツである。衿と袖口のブレードや袖の盾型紋、プリーツスカートは典型的なデザインである。右の2人は白いセーラー・ブラウスである。6歳から22歳までのサイズがあると記されている。図22は卒業式で着装されている白いセーラー・スーツである。濃い色の衿とカフスにはブレードがあり、袖には盾型紋がある。1920年5月のヴォーグに同じ場面の広告があってブラウスをスカートの上におろしているが、この図ではブラウスは折り返されてウェストの部分にボタンで留められ、スポーツの時には裾を長くすることができるので、2通りの着装ができる、と宣伝されている。



図16 麻のセラー・スーツ
1906年6月 L.H.J.



図17 セラー・スーツ
1909年5月 Vogue



図18 セラー・スーツ
1912年9月 Vogue



図19 セラー・スーツ
1914年9月 Vogue



図20 女学校の広告 1918年9月 Vogue



図21 セラー・スーツ
1919年10月 Vogue



図22 卒業式のセラー・スーツ
1922年5月 Vogue

以上のように、セラー型の衣服を年代順にまとめてみると、少年のセラー・スーツから少女のセラー・スーツへと着装が広がると同時に、女学生や女性たちには海水着やスポーツ服として用いられ始めたことがわかった。やがてその実用性が着目され、少女や女学生の通学着として採用されるようになったといえよう。

したがって、日本でセラー服が制服として用いられた1921（大正10）年には、すでにアメリカで女学生の通学服として定着していたといえよう。

3. 日本女子大学校の学生の服装

1) 女学生の服装

明治37(1904)年に第1回卒業生が同窓会である桜楓会を立ち上げ、同窓会誌である『家庭週報』を企画・編集し、母校の行事や教育方針をはじめとさまざまな情報を伝えた。同年7月の『家庭週報』3号には、当時の学生の服装について、次のような記事がある⁸⁾。

「女学生の服装」

女学生が服装を整ふるに當りては各其趣味に応じて、衣服の材料や形を撰び、其色の配合着附方等、細に注意し、質素儉約の道、材料の選擇、衛生經濟に就ての知識を實際に応用し、併て自然に美育の一助となさまほしき限りならずや。

我校は開校の始より、この主義によりて教育せられ、今に至るも尚一定の服制なく、或る人は絹布を重ね、或る人は粗布に甘ず。又袴の色のごとき決して一様ならず。海老茶もあり紫もなり、鼠色あり黒色あり。自ら其人の趣味によりて、配合され一種の美觀をなす。一度本校の門を訪ふもの、其服装の千種万様なるに、奇異の念をなさざるなし、もとより学校にては貴きもなく賤きもなく、富めるも貧なるも平等にして少しも階級無しと雖も、富めるものは、自然にゆたかに貧なるものは自然につまやかに、是等相集りて千種万様の様を呈す、是れ所謂社会現象にして自然なり。

ここでは、服装教育という観点からみると、単に質素儉約を推奨しているのではない、といい、さらに衣服の調達という面から言えば、経済的、衛生的、合理的な立場からの衣服選択が必要であるとしても、趣味に応じた美的な教育の一端を担うものであるべきと示されている。したがって、「一定の服制なく」それぞれの立場に応じて工夫をして衣服を用いることが「社会現象にして自然である」と述べられている。

2) 運動会の服装

本学の運動会は創立以来毎年開催され、第1回が創立時の明治34(1901)年10月22日に始まり、中止となった年もあったが、ほぼ毎年10月から11月にかけて開催されていた。この運動会は附属校も一緒に行なわれており、そこで女学生の体操服の変遷を辿ることができる⁹⁾。

明治36(1904)年の第3回運動会の記録は、後に発行された『家庭週報』の記事に見られる¹⁰⁾。

尚当年の運動会で一段と注意を惹いたものは運動の自由を主として而も動的表現に留意して考案された運動服を用いたことでありました。この服装を用いた一隊が出てくると六千余を算する観客は拍手して其の技をたたへその活動をほめその健康を祝しました。

ここでは、具体的な形はわからないが、「考案された運動服」が用いられていたことが記されている。

さらに第4回運動会についての記事が『家庭週報』に記されている¹¹⁾。

なほ華美に流れ驕奢に走るを戒むると雖、優美ならしめむが為め、その色合を撰び、其の服装を調ふ。一見、華美、なるが如くとも、經濟を脱したる事は決して許さざるべく、たゞ趣向、勞力を盡したる結果と見るをうべきと信ず。

且つ我校運動会は単に体育の一斑を公にするに止まらず、之を機として学び、之を機として改むる事なきにあらざるなり。(中略) 更らに運動を最も便ならしめむが為めに、いさゝかにも衣服の改良に資せん事を計る。すなわち筒袖の襦袢を用ひ、下穿きを穿ち、踵小さき靴を廢するが如き、……

すなわち運動会は、単に競技で優劣を競うのではなく、さまざまな教育の実践の場として学生たちが企画・運営を行うものであった。したがって、衣服の改良についても積極的になされていたことがわかる。

また、バスケットボールの服装が次のように紹介されている¹²⁾。

「バスケットボール」

これぞ此の日の呼びものなり。五十の精兵の扮装は軽快なる水兵形の運動服に、腕と襟飾とに紅と白との布をつけて、両軍の区別とす。髪はみつあみにして短く下げ、見るからに凄しき働き振りのさもこそとうなづかれぬ

バスケットボールは、アメリカ式の運動として注目されたのであるが、前衿は四角いが後衿がセーラー風である上衣に裾に線の入ったスカートを着装している。のちの通学服になるセーラー型の最初の例であるといえよう（図23）。

さらに、成瀬校長よりの運動会の批評が掲載されている¹³⁾。

服装に於ても、美術的、経済的、衛生的の考へ自然にあらはれたり。デルサートの服装、花神の舞の配色、バスケットボールの扮装等、昨年に比すれば、更らに一歩をすゝめたりといふべし。

このように、本学では運動会の折に学生たちにさまざまな創意工夫の機会を提供し、教育の一環としていたことが明らかであった。

次いで大正11（1922）年には、大学生全員の運動服が考案されたことが記されている¹⁴⁾。

「運動服制定

今年は新しい試みの一として大学部学生一斉に運動服を着用することとなりました。これは母校多年の宿望でありましたが、今回学生間に、便宜、衛生、風紀等の各方面に適ったものが考案せられましたので今後これを運動服とする事に協議一決し愈々来る五日より着用する事になつたのであります。

ここには、全員が揃いの運動服を着用して競技を行っていることが記され、その様子は写真に残されている（図24）。

大正15（1926）年の運動会で附属高等女学校の演武の様子が写真に残っているが、図24と同じような形であると思われる（図25）。

この運動服については、6回生の永島信子が次のように述べている¹⁵⁾。

（大正）十五年長女を日本女子大学に入学せしむ。（中略）昭和三年平壤赴任。帰省の長女、女子大学の体操服なりとて白の上衣紺のスカートを着す。



図23 バスケットボール 明治37（1904）年



図24 運動服 大正11（1922）年

ここでは具体的な体操服の形は述べられていないが、上述の運動服であったと推察される。

図26は、昭和7（1932）年の豊明小学校児童の演武である。セーラー衿にネクタイを付け、プリーツスカート穿いた姿は、現在のセーラー服とほぼ同じ形であろう。

また、昭和8（1933）年の第24回運動会では、「セーラーダンス」として次のような説明がある¹⁶⁾。

全員ブルーマーで押出したので、その名のように軽快だらうと思ったら、案外固くてスローモーション

これは予行練習を参観した時の感想であるが、ブルーマーという名称が記録されていて、その名には軽快に運動をするイメージがあったにもかかわらず、動きが鈍くてスローモーションのようであった、と述べられている。

図27は昭和10（1935）年の運動会であり、セーラー服にブルーマーの体操服で整列している様子が見られ、昭和16（1941）年の図28も同様の装いである。

このように、ブラウスとスカートの体操服からセーラー型の体操服に変化していった。ブルーマーとプリーツスカートは、それぞれ競技に応じて用いられていたといえよう。

4. 日本女子大学の教育理念と体操服

日本の女学校の制服としてセーラー服が導入されたのは、大正10（1921）年であったが、すでに体操服として各地の女学校や師範学校などに用いられていたことが先行研究より明らかである。

しかし、日本女子大学は、大学の独自の教育理念に基づいてさまざまな服装改革を実践してきた。それは附属女学校や小学校にも共通するものであるといえよう。

ここで、明治38（1905）年の『家庭週報』の記事を参照したい¹⁷⁾。



図25 高等女学校演武 大正15（1925）年

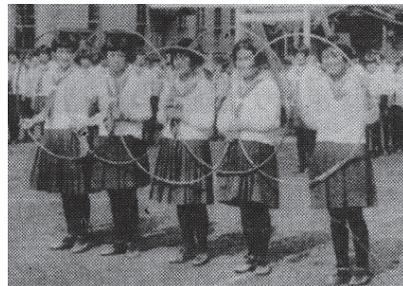


図26 豊明小学校演武 昭和7（1932）年



図27 セーラー服、ブルーマー 昭和10（1935）年



図28 セーラー服、ブルーマー 昭和16（1941）年

「国風的一端」

さりながら目下改良の急務を要するものは、労働服として、従来の服装の著しく欠点多きこととであります……従てその改良には、衛生上、経済上に重きを置ねばなりません、住居の関係、気候、風土の関係、或は産物即ち材料の関係等、一々精密の調査、研究を経なければなりませんので、こゝにはその道に通じたものゝ、研究し調査せんことを望み促す迄に止まるのであります。(中略)

なほ女学校の運動會の裏面には、いさゝかづゝなりと、服装の改良されつゝあるのを喜ぶのであります。公衆の前で、己れの技量を発表して遺憾なからしむる為めには、注意周到なる服装が必要であります。即ち競争遊戯、例へばバスケットボール、技術運動、例へば自転車マーチ等を為すには、最も敏活に、便利に働さう様に、或は下穿きを着し、筒袖の襦袢を用ひ、表情体操には、凡て色の配合、服の形等、最も美術に適うたものを選んで、一層表情の巧妙を助けしむるのです。以上学生の経済が許す範囲で行ふのはもとよりであります。

これ等が只運動會の折のみでなく、日常の運動にも用いられ、平常の労働にも応用さるゝに至つて、幾分づゝ改良に資するのであります。されば多くの女学校の於てはこの機を失せず、生徒をしてこゝに力を用いしむるのは、女子教育として大切な事であり、(後略)

ここでは、当時の女性の服装は欠点が多く、改良することが急務であるが、女学校の運動会では服装改良が実践されつつあることが喜ばしいと記している。一般の服装が変化を遂げるまでには多くの時間を要するが、まず、運動会という場での服装の改良には、その後の衣生活を考える手掛かりとなつたのではないだろうか。

衣服は単にその時の習慣に従うのみではなく、生活や経済などさまざまな条件を考えてよりよい方向に改良するものでなければならない。このような考えは、学生を育てていく上での根本的な教育理念に基づいたものであることを再確認すべきであると思われる。

5. 附属高等女学校のセーラー服

附属高等女学校の通学服がセーラー服になってきた過程は、日本女子大学の体操服の変遷としてみることができる。前掲の『家庭週報』37号(明治38年10月28日)にあるように、大学の運動会が服装改良の場としてさまざまな試みをしてきたことから、本学は運動会という機会を通して、服装改良についての視点を育て、日常生活に応用することを目指していたことが明らかである。それは、アメリカ式バスケットボールの導入など、成瀬仁蔵がアメリカでの体験を生かして進歩的な教育思想のもとに行つてきた教育の一環としての服装教育を見ることができる。

セーラー服の導入には、刑部が、井口あくり(セーラー服)、二階堂トクヨ(ジャンパースカート)の体操服が女学校でも用いられたことを大正期の女性の洋装化の要因と記している¹⁸⁾。また、ミッション系女学校のセーラー服についても詳細に述べられている¹⁹⁾。

昭和2(1927)年8月の写真では、まだ和装の女学生がほとんどであるが、昭和3年(1928)7月の写真(図29)では、セーラー服を着ている生徒を数人見かけることができる。さらに昭和4(1929)年7月では、ほとんどの生徒がセーラー服となり(図30)、昭和7(1932)年2月には、生徒たちが冬のセーラー服を着ている様子がわかる(図31)。

一方、『家庭週報』1129号(昭和7(1932)年5月20日)には、「ヨシザワの水兵服を」という広告が掲載されている(図32)。そこには「御嬢様方の御通学や御散歩に」という説明があり、通学服に推奨されていることがわかる。



図29 高等女学校学生 昭和3（1928）年7月



図30 高等女学校学生 昭和4（1929）年7月



図31 高等女学校学生 昭和7（1932）年2月



図32 ヨシザワ広告 昭和7（1932）年5月

以上のように、附属高等女学校のセーラー服についてみると、他の女学校のセーラー服導入の過程とは異なり、大学部と同じように体操服を着装していたことが発端であることは明らかである。運動に便利な体操服は日常生活でもその機能性が認められ、女学生にとっても体操服は洋装のきっかけとなるものであったのである。

当時の他の女学校の制服採用にも影響されたであろうが、附属校の女学生にとっては通学服にセーラー服を取り入れることは当然であったと思われる。したがって、本学の教育理念にある創意工夫の精神を踏まえつつ、制服の規定をせずにセーラー服を通学服に導入したことには特別な意味があるといえるのではないだろうか。

註

- 1) 刑部芳則「ミッション系高等女学校の制服洋装化」『総合文化研究』23巻3号、2018年3月、127-128頁。
- 2) 刑部芳則、前掲書刑部芳則『金城学院セーラー服の歴史』学校法人金城学院、2020年10月再販、6頁『福岡女学院九五年史』福岡女学院、1981、39頁。
- 3) 坂井妙子「1880年代から1920年代のイギリスにおける子供用セーラー服の流行」『国際服飾学会誌』30号、2006年11月、17頁。
- 4) *Godey's Lady's Book* は1830年創刊。女性誌のスタイルを確立したといわれる。誌名を *Godey's Magazine* に変更した後、1898年廃刊。桑名淳二『データが語るアメリカ雑誌』風濤社、2002年2月、74頁。

- 5) 1892年にニューヨークのエリートのために発刊した週刊誌。誌名を *Vogue* に変更し、1909年に現在まで続く一般向けのファッション誌に転換。桑名、前掲書、80-81頁。
- 6) *The Ladies' Home Journal* は、1883年創刊の家庭婦人を対象とした女性誌である。売り上げ部数も多く、広告が多い。20世紀初頭の6大家庭実用誌（ビッグ・シックス）のひとつ。桑名、前掲書、75-77頁、拙稿「アメリカにおけるセーラー服の変遷—*The Ladies' Home Journal*の記事から」『国際服飾学会誌』57-58号、2021年1月 参照 M. E. Zuckerman, “A History of Popular Women's Magazines in the United States, 1792-1995”, Greenwood Press, London, 1998, pp. 5-9.
- 7) 大枝近子「19世紀後半のイギリスにおけるセーラーブラウスの流行」『国際服飾学会誌』30号、2006年11月、17頁。
- 8) 日本女子大学校桜楓会『家庭週報』3号、明治37（1904）年7月23日、4頁。
- 9) 運動会については、以下の研究も参考とした。馬場哲雄・石川悦子共著『日本女子大学の運動会史』日本女子大学体育研究室、1982年3月。
- 10) 「運動会略史」『家庭週報』589号、5頁、大正9（1920）年11月19日、1244号、6頁、昭和9（1934）年11月2日。
- 11) 『家庭週報』10号、明治37（1904）年11月3日、1頁。
- 12) 前掲書、6頁。
- 13) 前掲書、8頁。
- 14) 『家庭週報』684号、大正11（1922）年10月27日、2頁。
- 15) 永島信子『日本衣服史』（芸艸堂、昭和8（1933）年初版、昭和49（1974）年六版）、687-8頁。
- 16) 『家庭週報』1201号、昭和8（1933）年11月17日、7頁。
- 17) 『家庭週報』37号、明治38（1905）年10月28日、1頁。
- 18) 刑部芳則「大正時代における高等女学校の洋装化—セーラー服とジャンパースカートの創出過程」『中央史学』40号、2017年3月、57-59頁。
- 19) 刑部芳則、2018前掲書。

補足

「日本女子大学校の学生の服装」については、2018年10月27日に開催された総合研究所公開講演会（研究課題68）「日本女子大学校の体操服」の配付資料を基礎としている。

吉屋信子『花物語』
—＜少女＞の精神的制服

Nobuko Yoshiya's *Flower Stories* : Spiritual Uniforms of "Girls"

三神 和子
MIKAMI Yasuko

1

日本において組織だったプログラムのもとに行われる女子教育は、明治初期のキリスト教布教とともに始まったが、すぐさま、女子教育はミッション系、官立、私立と、それぞれの特徴ある教育方針のもとに発展していった。それらの女学校に通う女性徒たちは、制服を着用した。明治後期から大正後期にかけては、矢緋の着物に袴姿、その後に西洋化が進み、昭和5年（1930年）ごろには、セーラー服の導入が進んできた¹⁾。この女学生の姿は、初期の頃の人々を驚かせ、注目を浴びたが、やがて女学校の存在が質量ともに充実し、大正時代になって市民の間にも広く認識され始めると²⁾、女学生たちは姿かたちばかりでなく、自分たちの存在を意識し、＜女学生＞という自分たちのアイデンティティーを自覚し始めた。そして＜女学生の文化＞、つまり＜少女文化＞を育み始めたのである。

この＜少女文化＞が一番花開いたのは、大正から昭和初期の第二次世界大戦前の昭和15年までの女学生のあいだである³⁾。もちろん担い手は女学生を中心とした結婚前の女性たちであったが、この＜少女文化＞の原動力となったのは、大正と昭和初期に創刊された少女雑誌であり、支柱となったのは、高島華宵、中原淳一、加藤まさ等を等の甘美な少女の姿を描いた挿絵もさることながら、これらの人気少女雑誌の一つ『少女画報』に大正5年（1916年）第1作の掲載が始まった吉屋信子の『花物語』である。この52の短編集は、以後9年間にわたって同誌及び『少女倶楽部』に掲載され⁴⁾、大正9年（1920年）から、幾度も単行本化され、「乙女のバイブルとして今なお名高い」⁵⁾存在になっている。

では、この＜少女文化＞とはどのようなものだったのであろうか。その概観は平成17年（2005年）（発行の内田静枝編『女学生手帳』（河出書房新社）、平成18年（2018年）（内田静枝編『セーラー服と女学生』（河出書房新社）、平成2年（1990年）の本田和子著『女学生の系譜』（青土社）など、数々の先行研究等から推し量ることができるが、なぜ、少女たちに人気があったのか、そして、なぜ、当時の社会（男性社会）に容認されたのかを改めて考えてみたい。吉屋信子の『花物語』を考察することで、この問題を考えてみる。この『花物語』が連載されていた時期は、第一次大戦とも重なる時期があり、日本の世は軍国主義に向かって勢いづいている時期であった。もちろん発行母体も発行部数も規模が異なるが⁶⁾、同じく若い女性を対象とし、女性の生き方を扱ったフェミニスト誌大正2年（1911年）創刊の『青鞥』は社会に受け入れられず、国からも危険視され、発禁処分を受けたことがある。吉屋信子も『青鞥』の社員となり、大正4年（1915年）ごろからは集會に出席、雑誌にも投稿している。もちろん、『青鞥』は大正5年（1916年）2月に終刊し、『花物語』は大正5年（1916年）7月に第1作「鈴蘭」が掲載されており、掲載時期が重なることはない。しかし、『花物語』はどうしても少女たちに人気があり、社会に受け入れられたのか、この問題を考えるこ

とは興味深い。

2

『花物語』の52の短編には、それぞれ花の名前がついている。その花は、主人公の他の女性（多くは少女）との心の触れ合いや心を揺さぶられる瞬間に一輪の生け花や庭木、校庭の木、または群生する形で登場し、主人公が受ける心的経験と一緒に心に深く刻み付けられる。主人公は多くの場合女学生であり、出来事は学校の行き帰り、女学校、家庭、休暇中に起こる。

52の短編のうち、すべてではないが、筋において一つに共通項が浮かび上がる。それは、主人公が初めて出会う同世代の少女に心惹かれるか、心の触れ合いを感じる、というものだ。もちろん、「野菊」における母親と思しき貴婦人との一瞬の出会い、「三色堇」における父親が幼き頃養女に出した娘との思いがけない再会など、例外もあるが、往々にして、女学生の年頃の少女（教師になりたてでも、嫁に行ったばかりでも、同じ範疇に入る年ごろの女性）の同じ世代の、または少し年上で「お姉さま」と呼べる少女と「妹」と呼べる年下の少女に、心惹かれ、心を触れ合わせる瞬間を持つ。その瞬間は、相手を恋し慕う「愛」に似た感情であったり、朝な夕なに慕う相手の名を呼ぶ熱病のようなものであったり、それも片思いであったり、両思いであったり、時には心の触れ合いを通り越して、「手を握り合い」（「スイトピー」⁷⁾、「嫺やかな腕を上げて、つと肩に巻く」（「日陰の花」⁸⁾）、手が「おのずと相触れ合い」、鐘声の「鐘の音に包まれて、二つの影は相重なって——」、「くちづけ」を交わしたかもしれない（「黄薔薇」⁹⁾）というような身体的な触れ合いにまで及ぶこともある。しかしこれ以上の肉体的な愛の表現は描かれていない。まさに、女学校やその寮生活という異性のいない空間で、また、異性との付き合いなどもっての外の時代においての、異性愛の代わりとなる同性への情熱、俗に言う「エス」(sister) の関係である。現代で言う「同性愛」とは異なり、性愛を満足するためのものというより、心の愛の関係で、それが勢いあまって身体的な触れ合い、「接触」の形へとほとぼり出ることもある愛である。手が触れ合ったり、肩に腕を廻したりというのが、まさに「身体的接触」の愛の表現であった。唇を重ねたらしいことが、「黄薔薇」ではほのめかされているが、詩の引用になっており、確かではない。袴姿では、他者との身体的接近が出来づらかったのか、作品を読む限り、日常において同性同士でも、身体的に接触することは少なかったようだ。戦後の中高生がよくやるように女の子同士で腕を組んで歩く、というようなことは作品には出てこない。目が合うだけで幸せで、うっかり意中の人と手が触れるだけで、はっとする、そのような他者との距離感の世界であった。

もちろん、物語のなかには、「愛」を伴わない、一瞬の心の共鳴を描いた、つまり、相手の少女の心を思いやり、理解するだけの瞬間を描いたものもある。北京の宮城を見学に行き、亡霊とも思える支那の少女と見つめあい、昔の夢を慕い廃宮の奥深くをさまよう支那の姫君の心に思いをはせて、その姫君の心に共鳴したり（「水仙」）、舞衣に無料で桔梗の刺繍をしてもらった旅芸人の少女の喜びに心打たれたり、「桔梗」、無くした手毬を拾って持ってきてくれた少女が、今住む館の元の持ち主の娘であると知り、その零落した少女の心を思って感慨にふける（「紅椿」）など、一瞬ながら、相手と心を通じ合わせるといった瞬間を描くこともある。

主人公たちが「恋」したり、共鳴したりする相手の少女は、押しなべて、どの少女も美しい。特に「恋」に落ちる時には、外観だけによる場合がほとんどで、いわゆる「一目ぼれ」である。たとえば、「アカシア」では、初めて女学校の教壇に立った、卒業したての英語の教師、新庄さんは、緊張しきっていた第一回目の授業で字が小さいと学生から指摘され、ドギマギしているときに、同

じ教室に可愛い学生がいるのに気づく。

その後ろの隅に私の目の向いたとき、私はハッとしました。それは前とすっかり違った意味で——そこには私がびっくりしたほど、ほんとにきれいな愛しい顔が、一つぽっかりと雑草を抜いて咲いた白い花のように浮いていたんですの、まあ可愛い顔——と思うと教壇に立つ私の胸がパッと明るくなりました。そして気持ちが軽くなって、なんということなしに そのかわい顔に微笑みかけましたの——今までのあの不快な、どうすることもできない重苦しきから、ようやく逃れられて、ほっと息をついたのでした¹⁰⁾。

そして新庄さんはその可愛い顔の丘さんという子を見るのを張り合いに教師を続け、授業中も、その可愛い顔や襟足の美しい襟首、ふわりとし垂れ下がるおさげとリボンに見とれて、書き取りの句を違えてしまうのである。

しかし、その愛や心の触れ合いは長く続かない。もともと、これらの「愛」は多くの場合一過性のものであるからであり、また、作者が、それを一過性のもので終わらせるからである。まず、これらの「愛」が一過性のものであったことは、「桐の花」に描かれている。通学電車で会う多美子に、一目惚れした礼子は、寝ても覚めても多美子のことばかりを思い、親しくなって、夢見るような親密さを分け合うのだが、卒業後に進路が分かされると、久しぶりにあった多美子は昔の二人の親密さなど覚えていない。友情の証の桐の花のことも覚えていない。社交ダンスを習いだした多美子は、ダンスとそこで出会う若い男性たちとの交流をたのしみ、もう女学校時代のことなど眼中にない。この多美子の姿を見て、礼子は次のように思う。

礼子は、多美子と少し離れて、先から、このシーンを打ち眺めていた。——ああ何も知らなかった——いつまでも昔の夢の少女の日をそのまま永久に続くものと信じて、はかない望みを持ちつつ、今日まであんなに多美子を恋い慕い——憧れていた哀れな自分は——もう自分への友情などは、今の多美子の胸の中にはあまりに影うすいものなどだ——それが人生の進みゆく路の真実なのかもしれない——礼子のつい、さっきまで抱いていた、多美子との麗しい昔の少女の愛情への光も力も、その瞬間地に落ちて見事に砕け去ったのだ¹¹⁾！

女学校時代の少女の「愛」や「恋」は、時期が来て新しい経験をすれば、やがて忘れられていく。儂い一時の情熱であり、その儂さに苦しめられる少女は辛いであろうが、儂いからこそ、うつくしいのだと作者は言う。

作者が物語の筋を使って無理やり少女たちの「愛」を終わらせることもある。運命が慕いあう少女たちを分かれさせるのだ。この運命こそ『花物語』の短編群を貫く筋（プロット）の要であり、これらの作品群は運命に翻弄される少女たちの姿を描いた作品群であると言っても過言ではない。初めから運命の荒波に呑み込まれて貧しく苦しい境遇にいる少女も、恵まれて幸せな境遇にいる少女も、ほんのつかの間の「愛」を見出した後、残酷にも、運命によって突然その「愛」を失うことになる。運命という言葉は多くの作品にそのまま登場する。たとえば、「沈丁花」では、貧しさにあえぎながらも、つつまじやかに平和に暮らす君恵とさち子姉妹に、運命がさらなる不幸をもたらす。二人の父親が車にはねられて亡くなった時、語り手は次のよう述べる。

けれども、おお運命よ、恐るべき盲目的なある強い意志よ——御身はこのつつましやかな貧しい親娘の幸福さえ時として見事に裏切り破ろうとするのだ！

——略——

こうして姉妹は、ただ一人の片親の父でさえも、運命の手に奪われてしまった¹²⁾。

また、「黄薔薇」では、愛する礼子との別れを意味する礼子の結婚話を知るとき、葛城さんの胸中を語り手は次のように述べる。

葛城さんの心はその時虚を突かれてうろたえた——思いもかけぬ恐ろしい岐路がそこに運命の悪魔の悪戯 好きの残忍な笑いととも、二人の処女を待ちかまえていようとは——ああ、今日までその日まで誰か知ろう——¹³⁾。

この「愛」を終わらせる運命の主なものには、保護者の経済的破綻、相手の少女の死や結婚があげられる。経済的破綻が一番頻度の高い運命の形である。「福寿草」、「露草」、「雛芥子」、「はまなすの花」、「寒牡丹」、「寒椿」など、親や保護者の仕事上の失敗や自堕落な生活から一気に経済的に没落し、それゆえに片方の少女が女学校を退学したり、都落ちすることによって、「愛」する少女たちが別れを余儀なくされる物語は多い。たとえば、「雛芥子」では、女学校四年級の志摩はゆき子という名前の一年級の女学生と知り合い、仲良くなる。ゆき子は父親の手ひとつで育てられたせいか、年上の志摩を慕い、「お姉さま」と呼んですがってくる。ゆき子の誕生日には志摩は赤い絹のハンカチを贈った。夏の休暇中も、志摩はかわいい手紙をなんどももらい、志摩のほうも返事を出した。しかし、夏休みが明けて、学校に戻っても、校舎の中にゆき子の姿は見えない。一か月たつて、とうとう志摩がゆき子の担任にゆき子のいない理由を尋ねると、家事上の都合で退学するということだった。志摩はやるせない気持ちになる。そして秋も深まったある日、志摩はゆき子にとてもよく似た子が浅草の舞踏劇の一座で踊っていることを耳にする。心騒いだ志摩は思い切って初めて浅草に行き、その舞台を見る。そしてゆき子に倣に生き写しの子がほかの踊り子たちに交じって踊っているのを見つける。半ば気を失った人のごとく志摩はその劇場を出て、一人の少女の運命を寂しく思いながら寮に帰る。その年の冬休み帰省する途中のある小さな港町で、汽車を待つ間、港を出る船の甲板にしょんぼりと紺のマントを着た一人の少女をみとめる。それこそやつれはしたものの確かにゆき子であった。志摩は何回も名を呼んだが、聞こえぬらしい。さらに声を強めて読んだとき、甲板の少女は志摩の姿に気づく。しかし港を離れ始めた船にいる少女の声は聞こえない。少女は真紅のハンカチを高く振り上げて力の限り振り続けるのだった。この物語には初めから片親で寂しい境遇のゆき子が、すさんだ生活をする父親のせいで、女学校をやめざるを得なくなり、退学するばかりか、旅回りの一座に踊り子として雇われ生計をたてないとならなくなった運命が、そして女学校で志摩と知り合い、志摩を慕ったほんのつかの間の幸せが志摩の心を通して描かれている。父親のすさんだ振る舞いは、経済的破綻を招き、娘に女学校を退学させ、それだけでは足りずに、踊り子に身を落とさせる。「明治の初めの女学校は特権階級の子女に限られていたが、大正の初めには質量ともに拡大していった」とはいえ¹⁴⁾、女学校に通うのはまだまだ経済的に余裕のある子女に限られていた。その中で親や保護者が経済的な破綻をきたせば、子女は即刻女学校を退かないとならない。このため、経済性の理由は頻繁に使用されている。

つぎに、死も運命の形としてよく使われている。「紫陽花」「コスモス」「フリージア」「合歓の花」、

「スイトピー」、「秋海棠」、「沈丁花」などがあげられる。たとえば、「スイトピー」では、女学校の三年生に進級した真弓は一年に入学してきた酒井綾子と親しくなる。酒井さんはとてもかわいく、女学生の間で大人気で、酒井さんが花壇のスイトピーの係りだったことから、スイトピーのピーさんと呼ばれ、「ピーさんは全校の人を悩殺している」といわれるほどの人気だった¹⁵⁾。そのうちあれほど元気はつらつとしてバスケットボールの選手だった酒井さんは体調を崩し、肋膜炎を患って、運動を控え、図書室で読書を好む生活を送るようになる。周囲の酒井さんへの人気も覚めていったが、そのような図書室で会うごとに二人の仲は深まっていき、酒井さんは真弓を慕い「愛」するようになる、真弓の同級生の佐伯さんも酒井さんのことを片思いながら「愛」しているのを知って、真弓は酒井さんとのことにたいして遠慮しようとするが、酒井さんの「愛」は止まらない。佐伯さんは酒井さんが学校を休んでいる間ノートを写して、酒井さんに渡していたのを知った真弓は、その献身的愛にうたれて、酒井さんは佐伯さんと「愛」を育んだほうがよいと思い、そう酒井さんに告げたのだったが、「愛は理屈ではございません。真弓御姉さま、佐伯様の愛に報いとのお言葉でございませうけれど綾子にどうして自らを欺くことができましょう」¹⁶⁾、と酒井さんは手紙を送ってくる。やがて、酒井さんはまた学校を休むようになり、真弓の女学校最後の年に、酒井さんは肋膜炎が悪化して帰らぬ人となった。現代のように医学が発達しておらず、薬も開発されていない時代、病気によって、女学校を休学し、家で病床に就き、やがてなくなる少女の姿が描かれることが多い。闘病のなか励みとなるのは、友人の見舞いや、手紙、そしてときめく相手の少女への思いである。しかし病の少女が回復する姿はあまり描かれず、彼女たちは帰らぬ人となっていく。

そして、結婚も「愛」の運命の形として使われる。「浜撫子」(日取りまで決まっていたものの、真澄は行方をくらましてしまう)、「合歓の木」(病に臥し亡くなってしまふ純子は、死の形の運命を物語った作品と考えられるが、同時に、あこがれの君の結婚を知ることによって生きる意欲を失くすことから、結婚を運命とする物語にも属する)、そして「黄薔薇」があげられる。また、結婚生活や夫から逃れてミッションスクールの寮に逃げ込んでくる片岡夫人の物語「燃ゆる花」(柳原白蓮をモデルにしていると思われる)も結婚を運命の形として使用していると言える。この物語の場合、結婚生活へと引き戻そうとする夫に逆らって、片岡夫人と彼女に魅せられたみどりは一緒に焼け死ぬことを選ぶのだが。結婚によって「愛」する少女たちが引き裂かれるよい例は「黄薔薇」である。英学塾を出たての葛城みさをは、自分自身の結婚話を逃れるために県立高女の英語の教師となって静岡らしき場所に赴任する。その女学校で彼女は赴任する汽車の中で一緒だった美しい少女、浦上玲子を教えることになる。そして遠足のとき目を傷めた礼子に付き添って眼科に行った葛城は礼子の美しさに心打たれる。そして二人は仲良くなり、離れがたい思いから、休みの日には礼子が葛城さんの宿を訪れ、夏休みには葛城さんが礼子の避暑地の興津の別荘を訪れた。「二人の影は相重なる」ほど¹⁷⁾、二人は惹かれ愛し合っていた。そして二人の間には、礼子が卒業したら、葛城さんに伴われて葛城さんの母校に入学し、そこを卒業したら、二人は相連れ立ってアメリカにわたり一緒にカレッジで学ぶという誓いがたてられていた。しかし礼子の卒業が間近になったある日、葛城は礼子の母親から突然の訪問を受け、礼子に結婚話があるので、嫌がっている礼子を説き伏せてほしいと依頼される。一人娘の玲子は本家から養子ももらい、四月にも式を挙げたいのだという。葛城さんは運命を悪魔と感じる。しかし、二人の愛情を露骨に表明し、それを盾にとって結婚を断らせることはできないと考える¹⁸⁾。彼女は母親の頼みを承知した。そして、礼子の卒業と同時に教職を辞し、五月にアメリカ、ボストンのカレッジに入学するべく横浜から船出した。葛城さんが考えるように、「自分たちが世常の結婚の型をとって生活できぬ同じ性」である以上、社会の人心は二人

の願いを許すはずはなく罵り嘲るばかりであるからである¹⁹⁾。少女同士がいくら仲がよくても、それは結婚を阻むものとは考えられない。第一、当時結婚は運命が言いつける命令であった。好むと好まざるとにかかわらず、親の決めた結婚には従わないとならない。

3

このように『花物語』の作品群は運命に操られる物語が多いが、少女たちのほとんどはどのような過酷な運命も受け入れる。多くの者たちは抵抗することなく、抗議することもなく、また、これらの運命を生み出す社会の風習や考え方、階級制度や資本主義、貧富の差、そして何よりも女性観について何の疑問ももたない。「桜草」にしても、自分はカンニングをしていないことを申し立てることもできたであろうに、弁解せずに運命の悪戯を受け入れる。確かに運命に逆らう主人公もいる。しかし運命に逆らっても、幸せにはならないことを作者は教える。たとえば、先ほどの「黄薔薇」の蔦城さんは、叔父叔母に結婚を押し付けられそうになり、避難所として教師になったのだが、「結婚の大波の洗礼を」²⁰⁾ 避けたつもりでも、蔦城さん自身も結婚という運命に逆らった謀反者として運命の報いを受ける。礼子を結婚という悪魔に奪われた挙句に、皆に期待されてアメリカに留学したものの途中で退学し、行方をくらまし、どうやらタイピストとなり、また行方をくらますという侘しい流離い人となる。悲しい末路が待っているだけなのである。そして「花芙蓉」では、たとえ動物の虐待をいさめることであっても、家来の娘の身分でありながら、若君に意見を述べることは許されない。いさめた少女は即刻国元に返されることになる。たとえどんなに少女に章子が感心し感動しても、当時の社会の根底を支えている主従関係を破ることは許されず、社会の秩序は保たれる。

彼女たちは運命によって悲劇に陥れられた「愛」する少女を救済することはない。第一に、相手の少女がそれを拒むからであり、次に本人に救済する力がないからである。作者はこれらの作品群の世界を救済のない世界にしている。まず、少女に救済を拒ませ、自分の運命を受け入れさせるといふ作者の考えは「露草」に描かれている。女学校を卒業してさらに勉強しようと補習科にいる秋津さんは、親なし兎で二年生の涼子と東寮に暮らしている。涼子は秋津さんを姉のように慕い、秋津さんも涼子を妹のようにかわいがった。二人はいつも一緒である。しかし、ある時、涼子の叔父が商売の手違いから家計が困難になったので、女学校をやめて国に戻ってくるように、国で技芸学校ぐらいなら通わせられると言ってきた。涼子は思い悩み、にわかには歳をとったように大人びた寂しい人になる。この相談を受けた秋津さんは母親に相談し、自分は節約するから涼子の学費も出してもらうように頼むと、わが子の真心に動かされた親は承諾し、秋津さんと涼子はこの知らせを心から喜び合う。しかし、そのうち、涼子の様子がおかしくなる、秋津さんにたいしてトゲトゲしくなり、何かにつけて拒絶するようになる。それでも気を弱らせずに、秋津さんは涼子に優しく、彼女をかわいがり続けるが、涼子は秋津さんのいない間に寮を出て行く。机の上に秋津さんあてに手紙が残されており、自分の不幸のために愛する秋津さんに重荷をかけることは忍びなく、秋津さんには自分の不幸にかかわることなく幸せになってもらいたいと書いてあった。自分に降りかかった運命は自分一人で引き受け、自分の不幸のために「愛」する者に負担を与えないと涼子は決心したのだ。秋津は涼子救済することはない結末である。作者は救済を運命に襲われた少女に求めさせない。また、「ダーリア」では、慈善病院で働く見習い看護師の道子は、初めのうちこそ女学校に行けない自分のささやかな境遇を恨んでいるが、最後には自分の境遇を受け入れ、そこに生きがいを見出す。社会の階段を上ることを拒むのだ。事故にあつて道子の働く病院に担ぎこまれた同い年の

春恵を親身になって介抱したことから、道子は春恵の家から夢のような申し出を受ける。道子を春恵の家庭の一員として家庭に迎え入れ、春恵の学友として女学校にも通わせ、将来も保護をしてくれるという申し出である。夢のような申し出に喜び、この申し出を受け入れるつもりであったが、実家に報告に行こうと考えていたとき、道子は病院の裏庭で泣いている子供と出会う。そして、その貧しく哀れな入院患者である子を病室に連れ戻し慰めているとき、道子の胸の底に「まだ覚えていなかった深い深い新しい泉が湧き出した」²¹⁾。この子供と母親のために、目の前の親子ばかりでなく、世の中の哀れでけなげな患者のためにできる限りのことをしたいという献身と愛の思いである²²⁾。この自ら求める献身の中に満足を得る生き方を彼女は自分の幸福を考え、夢のような生活を拒絶して、今ある境遇を選ぶ。この物語は道子の献身愛の日覚めの物語であるが、その日覚めを支えているのは、今ある境遇を受け入れるという姿勢である。貧しい者が幸運によって階級を上昇するというシンデレラ的な救済は行われない。

救済する力のないことは「雛芥子」に描かれている。前述したとおり、「雛芥子」にはかわいがっていたゆき子が浅草の芝居小屋で踊っているのを見た志摩は、ゆき子を助け出したいと思ったが、やがて次のように考える。

（こうして、あの人を求め訪ねて、自分は救うつもりだけれども、果たして私はそれだけの力が備えられてあるだろうか。また現在の境遇がそれを許すだろうか。）

こう冷静に自分御実力と立場を考察してみると、実際一時の激しい感情に駆られて、ゆき子を不幸な境遇から助け出すなどという、大きな望みはとても自分の今の力と境遇では不可能であったものを。志摩さんは、こうしてみずからを顧みでて、ひそかに恥じるのであった。それからの志摩さんは、ただゆき子を忘れえぬ人として胸に秘むるのみで、再びその（行方）を尋ね求めようとはしなかった²³⁾。

作者は志摩のような女学生である少女がたとえ「愛」する相手であっても、助けることはできないと、そのようなことを考えることは大それた「恥ずべき」ことだと言う。ここには作者の「運命が過酷であっても、その運命を受け入れよ。周囲の者も、その運命の波にもまれる者に、手を差し伸べるな」というメッセージが読み取れる。ここには慈善の心も社会への働き掛けもない。

4

では、少女たちはどうすればよいのか。どうしてこの作品は少女たちの間に人気が出たのであろうか。少女たちのやることはただ一つ、悲しい運命の波に襲われた少女の心に共鳴し、涙を流すことである。少女たちは、主人公も、「愛」された女の子も、よく泣く。『花物語』の作品群にはどれ一つとして、少女が泣かなかつたり、目を潤ませなかつたりする物語はない。号泣したり、すすり泣いたり、はらはらと涙が零れ落ちるだけだったり、涙ぐむだけだったりするが、とにかく彼女たちはよく泣く。おまけに彼女たちはよく倒れ伏す。強い悲しみが襲い掛かってきたとき、彼女たちはその悲しみに耐えきれず、倒れこんで泣く。もちろん、嬉しいときも、感激したときも、彼女たちは泣く。この本は少女たちの共感の涙の書である。

そして物語を聞いている者も一緒に共感して泣く。この『花物語』は、もともとは、「鈴蘭」からは始まる「名もなき花」までの七つの物語で終わる予定であった。あまりに人気が出たために短編を続けることになったのだが、初めの設定は、七人の少女が一つの部屋に集まり、一人ずつ話を

していくという設定である。語る少女も物語の少女の心に共感し、涙ぐみ、そして聞いている少女たちも共感する。

『おお名もなき小さき花の一つよ！私は涙さしぐまれるのでございます。』

言葉のごとく照子さんも涙ぐんで、おののく唇を閉じました。

そして、何とも譬えようのない柔らかな優しい感じに潤うた沈黙のヴェールが、七人の少女の胸を静かに覆うのでした²⁴⁾。

「桜草」は身体を悪くして臥せっている「私」を見舞いに来た滝沢良子の語る桜草に纏わる話に、聞いていた「私」も涙ぐむ。

じいと耳を澄まして聞き入った私の瞳にも、いつの間にか恥ずかしいほど涙が湧いてきましたの——合われ、隠して音もなく春の宵は柔らかに老けていくのでした²⁵⁾。

そしてこの共感作品の中の話の聞いている作中の人物ばかりでなく、読者にも共感を分け合う。たしかに作者は読者の物語の少女への共感を促している。『花物語』の作品群は、読者が運命に翻弄され、悲しみに突き落とされた少女、初めから不幸の荒波にもまれている少女の心に共感し、一緒に泣くことを目的としている。この意図は「ヒアシンス」において明確になる。少女甲子からの手紙の形になっている。甲子は裕福に暮らし将来はピアニストになることを夢見ていたが、父と共同経営していた叔父の仕事の失敗のせいで、女学校を退学しタイピストとなり、自分の稼ぎで母と妹を養う身となる。そのような男性社員の振る舞いに腹を立てた女性職員たちが男性社員に改めてもらうように支配人に頼むことになった。代表して麻子が支配人のところに行ったのだが、女性が批判がましい意見を言うことに、つまり、女性に従順だけを求める支配人を怒らせ、麻子のほかにも誰がこのような意見を持っているのかということになった。麻子を慕っていた甲子は裏切ることなどできないと思う。しかし、自分が仕事を失えば、母と妹を養うことができないと思う甲子は心苦しくも裏切ってしまう。麻子は男に盾を突くということで雇止めにあう。「悲しきヒアシンス、寂しい人間の運命、考えれば目の先は真暗でございます」、「なぜこのようなことを書いたのでございませう。ただ苦しくも悲しい懺悔の気持ちをこの花に寄せて永劫に嘆きゆくさだめだと思えばこそ」²⁶⁾、と手紙は綴られている。すると、この手紙を読み終えた作者は、次のように言って作品を終わる。

幾度となく終わりの方を読み返すうちに、やはり涙ぐんでおりました。——封筒にご住所はないけれどスタンプの跡、おぼろげに白金と読まれた、差し出した方は加津甲子さん——甲子さん、そして麻子さん、お二人ともいらして下さいまし、私の小さい書斎の扉はあなた方のためにいつでも開かれております。お二人の涙の末に私の泪も加えてご一緒に泣かせて下さいませ²⁷⁾。

まさに苦しい心に共感して一緒に泣くことが作者の狙いであり、読者もそうせよと言っているのだ。

ここには物語の少女も作者も読者も一緒になって共感し涙する共同体意識がある²⁸⁾。苦しい思い

をする少女たちはもう一人ではないのだ。悲しみや苦しみを理解し分け合ってくれる少女たちがいる。みんなは仲間です少女たちは共同体なのだ。この意識こそがこの作品の人気の秘密がある。

そして、ここにこの物語群が社会（男性社会）に容認される理由がある。彼女たちは抵抗しない。反抗しない。抗議しない。批判しない。疑問も持たない。自分の意見を持ち自己主張する少女もいるが、それが罷り通るのは、献身に生きようとする「ダーリア」の章子や自分の貧しさを頑なにわきまえる「向日葵」の横山潮のように、社会秩序を乱さない場合のみであり、その他の場合は、物語の筋の上少女たちは悲劇の結末を迎える。社会の習慣や価値観から反抗し逃避すれば、「黄薔薇」の葛城さんのようにさすらいの侘しい人生が待っているだけである。男性社会を批判し改善しようとするれば、「ヒアシンス」の麻子のように職を失うことになっている。この「ヒアシンス」は横暴な男社会の是正を求めるためのフェミニストの問題定義の物語ではない。焦点は、甲子のやさしい麻子への思慕と、その麻子を裏切った人間の弱さにある。男性たちは、そして社会は安心して少女たちにこの物語を読ませることができる。作者の描く筋は男性の地位や社会の秩序を脅かすことはない。女性たちは涙もろくて、感傷的で、悪さを企てたりしないのだ。

5

以上のように、『花物語』は共感の共同体意識を味わい確かめられるところに少女たちに人気があり、社会秩序や価値観を転覆させる危険がないところに保護者や雑誌編集者をはじめとする男性社会が容認する理由がある。日本社会にもフェミニズムが台頭し、大正2年（1911年）には『青鞥』が創刊され、帝劇では島村抱月訳、松井須磨子主演でヘンリック・イブセンの『人形の家』が上演されている。大正7年（1918年）から大正8年（1919年）にかけては平塚らいてうと与謝野晶子らの働く女性と子育てに関する論争が繰り返されている。＜新しい女＞の生き方が、働く女性の生き方が注目された時期である。大正9年（1920年）代にはプロレタリア文学が花開こうとしている。このようななかで、この『花物語』や『少女画報』（大正3年、1912年）創刊、『少女倶楽部』（大正12年（1923年）創刊）は、安心して少女に与え、涙もろく感傷的で、社会に反抗もせず疑問を形に表さない＜少女＞へと閉じ込めることができると男性たちや社会一般が考えた読みものであった。いわば、少女には共同体への所属意識を与える点において、社会にとっては男性の考える＜少女＞に押し込める点において、この物語は「精神的制服」の役を果たしている。実際は、少女に降りかかる不幸に憤りを覚えて、それをきっかけに社会の価値観や風習に、さらには社会機構に疑問を抱き始めた少女もいたかもしれない。

しかし、物語の筋の展開は、つまり表向きは安心できる筋が展開する物語であった。そして、もちろん吉屋信子自身は決してそのような＜少女＞ではなかったであろう。しかし、彼女は何をどのように書けば、売れる作家になれるか知っている作家であった。彼女は読者である少女たちの心を、また、当時の男性社会の要求をよく心得ていた作家であった。

註

- 1) 内田静枝『女学生手帳』（河出書房新社、2005）、p. 76.
- 2) 前掲書、p. 77.
- 3) 前掲書、p. 4.
- 4) 横川澄子、「吉屋信子「花物」の変容を探る——少女たちの共同体をめぐる」『美作女子大学短期大学部紀要』Vol. 46. p. 1-13, 2001.
- 5) 内田、前掲書、p. 4.

- 6) たとえば、『少女倶楽部』（大日本雄辨會講談社）は1923年6万7千部、1937年には49万2千部、今田里香「『少女』の社会史」勁草書房、2007年。
- 7) 「スイトピー」 p. 255.
- 8) 「日陰に花」 p. 42.
- 9) 「黄薔薇」 p. 93.
- 10) 「アカシア」 p. 15.
- 11) 「桐の花」 p. 300.
- 12) 「沈丁花」 p. 174-75.
- 13) 「黄薔薇」 p. 96.
- 14) 内田、前掲書、p. 77.
- 15) 「スイトピー」 p. 253.
- 16) 前掲書、p. 265.
- 17) 「黄薔薇」 p. 95.
- 18) 前掲書、p. 97.
- 19) 前掲書、p. 97.
- 20) 前掲書、p. 77.
- 21) 「ダーリア」 p. 281.
- 22) 前掲書、p. 283.
- 23) 「雛芥子」 p. 154-55.
- 24) 「名もなき花」 p. 58.
- 25) 「桜草」 p. 36.
- 26) 「ヒアシンス」 p. 216.
- 27) 前掲書、p. 216-17.
- 28) 横川氏は共同体という観点から『花物語』を論じている。横川、前掲書。

引用文献

内田静枝『女学生手帳』河出書房新社、2005。

横川澄子、「吉屋信子「花物」の変容を探る——少女たちの共同体をめぐって」『美作女子大学短期大学部紀要』Vol. 46. p. 1-13、2001.

吉屋信子『花物語』上、下、河出文庫、河出書房新社、2009.

少女雑誌にみる女学生の服装規範について

Dress Code for Female Students in Girls' Magazines

米今 由希子

KOMEIMA Yukiko

I. はじめに

日本女子大学・附属校の服装規範の変遷を検討するにあたり、附属校設立から標準服が採り入れられたと考えられる前後の当時の女学生の服装規範を明らかにすることを目的として、少女雑誌の記事の分析を試みた。資料収集の過程でコロナ禍による制限のため、当初予定していた通りの成果が見通せなくなったことから、附属校標準服のデザインに着目し、おなじ「ヨシザワ」製の制服を採用した女学校の制服採用の過程を明らかにすることとした。さらに、各学校の服装規範と制服とのかかわりが、日本女子大学・附属校の服装規範の変遷を検討する手掛かりとなると考え、学校史を中心に調査検討した。本稿では当初の予定通りとはいかなかったが、少女雑誌にみる女学生の服装規範について調査した内容を報告する。

II. 少女雑誌および調査対象期間について

大正から昭和初期にかけて新たな女性読者の増加とともに女性雑誌の創刊が相次いだ。要因としては女性の就学率の増加と識字層の増大、「職業婦人」の登場にみられる女性の就労率の増加、「新しい女」に触発された啓蒙的立場からの創刊、などが指摘されている¹⁾。その中で少女、すなわち童女から未婚の女性²⁾を対象にした少女雑誌も多数創刊され、少女の代表的な存在である女学生の間で好んで読まれていたといわれている³⁾。表1は明治から昭和初期に発行されていた少女雑誌について、発行期間と出版社をまとめたものである⁴⁾。

次に、調査期間の設定について考えると、女学生の制服は大正末から昭和初期にかけて和装から洋装へと大きく変化し、セーラー服を採用する女学校も多かったことは先行研究に詳しい⁵⁾。附属校が標準服としてセーラー服を採用した時期については、佐々井、鈴木の報告から、おおよそ大正末であると考えられる。そこで記事を収集する期間として、1910年から1930年を目安として設定した。また、雑誌の記事からは、当時の女学生の服装規範、および当時の社会一般で考えられていた服装規範を明らかにすることを目的とし、女学生の服装、制服の実態とそれらに対する社会からの評価、および女学生自身の評価について、情報が得られる記事を収集することとした。

以上のことから、1910年から1930年にかけて継続的に発行されており、該当記事を収集することのできる雑誌として、以下の5誌をとりあげた。

①『女学世界』

1901年(明治34年)1月から1925年(大正14年)1月まで博文館から月刊で刊行されており定期増刊号もあった。2005年に柏書房より復刻版が出版されており、今回の調査では復刻版を用いた。内容としては、女性の育成に役立つ教養雑誌として創刊されたが、8巻以降実用本位の内容に徐々に移行し、さらに15巻以降は小説類も増加している。

表1 1900年から1930年までに創刊された少女雑誌

雑誌名	出版社	創刊年	終刊	推定刊行数
女学世界	博文館	1901	1925	350
少女界	金港堂書籍、大洋社	1902	1914?	142
日本の少女	大日本少女會	1905	不明	—
少女世界	博文館	1906	1931	322
少女の友	実業之日本社	1908	1955	599
少女	女子文壇社	1909	不明	—
姉妹	國學院大學出版部	1909	1909?	14
女学生	文光堂	1911	不明	—
女学生画報	女学生画報社	1911	1920	111
少女画報	東京社、新泉社	1912	1942	364
少女	時事新報社	1913	1924?	148
新少女	婦人之友社	1915	1919	57
をとめ	千章館	1916	不明	—
少女新聞	東京社	1916	1917	29
少女号	小学新報社	1916	1928	136
小学少女	研究社	1919	1928?	107
小学女生	実業之日本社	1919	1923	49
女学生	研究社	1920	1922	28
令女界	宝文館	1922	1950	314
少女物語	ポケット講談社	1922	1924	26
少女倶楽部（クラブ）	講談社	1923	1962	504
愛の少女	婦人児童文化協会	1923	不明	—
少女星	大阪開成館	1924	1924?	1
少女の国	少女の国社	1926	不明	—
少女文芸	新報社	1926	1926	6
小令女	宝文館	1926	1927	10
少公女	集英社	1926	1927	16

②『少女の友』

1908年（明治41年）から1955年（昭和3年）まで48年間にわたって、実業之日本社から月刊で発行されていた。吉屋信子、川端康成らの小説や詩、中原純一の挿絵や「女学生服装帳」と題したファッション指南などが連載されていた。読者の投稿欄が多かったことから編集者と読者、読者間の交流も盛んで都市部の女学生に人気があったと言われている。「女学生服装帳」は中原純一と編

集部員との対談形式で記事が構成されているが、「セーラー服」がテーマの1回目の編集部員は日本女子大学の卒業生である内田多美野であること、描かれているセーラー服が「ヨシザワスタイル」のようであることが指摘されている⁶⁾。

③『少女画報』

1912年（明治45年）に『婦人画報』の姉妹誌として東京社によって創刊され、1931年（昭和6年）に新泉社に発行が移り、1942年（昭和17年）に『少女の友』に統合された。月刊誌で、当初は教育的な誌面であったが、大正末以降は芸能記事が増加し娯楽的な内容へと移行した。女学校の訪問記事、女学生からの学校の様子を紹介する投稿なども多く、女学生の服装規範についての情報を得るためには有益であると考えられる。

④『令女界』

1922年（大正11年）から1950年（昭和25年）まで宝文館から発行された月刊誌である。想定される読者層は女学校高学年から20代前半の未婚女性であり、記事の内容も美容記事や身の上相談、恋愛小説など年齢層に見合った内容となっている。

⑤『少女倶楽部』

1923年（大正12年）から大日本雄弁会講談社より創刊された月刊誌で、1946年（昭和21年）に『少女クラブ』に改題され、1962年（昭和37年）には『少女フレンド』と改題されるとともに週刊となった。想定される読者層はやや低めであり、小学校高学年から女学校低学年である。特徴的な記事の内容としては教育的な内容の長編小説や、女学校の入学試験心得などが挙げられる。

以上の5誌について、1910年から1930年に掲載された該当記事を収集することとした。

Ⅲ. 少女雑誌の記事にみる制服・服装の実態と服装規範

収集した雑誌記事について、1. 女学生の制服・服装の実態が分かる記事、2. 社会からの評価が分かる記事、3. 女学生自身の評価が分かる記事、の3項目に分けて紹介する。

1. 女学生の制服・服装の実態が分かる記事

当時の体操服を含めた、制服、服装の実態が分かる記事としては、まず画像資料として写真付きの記事が挙げられる。各雑誌とも巻頭にグラビアページがあり、卒業式や運動会がとりあげられる他、学校紹介記事などでも写真が掲載されていることから女学校での装いの実態を知ることができる。また街角スナップからは外出時の服装を知ることができる。

図1は「巣立ちする人々」と紹介されている1925年（大正14年）の頌栄高女の優等卒業生の写真である。続いて「栄えある卒業の日よ」と題されて、都内5校の卒業式の様子が紹介されている（図2）。いずれも和装であり、図1の左下の1名のみが大きく目の衿がついたブラウスとジャンパースカートの洋装であることが分かる。都内5校は右上が千代田高女の学術優等賞の学生、右下は牛込成女高女、左上は淑徳高女、左下は京華高女の優等卒業生と紹介されている⁷⁾。

また、「女学生の今昔」と題されて、卒業生の写真を対比して



図1 1925年（T14）頌栄高女の優等卒業生
『女学世界』1925年5月



図2 1925年 (T14) 都内女学校の卒業式の様子
『女学世界』1925年5月



図3 1891年 (M24) 女高師附属高女 卒業生
『少女画報』1916年2月



図4 1915年 (T4) 女高師附属高女 卒業生
『少女画報』1916年2月



図5 1915年 (T4) 岡山県立高女 運動会
『少女画報』1916年1月

掲載している記事もみられた(図3、図4)。1916年(大正5年)に掲載されたもので「上図(図3)はお茶の水女学校の明治二十四年の卒業生。下図(図4)同校大正四年の卒業生です。前列右より七番目は中川校長先生です。上図の後列五番目が矢張り中川先生ですが、かうして比べて見るも、全く無益のことではありますまい。」⁸⁾と記されている。紙面にお茶の水女学校と紹介されている女子高等師範学校附属高等女学校(以後女高師附属高女)では、1897年(明治30年)以降に袴の着用がみられるようになったと指摘されている通り⁹⁾、図3では見られなかった袴を図4では学生が着用していることが分かる。



図6 1915年 (T4) 埼玉県立浦和高等女学校 フットボール
『少女画報』1916年1月

運動会の様子も写真付きで紹介されることが多く、運動服の実態を知ることができる。図5、図6は「地方の女学校」と題されており、図5は「岡山県立高等女学校の運動会、バスケットボールに熱狂のありさまです。」¹⁰⁾と書かれている。襷がけをして袴を着用し、白い帽子をかぶっている。図6は「埼玉県立浦和高等女学校、フットボールに白と赤とが、勝敗を争う光景です。」と書かれ



図7 1916年(T5)上野高女運動会、京華高女記念式、
府立第一高女運動会、淑徳高女同窓会
『少女画報』1917年1月



図8 1915年(T4)岡山県立女子師範学校 運動会
『少女画報』1916年2月



図9 1915年(T4)日本女子大学運動会『白妙』
『少女画報』1916年1月



図10 1915年(T4)日本女子大学運動会『盲啞競争』
『少女画報』1916年1月

ており、こちらの襷は白・赤を示すための襷である。袂らしきものは見られないため、おそらく筒袖であると考えられる。また、袴には裾に白い1本線があることが見てとれる。浦和高女の袴の白線については、「ある女学校で体操をしてゐた一列を抜き出してみました。随分面白いぢやありませんか。袴の裾に白い筋のある女学生の方がズラリと列んだのが面白いので一浦和高等女学校!!」¹¹⁾ という解説とともに、一列にベンチに腰かけている写真が紹介されているものもあった。

図7は「晴れやかな集ひ」と題された記事で、右上は「上野高等女学校の運動会で、ダンスの終わりに、「秋季運動会」といふ文字を作つてゐる度であります(十一月五日)」¹²⁾ と書かれている。和装と洋装が混ざっているように見える。右下は「京華高等女学校の記念式日の体操(十一月十九日)」と書かれ、揃いの着物と袴を着用し、襷がけをしている。左下は「淑徳高等女学校の小石川植物園に於ける同窓会の集まりであります(十一月五日)」と書かれ、中央の女性二人は裾に白線が1本ある袴を着用している。京華高女の着物と袴、淑徳高女の白線のある袴については、刑部¹³⁾によりそれぞれの制服であることが分かる。左上は「府立第一高等女学校の運動会、バスケットボールの遊び(十一月十三日)」と書かれ、活動の便をとるために袴の裾を括っている。括り袴は他にも見られ、図8は岡山県立女子師範学校の運動会でバスケットボールをしている様子である¹⁴⁾。緋の着物と括り袴を着用していることが分かるが、その中で右端にセーラー服を着用してい



図11 1924年(T13) 女学生庭球大会 右お茶の水高女 左品川高女
『女学世界』1925年1月



図12 1920年(T9) 松本高等女学校
『少女画報』1920年9月

る学生が確認できる。スカート部分は裾がすばまっており、括りスカートであると推察できる。

また、日本女子大学の運動会の記事も見られた。図9、図10は1915年(大正4年)の第13回運動会の様子で、「昨年の十一月、女子大学で行はれた運動会であります。上(図9)は『白妙』といふダンスで、雪白の薄物を捧げての振りは、実に美しいものでありました。下(図10)は『盲啞競争』といって、一人は眼をかくし、一人は口をかくして、二つの竹の輪をくぐって帰るといふ、面白い競争でありました。」¹⁵⁾と書かれている。いずれも着物に袴を着用している。1920年(大正9年)の第14回についても写真付きで紹介されている記事がみられ、「十一月二十一日日女子大学の運動会で附属女学校の徒手体操」¹⁶⁾と書かれている。写真がはっきりせずに着衣の判別が難しいが、生徒が手を挙げている様子が写っている。

その他の体操服を知ることでできる記事として、運動競技の大会を取材した記事があげられる。図11は1924年(大正13年)11月に行われた関東女学生庭球大会を取材した記事で掲載されている品川高女のペアとお茶の水高女(東京女高師附属高女)のペアの写真である。下衣が写っておらず、また競技中の写真ではなく、試合後に撮影されたものと考えられるため、体操服と限定することはできないが、品川高女は細いリボンを結ぶセーラー服で、お茶の水高女はバンド型の徽章がみられる¹⁷⁾。

制服の実態が分かるものとしては、学校紹介記事の写真が挙げられ、図12は松本高女の紹介記事の写真である¹⁸⁾。刑部¹⁹⁾によると海老茶袴に白線が1本入ったものが制服として定められていたが、パラソルを差して通学する女学生の袴の裾には白線が確認できる。また、写真は掲載されていないがコラム欄に「学校だより」が掲載されることがあり、そこから服装の実態が分かることもある。例えば、1916年(大正5年)の「大阪における服制結髪の一定」²⁰⁾について報じた記事が挙げられる。「髪の結び方と服装」と題して「大阪府下各女学校にては協議の上生徒の髪と服装とを一定しました。一年級はおさげに元禄袖。二年級は元禄袖におさげにして前髪をふくらして結び、三四年級は束髪に普通の袖の着物です。」²¹⁾と書かれている。

2. 社会からの評価が分かる記事

次に社会からの評価が分かる記事として、雑誌記者が女学校を訪問して書いた学校紹介記事が挙げられる。写真付きで掲載されることも多く、前述の通り制服の実態も分かるが、加えて記者が校風や女学生の様子、世間の評判などを伝えていることから社会からの評価を知ることができる。

例を挙げると、『少女画報』に「女学校評判記」というシリーズものの記事があり、1916年(大正5年)3月号では川越高女を、4月号では熊谷高女を紹介している²²⁾。「埼玉県には浦和と川越

と熊谷とに、県立高等女学校がおかれています。(中略) 当校は浦和に比べると、一層質素で一層温順であります。これはこの町の生活状態が豊かであるために、一体に引込思案であるからではあるまいかと思って居ります。」と紹介されており、熊谷高女については「本校は大体に於いて川越と同じであります。(中略) 川越は昔ながらの町であって、土着の人が多く、生活も豊かでありますから、したがって生徒も温順であります。この熊谷町は交通の便が川越よりよく、(中略) 年々発展してゆく町でありますから、他郷から入り込む人々によって、少なからぬ刺激を受けるので、生徒も幾分、競争的態度になって居ります。けれども質素な点に於いては、浦和、川越よりも勝つてゐるかもしれません。」と紹介されている。土地柄と関係づけて両者の女学生の様子を評している。

1920年(大正9年)からは「三角眼鏡」という筆名の記者が「女学校評判記」をシリーズで連載している。第1回目は跡見女学校で「紫紺の袴に、紫紺の着物、裾さばきも軽やかに、光った靴を穿いて、小石川は柳町さして通っていく姿を見ると、なるほど上品な女学生さん達だと、通る人の眼がちっと注がれる。確かに跡見と云へば、一時は民間の華族女学校と云はれたも、無理からぬ次第だとうなづかれる。学校の歴史から云へば、東京でも一番古く、そして一番月謝が高いといふ評判も、或はほんとうであらう。」²³⁾と書かれている。跡見のシンボルでもある紫紺袴について触れ、上品と評されているが、続く記事の中で「新しい時代に掉してゆくには、やはり昔のままではいけないのかも知れない。(中略) まったく、世間並みの女学校になつたやうな気がするのは無理からぬ次第であらうけれど、私はさうした中にも、跡見独特の校風といふものがあることは信じたいのである。(中略) 上品な淑やかないふことだけは、制服の紫紺とともに、失はないやうにしていただきたいものである。」と書かれており、他の女学校とは一線を画した存在であったが時代とともに変化していることが指摘され、また紫紺袴に象徴される以前のような跡見の上品さ淑やかさを好ましく評価していることが分かる。取材時の写真も掲載されているが(図13)、「跡見女学校の皆さんの、お転婆ぶり、いや、これは失礼。快活なる運動ぶりです。」と添えられており、紫紺袴と紫紺の着物姿で大縄跳びを跳んでいる様子(左下)などが紹介されている。また、『女学世界』に「女学校のぞき」題された、帷子という筆名の記者が書いているコラムが連載されているが、そこでは「跡見高女の前に立ちたる時は、恰も茶目さんの退け時とて紫の制服に包まれたる体の持主に包囲されたり。」²⁴⁾と書かれており、シンボルの紫紺袴と着物に身を包んだ女学生を「茶目さん」と称している。

『少女画報』の「女学校評判記」の2回目は成女高女をとりあげている。「私立学校が貧乏を標榜することは珍しいことではないが、(中略) その実際も貧乏な学校であることは、番町の大名屋敷から市ヶ谷に校舎を移してここに十幾年、昨年やつと校門が石門に改められたことでも知れる。(中略) この学校は私立学校としては余



図13 1920年(T9)跡見女学校
『少女画報』1920年8月



図14 1920年（T9）成女高女
『少女画報』1920年9月

運動場での装いが異なっており、通学には紺地の洋服を着用していたとも考えられるが、「今では全数の三分の二くらいはこの改良制服を着ている」というのが、学校側からの情報であれば、外に発信するための情報と実態が異なっていたとも考えられる。記事には続けて「市内の自動車の車掌とまちがへられまいかとの懸念もあるさうだが、なる程着物はよく似て居るが、よく見れば学生さんと車掌さんとは自ら態度に表情にちがふ所がありますよ。成女の方々ご安心遊ばせ。」と書かれている。

また、「女学生評判記」では1921年2月号で東京女学館をとりあげている。「虎の門の方々」と呼び「虎の門は世間に評判されてゐるやうなハイカラではないことを証明される？（中略）濃く白粉もつけ、銘仙以上の着物を着、ハイカラな靴も穿き、色美しいリボンもかけ、顔をそむけたいほどハイカラでいらつしゃると云ふのが、世間の批評でしてね。（中略）ハイカラなんていふことは世人の誤解で、一日も早くその誤解を打破りたいといふ、生徒さん方の殊勝な心を推奨して、筆を擱きます。」²⁷⁾と書かれている。ここでは校風として派手でハイカラであると世間からみられており、社会から好ましくない評価を得ていること、女学生自身はその評価について不当だと感じていることが読み取れる。

前述の『女学世界』に掲載の「女学校のぞき」シリーズには、他にも淑徳高女について「制服は無けれど、袴の裾に白き線をめぐらしたり。写生中血色の良い少女達思ひ思ひの軽装をして出で来たり。」²⁸⁾、京華高女については「極めて自由な服装がこの学校の気風をよく現はしてゐます。」²⁹⁾といった記事がみられ、服装と校風を結び付けて述べられている。

デモクラチツク
程民主的なところがあつて、一年の収入支出を職員に公表するなどにはさすがに新しい宮田校長の偉いところで、その点に於いては校主さん一人が富んでゆくといふやうは学校とは大ちがひ。何にしるかうして貧乏な点では都下随一であらう。」²⁵⁾と書かれており、宮田修校長による民主的な校風であることが指摘され、卒業生や名物先生を紹介する際にも宮田校長の先進的な態度に由来すると書かれている。さらに「校長先生が婦人服の改良論者だけに、ここでは一番早く改良された着物を用ひてゐる。即ち紺地の洋服で、大さう可愛らしい形です。漸々に生徒がこれを着るやうになつていつて、今では全数の三分の二くらいはこの改良制服を着ているらしい。」と書かれている。難波²⁶⁾によると、成女高女の洋服は1919年（大正8年）に完成されており、この記事はその翌年であることから、紺地の洋服とはその時に完成されたものであると推察される。しかし、掲載された写真を見ると紺地のワンピースを着ている姿は見られず、多くは和服からの改良服と考えられる白い筒袖とやや丈の短い袴を着用していることが分かる（図14）。その中に、ブラウスとスカートとみられる洋装、セーラーカラーのように見える上衣とスカート姿が見られる。通学服と運

3. 女学生自身の評価が分かる記事

読者からの投稿欄には、女学生から学校での出来事が投稿されることがあり、服装に関する評価が読み取れる記事もあった。

『令女界』1929年9月号には「学園散歩」という投稿欄に「山形M高女の巴まみゆ」からの投稿が掲載されている。「風紀向上のため」に行われる「学校自治会」の様子として、「華美な風を避けること、生徒の身で髪にこてをかけたり、白粉をぬったりせぬこと—この問題は2年×組から提出された。説明者は2年生のKさん。『近頃、本校にまた当地方にふさはしくない身装をする人が見えますが是非、あはれは止していただきたいと思ひます…。』下級生の視線は一斉に四年生のYさんに注がれた。』³⁰⁾と書かれている。投稿の内容は、結局のところ、派手な装いをしていた4年生のYさんは美術の先生の描く油絵のモデルであったことが判明し、『『なアんだ。』と生徒はお互いに目を見合わせるのみ』という顛末であるが、ここで下級生からの糾弾の対象となっている装いが、「髪にコテをかける」「白粉を塗る」という「田舎にはめったに見られないモダンスタイル」であり、「本校、当地方にふさわしくない」ととらえられていることが分かる。投稿は匿名であるが、山形M高女というイニシャルが正しければ、おそらく山形県立宮内高等女学校（現山形県立南陽高等学校）であると推察され、派手な装いは目を引いたと考えられる。また油絵に描かれていた姿は「黒いセーラー服に赤いネクタイを下げたモダンガールがかわいい西洋人形を抱いている」姿であり、黒と赤の対比も鮮やかであるがセーラー服も時代の先を行く服装として、描く対象に選ばれたと考えられる。

IV. まとめ

日本女子大学・附属校設立から標準服が採り入れられたと考えられる前後の当時の女学生の服装規範を明らかにすることを目的とし、1910年から1930年に少女雑誌に掲載された、女学生の服装、制服の実態とそれらに対する社会からの評価、および女学生自身の評価について、情報が得られる記事を収集し分析した。コロナ禍による制限のため、当初予定した通りの資料収集がかなわず、限られた資料ではあるが、女学生の服装、制服の実態が分かるものとして、グラビアページ、運動会・競技会の取材記事、学校紹介記事などが挙げられ、体操服、制服を含めた服装の実態を知ることができた。社会からの評価が分かるものとしては、学校紹介記事にみられる校風や女学生の様子、世間の評判などを伝える内容が挙げられ、上品さ淑やかさは好ましく評価され、派手でハイカラな装いは好ましくないと評価されていた。女学生自身の評価が分かるものとしては、女学生からの投稿記事が挙げられ、華美な装いは女学生自身がふさわしくないと好ましくないと評価を与えていた。

1910年から1930年にかけての服装規範の変遷を結論付けるためには、より継時的な資料収集が必要となると考えられ、また、都内の私立女学校と地方の県立女学校では服装規範が異なることも想定される。今後、新たな資料収集と分析を試みたい。

注

- 1) 三鬼浩子「大正期の女性雑誌—働く女の機関誌を中心に—」近代女性文化史研究会『大正期の女性雑誌』（大空社、1996年）、3頁。
- 2) 本田和子『女学生の系譜—彩色される明治』（青土社、1990年）。
- 3) 内田静枝『女学生手帳 大正・昭和乙女らいふ』（河出書房新社、2005年）、6-7頁。
- 4) 表は以下を参考に作成した。近代女性文化史研究会、前掲書 近代女性文化史研究会『近代婦人雑誌目次総覧』（大空社、1985）、熊本県菊池郡菊陽町図書館ホームページ（<https://www.kikuyo-lib>）。

jp/?page_id=119、2021.6.20最終閲覧)「少女雑誌について」。2019年5月閲覧時には「終刊もしくは最終確認号」「推定刊行数」の2項目も掲載されていたが、2021年6月時点では削除されている。

5) 女学生の制服については以下の文献を参考にした。

刑部芳則「大正時代における高等女学校の洋装化：セーラー服とジャンパースカートの創出過程」『中央史学』40号、2017年3月、56-75頁。

「明治時代の高等女学校と服装論議：女子生徒の着袴」『大倉山論集』64号、2018年3月、73-140頁。

「ミッション系高等女学校の制服洋装化」『総合文化研究』23巻3号、2018年3月、130-106頁、日本大学商学部。

「近代日本の制服研究（中央史学会第40回大会記念シンポジウム 歴史研究と史料）」『中央史学』39号、2016年3月、40-51頁。

「セーラー服の百年史。愛され続けた理由」『東京人』36巻3号、2021年2月、116-123頁。セーラー服の変遷についてまとめられており、附属校の標準服についても触れられている。

難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』（創元社、2012年）。

『近代日本学校制服図録』（創元社、2016年）。

内田静枝『セーラー服と女学生 100年ずっと愛された、その秘密』（河出書房新社、2018年）。

前掲『女学生手帳 大正・昭和乙女らいふ』（河出書房新社、2005年）。

6) 内田、前掲書『セーラー服と女学生』、54頁。

7) 『女学世界』25巻5号、1925年5月、4-7頁。

8) 『少女画報』5巻2号、1916年2月、11-12頁。

9) 難波、前掲書『学校制服の文化史』、7頁。

10) 『少女画報』5巻1号、1916年1月、18頁。

11) 『少女画報』5巻2号、1916年2月、88頁。

12) 『少女画報』6巻1号、1917年1月、11頁。

13) 刑部、前掲「明治時代の高等女学校と服装論議：女子生徒の着袴」、110頁。

14) 『少女画報』5巻2号、1916年2月、10頁。

15) 『少女画報』5巻1号、1916年1月、11頁。

16) 『少女画報』10巻2号、1921年2月、18頁。

17) 『女学世界』25巻1号、1925年1月、164-165頁。

18) 『少女画報』9巻9号、1920年9月、13頁。

19) 刑部、前掲、112頁。

20) 難波、前掲書、236-237頁。

21) 『少女画報』5巻4号、1916年4月、65頁。

22) 『少女画報』5巻3号、1916年3月、64-65頁。5巻4号、1916年4月、42-43頁。

23) 『少女画報』9巻8号、1920年8月、112-114頁。

24) 『女学世界』25巻2号、1925年2月、8頁。

25) 『少女画報』9巻9号、1920年9月、106-109頁。

26) 難波、前掲書、260頁。

27) 『少女画報』10巻2号、1921年2月、109-112頁。

28) 『女学世界』25巻2号、1925年2月、8頁。

29) 『女学世界』25巻4号、1925年4月、23頁。

30) 『令女界』8巻9号、1929年9月、148-149頁

図版出典

図1、2 『女学世界』25巻5号、1925年5月、4-7頁。

- 図3、4 『少女画報』 5巻2号、1916年2月、11-12頁。
図5、6 『少女画報』 5巻1号、1916年1月、18頁。
図7 『少女画報』 6巻1号、1917年1月、11頁。
図8 『少女画報』 5巻2号、1916年2月、10頁。
図9、10 『少女画報』 5巻1号、1916年1月、11頁。
図11 『女学世界』 25巻1号、1925年1月、164-165頁。
図12 『少女画報』 9巻9号、1920年9月、13頁。
図13 『少女画報』 9巻8号、1920年8月、10頁。
図14 『少女画報』 9巻9号、1920年9月、10頁。

フランス女子教育における服装規範の役割

The Role of dress Code in the Girls' Education in France

佐藤 恭子
SATO Kyoko

I. はじめに

本研究は、女子学生の服装と制服に見られる女らしさを明らかにするにあたり、比較研究としてフランスの女子学生の服装について検討する。今日、フランスでは女子学生の制服が義務づけられている学校は少ない。2017年12月、国民教育・青少年大臣のジャン＝ミシェル・ブランケール氏が希望する地域での制服導入を許可する旨について言及したが、それは強制的なものではなかった。¹⁾ その後2018年11月5日に制服を採用した公立校は、制服の採用理由として所属意識の強化や公立学校で取り入れることで共和国の一員であることを意識させられる、などを挙げていた。その際の制服は男女共通のポロシャツ、トレーナー、ジャケット、パンツの他、女子はスカート、男子はバニユーダパンツがそれぞれ追加されている。²⁾

制服を新たに取り入れようという動きがあるなか、1809年に設立されたレジオンドヌール学院は、今日も制服が存在する数少ない女子校である。この学院は、1992年、2000年、2012年と制服姿の学院生活を掲載した記念写真集が出版されるほどに知名度が高く、フランス女子教育における伝統校といえるだろう。この学院の20世紀初頭の様子は、1901年に女性向け雑誌『フェミナ』でも確認することができる。

本論でははじめに、同時代の女性の理想像を示している女性誌の記事に掲載された女子教育に関する記事より、服装や女らしさを検証する。具体的には、1901年のセーブル女子高等師範学校と1902年のレジオンドヌール学院の紹介記事を取り上げる。20世紀初頭は、最新モード、マナー、女性権に関する動向などを掲載した女性向け雑誌の発行部数が増えた時期でもある。女性誌の記事を取り上げることで、大衆が目にした女らしさとはどのようなものだったのかを検証する。次に、女子の服装規範として制服の採用を継続しているレジオンドヌール学院の歴史をさかのぼり、学院の女子学生の目指す姿と衣生活との関係をみていく。以上のことを考察し、フランス女子学生に求められた女らしさと、フランスの女子教育における服装規範の位置付けを明らかにしていく。

II. 20世紀初頭女性誌に掲載された2つの女子校の服装

20世紀初頭に刊行された女性向け雑誌『フェミナ』には、刊行初年度である1901年と翌年1902年に、それぞれ2つの女子校を紹介する記事が掲載されている。1901年には「セーブルのエコールノルマル」(« L'Ecole normale de Sèvres »)と題してセーブル女子高等師範学校の教育指針が、1902年には「サン＝ドニのレジオンドヌール学院」(« Une Maison d'Education de la Légion d'Honneur Saint-Denis »)と題してレジオンドヌール学院の生活の様子が紹介されている。

1. « L'Ecole normale de Sèvres »

セーブルは1881年7月26日に、カミーユ・セーを発起人として創設された女子高等師範学校であ

る。設立からおよそ20年後に執筆されたこの記事には、セーブルの「まるで修道院のような簡素で実用的でありながら控えめな魅力のある³⁾」校舎の描写や、そこで学ぶ女子学生の様子が示されている。「ここ20年来、フランスのあちこちで設立されている多くの女子高校や女子中学で、女性教師が必要とされている。セーブルは、彼女らを送り出す使命をもつ。毎年、厳しい試験をへて、修了証を有する20名程度の若い女子生徒がエコールに送りこまれる。⁴⁾」セーブルは、20世紀初頭に女子教育が大きく躍進するなかで、必要とされた教員養成校であった。しかし、「20人の熱心な者のうち、4人か5人が競争に勝ってアグレガシオンの取得に達する⁵⁾」とあるように教員資格であるアグレガシオンを取得するのは非常に難関であったことがわかる。

記事では、そのような厳しい試験を準備する勉学の環境とは相反するかのように、女子学生の様子を優雅な姿としてとらえている。「広い中庭で、レクリエーションをするセプリエンヌの優雅な姿を見て、私たちは、彼女たちの非常に手入れの行き届いた髪型、そして上品なエプロン、良い趣味を示した姿に見とれた。⁶⁾」この記述には難関資格を前に学問に没頭する姿というよりはむしろ「優雅」、「上品」、「良い趣味」といった、女らしさを失わない姿を紹介していた。記事の描写は図1、図2の写真に示されている。服装の詳細はここでは不明だが、中庭やサロンの女子学生のエプロン姿が確認できる。一方、図3では授業時間の様子が紹介されている。こちらをみると、それぞれが異なる服装をしていることがわかる。記事では服装について次のように記している。「制服は課されておらず、学問がおしゃれをすることにまで、完全に侵入していたわけではなかった。⁷⁾」

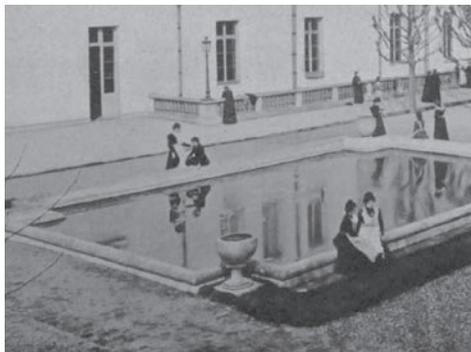


図1 中庭



図2 サロン



図3 科学の授業

セーブルの女子学生の記事からは、服装は決して派手なものではなかったが、制服が課されるようなことはなく、「優雅」で「上品」な「良い趣味」をもって勉学にいそしむ姿がうかがえた。

2. « Une Maison d'Éducation de la Légion d'Honneur Saint-Denis »

レジオンドヌール学院は、1809年レジオンドヌール名誉軍団の子女のための学校として、ナポレオンによって設立された学校である。⁸⁾ 学院へ入学するには、定められた条件を満たさなければならなかった。まず有料の制度で入学するには、騎士団のメンバーの娘、孫娘、姉妹、または姪でなければならない。また、無料の制度を受ける場合、財産を持っていない名誉軍団の正当な娘、または名誉軍団のうち上級将校の娘であること、さらに10歳から12歳で試験を受ける必要があった。記事からは「最も著名な教育機関のひとつである学院の学校生活1年間について、元学院生がまとめた記録」(«ces notes rédigées par une ancienne élève de Saint-Denis, sur l'année scolaire dans une de nos plus illustres maisons d'éducation»)と記されているように雑誌読者にとっても、良く知られていた名門女子学校であることがわかる。記事には学院生活や服装、規則などが紹介されているが、特にここでは服装に関する記述を見ていく。

レジオンドヌール学院には制服がある。記述によると制服は「率直に言ってみると見苦しい⁹⁾」とある。具体的には次のようなアイテムで構成されている。「黒いメリノドレス、同素材のエプロンはブローチ(ホック)のついたベルトで支えられている、ベルトはウールでクラス別に色分けされており、肩をとおり交差し、ウエストの後ろ部分で結ばれている、モスリンのプリーツ付きの飾り襟、メリノのケープは黒のファスチアン¹⁰⁾で裏打ちされている、夏は綿、冬はウールのストッキングをはき、白の手袋、カンカン帽をかぶる。¹¹⁾」とあり、服装の詳細が決められている。肩をとおりウエストで結ばれている太いリボンのようなベルトについては図4で、ドレスにエプロン姿は図5のレクリエーションの場で確認できる。また、図6の授賞式の写真でカンカン帽を持つ姿を見ることができる。8つあるクラスごとに異なっており、最年少は緑、中級は順番に紫、曙色、青、真珠色、白の5色、最年長は多色のベルトと記述されている(8クラスであるが、記述されている色は7種のみ)。着用方法は肩で交差して、腰の後ろで結ぶと解説されている。優秀な生徒が表彰される時は、クラス色の光沢あるシルクリボンにメダルが付けられて与えられた。逆に生徒が悪い行いをした場合は、もっとも重い罰として、悔い改め期間中はクラスの色ベルトをはずしていなければならなかった。ベルトは体操専用の制服に着替えた場合でも、肩や腰に着用していた。体操用の制服

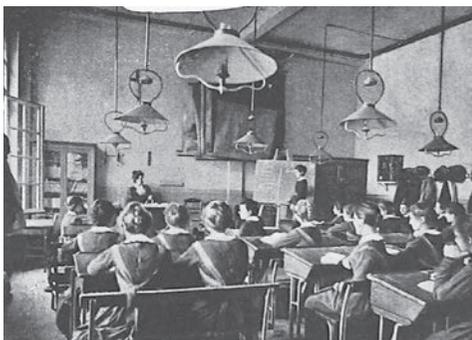


図4 サン＝ドニ校の授業



図5 レクリエーション



図6 サン＝ドニ校の授賞式

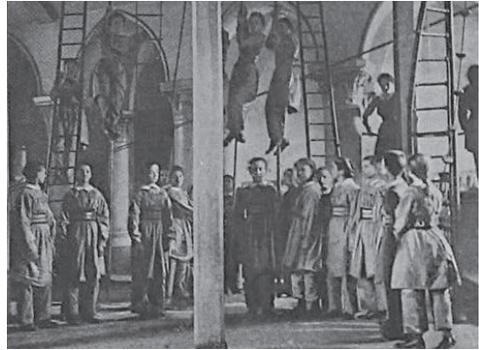


図7 体操のクラス

は、1856年から変わっておらず、ブラウス、グレーのキャンバスパンツ、バックルとリングが付いたベルトで構成されていた。¹²⁾ シルエットとしては膝丈のスカートの下にズボンが見えている形状であった。(図7)

今日まで続く伝統校である同学院の現在の制服について、写真集¹³⁾を参考に見ていくと、同様に肩から腰に掛けて巻き付けたベルト(リボン)が着用されており、色も学年ごとに異なる色が用いられている。また、スカートのシルエットや丈は時代に合わせて短くなっているものの、地味な黒っぽいジャンパースカートとジャケットに白いブラウス、という構成になっているのがわかる。

Ⅲ. フランスの女子教育における服装規範—レジオンドヌール学院の事例をとおして—

20世紀初頭の女子学生の服装の例として、前章ではセーブル女子師範学校とレジオンドヌール学院を見てきた。両者を紹介する記事からもわかるように女子学校に必ずしも制服があったわけではなかった。本章では、制服を採用していたレジオンドヌール学院について学院の歴史と女子教育の変遷をみながら女子教育における服装規範について検討していく。

1. レジオンドヌール学院前史にみるキリスト教教育

レジオンドヌール学院はナポレオン1世の政令によって1809年に設立された。学院はレジオンドヌール受勲者の子女を教育するための学校として開校した。1816年には政令によってサン＝ドニ校、サンジェルマン＝アン＝レイ校、エクアン校、ロッジ校の4校に編成された。その後、1882年フェリー法による学院の規定改定では、サン＝ドニ校、エクアン校、ロッジ校の3校に再編成された。前述の1902年の記事の内容は、この3校に再編された後の学院生活である。

レジオンドヌール学院の成立背景をみていくと、絶対王政期のフランス女子教育まで遡ることができる。1684年に設立された聖ルイ王立学校サン＝シール学院は、フランス王ルイ14世によって女子のための寄宿学校として開校し、フランス革命後の1793年まで続いた。貧しい貴族の女子のための学校をめざし、ルイ14世の2人目の妻、マントノン侯爵夫人の要請で設立されたものである。貧しい貴族の女子のためではあるものの、貴族階級の女子寄宿学校であった。

サン＝シール学院マントノン侯爵夫人の意志は、次にマリー・アントワネットの首席侍女であったエリエット・カンパン夫人によって設立された国立サン＝ジェルマン学院に引き継がれた。¹⁴⁾ ナポレオン1世は、このサン＝ジェルマン学院の教育を視察しながらレジオンドヌール学院の設立

につなげていった。特にレジオンドヌール学院設立について記されたエクアンの覚書¹⁵⁾には、次に示すようにサン＝シール学院をお手本としつつも改良が必要であることが記されている。

エクアン校における教育は、あらゆる点で優れていなければならない。大枚をはたいておきながら、しかるべき子女教育をおこなわなかったサン＝シール学院の轍は踏まないように。

また、女子教育においては、「時間割には特に注意が必要だ。エクアン校の生徒は何を学ぶべきか。何をにおいてもキリスト教教育をおろそかにしてはならない。」、さらに「誰が何と言おうとも、宗教は母親や夫たちにとってこの上なく確かなよりどころである。」といったように、キリスト教を基礎とする宗教教育の重要性が示されている。またキリスト教が女子教育の先にある目指すべき到達点である母親、そして将来支えるべき夫にとっての「よりどころ」となることも明確に示している。

…理屈屋ではなく、信仰心の篤い女性を育てていただきたい。女性の頭脳の弱さ、思考が移り気な点、社会における地位を考えれば、絶え間ない忍従と一種寛容で純朴な慈悲の心を教え込まねばならない。それには、隣人愛に富んだ慈悲深いキリスト教が必要となる。…エクアン校での教育の大半は福音書の教えによるものとする。この学院を修了する女性には、朗らかで、高い徳を備え、機知や娯楽などではなく、品行方正で気高い心を身に着けてほしい。…全体の中でもキリスト教教育にはとりわけ最新の注意を払わねばならない。

学院が目指すべき理想の女性像は、キリスト教の教えを守ってのものであった。学問として学ぶ科目は限られていた。「生徒たちに教えるのは、算術、読み書き、正しくフランス語を書くための文法。それから若干の地理と歴史。ただしラテン語やそのほかの外国語の学習は慎むこと。年長者には少々の植物学、物理学、博物学を教えてもよいが、それでも弊害は避けられないだろう。物理学は、生徒が甚だしい無知や馬鹿げた迷信に陥らないのに十分なだけの学習にとどめ…」とあり、必要以上の教育はとどめることを示していた。

2. エクアンの覚書にみる女子教育と衣生活

エクアンの覚書には、衣生活についても細かく記されている。

衣服を大量に与えるのが適当かどうか検討が必要である。そうした家の子女も儉約に親しみ、物の価値を判断して、自身で計算することができてよいはずだ。全員、一日のうちの大半は手仕事に費やさねばならない。長靴下、ブラウス、刺繍等、女性のたしなみ全般である。一万五千から八千リーヴルほどの収入で、娘の嫁入りに一万二千から五千リーヴルくらいの持参金しかつけてやれないような地方の家庭の子女だと想定して、相応に対処せねばならない。そうすれば家庭における手仕事の重要さがわかるだろう。

衣生活は、儉約生活と直結するものであったことがわかる。儉約するために身につけるほとんどすべてのものを手仕事で整えるべきであるとしている。家計を支える手仕事は女子教育の最重要事項のひとつとなっていたのである。

また、学生生活のなかでの服装についても示している。

服装については、制服とする。ごく一般的な生地で、着やすいデザインがよい。制服のデザインは、よこしまな気を起こさせるようなものであってはならない。もちろん腕を露出するようなことはないし、慎み深さと健康の両方に配慮して、改良してゆかねばなるまい。

服装は一律制服とされていた。実用性を良しとし、露出や華美となることを否定するとともに、「慎み深さ」が重んじられた。このことについては特に「余はモード商人を育てているのではない。小間使いや家政婦を育てているのでもない。つつましく貧しい家庭が必要とする女性を育てているのだ。」と念を押しており、モードとは無縁であることがわかる。しかし一方で、「自分の仕立てたドレスであれば、着こなすこともできるだろうし、優雅さも身につくというものだろう。」と述べており、つつましく、優雅な着こなしのできる女らしさが求められていたことがうかがえる。

3. 女子教育における服装教育

本章では、マントノン夫人の聖ルイ王立学校サン＝シール学院やサン＝シール学院を継いだカンパン夫人のサン＝ジェルマン学院、そしてサン＝ジェルマン学院を参考にしたナポレオンI世によるレジオンドヌール学院、この3校の服装についてみていく。

サン＝シールでは、制服として茶色のドレスにレースで縁取られた白い帽子（ボネ）、頭と腰にリボンを結んでいた。¹⁶⁾ リボンの色は、クラスごとに異なり、最年長は青、それに続いて緑、次が黄色、最年少は赤であった。¹⁷⁾ 女生徒たちの地味なドレスにリボンという統一された服装姿は、1689年（初演）「ラシーヌの劇『エステル』を演じる女生徒たち、マントノン夫人とルイ14世の前で」（1830）¹⁸⁾ や版画¹⁹⁾ などの生徒が描かれている現存資料で確認できる。

サン＝ジェルマン学院の服装では、サン＝シール同様クラスは4つに分かれており、クラスごとにベルト、帽子、スカーフの色が異なっていた。低学年は緑、中学年が青色、朝焼けのようなえんじ色、高学年は深紅に分かれていた。²⁰⁾ ベルトの重要性については、「ささいな悪さであれば叱るだけ、やや目にあまるようであればひとりで食事、重大な過ちであれば生徒と先生が集まっている前でベルト没収」との規則があった。²¹⁾

レジオンドヌール学院の設立当初の服装は、白いサージ地、のちに汚れにくい赤褐色のドレス、加えて黒のエプロンをつけていた。クラスは6つあり、ベルトや飾りひもの色で分けていた。最年少は緑、それから紫、黄金、青、橙、白と進み、年長者は紺であった。²²⁾

第2章で示したように、20世紀初頭のレジオンドヌール学院は、黒いメリノドレスに同素材のエプロン、ベルトはクラス別に色分けされていた。最年少は変わらず緑、中級の紫、曙色、青、真珠色、白の5色は若干変更がみられる。また、最年長は紺から多色のベルトに代わっている。

これらの様子から、地味な色を規範としたドレス、エプロンを着用し、リボンやベルトによってクラス分けが行われるシステムは、長い女子学校の歴史のなかで絶えず残ってきたものであることがわかった。特にリボンやベルトを取り上げることを罰則として使用するなど、制服のもつ所属を示す役割や、学院の一員である誇りを喚起するような役割は、リボンやベルトにあることがわかった。ドレスのデザインについては非常に質素なものであり、サン＝シール学院時代から続く、キリスト教をもとにした教育方針が見られた。

IV. まとめ

現在でも制服を採用している女子学校のレジオンドヌール学院は、学院の変遷を検討していくと革命以前のキリスト教を基盤とした女子教育につながっていることが明らかになった。学院の制服は、宗教教育の目指すべき質素でつましい女性像にふさわしい服装であり、学院の方針が反映されたものであった。制服は時代性に合わせたシルエットの変化はあったが、基本的に質素な色のドレスであり、デザイン性よりもむしろ色分けされたリボンやベルトの重要性が明らかになった。リボンやベルトはクラス分けや規律を示す役割を担っていた。リボンあるいはベルトは罰則としても用いられており、生徒である意識と強く結びついていた。一方で、セーブル女子高等師範学校、レジオンドヌール学院を例に取り上げ、制服採用、不採用に関わらず共通してみられた特徴は「優雅」な姿を理想とすることであり、女性らしさを形成する大きな要素であることがうかがえた。

最後に、本論で取り上げた19世紀後半に設立されたセーブル女子高等師範学校は、1886年ゴブレ法が小学校教師を非聖職者に限る、と提示した後に誕生した公立の教師養成の女子学校であり、制服の不採用との関係性がうかがえる。今後は、現代のフランスの学校教育における制服のありかたも含めて、政教分離と教育が制服や服装規範へどのような影響を与えたのか更に考察していきたい。

図版出所一覧

- 図1 *Fémia* le 15 mars 1901
- 図2 *Fémia* le 15 mars 1901
- 図3 *Fémia* le 15 mars 1901
- 図4 *Fémia* le 1 août 1902
- 図5 *Fémia* le 1 août 1902
- 図6 *Fémia* le 1 août 1902
- 図7 *Fémia* le 1 août 1902

注

- 1) « Jean-michel Blanquer se prononce en faveur de l'uniforme dans les écoles », https://www.bfmtv.com/politique/gouvernement/jean-michel-blanquer-se-prononce-en-faveur-de-l-uniforme-dans-les-ecoles_AN-201712120042.html, BFM TV., 2021年6月30日閲覧.
- 2) « Seine-et-Marne. A Provins, l'uniforme à l'école pour tous ? », https://actu.fr/ile-de-france/provins_77379/seine-marne-provins-luniforme-lecole-tous_18535588.html, actu.fr, 2021年6月30日閲覧.
- 3) *Fémia* le 15 mars 1901, p. 72, « austère, pratique, avec cependant un charme discret. On dirait un couvent... »
- 4) *Ibid.*, p. 73, « aux nombreux collèges et lycées de filles, fondés un peu partout en France depuis vingt ans, il faut un personnel de professeurs féminins. Sèvres a pour mission de les préparer. Chaque année, un examen très strict livre à l'École une vingtaine de jeunes filles munies de leurs brevets supérieurs. »
- 5) *Ibid.*, « De nos vint enthousiastes, quatre ou cinq décrochent la timbale de l'agrégation. »
- 6) *Ibid.*, « Nous avons vu, dans la grande cour, des silhouettes gracieuses de Sévriennes en récréation; nous avons admiré leur cheverux fort bien coiffés, leurs tablier qui ont de la grâce -- preuves de goût. »
- 7) *Ibid.*, « Nul uniforme n'est imposé et la science n'a pas tout envahi aux dépens de la coquetterie. »
- 8) *Fémia*, le 1 août 1902, p. 231, « C'est le 23 mars 1809, que Napoleon céda la Légion d'honneur, pour

- y établir une maison d'éducation, »
- 9) *Ibid.*, « Ce costume, on peut bien le dire, est franchement laid. »
 - 10) Futaine はロベール仏和辞典、小学館、1988によるとファスチャンの意。ファスチャンは麻糸と綿布の綾織りで毛羽を立てたコール天やピロード等の綾織綿布とある。
 - 11) *Fémina, op.cit.*, « Il est ainsi composé : une robe de mérinos noir, un tablier de même étoffe, monté à la ceinture avec agrafes ; une ceinture de laine de la couleur de la classe, croisée sur les épaules et nouée derrière la taille ; une collerette de mousseline plissée ; une pèlerine de mérinos doublée en futaine noire ; des souliers lacés ; des bas de coton en été, de laine en hiver ; des gants de coton blanc ; un chapeau canotier. »
 - 12) *Ibid.*, p. 232, « Ce costume, qui n'a pas varié depuis 1856, se compose d'une blouse, d'un pantalon en toile grise et d'une ceinture avec boucles et anneau. »
 - 13) Gérard Monico, *Portrait des Demoiselles de la Légion d'Honneur*, Calmann-Lévy, 1992, Agnes Cerbelaud-salagnac, *Au-delà de l'uniforme des filles d'aujourd'hui*, Scrineo, 2012.
 - 14) 貴族社会が終わった革命後に台頭した新興層にむけて上流社会の作法を教えた。イネス・ド・ケルタンギ『カンパン夫人：フランス革命を生き抜いた首席侍女』ダコスタ吉村花子訳、白水社、2016、p. 202.
 - 15) Note sur l'établissement d'Ecouen. Finkenstein, 15 mai 1807、日本語訳は同上、pp. 266-270.
 - 16) P. de Noailles, *Saint-Cyr : histoire de la Maison royale de Saint-Louis établie à Saint-Cyr pour l'éducation des demoiselles nobles du royaume*, 1843, p. 191-192.
 - 17) *Ibid.*, p. 9.
 - 18) 国立教育博物館所蔵。(« Racine faisant répéter Esther par les demoiselles de Saint-Cyr », Musée national de l'éducation.) *Les Demoiselles de Saint-Cyr. Maison royale d'éducation, 1686-1793*, Archives départementales des Yvelines, 1999, p. 117参照。
 - 19) ルーアン市立図書館所蔵237、238番 (Bibliothèque municipale de Rouen)、Gallica.bnf.fr (閲覧日 2019/11/30)。
 - 20) 前掲書、ド・ケルタンギ、p. 274。
 - 21) 軍隊であれば降格を指すことと同じ意味に相当する。同上、p. 211。
 - 22) 同上、p. 274。

附属校における服装規定について —セーラー服への思い

The dress code of the junior high school students affiliated with Japan
Women's University: Thoughts on sailor style uniform

鈴木 幹子
SUZUKI Mikiko

1. はじめに

現在、附属中学校では生徒手帳の『生活上のきまり』の中に服装に関する原則があり、附属高校には『風紀内規』があり、それぞれに自由な校風の中で生徒自らが通学服のあり方を考え、相応しい服装を選びながら学校生活を過ごしている。そこで附属校特有の標準服の歴史的な流れを辿るとともに、現職の教員の立場から見えていること、伝えられることが何かしらあるのではないかと考え、標準服の特色と服装規定について考察してみる。

2. 附属校のセーラー服の歴史

2018年度に、若葉会総会出席者・桜楓会江東支部会出席者の有志の協力を得て、服装規定に関する自由記述のアンケートを行った。同窓生が在学中（中学が生田に移転する1978年までの記録）の印象に残っている出来事の中から、標準服や通学服の着こなし方、主にセーラー服に関する記述のみを、一部分原文のまま抜粋した。

(資料1) (文頭・は同回生の複数回答、高校のみの入学者も有り)

旧制高等女学校 36回生

生地も形もいろいろ（私は自家製）、夏は上下共 木綿地、他は紺サージにセーター等。式典にはネクタイが白でセーラー、和服は届出（病気等の理由）が必要。豊明小学校では、ワンピース等自由でしたので、女学校のセーラー（どんな色、形でも）は、「あこがれ」でした。附属の特徴自由であること。

高校4回生（以下新制）

セーラー服でした。カーディガン、手提げ、ソックス、靴等、自由でした。セーラー服で良かったと存じます。

高校5回生

入学時は終戦直後で物資が無く、特にセーラー服でなくても良かったが、卒業時は全員セーラー服でした。ネクタイは紺と限らなかったと思います。（白・グレー）セーラー服をおしゃれに着こなすために、ウエストを細く絞って着ている方がありました。伝統に支えられ、誇りを持って着用していました。

高校6回生

・中学セーラー・高校ブラウスにスカート、柄など覚えていない。他校はスカートの結び方やネクタイ等の違いがあって面白いと思っていた。うちは普通だと思っていた。

- ・白のブラウスと紺無地のプリーツスカート。(レースのついた襟は特別なおしゃれをした様で嬉しかった!) 冬は紺色ブレザー、白ソックス、黒革靴。式典に出席するのに、特別な指示はなかったと記憶していますが、セーラー服・ブレザー等。(下に着るものはセーター等色とりどりだったと思います。) 時々華やかな色のセーターやカーディガンが、目立つことはありましたが、私自身は白のブラウスとブレザーで通しました。通学鞆それぞれ自由でしたが、中学から上がられた方のセーラー服が羨ましかった! ……地味・お行儀が良い・伝統が感じられる等、西生田で下車する時、いつも誇りに思っていた様に思い出します。

高校9回生

- ・中学セーラー。紺のVのセーター又は紺のカーディガンのみ。(色は1色) 靴下は踝までの長さの白一色のみ。(1年中) 特徴は、胸や腕に刺繍されたJWUの文字と校章。
- ・式辞のときはセーラー服、外に出る行事などもセーラー服(すみれ洋装店お誂え)。ネクタイではなく、絹の四角形を二つに折り、三角形にした。JWUの下を通して留めた。
- ・高校のスカートは紺の無地で箱ひだ・まわりひだ。箱ひだの幅の大きさを自分好みにしたり、まわりひだも大きくひだをとったり、布も色も濃い薄い、サージ・ギャバなど変化させ、何枚も持って、替えて密かに楽しんでた。(寝押し) 毎晩油紙で、たとう紙のように母親の作ってくれたスカートを挟み、紙包みに丁寧にたたんで、お布団の下に入れて寝た。式にはネクタイは白スカーフ、でも紺でもお叱りは受けない。
- ・学生らしいもの。セーラーの胸を大きく開けたり、脇を縫いこんでウエストを細く見せたりする友が1人おりましたが、真似するものはおらず、冷ややかに見て、真似もしなかった。決まりがないのが良かった。ソックスも自由だった。他校の服装をあまり見かけたこともなかった。服装のことで気にした覚えはなし、セーラーも中学時だけ着ていて、白線が汚れ、袖口にベンジン等を使ったり、始末が大変だった。白線だけ取り替えた気がする。

高校13回生

高校はブレザー。女子大の特徴、JWUの刺繍。

高校16回生

…通学鞆は皮製の(今で言うなら)ビジネス鞆が主でした。布の袋でも良かった。スカートの丈は膝まではあった。近年の子供達は、短すぎて格好悪いと思う。セーラーの格好良さ、特に衿のシャープさや、白線のテープが細い綿のバイアステープだったので、見栄えも良かったです。(細いコードではなく) 小学生の時にあった、胸当てもなく、衿元がすっきりして良かった。

- ・セーラーは白長袖、左腕に鷲の憲章もあり。セーラー以外の洋服もありでした。白基準で少しの模様はお目こぼしが。夏は白のブラウスに、紺無地のスカート。ソックスはあくまでも白、冬も白。ハイソックスが出始めましたが、これは紺。黒のタイツで、寒い日には黒ソックスを重ねて履いていました。…体操服-高校は冬は黒(上下) ジャージ サイズは上下バラバラ可でした。式典は白ネクタイ。家庭科調理は割烹着に準じたもの。化学実験・掃除で割烹着、中学では必ず! カーディガンは紺を基準に、テニス風の左腕に2本の白。紺サージの上着をセーラーに作ってもらったものを着ていました。白ブラウス基準で、思い思いにしていますが、私は麻のスワトウを何枚か持ち、日曜日にアイロンをしていました。でも行き着くところは中学のセーラー、冬はだんぜんセーラー。特徴は結ばない紺ネクタイ、白線、何よりも左腕の憲章が格好良くて友人の中には、それを上着に作り直してもらった人がいましたが、余り評価は良くなく、やはりセーラーのすっきり感が目だっていました。外に学校の用事(テニスの試合)で休日出るときもセー

ラーではなく、夏の基準服で参加しました。小学校の制服も好きでした。特に赤ネクタイから紺に変わるときは感激しました。

高校17回生

制服ではなく、標準服だったので、個性が出て良かった。

高校19回生

白のブラウス、紺無地たぶん8枚以上のひだのスカート。一般には紺のブレザーでしたが、学生らしい色であれば、無地のグレーでもOKだったと思います。靴下も白であれば、ハイソックスでもOK、靴は黒・茶系の革靴。中学校ではカーディガンは紺。高校になると紺・黒・グレー他着用、中学はほとんど決められた制服でしたので、ソックスに折り返しの流行があったと思います。制服ですので、日本女子大の中学生であることがわかり、愛着があります。高校は基準服で、ブレザースーツでしたが、学生らしい服装を守っていました。パーマは禁止で、時々違反者がいて注意されていました。

高校20回生

夏は半そで白のブラウス・紺無地の2本以上のひだのあるスカート。特別な服装は特にないが、寮生で中学の制服を購入し、式典のみ着用していた生徒がいた。色のポロシャツが人気があり流行した。自主性を重んじた風紀内規であったので、生徒を信じてもらっている学校側の対応に応えるため、乱れた服装を慎むムードがあった。

高校23回生

白・ブルー・クリーム・ピンクのブラウスカポロシャツにグレー、紺色でいくつかひだのあるスカート。冬はその上に、紺・グレー・黒・白などのセーター。セーターはラインやダイヤ柄があったりしたと思います。中学は式典のときは、白ネクタイ。高校は式典の決まりはなかったけれど、ブレザーを着る人が多かったように思います。中学校の制服でも、スカート丈をベルトで調節している人はいました。短すぎれば注意があったと思います。中学は紺の皮の通学靴。高校は母や自分たちで作った布製の手提げだったと思います。高校の時、コートは自由だったので他校よりカラフルでした。

高校25回生

スカートはプリーツ1・2本入った紺・黒・グレー。上着はスポーツシャツ・ブラウス、色は自由。高校時代、ほとんど自由だったので、毎日着ていくものに悩んだりしましたが、スカートの形が決まり、上着・ポロシャツ等、自分の好みのスタイルが決まれば悩むことはなかった。セーラー服に校章が入っていたので、どこの学校か一目でわかるから、良い面・悪い面両方あったと思う。

高校27回生

・セーラー服は背中のカモメ形の切り替えが良くて、そのため、フィット性がよく、綺麗に着こなせる。可愛い柄つきブラウスやポロシャツにプリーツスカート。(黒・紺・グレーに1本以上のプリーツ入り)寒ければ、セーター・トレーナー・ベスト。(何色でも可)寒ければ、ズボン・タイツははいて良し。防寒+自由、特にダッフルコートを着ていた。ジーンズ・透明ストッキングだけはダメ。靴はローファーかストラップ付き。式典の服装はブレザーなど何も決まっていなくて自由。卒業間際に、中3はセーラー服を洗濯に出す(卒業式に着るため)との理由で、白ブラウスに紺セーターが許されていた。洗濯はいつでもできるのに、わざわざそういうのを着た。中学で入学時は三つ折ソックスだったが、皆で運動(?)して、ハイソックスが認められるようになった。セーターやトレーナーから、衿を出して着るとき、ネクタイはしていなかった。式の

とき、白ネクタイだったか、黒長靴下はいらなかった。個性を生かしていた。昨今では高校はなんちゃって制服中心になっているようだが、私たちはあえて、ブレザーとスカートは自由に（色も形も）着ていた。制服を作って欲しいということを言う人たちもいたが、個性を生かすことが、創立時からの考えで大切だから、私服を着る方が良いということになった。

- ・色や柄に拘らないブラウスに、紺のプリーツのあるスカート。それを基本に、カーディガンやセーター、トレーナー等を重ね着する。スカートはタイトスカートは禁止。紺・黒・グレーが許可されていた。式典には紺・黒・グレーのブレザーまたはジャケットが必要。スーツという指示はなかったように思う。ただし、式典には「衿のあるもの」を指示された記憶がある。当時ハマカラーのブラウスやボタンダウンのシャツが流行っていた。無地のブラウスの他、鮮やかな柄のブラウスも流行っていたように記憶している。A4ノートが入るバッグという指定だったが、小さなバッグにノートを丸めたりしていたことが懐かしい。当時リーガルのローファーが主流だった。色は黒もしくは茶。ソックスは白の短いものではなく、ハイソックスやひざ下丈のソックスが主流。ソックタッチも必需品だった。小田急線沿いでは珍しい私服通学だったので、非常に華やかな印象でした。私自身は寮生だったので、通学生が楽しそうに見えたことの要因の一つが、服装がある程度自由だったからではないかと思っています。

高校29回生

- ・夏は紺のスカートにチェック（小さな）のシャツなどを着用したこともありましたが、衿のついた半袖のトレーナーのようなものを合わせたりしていたこともありましたが。冬は白シャツの上に当時は編みこみ（ノルウェー風のような北欧風の模様）のセーターなどを着るのが流行ったこともありましたが。また一部、大人びた学生たちは丈の長いスカートにストッキングで通っており、様々なファッションの者がありました。シャツの上に着るベストもアーガイル模様も流行ったりしてありました。また、スカーフを白いシャツの上に巻くことも流行ってありました。夏はロゴの入ったTシャツを着たこともあり「non-no」「seven teen」「Mc sister」などの雑誌を参考にしていたような気も致します。高校は式典はブレザー・スカート（紺？）着用、ネクタイをしていないように思います。
- ・中学では当時、制服の上に着るカーディガンはおしゃれな人は白を着て、あとは水色を着ている人もいて、スカート丈も上級生になるにつれて、短めだった気がします。靴は硬い四角い薄型のもので、サブバックのおしゃれなものやキャラクターものなどで、個性を出していたように思います。また、ソックスは足首とひざの間くらいの長さで「ソックタッチ」という、糊の液体状のものを塗って、ソックスが落ちないようにしていました。夏と冬の間に、夏服の長袖を着ている人が、たまにいました。当時、親戚に聖心に通うものがあり、それと比較して自分ではセーラー服が気に入ってありました。冬服の袖のマークが特徴的なのと、式典で白ネクタイをすることがとても印象に残っており、他校では見られない特徴だと思います。高校に進み、スカートの色以外自由になり、今の学生より、もっと私服が自由で、大学生に近いような格好でした。母と伊勢丹などに行き、買い物をしており、それはそれで楽しい思い出ですが、最近では皆高校生がどこの学校かわからないような白いシャツにスカート・ブレザー等で、それならむしろ高校もセーラー服でもいいのでは？と思うこともございます。
- ・冬も夏もブラウスに関しては色も柄も自由だった。靴下に関しても色は自由だった。スカートに関しては、色は黒・紺・グレーでプリーツのあるものキュロットは大丈夫だったように思います。タイトスカートは禁止でした。カーディガン・セーター・トレーナー等は、白・黒・紺グレーは

もちろん、派手でなければ良かったように思います。アイビールックが流行っている時期でした。特にスーツを着た記憶はありません。紺か黒のジャケットにスカート、白のワイシャツ・白の靴下でした。ソックスは当時ソックスタッチが流行し、白の靴下を伸ばして履いていました。靴はほとんど物が入らないようなぺちゃんこにして持つのが流行っていました。スカートは膝上で、短くして着るのが流行っていました。靴はリーガルで茶色か黒を履いていました。附属中学校の制服は好きでした。袖の鷺のデザインが良かったです。ヨシザワの制服の形の方が他のものより好きでした。高校は決められた範囲の中で、個々におしゃれをし、個性を出せて良かったと思います。中にはセンスのない友人がいて、赤いシャツに黄色い靴下とセンスを疑う人もいました。

高校30回生

- ・冬はプリーツの無地のスカートにポロシャツ・トレーナー。夏は無地の巻きスカート、フクゾーなどのブラウス。式典のときはシャツカラーのブラウスの上にブレザーを着用。スカートはタイトはダメで、必ずプリーツが入ったもの。靴はカッターシューズと明記してあったが、意味が良く分からなかった。ミハマなどを履いていた。割合自由だったと思う。パーマもOKでした。靴はB5が入れば、ハンドバッグも良かった。今の学生より大人っぽい装いだったと思います。
- ・ハマカラーのブラウス、ポロシャツ。紺・グレーのプリーツ・巻きスカート。ハイソックス・ミハマの靴。式典は紺のブレザー。セーター・カーディガンは紺・黒・グレーといった地味な色ばかりでなく、赤・黄・水色など派手な色も着用。ソックスもセーターの色に合わせたりした。靴は置き教科書をしていたので、ハンドバッグのように小さかった。中学はセーラー服にも関わらず、とても自由でカラフル。スヌーピーの布袋やランチボックスなど。靴もバッシュ・ローファーなど様々。高校はカラフルな上着に比べて、紺・黒・グレーのスカートが決まりなので、そういう点で他校と区別がついた。

高校31回生

式典にはブレザー着用。スカートのデザインが必ずプリーツがあることと、色は黒・紺・グレーでした。そこに茶と千鳥格子を入れるか否かで、生徒全員で真剣に話合ったのが、大きな思い出です。茶や千鳥格子がなくとも、爽やかで好感の持てる着こなしをしていました。決め付けられた枠の中ではなく、多くの選択肢の中で、節度と品位、センスを持っていたと思います。制服の厳しい話を聞くたびに、生徒の認識がきちんとしていれば、そのような制約はなくとも、場に合った服装はできる。子どもをもっと信用して欲しいと思います。

以上の高校31回生までのアンケートによると、セーラー服のデザインは今と大きく変わることはなく、左袖に鷺と桜楓の刺繍が施されたワッペンと、ネクタイ留めには筆記体のJWUの刺繍が付いている。後ろ見頃の背中への切り替えは、緩やかにカーブしていて、カモメの切り替えという表現が使われている。セーラーの上に着るものに関しては今よりもさらに規定がなく自由だった様子が分かる。

中学校にはPTA 厚生部による活動で、長年卒業生からの『標準服の譲り渡し』が行われている。(厚生部の活動としては1978年頃から) 毎年アイロンや包装なども丁寧に準備され、尚且つ低価格ということから、在校生の保護者からたいへん好評を得ている。その根底には、貴重な衣類を無駄にしないということだけでなく、卒業時に下級生にセーラー服を引き継ぐことと同時に、標準服という伝統も大切に受け継ぐという考え方があると思う。標準服とはすなわちセーラー服のことではあるが、歴史的な流れをみても、附属校は制服という表現があまり使われてきていない。近年まで

は一つの指定店に注文しなければならないということもなかったのである。今回のアンケートの中では、自家製もあり、すみれ洋装店、西川洋服店などヨシザワ以外の他店舗へのオーダーもあることが分かった。ある程度決まったデザインに仕立ててもらえれば、どこで作るとどんなセーラー服でも良かったということである。

附属高校の通学服は現在はセーラー服ではないが、いつごろから今の服装規定になっていったのだろうか。附属中学校の卒業アルバムには、今でも旧制高等女学校の創立記念式の記念樹の『木植え』の写りが掲載されている。年代は不明であるが、背景には目白の成瀬講堂が見えていて、セーラー襟の3本線と左腕の鷲の憲章が確認できる。

『わかたけ』19号の記載の昭和12年入学の卒業生の『目白の思いで』の寄稿によると、「セーラー服を格好よく着こなした一年生係の五年生が、てきぱきと私たち一年生をお世話してくださったが、そんなことも区立の小学校から来た私には新鮮な魅力だった。」とある。日華事変～第二次世界大戦を経て、物資が不足する時代が訪れるまでは、前述のアンケートからも、セーラー服は着用されていたのだと考えられる。

(資料2)

本校には制服がない。実は高等女学校には制服があったのである。胸当てのない、袖に飾りの刺繍のあるスマートなセーラー服で、当時、これに憧れて入った生徒もあったと聞く。新教育制度発足の際、この制服と、ピンク地に桜楓の校章は中学校に受け継がれた。……附属高女からの生徒は当然セーラー服を着用していたし、大学受験で回された生徒は、今更制服着用と言っても在学期間が1年しかないのだから、自由服であった。…半数以上の生徒が附属中学からの進学者で、そのままセーラー服を着用していたから、通学服が問題になったという記録は探しても出てこないのである。…五、六回生、否、もう少しあとまで、…目白の女子大近くの「西川洋服店」から人が来て、セーラー服を注文する生徒の採寸をしていた。だから、制服とは規定していなかったけれど、高校に入ってセーラー服を作る生徒もある程度の数には達していたのである¹⁾。

今回の研究を進めるにあたって、現在豊明小学校・附属中学校の指定店となっているヨシザワの3代目社長吉澤宏樹氏に取材をお願いした。大正初期にはまだ、制服の指定制度はなかった²⁾。ヨシザワでは残念ながら戦災でそれまでの資料は失っているとのことであるが、他校の資料によると、大正13年創業と同時にアメリカの某カレッジのライセンスを持っていたヨシザワがセーラー服を作り始め、森村学園とほぼ同じ時期に、女子大附属も作り始めたのではないかとのことである³⁾。女子大附属には校則の中に制服指定の記述はないが、吉澤氏によると「他校のような指定がないことは、むしろ珍しいのではないか」とのことである⁴⁾。

関東でヨシザワのセーラー服を指定にしている学校は附属を含め4校のみ。学習院は、初等科・女子中高等科、森村学園は、初等部・中高等部、聖学院は聖学院小学校・女子聖学院、(指定ではないが、女子学院のセーラーも扱っている)。ヨシザワ襟という表現もある胸当てのない小さな立ち襟のセーラーは全国的には珍しく、生徒のどのような輪郭にも沿い、清々しくスマートに見せてくれるように思う。中学から入学する生徒の中には、わが校のセーラー服が可愛いということに憧れて進学を希望する生徒も多くいる。ここでデザインの秘密は公開できないが、白線1本の材質や幅についてもヨシザワの譲れないこだわりがあり、一見同じように見えるセーラー服の中でもその

縫製の美しさは群を抜いていると思うのである。

豊明小学校がヨシザワを指定にしたのは昭和57年、附属中学校は平成11年のことである。中学校がヨシザワを指定にした背景には、中学からの入学者にも豊明小学校からの進学者と同じ洗練されたデザインのセーラー服を着せたいという教員の思いがあったと記憶している。画一的な服装をさせようという意図では勿論ない。セーラー服を着用すること以外の細則をできるだけ決めず、服装に関しても生徒自身に考えさせたいというのが、わが校の特徴だからである。

3. 附属中学校の服装規定

現存する中学校生徒手帳の中から、『服装』に関する記述を抜粋し、どのような細則があったのかをまとめてみた。

*1945年以前の数冊には、服装に関する記述はない。

年代	前文 他	セーラー	ネクタイ	上衣 他	靴・靴下	髪型 等	備考
1953	校章は必ずつけるようにしましょう セーラーのマークをつける場合は中学のものを用いる	服装はセーラーを標準とし、持っている人は必ず着るようにしましょう。 持っていない人はセーラーに近い地味な物を着るようにしましょう。	ネクタイは白、紺、黒のいずれか、式 のときは白	オーバー、ハーフコート、セーターの色や型は、派手でないものを着るようにしましょう	靴下、ソックスはあまり派手でないもの、ナイロンや綿のものも用いない	パーマ、こて、クリップはかけない リボンや飾りピン、ブローチは用いない	縦書き 『学校のきまり』
1956	身だしなみはきちんとしましょう。 校章は必ずつける セーラーのマークは付けてもつけなくても自由	セーラーを標準とし、着ない人はセーラーに近い地味なものを着る	白、紺、黒のいずれか。式 のときは白。 夏服は、紺・黒。	あまり派手でないもの。 夏の帽子はビケ帽を標準 ネックチーフは、雨風雪の日のみ	中学生らしいもの茶・黒・白・紺、サンダルは用いない。 運動靴の色は自由上靴には赤布を付ける	パーマ、こて、クリップはかけない 装飾品は用いない	縦書き
1957	同上	同上	同上	同上	色の記述なし		縦書き
1958	同上	服装はセーラーを標準としマークは付けてもつけなくても自由	同上	身につけるものは学生らしい物を用いる	色の記述あり。	パーマ、こて、クリップ、ピンカーはかけない、中学生らしい髪型	縦書き
1960	身だしなみはきちんとしましょう	セーラー服に関する記述なし	記述なし	同上 (帽子・ネックチーフの記述有り)	記述なし	装飾品は用いない	『私達の申し合わせ』と表記
1961	同上	服装はセーラーを標準とし校章は必ずつける	1956と同じ	帽子の記述はなし	中学生らしい型 黒・茶・白の地味なもの ソックスは白、長靴下は	髪型に関する記述はなし。	

					黒 校内では白 ズック靴		
1964	同上	セーラーに関する記述なし	ネクタイに関する記述なし	夏の帽子はピケ帽子を標準 冬はじみな帽子、寒い日以外はかぶらない	靴の記述はなし	パーマ・クリップ・ピンカールはしない	
1967	同上	同上	同上	同上 身に着けるものは学生らしい物	同上	装飾品は用いない	『学校のきまり』と表記
1968			ネクタイは紺、式るときは白		同上		この年より自治会則より先に『学校のきまり』
1977 (1978～ 生田へ)	記述なし	セーラーを着用し、校章をつけること	同上	記述なし	校内では規定の運動靴を用いる	パーマネント・クリップ・ピンカールなどはしない	(1978～横書き)『生活上のきまり』
1996	同上	セーラー服を着用し、校章・名札をつけること	同上	セーター・カーディガン形はVネック、シンプルな編み目のもの、色は紺・黒・グレー・白の無地 トレーナーは着用しない	通学靴は黒又は茶の革靴。校内では規定の運動靴 通学靴は学校で用意したものを使用する 補助靴は通学靴に準ずる ソックスは白・黒いストッキングをはいている時は黒でも良い	パーマはかけない	
1997	流行にとらわれず中学生らしく身だしなみを整えること	セーラー服を着用し、校章・名札をつけること	同上	同上	同上	パーマ・染色等はしないこと	『生活上のきまり』
2003	同上	同上 スカート丈は膝丈を基準とする	同上	同上 (ベストは着用しない)	同上	同上	同上

*2003年以降服装に関する記述は同様

4. セーラー服と「女らしさ」

日本ではセーラー服は女学生の服装として定着しているが、本来海軍の水兵服が原型であるセーラー服が果たして「女らしさ」と結びつくものだろうか。セーラー服の上衣だけに限って考えれば、性別に関係なく着られる形である。

附属中学のセーラー服には左袖に鷲と桜楓と3本ラインの刺繍の憲章がついており、これは水兵服の名残を示すものであり、機能的には必ずしも必要ではないデザインである。在校生・卒業生ともに、冬服・夏服にセーラーに好みが分かれるが、冬服の好みのデザインの中に、鷲の憲章は少なからず登場する。上記、表の1956年の生徒手帳に「セーラーのマークはつけても付けなくてもよい」という記載が見られるが、これは袖の鷲の憲章を指しているものと思われる。

ある卒業生への聞き取りの中で「セーラーは女性が着用し、スカートがついて初めて女性らしさを感じるものだと思う。そしてセーラーは、男性は水兵以外着ることがないという認識が定着していることを前提に、セーラー服はある意味、品格に繋がっている部分もあるように感じる。その品格こそが長年の附属生、卒業生にとって誇りとなっているのではないか。」という意見を聞くことができた。

また2021年春に卒業したばかりの中学74回生有志にも、セーラー服は女らしさに結び付くものであるかとの問いに答えてもらう機会を得た。以下一部抜粋であるが、必ずしも女らしさを強調するものではないという意見も少なからずあった。

- ・女性の上品さや美しさがセーラー服のシンプルさによって際立って表れるのだと思う。
- ・スカートの広がり方やシンプルで飾りすぎない制服が、日本の学生らしさと、女性らしさに結びついている、セーラーは落ち着いたイメージと可愛らしさがあると思う。
- ・セーラー服の全体的に柔らかいイメージが、女性の穏やかさと結びついていたと思う。
- ・スカーフやスカートがひらひらしていること、最低限の露出で、男性とは明らかに違う骨格を表していることで、女らしさと結びついていると思う。
- ・セーラー服はブレザーとは違う上品さがある。スカートの襷も、衿も3本の白線も女性の上品さを感じられる。
- ・女性らしい上品な色合いやデザインだと思う。
- ・プリーツのスカートやネクタイのフワリとしたサテンの生地が女性らしいと思う。
- ・スカートのヒラヒラが女の人らしい。プリーツスカートで広がる形が女らしい。
- ・セーラー服にはエレガントさがあると思う。
- ・セーラー服の可愛らしさは、女性らしさの特徴であると思う。
- ・元々海軍の服だったものだから、セーラーにズボンでもすごく似合うと思うので、女らしさもあって、男らしさもあると思う。セーラーの襟が華奢に見える印象があって、そこは女らしさに結び付くのかなと思う。
- ・物心着いた時から、女子だけの環境にいたため、特段男女を意識したことはありません。女らしさではなく、「私たちの学校らしさ」を結び付け、愛着を持っていたように思う。

これまでの調査から新旧に関わらず、どの年代の卒業生にとっても、セーラー服は特別な愛着を持つものであることがわかった。それは女らしさと結びつくともできるが、それだけではなく自分たちの学校の象徴として捉え、大切に誇りを持って着用していたことは間違いないだろう。

5. おわりに

標準服は、生徒が普段身に着けている洋服の中ではむしろ平面的で、スカートは白吊りと呼んで

いるベストから繋がっていて、上衣の下は身体を一切締め付けずに着用できる形となっている。身体のラインを強調せずに、むしろカバーしてくれるデザインであるともいえる。上級生になりお洒落に興味を持ち始めると、体形の変化とともにウエストを締めないデザインには手を加えたくないようで、ベルトで締めることで、スカート丈を調節しすっきりと着こなしたいという願望が生まれるようである。1997年頃の一時代ルーズソックスが流行し、靴下のボリュームと長さとのバランスで、スカートも極端に短くすることが流行した。しかしそのときも、附属校の教員は生徒の服装に対する考え方を縛ることを良しとせず、ルーズソックスの禁止も、スカートの丈を細かに規定することもしなかった。学活や生徒会の代表委員会で議題に上ることもあったが、時間をかけて生徒と話し合いを重ね、品性を失わない標準服の着こなし方を考えさせようとしたのである。生徒も自由を守るために、TPOを大切に場面に応じた着こなし方を考えようという姿勢を貫いてくれたように思う。その時代に『生活上のきまり』の前文に加えられたのは、「流行にとらわれず中学生らしく身だしなみを整えること。」の一文のみであった。

義務教育が終了する附属高校へ進学を機に、今の時代はセーラー服と別れを告げることになる。附属高校の『風紀内規』の細則も少しずつ変化してきているように、学生らしい通学服のあり方はその時代に合わせて変化していくものである。そしてその後の学生らしい服装を考える基礎力は、高校生の様子を目にしていると、中学校までの自治活動の中で十分養われていると信じる。その意味で附属校のセーラー服はやはり標準服なのであり、規則として定められた制服という呼び名とは一線を画すものであると考えるのである。セーラー服は少女から大人の体形に変化してゆく附属生の9年間を文字通り心身ともに護り育ててくれるものであり、緩やかなきまりの中で、生徒の学校生活を支えていたものなのだと思う。

卒業生のセーラー服に対する特別な愛着は、ただ毎日の学校生活で着用していたからだけではなく、自ら選ぶことにより自分をより知的に魅力的に見せる着こなしを学んでいたからであり、服装に対する大切な学びの機会を学校生活において得ていたことによるものだと思う。附属校の服装規定は、まさに自念自動の精神から生まれ、建学の精神を体現しているものであると考えるのである。

謝辞

今回の調査研究を進めるにあたって、(株)ヨシザワの吉澤宏樹氏、若葉会会長篠田明美先生、桜楓会江東支部の野間久仁子氏、中高図書室司書教諭の久保文香氏・尾形翔子氏、同窓生有志の皆様、ご協力頂いたすべての方々に心より御礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 『日本女子大学附属高等学校三十年史』 p. 110 1983/12/20
- 2) 『豊明小学校80年史』 p. 37 着物に袴の児童の写真
- 3) 『森村学園の100年』 森村学園百年史 p. 56 2010年9月
- 4) 『女子聖学院の歴史1956～1987年』 2008年3月
『わかたけ』 2～38号 附属中学校 PIA 文化部編集発行
附属中学校卒業アルバム
附属中学校生徒手帳『生活上のきまり』

日本女子大学の草創期における欧米思想の受容
—女性の自立と平和の結びつきをめぐって—

Western Thought and the Foundation of Japan Women's University:

A Study of Women's Independence and Peace

高 梨 博 子 TAKANASHI Hiroko
(日本女子大学文学部英文学科教授)

増 子 富 美 MASUKO Fumi
(日本女子大学名誉教授、婦人国際平和自由連盟会長)

白 井 洋 子 SHIRAI Yoko
(日本女子大学名誉教授)

三 神 和 子 MIKAMI Yasuko
(日本女子大学名誉教授)

高 村 宏 子 TAKAMURA Hiroko
(卒業生、婦人国際平和自由連盟理事)

牛 山 通 子 USHIYAMA Michiko
(卒業生、婦人国際平和自由連盟理事)

増 田 和香子 MASUDA Wakako
(文化服装学院専任講師、日本女子大学非常勤講師)

目 次

1. はじめに
2. アメリカ留学前の成瀬仁蔵
—伝道と教育と社会改良と— 白井 洋子
3. 上代タノ
—若き日の欧米滞在経験と平和運動への道— 高村 宏子
4. 20世紀初頭の田中孝子の足跡
—シカゴ大学の社会学、成瀬仁蔵、渋沢栄一との関連から— 高梨 博子
5. 1900年創立当時の日本女子大学校家政学について
—シカゴ大学家政学と比較して— 増子 富美
6. 草創期の日本女子大学へのジェーン・アダムズの影響
牛山 通子
7. マリオン・タルボットの家庭のヴィジョン：
シカゴ大学の家政管理学科 三神 和子

日本女子大学の草創期における欧米思想の受容 —女性の自立と平和の結びつきをめぐって—

Western Thought and the Foundation of Japan Women's University: A Study of Women's Independence and Peace

高梨 博子
TAKANASHI Hiroko

はじめに

1901年の開学以降の日本女子大学草創期において、日本女子大学で学んだ学生や卒業生たちは新しい生き方に目覚め、女性として、そして一人の人間として、自立して生きることを目指した者たちは多い。社会と自分とのかかわりの中に自分の存在意義を見い出そうとしたのである。また、彼女たちの中には、自立から平和を目指した者たちもいた。このような彼女たちの精神的展開の中で、草創期の日本女子大学はどのような役割を果たしたのだろうか。日本女子大学在学中や卒業後における直接的、間接的な考え方や思想の受容、日本女子大学を契機として広がった他教育機関における経験や人間関係を通しての啓発、これらのすべてが彼女たちそれぞれの精神的糧となって、彼女たちの中で熟成され、彼女たちの進むべき方向を定めていったのだと考える。

本研究は、草創期の同窓生たちに直接的、あるいは間接的に影響を与えたと考えられる考え方や思想を考察した。成瀬仁蔵、上代タノ、ジェーン・アダムスについては先行研究もあるが、今まで焦点の当てられてこなかった時期や角度から研究することで、新たな光を当てることができた。また、視野を広げて、同窓生の中でも今まで発掘されていなかった者も発掘した。このことによって、今まで研究対象とされてこなかったシカゴ大学と同窓生（田中孝子、井上秀、大橋広）、及び本学との結びつきを浮き彫りにすることができた。

白井洋子研究員は、アメリカ留学（1890年末から3年間）以前の成瀬仁蔵の大阪、大和郡山、新潟における教育実践と伝道活動が成瀬に与えた葛藤の意味するところを、宗教と教育、社会との関係という視点から、将来的な女子大学校構想を射程に入れながら考察した。

高村宏子研究員は、戦前戦後を通じ教育と平和運動に偉大な足跡を残した上代タノが、第一次大戦後の欧米でどのように見聞を広め、国際的人脈を広げ、将来の活動の基盤を築いたか、関係書簡および上代が残した手帳ダイアリーなどの一次資料から明らかにした。

高梨博子研究員は、日本女子大学の草創期の学生の一人である田中孝子に着目し、特に、彼女が明治42（1909）年に渡米してから大正8（1919）年に帰国するまでの成瀬仁蔵や渋沢栄一、シカゴ大学の社会学とその流れを汲むジョン・デューイとの関わりについて、発掘した資料をもとに整理した。

増子富美研究員は、シカゴ大学等アメリカの大学に留学した日本女子大学校卒業生が、日本女子大学校の学びに与えた影響について、特に、アメリカの家政学とは異なる日本女子大学校の家政学の独自性について考察した。

牛山通子研究員は、ジェーン・アダムズがセツルメント運動の拠点としてシカゴに設立したハル・ハウスの活動と日本女子大学社会事業学部創設との関係について、及び WILPF の活動が日本

女子大学関係者に与えた影響について考察した。

三神和子研究員は、麻生正蔵及び同窓生が訪れ、また卒業生が学んだシカゴ大学において家政学部をたち上げたメアリー・タルボットに着目し、その家政学部たち上げの趣旨を女性と教育の観点から考察した。

アメリカ留学前の成瀬仁蔵 —伝道と教育と社会改良と—

Jinzo Naruse: Christian Evangelism, Women's Education,
and Social Reform, 1878-1890

白井 洋子
SHIRAI Yoko

1. はじめに

吾天職

教員にあらず、牧師にあらず、学者にあらず。
社会改良者なり。女子教導者なり・・・¹⁾

明治23 (1890) 年師走の16日午前10時、32歳の成瀬仁蔵 (1858/6/23-1919/3/4) を乗せた City of Peking [北京市号] は横浜を出帆しサンフランシスコへと向かった。「横浜よりボストンまでの旅行日数は二十四日也。桑港に二日中止、[陸路で] シカゴウに一日止まれり。差し引けば二十一日也。其中二三日を除くの外は晴天也。」新年の1月11日、留学先のアンドヴァー神学院のあるボストン近郊ノース・アンドヴァーに到着、旧知の宣教師 H. H. レヴィット (Horace Hall Leavitt 1846-1920) 宅に落ち着いた。病身の妻万寿枝 (1860/5/4-1900/9/13) を日本に残してのアメリカ留學生活の始まりであった。冒頭の「吾天職」は、渡米して1カ月半ほど後の1891年2月20日の日記からの引用である²⁾。

1877年11月、前年にアメリカからキリスト教宣教のため帰国したプロテスタント会衆派 (日本では組合派と呼ばれた。以後、組合派/組合教会を用いる) の澤山保羅 (1852-1887) から洗礼を受けた成瀬は、1878年1月、澤山と大阪浪花教会信者らによる梅花女学校開校に尽力し、若干19歳にして女学校教師となった。しかしキリスト教主義の学校運営のあり方をめぐる考え方の違いから1882年8月にはそこを辞し、キリスト教伝道への専念を決意し、その年の暮れ、妻万寿枝と二人、奈良は大和郡山にある大阪浪花教会の出張伝道所へと向かった。そして84年1月、成瀬は接手礼を受け、設立されたばかりの大和郡山教会の初代牧師となる。郡山での厳しい伝道活動を経て、1886年7月には組合教会からの強い要請と師の澤山の推薦により新潟に向かい、その年の10月には新潟第一基督教会 (のちの新潟教会) 初代牧師に就任した。そして翌87年5月に新潟の有力者らの協力のもと新潟女学校を開校、校長を兼務したが、88年2月には牧師を辞任、校長職に専念した。それから3年も経たない1890年12月16日に横浜を出港、アメリカ留学へと旅立ったのである。そして渡米後かなり早くに日記に書き留めたのが冒頭に引用した「吾天職」であった。

成瀬のアメリカ留学の目的が女子教育研究と視察、キリスト教を中心とした欧米の宗教研究にあったことは、これまでの成瀬研究の成果と蓄積が明らかにしている³⁾。仁科節編『成瀬先生傳』(1928年) には、アメリカ留学以前の成瀬を、「大阪時代は、教育が主、宗教が副、郡山時代は宗教が中心、教育が補助になった時代であり、新潟時代は更に又宗教から教育に重点が移りかけて、し

かまほ両者相対立していた時代といへる」とある。同書はさらに、成瀬がアメリカ留学を決断した4年3カ月の新潟時代について、成瀬の当時の学生向け講話の話題が「宗教以外の社会的、道德的、教育的方面のことが多く加はって往つた」⁴⁾ことを挙げ、「この時代に於ける思想的変動の一端は、学校に於ける教育内容にも現はれたようである」と述べる。牧師職を辞任し新潟女学校校長として教育に専念した新潟時代には、成瀬のなかに「時代と年齢との、内外相応じた刺激」によって、梅花と郡山での「情熱的な天性」をもってしての伝道と教育実践から、その「裏面に埋もれていた理智の方面」への、動きがあったと言うのである。『日本女子大学校四拾年史』には、「新潟時代はその後期に及んで、漸く先生後年の帰一的宗教への過渡を示し始めた。女子教育に対する一層根本的研究と、新な宗教的転機とを内に蔵して、先生のアメリカ留学となったのである」⁵⁾と書かれている。

確かに成瀬にとってアメリカ留学を決断させた新潟時代の経験は、それ以前の大阪の梅花と大和郡山における伝道と教育がいわば個人の信仰と教育活動をめぐる葛藤が中心だったことに比べると、ひと回りもふた回りも広がりを持つ教会組織と市民社会の真っ只中での活動だったのであり、そこから得られた教訓は幾重にも貴重なものであったと言えよう。しかし新潟での「思想的変動」につながる経験は、梅花と大和郡山で積み上げられた教育への情熱と信仰の深まりとの文脈から切り離されてはならない。

ところで成瀬が渡米直後に日記や日本への書簡で明らかにした決意は、冒頭引用の「吾天職」だけではなかった。「吾天職」が書かれたより少し早い2月14日付の妻万寿枝宛の書簡には、「余が帰朝後は一の女大学校を興し之を中心トシ本体として日本全体ニ感化を及ボス事ニ致度候」⁶⁾と書かれていた。さらにその3月には、「女子教育方針 女子の目的」、「女子教育ノ目的」、「学校制度(日本)」など、項目毎に整理し詳細に記録されたノートが残されている。部分的には『成瀬先生傳』に収められているものもあるが、いずれも将来的な女子大学校構想やそのために刊行された『女子教育』(1896年)につながる内容となっている。この「アメリカ留学時代のノート(女子教育之方針、種子)1891年」巻末の片桐芳雄による「解題」には「女子教育に関する観察メモを、作成し始めた」とある⁷⁾。1891年3月といえば、成瀬がアメリカの女子大学、ウェルズリー、マウントホリヨーク、スミスを視察する以前のことである。おそらくは太平洋航海船上で、ボストンまでの大陸横断途上で、そしていよいよ始まったアンドヴァーでの研究生生活のなかで思索し構想を重ねながらまとめたのであろう。

本稿は、アメリカ留学以前の、大阪の梅花女学校、大和郡山、新潟における伝道と教育活動が成瀬に与えた葛藤の意味するところを、将来的な女子大学校構想を射程に入れながら、宗教と教育、社会との関係という視点から、筆者なりの考察を試みるものである。成瀬仁蔵研究の層の厚い先行研究成果に多くを負っていることを最初にお断りしておきたい。

2. 新しい世界へ—キリスト教と女子教育と— 大阪・梅花女学校時代

澤山保羅との出会いによって、キリスト教と女子教育という、まったくの未知の世界へと足を踏み入れた成瀬だったが、のちに次のように語っている。

私は物事をするのに、何時も全力を尽すのであるが、一番熱心になったのは、大阪に梅花女学校を興した時、其次は郡山に往った時であります。其の時は一番困難な時であるが、私は一番

望みのない時に、一番熱心になつて、コンセントレートするのであります⁸⁾。(下線筆者)

一番困難な時、梅花時代の問題とは、プロテスタント組合派の掲げる教会活動、伝道活動における独立自給の原則と、この独立自給主義を教会立の学校運営にも貫くべきかどうかという点にあった。梅花女学校設立の母体となったのは、澤山保羅牧師を中心とした組合派の浪花教会とその母教会ともいべき大阪の梅本教会であり、学校創立資金も教会信徒からの拠金によるものであった。(梅花の名称はこの二つの教会名に由る。)同時期に国内に設立されたキリスト教主義の学校が外国の伝道会社からの資金によっていた状況において、梅花女学校は、教会活動における自給の原則、つまり信徒からの自主的な献金によって支えられる自給主義を学校運営にも貫いたという点で、日本で最初の独立自給の原則に立つキリスト教主義女学校だったのである。

1869(明治2)年、アメリカの海外伝道組織アメリカン・ボード(American Board of Commissioners for Foreign Missions)が会衆派(組合派)の牧師を日本への最初の宣教師として派遣して以来、組合派は京阪神を中心に教会建設や学校設立などを軸に「異教地に福音を伝える」活動を推し進めてきた。組合派以前に日本伝道を開始していた他のプロテスタント諸派(長老派、改革派)がすでに京浜地域を活動の拠点としていたためである。独立自給主義とは、元来が、アメリカン・ボードの海外伝道活動における基本姿勢であった。つまり「宣教師が伝道地で異教徒をキリスト教に改宗させ、現地人に教会を組織させた後、当該教会を現地人伝道者に譲渡し、さらに当該教会を自治自給の教会にする」という、いわゆる「自治自給自力伝道論」に基づいている。しかし伝道地での諸事情やアメリカン・ボードの資金力が豊かになることで、最終的には自治自給自力伝道を目指すものの、現地教会へのボードからの財政援助と宣教師の関与が続けられるという考え方に方針が緩和された。日本におけるミッション・スクールも外部からの援助を受ける立場にあった⁹⁾。

アメリカン・ボードとその日本ミッションの伝道方針が次第に緩和されていくなかで、教会立としての梅花女学校の学校運営にも独立自給の原則を貫くべきかどうか厳しく問われることになった。ただし梅花の場合は、最初からアメリカン・ボードからの財政援助は論外だった。ただ、経済的に廃校の危機にまで追い込まれた教会委員の多数は女学校設立の目的と運営方針をめぐる、信徒以外からも広く寄付金を募り経営を容易にすることで教育の普及に努めるとの立場、つまり教会立学校から「クリスチャン・スクール」へとその性格を変えることに打開の道を求めたのである。論争に次ぐ論争の末の結論であった。おそらく澤山も女学校存続のためには多数派の立場を取らざるをえなかったと思われる。しかし学校運営にも独立自給の原則を曲げるべきでないとする成瀬の主張は多数派との一致点を見ることはなく、成瀬は辞職して伝道活動に専念する道を選んだのだった。成瀬が言う「一番困難な時」とは、実はその「困難」の根が宗教と教育とはどのような関係にあるべきか、つまりキリスト教主義に基づく、とりわけ教会立の学校に内在する本質的な問題に由来していることにあったのだが、キリスト教と女子教育という二つの新しい世界に同時に飛び込んだばかりの成瀬にとって、宗教と教育の本質問題にまで切り込んだ見通しを持つことは難しかったであろう。成瀬が最初に突き当たった「困難」の根はそれだけ深かった¹⁰⁾。

1878年1月に開校した梅花女学校設立に際しては、入信したばかりだった成瀬の師範学校卒業資格が重要な役割を果たしたことは言うまでもなかった。教会活動を主とし学校では聖書を担当する澤山と外国人宣教師の協力はあったが、成瀬は唯一人の専任教師として、授業のみならず財政上の問題を含めて女学校運営の諸事を担当した¹¹⁾。開校の式辞を述べたのも成瀬だった。周囲から「行住坐臥の間に聖書を離さず」と言われ、外国人宣教師からは「聖書を持つ青年」¹²⁾と呼ばれたほど

聖書研究に打ち込んでいた成瀬だったが、梅花女学校開校後は実質的な校長として授業と教務、財政面を含めた学校運営に心血を注いできた。成瀬の梅花時代については、『成瀬先生傳』に以下の引用がある。

私は一人で五つの組を担当しておりました。論理も、代数も、幾何も、物理も、化学も、教育も、心理も、一切一人で教へて居りました。その化学実験をする時の薬も、皆自分で籠を持って走りまわって買い集め、器械も多くは自分の手で造り、或は生徒にも拵へさせ、その上会計もして、月謝を取ることから、総ての事をいたして居りました。校内の掃除から草むしりをする事まで、生徒にもさせ一緒に何でも致しました¹³⁾。

さらに寄宿舎の監督、乏しい生活費補填のため西洋人に日本語を教え、バイブルクラスを持つなどもした。授業は上級生に下級生を教えさせる方法をとるなどの工夫を重ね、自発自学的な生徒本位の教育法を実践した。

1882年8月24日の日記には、梅花女学校を辞職するに際しての8月26日付提出書の控えが残されているが、そこには信者である教会委員が、信仰によってではなく「不信者」からの助けを仰ぐことで女学校を維持しようとしていることへの厳しい批判が述べられている。ここには信者と「不信者」は「心底反対するもの」と表現され、さらに次のように続く。「又若しコノ学校ハ第一二学問を重んじ神之榮を顕はすを第二トすれば余ハ之と一致すること能はず。」¹⁴⁾ 同じく8月24日の日記には、「女学校」と題して23項目にわたる梅花のとるべき教育と運営方針についての覚書がある。その幾つかの項目を以下に挙げる。

神の榮ノ為メナリ。故ニ女ヲ教育して聖書ニ合フものとする事也。

第一信仰ヲ育てる事、第二聖書（第三）世ノ情ヲ捨テ実ニ潔白の心ヲ育てる事・・・

（第七）学校之友或ハ其他ノものニ道ヲ傳ヘ常ニ神の榮ノ挙る事を目的トセシメ一神の榮ノ為ニ働く性質を神ニ由て教育する事。

（第十）英学是れ聖書等研究する為也。余思フニ支那学ハ無用也。如何となれば漢文を書くにあらざ。又漢書ニ便利ノ本あるにあらざ。また諸新聞諸状等漢文ニて綴りしにあらざ。之ヲ学ぶハ無用ニして反テ之ニ由て高慢トナラン。

（十九）コノ学校ハ信者之ものとし生徒ノ月謝と教会より之寄付金とを以て立て其有丈を以て足りれとして維持し神の御恵を信じて建るハ御旨ならんか。（下線筆者）

以上の内容は、日記に書かれたものとはいえ、一年前に成瀬自身が執筆出版した『婦女子の職務』と比較しても宗教性を強調した内容となっている¹⁵⁾。

実のところ、成瀬の梅花辞職申し出は二度あった。一度目は周囲の説得により収まったが、他の委員との意見の一致には至らなかった。『成瀬先生傳』には成瀬の行動について「多少周囲の諒解を欠いたやうなこともあったらしく、同時に一面先生が基督教の信仰の益々熱烈となるにつれて、全力挙げて直接伝道を試みたい欲求が次第に強くなってきた。そこで再び辞職を申出た」とある¹⁶⁾。

成瀬の、一度決意したら納得のいくまでとことん行動するという、その熱心さは生来のものだった。成瀬の従兄弟で幼馴染の前原巖太郎は、幼少時の成瀬の賢さは親類中の麒麟児だったと形容し、

成瀬の性格を「人の為に尽して細心翼翼といふが如き村夫子風の所だけではなく、又一面に非常に強い信仰の態度、よくいへば不撓不屈、悪くいへば強情我儘」だったという¹⁷⁾。梅花の財政危機を救うためとの熱心さのあまり郷里山口の吉敷に帰り、先祖伝来の田畑を売ろうとして親戚から反対されたり、「売れるだけの物は売って」学校増築や設備の費用の一部に充てたりした。そのため親戚とは絶縁状態になり、友人とも意見が合わず、「総ての人から見捨てられてゐた時が私の最も熱心な時であった」と、のちに自身を振り返っている¹⁸⁾。

成瀬の独立自給の精神は、当然のことながら教育にも、自らの生活にも貫徹されていた。梅花時代の教員成瀬は当時の女学生たちの目にどのように映っていたのだろうか。『成瀬先生追懐録』(1928)所収の二人の梅花女学校卒業生の文章からの抜粋である。「我が梅花は京都神戸のとは異なり、始めより自給独立を標榜して建てられた学校でありますから、屢々其の維持の絶命なる困難に出あひ、廃校の運命に陥らんと危ぶまれたる事再三にして・・・自らは口を糊するに足らざるまゝに甘んじ、衣服は如何と申せば、労働者の纏ふ様なる極めて質素なる手織木綿風或は染め直しの小倉袴を穿たれて、平然たる其の様子、生徒の目には一層崇高の念を高め敬愛の情を増しました」、「・・・創立の際ではあり財政は困難であり、何の設備もない時でありましたが、故先生は薄給に甘んじ、不完全な設備を物とも遊ばされず、化学実験などの折は、御自宅から七輪や土鍋、土瓶などを、お持ちになって、実験をして御見せ下さいました。故先生はと見れば御袴とは名ばかりで、後ろのない前ばかりのものを召され、一向平気で熱心其のものゝやうに、溢るゝばかりの熱心と慈愛とをもつてお教え下さった、と承っております・・・故先生は実践窮行の方で、御仰せになる事は必ず御実行なさいました。』¹⁹⁾

長くなるが、辞職後の郡山に移ったばかりの伝道生活を知る深井虎蔵の成瀬追悼文も紹介したい。「その頃先生は誠に貧乏で、着物なども洋服はなく和服を着ていらっしゃいましたが、その和服もいつも同じ様な紬か何かの羽織を召していらっしゃいました・・・俸給と言ふものは郡山教会の信者達が、毎月拠金しあつて出すことになっていた八円と、伝道教会〔浪花教会〕の方から支給される四円だけでありました。大和の四月といふ時は、まだうすら寒い時候でありましたが、先生は風呂等も、いつも水風呂に入っておいでになった様に記憶します。」郡山に独立した教会を建てるまでには信者も増えて、いよいよこれからという時だったが、成瀬が牧師として赴任してからは信者数がだんだん減ってきたというのである。「どう言ふわけで減るのかと調べて見ると、先生はあの土地の人の言葉で言ふ、あまりきつすぎると言ふのでありました。例へて言へば、日曜日は凡ての業を休まねばならぬと云ふので、先生はそれを御実行なさいました。併し信者達は自分の職業を休むわけにはいかないと云ふ風で、どうも先生の厳格なのについてゆくことができないと云ふのであります。」禁酒禁煙も信者から言わせれば辛いことだった。「先生は全く清教徒の様でそれが為にはたの人は窮屈であつたにちがひありません。」結果的に信者数が減って拠金額も減り、生活はいつそう困窮したということである。深井は妻万寿枝の辛抱をも思いやっている。「先生の熱心は数へあげると切りがありませんが、さう言ふ赤貧と戦ひながらその信仰はますます固く強くなりました。」²⁰⁾

キリスト教信仰と女子教育の世界に足を踏み入れた成瀬は、生活苦のなかで貧しければ貧しいままにそれを受け入れ、なり振り構わずに授業と校務に奔走し、信仰心を深めた。周囲からは頑なども受け取られた信仰と教育への熱心さ故にぶつかった最初の困難とは、その後成瀬が、宗教と教育とはいかにあるべきかを求めて苦悩していく、最初の関門だったのである。

3. 「伝道ハ愛ナリ」²¹⁾ —聖書と伝道— 大和郡山時代

成瀬にとって二つ目の困難な時とは大和郡山での聖書研究と伝道活動に専念した日々にあった。聖書研究と伝道活動は、内と外との両面から、成瀬に厳しく内省を迫ってきた。梅花で味わった困難と、幼い頃から儒教的環境で育ってきた成瀬にとって、キリスト教の教えとその実践に正面から向き合う道を選んだことは、成瀬の人生においても精神的にもっとも辛く苦悩に満ちた時代であったのではないだろうか。梅花辞職に至るまでは、独立自給の原則を貫くよりも不信者頼みの資金集めに傾く女学校の教会委員たちを厳しく批判していた成瀬だったが、いざ、郡山での伝道中心の生活を前にした辞職直前の日記には、その心情を吐露するような文章が見られる。

己ハカナク、智ナク、徳ナシ。今有ルモノハ神ノ恵ナリ。吾口ハ鈍シ。只主ノ命令ヲ受ケテ人ニ伝ル僕ナリ。
(1882/8/21『著1』273)

辞職した当日夕刻、伝道に専念するに当たっての心構えを次のように記している。

如何ナル道ニ由テ悔改ムルヤ又キリストヲ知ルヤ
神ノ旨ノ如ク成ラン。之ヲ求メヨ理論ヨリモ実験ニ照シテ知るベシ。
(1882/8/26『著1』287)

いかにも成瀬らしい表現によって、理論よりも自らの実践によって学ぶべしとの決意が示されている。そして梅花女学校辞職から二日後の1882年8月28日の日記は次の一行から始まる。

昨日澤山、前神〔醇一〕の説教ヲ聞き吾ニ愛心ヲ欠きたる悟り大ニ悔改之心を生ぜり。
(『著1』289)

のちには「舌の人」²²⁾と言われたほどの熱弁を奮った成瀬であったが、伝道生活に入る頃の成瀬は説教一つうまくいかない自らの非力を知る。そのことを自覚するのは、敬愛する牧師澤山や入信してからのちずっと成瀬を精神的にも経済的にも支え続けてきた前神醇一の説教に、伝道する立場から耳を傾けた時だった。そして自分に足りないのはキリスト教の愛の精神であると悟る。

「吾ハ善牧者なり。善牧者ハ羊の為に命を損つ。」ヨハネ伝十章十一節
(1883/8/26『著1』295)

愛ハ己ヲ忘レテ人ヲ顧ミ、人ノ事ヲ思フ事ナリ。愛ハ己ニ止ルモノニアラズ。人ニ対シテノ事ナリ。吾曹もし己ノ事ノミ思ヒ、之ノミスレバ愛ハナキナリ。広キ愛ハ、広ク人ニ交リ人ノ事ヲ顧ルナリ。
(1883/9/31『著1』315)

郡山生活にも馴染んだ頃、説教の準備とともに書き残したのは次の一文だった。

宣教ハ自ラ味ヒ、自ラ経験シ自ラ悟リタル神ノ奥義ヲ宣ル事ナリ。故ニ第一自ラ救ワレ自ラ聖

霊ヲ受ケ自ラ神ト共ニ在ラザレバ、コノ義務ヲ尽スコト能ハザルナリ。

(1883/10/20『著1』336)

伝道活動とは人と社会に直接触れることであり、接する相手に信者、未信者の区別はない。これまで敵であった者にも神の教えを説くことが求められた。

イエスの心ヲ以テ説教し、兄弟、罪人ト交り、貧キ人ニ交り、敵ニ交ル可シ・・・イエスノ柔和、憐を以テ、罪人に交り、イエス之福音を伝ふ可シ。

(1883/9/2『著1』298)

聖書に学べば学ぶほど、イエスの教えはそのまま成瀬自身の胸に突きつけられてくる。

人ヨリ吾ヲ責メヨ

人の弱ヲ例ニ言フヨリ、責むるより、己之弱を思ヒ、之ヲ責め又憐ヲ乞フ可シ。また人之罪を責むるより、己之罪ヲ責む可シ。

(1883/9/2『著1』301)

吾ハ妻ノ弱ヲ負ハザル可ラズ。故ニ右ノ頬ヲ打タバ左ヲ向ケヨ。一里ヲ強ラバ二里ヲ行ケ・・・又弱キヲ助ケ残ス事勿レ。

(1883/9/24『著1』307)

今イエスノ足下ニひれ伏し私ニ聖霊ヲ下シ玉ヘト祈レバ、イエス答ヘテ曰、汝何故ニ之ヲ要スルヤ・・・穢ノ潔まらん為メナリ。又私ノ心ハ暗キ故光ヲ得ン為メナリ・・・イエス答ヘテ曰く。汝求メテ得ザルは爾慾の為メニ費さんとして妄ニ求むるが故也。子ヨ汝の心ヲ験ベヨ。

(1883/10/20『著1』342)

イエスとの心のなかの対話で未だ私心に揺れることを突かれた成瀬は次のように答える。

又他の兄弟ニ先ダチ聖霊恩化ヲ受ケシト慢リシナラン。又吾働、著書ヤ教育ヤ伝道杯ニ慢リシナラン。又己ノ無学ニ慢リシナラン。余ハ神学モ英学モまダ出来ません。又信仰モ薄し。(同上)

其汝の罪之重荷ハ大阪或アメリカへ行き或ハ余ニ来ルモ更ニ息シアリ。汝イエスニ行く可シ。さらば如何重荷も心配も安ニなる可シ。又ハ世界中ヲ巡廻スルモ安を得ルコトナシ。マタイ伝十一の二十八(同上)

郡山での伝道生活は成瀬にとってまさに内なるたたかいであり、聖書研究に打ち込み信仰を深めれば深めるほどにその葛藤はさらに厳しく自身を責めた。病弱な妻との困窮生活以上に成瀬を苦しめたのは、私欲私心を捨て去ること、「羊のために命を投げ出せるか」にあった。

今之困難ハ眞ニ神ヨリ来る困難ニあらず。信者之信仰ト熱心ト忍耐之足らざるより生ずる事ならん。

(1883/10/20『著1』343)

「それ神ハ生みたまへる独子を賜ふ程ニ世の人を愛し給へり」ヨハネ三・16

(1885/7/13『著1』388)

「罪人の為に死たまへり」ローマ五の六の八

(1885/7/15『著1』389)

郡山時代について、のちの談話が『成瀬先生傳』に残されている。

私は澤山といふ人ニ、如何なる困難をしても道のために尽くすといふことを誓ひました。そして大雪の中を、ウェブスターの辞書を提げて郡山へ往つて、五平といふ人の家で、粥をすゝつて伝道しました。けれども独立自営といふことが主義であるから、自分の生活といふことに就ては、少しも顧慮しなかつたのである²³⁾。

しかしながら自らの生活苦には耐えられても、若く病弱な妻万寿枝への思いが日記の行間から想像できるだけに、信念徹底を生きるための苦悩は想像を絶するものであったと思われる。また成瀬の澤山への深い信頼と尊敬の念は、留学中の成瀬に *A Modern Paul in Japan* (1893年) を出版させるに至った²⁴⁾。のちに澤山の20回忌 (1906年) が済んでからの女子学生への講話で、成瀬は次のように語っている。

澤山といふ人には、社会のため、人道のために、身を捧げて尽くされたところの、燃ゆるが如き信仰があった、熱心があった。さうして誠に寛容の徳にみちて居られた・・・不幸と、困窮と、病苦との中に在りながら、如何に人に力を与へ、慰めを与へ、希望を与へたか。集中した人の生涯が如何に有力なものであるか、この書の中に明らかである。この人は亡くなつたけれども、私の心の中にはまだ生きてゐる。私の人格の一つの要素はこの澤山という人の人格である²⁵⁾。

成瀬が澤山の真価を身をもって理解したのは、おそらく自身の郡山での伝道生活を通してであつたろう。明治初期からのキリスト教伝道活動にはさまざまな迫害が加えられたが、成瀬が郡山での伝道に入った頃も例外ではなかつた。とりわけ仏教の僧侶や神道の神官たちからの反発は激しかった。路傍での説教中に石を投げつけられるなどはしょっちゅうだった。一年後、郡山によりやく独立した教会堂が完成するや否や、その白壁いっぱい「耶蘇退治」「耶蘇教の無道理」「或寺の某、暗夜にこれを書す」などと嫌がらせの大文字が書きつけられたりした。成瀬は「なにほうつておけばよい」と相手にしなかつたという。壁の落書きは郡山教会が改築されるまで残っていたとの信徒の回想である²⁶⁾。しかし成瀬らの努力は、路傍での説教に百人ほどの聴衆を集めるほどになつたという。

昨十八日夜ハ警察隣ニ於て路傍説教を為す。聴衆大凡百名謹せり。神の御導ニ由り数名の人々語る道ニ心を注げり。
(1885/9/19『著1』441)

たとへ未信者ニ語るニも信者ニ語ると同様初め二十分ニ祈祷し、謙遜柔和、己を忘れ信仰を保ち、精霊ニ由り人ノ霊之無限亡びる事を思ヒ、眞の憐を以て伝道す可し。

(1885/6/26『著1』365)²⁷⁾

伝道活動への専心は成瀬の内から信者と未信者との間の壁を取り払っていた。しかし成瀬の回顧にあつた二つ目の困難、おそらくは「吾ハ善牧者ナリ。善牧者ハ羊の為に命を損つ」の教えの体得にあつたのではないかと思われるが、キリスト教の愛の精神についての葛藤は続く。それは成瀬の言葉としてよく見られる「実験」、つまり実践をひたすら積み重ねることとしかないと自答する。

又福音ハ実地ニテ悟ルベキナリ。感ズ可キナリ。只学問ニテ知識ヲ以テ悟ル可ラズ・・・
故ニ眞ニ福音ヲ悟るハ実地之ヲ受ケシ後ナリ。故ニ福音ヲ知らんとおもふものハ只神学ニテ研究するヨリ実地行フ事ヲ努メ・・・タトヘ聖書ノ注解ヲミナヨムモ伝道方ヲミナ勉強スルモ之ニ更ニ己ニ行わざれば一モ真理ヲ知る事能はず。神の国ハ言ニあらず。能なり。

(1883/10/20『著1』344)

神の道ハ言ニあらず。行ニあるなり・・・幾何即ち千万の語を以て人を勤むるも其人もし行はざれば真理の光を見る事能はざるなり。

(1885/9/28『著1』448-449 下線筆者)

加藤邦雄の「日本におけるプロテスタント教会教勢の一研究」(1961)によれば、キリスト教伝道活動は大きく次の三つの面に分類される。第一に宣教活動、説教によってキリストの福音を説くこと、第二に教会学校やキリスト教主義学校など、教育的方法によるもの、第三に社会奉仕やさまざまな社会活動を通じてキリストの愛の証をすることである。そしてこの三つの活動が根っここのところで繋がっていたことは、澤山保羅を中心とした大阪の組合派の活動がよく示していた。各地での路傍説教、宣教のための講義所の開設、会堂での信徒のためのキリスト教教育、学校での普通教育や英語塾、女性が集える塾、診察所での医療奉仕活動は、ゆっくりとではあるが浪花教会や梅花女学校の創立へと導いた。伝道とは、宣教、教育、奉仕のすべてを意味していた。成瀬の伝道もこの三つの活動内容が織り込まれたものであり、「行」としての伝道実践は必然的に教育の現場へと成瀬を導いたのである²⁸⁾。

大和郡山を軸とした成瀬の伝道活動は、奈良、津、久居、伊勢、松坂、時には大阪や京都へと広範囲に及んだ。郡山に独立した教会が作られてからは郡山の社会的文化的教化、とりわけこの地域の教育環境改善へと関心が向けられた。1885年10月17日の日記には、「今設立する小学校夜学校は郡山の為め尤も肝要のものなれば、力を尽くして之を助く可し」とある。続けて、学校教育については「今教会ハ郡山の基礎なる可きもの也。故ニ少年を教育して働くモノヲ作り吾か地の凡ての悪風を一洗す可き也」とし、そのためには「純粹無欠」のものを求め、人材の育成をすべき時であるという。「吾郡山ニ金のふえ富の増スヲ望む勿れ。たとへ貧しくも眞の神に忠信なるもの、多く出るを望むべし。事ヲ為スニ更ニ金ヤ機械ニ由ル勿レ。只精神によれ」と説く²⁹⁾。

吾が一の誤ハ今迄伝道を第一とし羊を放する事を第二とせし処なき乎。吾は牧師なれば第一羊を育て導き愛し慰め之をして働かしむるは吾努らん。教会ニ天国の喜を探すハ尤も大切な事ならん。凡て使徒の書翰ハ教会の信者の為也。

(1885/10/7『著1』458)

一口に教育活動といっても、信徒への聖書教育、夜学校、英語教授、監獄での説教、各地での「婦人の集まり」(これには妻の万寿枝も参加し聖書を教えた)など、実に多様であった。遠方に出かけての説教、夜間に時間を割いての相談会など、こうした活動の合間に自らの聖書・神学・教会史研究、そして祈祷の時間を確保しなければならなかった。宣教と教育活動は必然的に地域の文化教化や社会改善活動へと結びついていった³⁰⁾。

私はどうしても根本のものは宗教であるから、宗教によらねばならぬといふ考へでありましたが、どうしても私の頭から離れぬものは女子教育であって、何処へ往っても、書生を集めて教育しました。それで自分は教育が天職であると感じました。

(『傳』98-99)

成瀬にとって宗教と教育とはどこまでも切り離せない関係にあった。問題は、その関係性にあった。成瀬の梅花辞職は伝道活動に専念するためよりも、学校運営にも教会活動の原則である独立自給主義の原則を貫くべきかどうかの意見対立が直接的原因であった。とりわけ女子教育への情熱は梅花辞職後の日記にある女学校の教育と運営方針についての覚書からも明らかのように、郡山時代にも消え去ることはなかった。1883年10月20日の日記には、女子教育と題して次の言葉を残している。

余を神ハ選ンデ女子教育ニ用ゐん為めに、前より定め玉ふるを知る故ニ、此の事も常ニ忘る可らず。 (1883/10/20『著1』337)

行の目的は愛なり。即ち神ト人ト人ト人トの関係也。 (1885/10/27『著1』69)

成瀬の師、澤山の信仰は神の愛の強調にあったが、病人、貧困者、「不具」の者、そして「寡婦」ら、社会の底辺に生きる人びとへの神の愛の教えをその澤山からもっとも深く受け継いでいたのは成瀬、その人だった³¹⁾。

1883年10月20日の日記の最後に「大和基督青年会ヘノ勸メ」³²⁾として九項目の助言がある。

(一) は聖書の箴言27-17の引用である (『著1』には漢文)。

「鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる。」 (新改訳聖書刊行会編、1970年)

最後の二項目は特に意味深い。

(八) 望ヲ大クシ、小ヨリ初メ大ニ進ム可シ。神ノ働ハ凡テ芥種の如し。

エール大学校、マウントセミナリー学校、アメリカ合衆国、アメリカン伝道会社、の如し。

(九) 大和ニ於テ事ヲ為スコトヲ得ルヤ (下線筆者)

(八) の下線部は以後、表現は多少異なるが、『成瀬先生傳』(149頁)、「アメリカ留学時代のノート」(1891) 8頁にある次の文章へと内容的に繋がっているように読み取れる。

元より始めよ

一個人より始めて、国に及ぼすべし。田舎より始めて、都会に及ぼすべし。働きより考へて、学校創立に及ぶべし。

マウントセミナリー学校はのちのマウントホリヨーク女子大学であり、創立者のメレーライオン(メアリー・ライオン Mary Lyon 1797-1849) はアメリカでの女子高等教育の先駆者として成瀬が常に手本としてきた人物である。先の1883年10月20日の日記「余を神ハ選ンデ女子教育ニ用ゐん為めに・・・」の一文と併せて考えるに、成瀬は郡山伝道生活に入って二年目にして、将来的な女子高等教育構想を描きつつあったのではないかと読める。

(九) の文章はどうか。ここ大和郡山での「行」によって自らの「為スコト」への確信を得たとの解釈も可能であろう。成瀬が女子大学校構想をいつから抱いていたかについては諸説あるが、上記(八)と(九)の意味するところを無視することはできない³³⁾。

しかし今、本節を終えるにあたり大事なのは次の部分にある。

受諫時

人吾ヲ諫ムルトキ如何ニ怒リテ言フモ其人ニ理あらば悦ンデ受ケ、自分ノ誤リヲ正ス可シ。たとへ自分ノ為せし事善ニもせよ怒ル可ラズ。柔和ニ説明す可シ。(1883/10/20『著1』346)

これこそが梅花辞職以来、郡山での聖書研究と伝道実践のなかで幾重もの葛藤を克服しつつ獲得した成瀬の生きる姿勢であった。1886年1月26日28日の日記には、「今吾職務」として以下の言葉を記したが、この年の夏、成瀬は新たな使命を帯びて郡山から新潟へと向かった。

今吾は牧師なり、伝道者也。是れ吾現ニ掛る処の職務なり。之を怠るは神ニ対して不忠不義なり。神よ之を如何ニ尽す可きや、示したまへ。(1886/1/26、27『著1』473)

4. 教会と学校—さらなる苦難— 新潟時代

新潟での4年3カ月は、それ以前の梅花と大和郡山での約10年に及ぶ教育と伝道の日々とはまったく異なる環境のなかで、成瀬に新たな試練をもたらした。

新潟でのプロテスタント伝道活動の要となってきたのはエディンバラ医療宣教会の T. A. パーム (T. A. Palm) である。しかし1883年10月、病気で帰国したパームの後をアメリカン・ボード (組合派中心) の北日本ミッションが引き継ぐことになった。ここ新潟でも仏教徒をはじめとする反キリスト教の風潮は強く、伝道活動は困難な状況にあった。加えて、パーム・バンドと呼ばれていた信徒たちは教会財政方針と信徒の生活態度をめぐり分裂状態にあった。成瀬の新潟招聘は、教会の自給主義の立場をとる北日本ミッションからのものであったために、これまでパームからの財政援助に頼り、パーム帰国後はアメリカン・ボードからの支援を期待していた信徒の多くは長老派教会に移ろうとしていた。成瀬を迎えたのは北日本ミッションの新潟進出後に新たに組合派に加わった信徒を含めての二十名ほどであった。86年10月、成瀬は新潟第一基督教会 (組合教会) の初代牧師に就任した³⁴⁾。

新時代の欧化主義の風潮も手伝い、成瀬の新潟赴任を知るや、成瀬のもとには英語教授の要請が多く来るようになった。その大半は「高級官吏の夫人令嬢」だった。教育を通じての地域社会の文化教化と改善も布教活動の一環である。本州北部では最大の県であるにもかかわらず、師範学校の女子部があるのみで女学校は皆無という状況は、新潟の保守性をそのまま反映していた。成瀬は地元新潟の「紳士・官人」に協力を訴え、寄付金を集め、元軍隊営舎の一部を借受け、赴任した翌87年の5月には新潟女学校の正式な開校を迎えるに至ったのである³⁵⁾。発起人8人のうち信徒は成瀬ともう一人の組合教会員の二人のみ、あとの6人はキリスト教に理解はあっても信徒ではなく、県知事、のちの市長、始審裁判長、政治家、高級官吏、実業家からなる地方名士であった。新潟の近代化にとってキリスト教系の学校建設は県の上層部からも歓迎された。財政的にも信徒以外からの寄付金を募った。つまり、新潟女学校は、大阪の梅花女学校の時とは異なり、発起人の構成においても、財政的にも、教会立の学校ではなく、いわば「半官半私」の性格を濃くしたものだ³⁶⁾。1887年2月27日付『新潟新聞』に発表された「新潟英和女学校主意書」*にはキリスト教主義に基

づく方針は何も示されていなかった。『成瀬先生傳』には「訓育はキリスト教主義に由る」とあるが、学生の信仰については「自然に養われて、生長して来るのを待つような赴き」のある寛容な対応がなされ、梅花時代と比べると大きな違いであった³⁷⁾。*新潟英和女学校は開校前の呼び名

新潟女学校と梅花女学校の最大の違いは、梅花がキリスト教主義教育を柱とした教会立学校だったのに対して、新潟女学校の場合、キリスト教主義教育がその開校主意書にも規則にも一切示されていなかったことにある。主意書の書き出しには「夫れ社会の源ハ夫婦なり」とあり、「夫婦相敬ひ相愛するハ人間最大の美德なり」と説く。その美德を全うするには夫婦が平等に教育を受けることであり、夫婦が苦楽をともにすることで真成の家庭を作ることができる。女子教育の目的は女子に学芸を授けるだけではない、「婦女に固有する天賦の美性を発達せしめ智徳兼備の良女善婦を養成する」ことであると断言する。開校式直前の5月12日付『新潟新聞』に発表された「新潟女学校規則」にも主意書同様にキリスト教との関係は一切触れられていない。発起人が、二人の信徒を除いて、地元名士であったこと、新潟の保守的で反キリスト教風土への配慮が強く働いていたであろうことは、容易に想像できる。が、果たしてそれだけが理由だったのだろうか³⁸⁾。

『成瀬先生傳』には1888年5月21日の「開校式の演説には、[成瀬校長は] 宗教と教育との関係を論じて、純然たる基督教主義に依って教育すべきことを宣言したのである」と書かれているが、『新潟新聞』に掲載された記者による校長演説「大意」にも女学校とキリスト教主義との関係を示す文言は見当たらない³⁹⁾。この時の演説内容は、「大意」を読むかぎり、宗教と教育との関係を一般的に論じたものである。「大意」をさらに要約すれば、宗教と教育とは相互に阻害する関係にあるのではなく、むしろ密接な関係にあることを知るべきである。教育には徳育智育体育と三途ある。なかでも徳育はその本幹をなし、この道徳は宗教の力によって維持される。宗教の本義は神と我との関係を明らかにすることにあり、真の神とは、真の神の能力とは何かを知ろうとする、知ってこれを敬い、なすべきことを考える者は、一身を支配する道義を得るであろう、というものだった⁴⁰⁾。

成瀬の目指すところの女子教育の芯にあたるものは、新潟女学校開校から2年余のちになるが、1889年7月18日から19日付『新潟新聞』に掲載された「女子教育に就て」に、女学校開校当時より一步踏み込んだ内容として示されている。成瀬はそこで、今や論ずるべきは女子教育の必要ではなく、「女子教育の主義及其方法是なり」と断言する。そしてここで論じられているのは、女徳涵養の主義およびその方法についてである。

吾人ハ女大学主義の道徳・・・を説法すればとて之のみを以て決して現日本の女徳を維持するの価値なきのみならず、到底吾人が熱望する社会の腐敗を清浄ならしむるの勢力たる女徳を涵養するに足らざるを知るなり。何となればこれ実に束縛的の教育法にして其徳や自由自動独立選択的の女徳に非ざればなり。・・・然れども吾人は熱望す・・・自ら悟り、自ら選び、自ら守り、自ら喜んで愈々女徳に進歩し、社会の腐敗を見てハ慷慨悲憤の情を発し・・・社会の腐敗を清むるの塩となり社会の暗黒を照らすの光となり得る程の女徳を具へたる婦人を教育せんことを熱望するなり。

(『著3』1015-1016 下線筆者)

上記引用の文脈から考えると、新潟女学校での学生の信仰については「自然に養われて、生長して来るのを待つような赴き」のある寛容な対応がなされたというのも納得できる。信仰は個人の、内心の問題であり、学生の自由で独立した道の選択を尊重するという教育の根幹が見えてくる。そこに至るまでの徳育を授けるのが宗教教育の目的とするところであるとの考え方は、先に紹介した開

校式で校長の成瀬が、宗教と教育とは密接な関係にあるとした演説内容にすでに込められていたのである。つまり成瀬の頭の中には、新潟女学校開校を構想した時点ですでに、学校教育とキリスト教主義教育についての考え方に変化の兆しがあったのではないと思われる。「自由自動独立選択的の女徳」という表現にその変化が明瞭に示されている。

しかしながら、学校でのキリスト教主義教育への成瀬の思いがここ新潟で完全に閉じられてしまったわけではなかった。開校主意書と規則に表立ってはキリスト教主義教育が謳われていず、徳育を支える宗教教育がキリスト教主義に依るとは書かれていなかったとはいえ、実際には「毎朝始業前三十分間づつ礼拝といふことがあって、聖書に就いての講話や祈祷が行はれた」のであり、毎日曜日には学生に教会への出席を勧め、成瀬が引率して行く光景が街中で人目を引いたようであった。当然のことながら新潟女学校はキリスト教の学校と見られていたのである⁴¹⁾。

一方、教会の牧師職にある成瀬が女子教育への情熱を再燃させるに反比例するかのごとく、新潟の教会事情は混迷を極めるばかりだった。成瀬の新潟赴任以前から根深くあった新潟のプロテスタント伝道活動における教派間（組合派と長老派）ならびに組合派内部の対立と分裂などの複雑な事情は、もちろんそうした状況への対応を期待されての新潟招聘ではあったが、成瀬が郡山での伝道実践と聖書研究の苦闘からようやく到達した「今吾は牧師なり、伝道者也」という信念、聖書の教えに忠実であろうとする信仰心とはかけ離れた、醜く歪んだ世界との対峙だったと言えよう。1888年2月、成瀬は悪化する教会問題から手を引き女学校校長職に専念するとの決意から牧師職辞任を決断する⁴²⁾。のちに明らかになったことは、教派間の対立、教派内部の対立と分裂に象徴される新潟という一地方での伝道活動上の問題の根源が、実のところ、日本のキリスト教界中央での指導権争いや伝道姿勢にあったことである。成瀬の牧師辞任後の1889年4月、成瀬も尽力し、新潟での組合教会と一致教会（長老派が中心）とがそれまでの経緯を克服して、無教派として一つに合併した新潟基督教会の設立に漕ぎ着けたものの、成瀬自身も所属する組合教会の全国レベルでの総会決定が、この合同教会に再び教派色を持ち込ませることで、合同教会を事実上なきものとしてしまったのである。しかし無教派の合同教会誕生によってプロテスタント伝道活動が活発となり、教会員は「二百名以上、毎日曜の出席者も三百名」を超える状況を生み出し、長岡と新発田の新たな教会建設に結びついたことは、何とも皮肉なことであった⁴³⁾。

牧師辞任後の成瀬の教育活動は新潟女学校でのそれにとどまらず、新たな展開を見せる。それは知の伝道とも形容できようか。一般市民、とりわけ女性を対象とした公開講演会の企画を次つぎに実践していったのである。牧師職辞任を決意したと同時期の1888年1月、成瀬は女学校上級生向けの講義を学外の一般女性向けに公開市民講座として開講したのだった。1887年12月29日付『新潟新聞』には、「1月9日より毎週二回（水曜日午後4時より土曜日午前10時より）医学士による「衛生学及び生理学」と理学士の「物理学」講義を開くので「普く校外婦人の来聴を許す」との広告が掲載された。さらに新潟女学校で音楽と英語の授業を担当していたアメリカン・ボード北日本ミッションの宣教師のD. スカダー（Doremus Scudder）と姉（Catherine）の父、スカダー博士（Henry Martyn Scudder 神学／医学博士）の来日により、88年3月から連続講演会が新潟女学校を会場として開催された。父スカダー博士はかつてインドで伝道に携わった著名な宣教師でもあり、この公開講演会には新潟外からの有識者も参加し、多くの聴衆に感動を与えたという。こうした学外からの著名人による講演会以外にも、成瀬と宣教師のD. スカダーが中心となり、一般の有志を対象とした宗教と教育に関する講演会を毎月一回ずつ女学校の講堂で開催した⁴⁴⁾。公開講演会は「宗教にハ余り関係せずして専ら学術上の新知識を開発すること」⁴⁵⁾を目的とし、キリスト教信徒、未信徒

を問わずの一般市民を対象とした社会教育活動は、新潟時代後期の成瀬の関心が、例えば、女学校での講話の話題にも「宗教以外の社会的、道徳的、教育的方面のことが多く加はって往つた」と当時の学生が記憶していたこととも符合する。一般社会に開放した衛生学や物理学の講義、スカダー博士の公開講演会の内容は学術的にも高度なものであり、科学と合理性を重んじる成瀬の教育への並々ならぬ意欲が感じられる。知の伝道活動は教育を通じての成瀬流社会改良運動でもあった。

講演会活動との関連で特筆すべきことがもう一つある。1889年4月に組合教会と一致教会とが合併して無教派の合同教会が結成されたことは前述したが、その時に女性会員の層が広がり、新潟女学校生徒の増加もあったことから、翌年春には新潟基督教会婦人会（通称「新潟婦人会」）が結成された。その会則には、新潟基督教会の信徒が組織するものの、信者未信者に拘らず会の目的に賛同する者は入会できるとあり、「聖書を研究（しらべ）し、工手（てしごと）をなし、又、諸名士を聘して宗教、教育、家政、衛生等に関する講話（はなし）を聴く可し」との目的が記され、実際そのように活動された。これも無教派の合同教会がもたらした成果である。そしてこの会の「最大の」後援者が成瀬だった⁴⁶⁾。

『成瀬先生傳』によれば、成瀬の過ごした新潟時代とは、欧米文化流入に対し反動的保守思想が勢いを増すなかで、時代の要求に応じた国民生活の理想的発展を示し、社会改善の動力となるような教育が求められた時であったという。そしてこの時代に立ち向かった成瀬を、「果然従来の意志と情操と、及び生活と事業とにさらに確乎たる合理的根拠と、新様の組織的形式とを与へなくてはならない要求を、社会に、また自己に看取した」と捉えている⁴⁷⁾。

内側に於ては、宗教を理論に依つて整頓し、教育を組織に依つて実効化して、且つ之を根本的統一に収束し、外側に於ては、信仰を教会から民衆に、教化を学校から社会に解放し、以て之を全体に周匝させなくてはならない衝動を、両面から同時に触感した。（『傳』97下線筆者）

上記引用は、成瀬が新潟女学校設立にあたってキリスト教主義教育を公然と打ち出さなかった、または出せなかった事情、女学校上級生用の講義を校外女性にも開放したこと、無教派の合同教会設立に尽力したこと、信者未信者の区別なく教会活動及び社会教育活動を展開したことの総括となっている。

それでは成瀬自身の信仰上の問題についてはどう「看取」したのだろうか。一つは、新潟に赴任するや否や、成瀬が直面した複雑な教会問題である。このことが成瀬の教会組織と信仰のあり方への懐疑に繋がったことは疑いない。二つ目に、1888年2月の成瀬の牧師辞任後に起こった北越学館問題がある⁴⁸⁾。北越学館は、成瀬もその設立発起人の一人として関わり、新潟女学校開校と同年の10月に開設された、キリスト教主義教育に基づく男子校であった。内村鑑三事件とも呼ばれるこの事件の発端は、1888年9月に北越学館の新教頭に就任した内村鑑三が、「日本人独行主義を標榜して、外国宣教師排斥論を提唱し」、これに学生を巻き込んで外国人宣教師を退職させる事態を引き起こしたことにあった。事件は同年12月に内村の辞職で解決した。しかしこの事件はキリスト教主義を教育理念とする学校での宗教教育のあり方を問うことにもなり、成瀬自身の信仰にも関わる内容を孕んでいた。内村も、内村の後任として教頭となった成瀬旧知の松村介石も、キリスト教主義を標榜する北越学館での精神教育にキリスト教以外の宗教、松村の場合は陽明学、を用いたことにあった。これに納得できない成瀬の反応に、松村は欧米でのキリスト教新神学（自由主義神学）の知識を披露したと回想する。「成瀬君は驚いた。而して一時は不快の感を起こした様であった。然

し成瀬君は元来進歩的な男である・・・遂に『松村君僕は一つ洋行して来る』と云ひ出した⁴⁹⁾。北越学館事件は成瀬に欧米の「新神学」についての知識をもたらすとともに宗教教育のあり方を再考するきっかけともなった。そしてこの頃から成瀬はアメリカ留学を考えるようになる⁵⁰⁾。

信仰上の問題の三つ目は、成瀬自身のキリスト教理解についてである。長岡教会の宣教師 H. B. ニューウェル (Horatio B. Newell) からの1890年9月30日付書簡、成瀬の質問に対しての返信とみられるが、そこには、成瀬がキリスト教教育における儀式 (ceremony) と敬虔 (devotion) の概念を混同しているとの指摘があった。これらの概念が正しく理解されていれば、何も問題はないはずで、いわゆる「儀式」は少なければ少ないほど良い、[形だけの] 儀式としての聖書の読みと礼拝であれば、すぐにやめた方がよい。真理による人格形成を目的とし、徳育にキリスト教主義をもってするのであれば、学校全体の誠意ある協力のもとで自分たちに相応しい方法や時間帯を選べばよいとの助言だった。成瀬の聖書の教えに対する実直すぎるほどの向き合い方が、時として原則主義的に頭をもたげ、現実の学校教育に柔軟に対応する際の足枷となってある種の迷いを感じさせたのではないだろうか。「女子教育に就て」で論じた「自由自動独立選択的の女徳」とは、成瀬自身の「行」への指針ともなっていたはずである。留学へと旅立つ直前でのニューウェルからの手紙は、成瀬にとって決して小さくはない、信仰の核心に迫る衝撃を与えたに違いない⁵¹⁾。

『成瀬先生傳』には、新潟時代に成瀬のなかに生じつつあったキリスト教信仰への批判的態度を「のちの総括であらうけれども」として、次のように回想したとある。

吾々もキリスト教を信じて、迷信的に突進しました。確かに一つの力を得て、伝道もしました。教育もしました。けれどもそれではまだ足らぬところがある。今日の考へを得るまでには、余程苦しんだのである。 (『傳』98 下線筆者)

成瀬のアメリカ留学は、「まだ足らぬところ」は何かを究めるための「旅」でもあった⁵²⁾。

5. 宗教と教育—社会との繋がり—

成瀬の理想とする女子教育において、宗教と教育とが密接な関係にあることは新潟女学校開校式での校長としての演説 (大意) に示された通りである。徳育を支えるものが宗教であり、個人の内心に宗教心を育てることが人として生きる道義につながると説いた。大阪の梅花女学校は教会立の学校であったためキリスト教主義を前面に掲げたが、新潟女学校の場合は、おそらく設立発起人の多くが信徒ではなかったことや保守的な社会事情から、キリスト教主義を公的には出さなかった。しかしそのことが設立資金のための寄附を広く社会に訴えることを可能としたことも事実である。梅花の場合は信徒以外からも寄附を受け入れることで存続を可能としたが、自給主義の立場からこれに反対した成瀬は辞職した。また新潟女学校は元来が保守的反キリスト教風土と有力な協力者らの転任などの諸事情が経営を悪化させ、成瀬が留学に旅立った2年半のちには廃校となった。二つの女学校からの教訓は、健全な学校経営のための財政的基盤の確立が理想実現には必須であることを成瀬に痛いほど知らしめた。

成瀬が渡米直後の1891年2月14付万寿枝宛書簡に「女大学を興し」と綴ったことは、すでに「1. はじめに」で触れたが、実はそれ以前の日記 (1月26日) に女子大学構想と関連づけられる文章がある。

独立、独立女学校、独立家庭、独立教会

人独立せざれば進歩と勢力と自由と幸福を得ること能はず。国独立せざれば富強なる能はず。吾日本に最も必要なるは此の精神也・・・独立女学校を興すべし・・・先づ自ら独立の道を得て、真に国家の為に身を犠牲となし、他愛之主義を確守すべし。即日本社会は愛を立て充滿するの処となすべし⁵³⁾。

さらにしばらくのちの日記には以下の文章がある⁵⁴⁾。

人は寄附を成すの義務あり

政府に税を収め、或は会社に資本を出す。これ己れもその利潤に与れば也。会社は己之に属し、而して之が生ずるの利害悉く己に帰する也。故に人は各々負ふ処あれば其分を尽す可し。万民之を悟らずして可ならんや。

上記引用は、学校設立のための寄附を広く社会に訴えることの正当かつ論理的な理由として受け取れる。しかし上記の論理が成り立つためには、寄附の対象となる学校とそこでの教育が広く社会に貢献しうるものでなければならない。成瀬が興そうとしているのは女大学、女子大学校である。女子教育、とりわけ女子のための高等教育の必要性について、成瀬はすでに梅花時代にまとめた『婦女子の職務』（1881年、87年増補版）で次のように言う。

昔より何の国にても女の真価を知らずして持たざる国は必ず開化することなし・・・。

我国にては女に学問は入らぬと云ふ者が随分多くあれども、若文明の基なる女に学問なくして、如何に我が文明に進むの理あらんや。無学にては如何しても婦女子の職務は尽されざれば国は開けざるなり。また我国の人民は大抵三千五百万人の中にて女半分あり。若此半分が無学なれば半開ならずや・・・故に男の学ばねばならぬ学問は女も学ぶべきなり。又男が智を研かねばならぬと等しく女も智を研く可きなり。
(『著1』4、12)

成瀬は、文明国では幼稚園から女子大学や師範学校まで教育を担うのは主に女子であることから「公の教育」における女子の職務は国家にとっても重要な意味をもつとして、女子大学校設立への寄附の正当性を説こうとしたのではないかと⁵⁵⁾。無学であることはゼロではなく、学び自らを生かす権利と機会を奪われることで、学ある者との格差は2倍にも3倍にもなるのである。

「公の教育」の場である学校設立のための寄附であれば、宗教との関係も問題となる。成瀬が渡米直後から作成した「アメリカ留学時代のノート」には学校教育と宗教との関係について次の言及がある。同じ内容は『成瀬先生傳』（153頁）にも収められている。

宗教ト教育ハ全ク別離スベシ別々ニ働ラナスベシ

然らざれば教育を普スルコト能ハズ

而して宗教別日別処ニテ其働ラナスベシ真信仰自由ニナスコト大切ナリ⁵⁶⁾（下線筆者）

下線部分は、新潟女学校での学生の信仰への「自然に養われて、生長して来るのを待つような赴き」のある寛容な対応、さらには『新潟新聞』（1889年7月）掲載「女子教育に就て」にある「自由自

動独立選択的の女徳」と通底する。

成瀬は常々宗教と教育は切り離せない問題として語っていただけに、この部分だけを読むと唐突な印象を与えるかもしれないが、こう言い切る背景には伝道と教育の厳しい実践と思索の日々を乗り越えてきた年月の積み重ねがあったことを忘れてはならない。結論から言えば、「宗教と教育の分離」には明治初期の日本に開設されたミッション・スクールへの批判が込められていたのであり、徳育のための宗教心を育てる教育を否定していたのではない。このことは帰国後に著した『女子教育』に詳細に論じられている。

宗教なるものは最も高尚なる理想的の有心者、或は観念を崇拜するものなるが故に・・・宗教教育は道徳と分離すべからざるのみならず実に欠くべからざるものなり。然れども、著者の所謂宗教々育なるものは一定の形式を具へたる宗教、若くは宗派、或はその神学、又は教條を生徒に授くるの謂に有らざるなり。学校に於ては唯凡ての人心に通用せる宗教心を開發するをもて目的とせざるべからず。一定の神学、教條等は之を避け、只生徒の自然の宗教心を發育せしむべし・・・。伝道と教育とを混合し、学校を伝道の機関とすべからざるなり。

(『著1』107 下線筆者)⁵⁷⁾

同様の内容は、1906（明治39）年度の豊明幼稚園小学校開校式で学園の宗教的要素として説明されている。

教育と宗教とは混ずべからざるものであることは最初より称へた所であります。併し乍ら教育は宗教的生命を得る迄に至らなければならぬと云ふ事は、本校創立の当初からの考えである。

(『著2』666)

梅花女学校時代より成瀬の心中にあって消え去ることのなかった教会と学校、宗教と教育の関係については、すでに新潟女学校開校準備の頃には考え方に変化が兆していたのではないだろうか。独立した学校経営を可能にするための財政的基盤の確立には、教会や教派の違いを超えて広く万民によって支えられる必要があり、そのためには社会にその実りを還元しうる教育理念と高度な教育内容を持たねばならなかった。殊に女子教育においては、その社会的意義を明確に示すことが必要だった。人口の半分を占める女性を男性と同じように人として教育すること、そこにこそ成瀬の女子教育の原点があった。

いよいよアメリカ留学へという時の心情をのちに語った言葉がいくつか残されている。

日本を去る時に、既に神学上の疑問があり、信仰上の懐疑時代であった。(『傳』153)

私は十九の時に基督の弟子になるといふことを告白して、基督教会にはひつたのであった。それから明治二十三年頃に疑問が起つて、外国に往つて研究した。

(『傳』355 明治45年1月櫻楓修養会にて)

二十年前私は、之れまでの狭い独断的な宗教観に就て疑ひを始め、又一つには其頃女子教育に対する反動があつたので、右の疑ひに就て研究傍、女子教育に対する世界の大勢も見たい考へ

で、洋行を企てたのでした。(成瀬仁蔵「欧米宗教界の現状」『道』60号(1913年4月、17頁))

新潟時代後期には、「一番困難な時」に「一番熱心になつて、コンセントレート」したという梅花、そして郡山時代の信仰を、「今からいへば間違ひであつたけれども、その時は迷信でないと信じて」と回想している。しかしそれは、キリスト教に入信した頃の聖書の教えに忠実であろうとする若さと情熱の勢いが独断的解釈に走らせたことへの苦い思いからの、経験を積んだのちにこそ言える言葉だったのではないか。「独断的な宗教観」とは、新潟で成瀬が目にした教派内外の対立と分裂、そこで味わった失望感と重なるものだったのであり、狭く独善的な宗教観に自らも陥っていたのではないかという自身の信仰のあり方への疑問だったのではないだろうか。そのことを悟らせてくれたのが、出立直前に届いた長岡の宣教師ニューウェルからの返書だった。それを目にした瞬間、抱いていた信仰上の「懐疑」への閃きのようなものを感じたのではないだろうか。

最後に、留学のため新潟を発った日の日記を引用する⁵⁸⁾。

明治23年11月なり、新潟を出立せり。

余、新潟に在る4年3ヶ月余初て新潟に来り只一人の朋友ありしが、新潟を出ずる時は多く親友あり、情を以て余を送れり。親友より余に贈りし金員並に品物は、大凡百五十円なりし。

新潟の人びと一組合教会に残った信徒、新たに加わった信徒、同僚宣教師、女学校設立協力者、女学校生徒、卒業生、その家族、婦人会の面々、講演会参加者等々に温かく支えられてのアメリカへの旅立ちだった。

*本稿執筆に際し、日本女子大学成瀬記念館の資料を利用させていただきました。岸本美香子氏、杉崎友美氏、是恒香琳氏には収集と閲覧においてお世話になりました。また、ほんぼーと新潟市立中央図書館の館員の方々には資料収集へのご協力をいただきました。両館の新型コロナ禍での懇切丁寧なご対応に厚くお礼申し上げます。

注

- 1) 仁科節編『成瀬先生傳』(櫻楓会出版部、1928年)、111頁(以下、注では、『傳』とする)。ここには「この頃[渡米直後]の先生の日記を見る・・・二月二十日の條の中に」とあり、渡米直後の1891年2月20日と解釈されているが、この部分の日記の所在は不明とされる。また、中村政雄編『日本女子大学校四拾年史』(日本女子大学校、1942年)、15頁には、渡米直後の1891年1月18日の日記を引用後、「先生の天職の自覚も此頃はつきりと把握され、日記には『吾天職』として『教員ニアラズ牧師ニアラズ、学者ニアラズ。社会改良者ナリ、女子教導者ナリ・・・』と誌して」ある。
- 2) 『傳』、110頁；日本女子大学成瀬仁蔵記念館編『成瀬仁蔵関係書簡集1』(日本女子大学成瀬記念館、2019年)、117頁(以下『書簡集1』とする)。なおアンドヴァー到着の11日とは現地時間の10日である。ここでは時差が考慮されてなかった。片桐芳雄「成瀬仁蔵のアメリカ留学、タッカーとの出会い―帰一思想への道(1)」『人間研究』50(2014)、19頁。妻マスエの表記は『書簡集1』で成瀬が書簡に記していた万寿枝とした。
- 3) 以下、代表的な研究を挙げる。中寫邦『成瀬仁蔵研究―教育の革新と平和を求めて(ドメス出版、2015年)；大森秀子『成瀬仁蔵の帰一思想と女子高等教育 比較教育文化史的研究』(東信堂、2019年)；

- 影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想』（風間書房、1994年）；片桐芳雄「成瀬仁蔵の女子教育への道—大阪、大和郡山、そして新潟へ—」『愛知教育大学研究報告』65（2016）、213-220頁；同「新潟の成瀬仁蔵—試練のなかの牧師生活—」『人間研究』52（2016）、79-88頁；同「新潟女学校と成瀬仁蔵—キリスト教教育をめぐる—」『愛知教育大学研究報告』66（2017）、179-187頁；同「成瀬仁蔵のアメリカ留学、サッカーとの出会い」。片桐はここに紹介した以外にも『愛知教育大学研究報告』と『人間研究』（日本女子大学教育学科の会）に成瀬仁蔵に関する研究を多数発表している。
- 4) 『傳』、99頁。近代新潟における教育とプロテスタント伝道の歴史を詳細に検討した本井康博も、成瀬の渡米直前までの新潟での活動と新潟女学校での教育実践が、彼の留学決断に大きな意味をもったこと、成瀬の思想形成において「越後時代は移行期、あるいは過渡期」と位置づけ、「彼の思想上の力点は、この地で伝道から教育へと大きく変化した」とする。本井康博『近代新潟におけるプロテスタント』（思文閣出版、2006年）、208-209頁；同『近代新潟におけるキリスト教教育』（思文閣出版、2007年）、33頁。
 - 5) 『日本女子大学校四拾年史』、12-13頁。成瀬の婦一思想については、以下を参照されたい。『成瀬先生傳』、『成瀬仁蔵著作集』、見城悌治編著『婦一協会の挑戦と渋沢栄一 グローバル時代の「普遍」をめざして』（ミネルヴァ書房、2018年）、大森『成瀬仁蔵の婦一思想と女子高等教育』。
 - 6) 『書簡集1』、127頁。
 - 7) 日本女子大学成瀬記念館編「アメリカ留学時代のノート（女子教育の方針、種子）1891年」『成瀬仁蔵資料集3（D2008）』（日本女子大学成瀬記念館、2018年）5-7、79頁。
 - 8) 『傳』、83-84頁。
 - 9) 吉田亮「第五章 組合教会」キリスト教史学会編『宣教師と日本人 明治キリスト教史における受容と変容』（教文館、2012年）、173-175頁。
 - 10) 『傳』、61-64頁。成瀬の独立自給主義の主張と梅花女学校のクリスチャン・スクール化についての詳細は、茂義樹「明治期における会衆派の大阪伝道—明治十三年（1880年）より十七年（1884年）まで」『沢山保羅研究』2（1969）；片桐「成瀬仁蔵の女子教育への道—大阪、大和郡山、そして新潟へ—」を参照されたい。なお、資料文献には、「澤山保羅」「沢山保羅」と、ふた通りに表記される。
 - 11) 茂義樹「明治初期における組合教会の大阪伝道と梅花女学校—明治二年十一月より明治一三年六月まで—」『沢山保羅研究』1（1968）、52-54頁；佐野安仁「沢山保羅と創設期の梅花女学校」同誌、84-86頁；片桐「成瀬仁蔵の女子教育への道」、214頁。日本女子大学成瀬記念館「梅花女学校教師時代の覚え書 明治十五年」『成瀬仁蔵資料集1（D266）』（日本女子大学成瀬記念館、2018年）は、成瀬の授業が如何に緻密な計画と実践記録に基づいていたかを今に伝えてくれる貴重な史料である。
 - 12) 『傳』、42-43頁。
 - 13) 『傳』、57頁。
 - 14) 成瀬仁蔵著作集委員会編『成瀬仁蔵著作集』第一巻（日本女子大学、1974年）、285頁（以下、『著1』とする）。
 - 15) 同書、281-283頁。
 - 16) 『傳』、66頁。
 - 17) 『傳』、625頁。
 - 18) 『傳』、66頁。
 - 19) 山岡はる子「梅花女学校時代の成瀬先生」成瀬先生追懐録編集委員会編『成瀬先生追懐録』（櫻楓会出版部、1928年）85-87頁；川島芳子「故成瀬先生について」同書、92頁。「京都神戸」とは、京都の同志社女学校、神戸の英和女学校のこと。
 - 20) 深井虎蔵「郡山時代の成瀬先生」『成瀬先生追懐録』、69-75頁。なお、自給主義と精神的独立・主体性との考え方について、成瀬は、ニューイングランドの徹底したピューリタニズムによって鍛えられた澤山の姿勢を受け継いでいた。この点では同じ組合派教会ではあったが、金銭上の経済的自立の精神に関してはアメリカン・ボードからの援助受け入れに肯定的だった新島襄や海老名弾正らとは立場を異にしていた。笠井秋生・佐野安仁・茂義樹『沢山保羅』（日本基督教団出版局、1977年）、169頁。

- 21) 『著1』、315頁。
- 22) 『傳』、306頁。前神醇一（1844-1921）は薬剤師で澤山保羅とともに浪花教会と梅花女学校の創設に尽力した。
- 23) 『傳』、81頁。
- 24) Jinzo Naruse, *A Modern Paul in Japan: An Account of the Life and Works of the Rev. Paul Sawayama* (Boston: Congregational Sunday-School and Publishing Society, 1893). 新井明訳『澤山保羅現代日本のパウロ』日本女子大学、2001年。澤山の場合、Paulは「パウロ」とカタカナ書きされる。澤山は留学中に受洗し、キリストの使徒パウロの伝道の姿勢に深い感銘を受け、自らを本名の馬之進から保羅と改めた。ヴァーモント州の新聞 *Vermont Chronicle* (1893/10/13) には「示唆的で感動的な内容で、すべての教会関係者が読むべき一冊である」と紹介された。
- 25) 『傳』、49頁；笠井・佐野・茂『沢山保羅』、160-161頁。
- 26) 『傳』、71頁；深井「郡山時代の成瀬先生」『成瀬先生追懐録』、73頁。
- 27) 未信者への説教については、郡山時代初期の成瀬から澤山宛に教えを乞うことがあったようである。1883年8月10日付の澤山から成瀬宛書簡に次のような内容が含まれている。「小生ハ常ニ聖書ヲ手本トシテ説教する故説教は信者ニモ不信者ニモ感銘スル様ニ致候目的故全く不信者ノ為ノミト申説教ハ致不居聖書ハ不信者読メバ畏懼シテ悔改メ信者読メバ徳ニ進ム如此キ説教コソ誠ノ益ヲナス説教ナリト説諭致候」（成瀬記念館所蔵資料1847）。笠井・佐野・茂『沢山保羅』、148頁。
- 28) 加藤邦雄「日本におけるプロテスタント教会教勢の一研究」日本基督教団宣教研究所編『プロテスタント百年史研究』（日本基督教団出版部、1961年）、91-95頁；笠井・佐野・茂『沢山保羅』、160-161頁。
- 29) 『著1』、454-455頁。
- 30) 『著1』、307-308、326、460-461頁；『傳』、73頁。
- 31) 笠井・佐野・茂『沢山保羅』、160-161頁。
- 32) 『著1』、346頁。
- 33) この問題について、本井は『近代新潟におけるプロテスタント』（208-209頁）で論じている。それによれば（1）麻生正蔵説は、成瀬が20歳前後の大和郡山時代に大望を育んだとする。本井も同様に（2）大和郡山時代の「余を神ハ選ンデ女子教育ニ用ゐん為に・・・」と書いた頃をあげるも、これだけでは「女子教育」に大学設立が含まれているかどうかは不明とし、（3）後年の成瀬の回想「本校〔日本女子大学校〕の起源は遠く二十年前〔1885年に相当〕の事にして、当初十年間は準備の時代ともいふべきなり」（『著2』487）を挙げるが、これも「二十年前」に幅があるとして、「新潟時代に既にその萌芽は潜んでいた」（『日本女子大学校四拾年史』）と見るのが妥当ではないかとの立場をとる。本稿筆者は、成瀬の回想にある「二十年前」とは2年ほどのずれはあるが、本稿中（九）の一文で言う「為スコトヲ得ルヤ」が大学校構想に当たる、つまり大和郡山時代ではないかと推測する。
- 34) 『傳』、84-85頁；本井『近代新潟におけるプロテスタント』、146-147、155頁；新井明「解説」新井訳『澤山保羅』、206-210頁。
- 35) 『傳』、88-89頁；新井訳『澤山保羅』、186頁；本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、38-39頁。
- 36) 本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、34-40頁。
- 37) 『傳』、90頁；本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、34-35頁；片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵一キリスト教教育をめぐって」、179-187頁。
- 38) 『新潟新聞』1887年2月27日。主意書と規則については次の研究が詳細に論じている。本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、34頁；片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵」、181頁。
- 39) 『傳』、89頁。片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵」には「キリスト教に基づく宗教教育の積極的な意義は述べられていない」とある。
- 40) 『新潟新聞』1887年5月22日。開業式での成瀬の演説「大意」詳細については、片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵」を参照されたい。
- 41) 『傳』、90頁。
- 42) 新島襄宛の成瀬書簡「177 一月三日 成瀬仁蔵」全集編集委員会編『新島襄全集』9 - 上、同朋社出版、

- 1995年、327-328頁。ただし消印は二月四日となっている。
- 43) 『基督教新聞』(明治22年5月1日)には「拜啓我等従来一致組合ノ両教会ヲ組織致居久敷御佑助ヲ蒙候段深ク奉謝候」で始まる挨拶文がある。『傳』86頁。柏木義圓「故新島襄先生を懐ふ」『上毛教界月報』99号(明治40年1月15日)には新島が両教会の合併に反対したことが回想されている。この問題の詳細については、本井『近代新潟におけるプロテスタント』169-172頁；片桐芳雄「新潟の成瀬仁蔵―試練のなかの牧師生活―」『人間研究』52(2016)、81-83頁を参照されたい。本井は同書169頁で、教会員数を「一挙に177名に膨れ上がった」としている。
- 44) 『傳』、90頁；本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、47頁。
- 45) 『新潟新聞』1888年2月19日；本井『近代新潟におけるキリスト教教育』、46-47頁；片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵」、184頁。
- 46) 本井『近代新潟におけるプロテスタント』169-188頁は、この婦人会についての詳細な研究である。
- 47) 『傳』、92頁。
- 48) 北越学館事件についての詳細は次の研究を参照されたい。本井『新潟におけるキリスト教教育』第3章；片桐芳雄「北越学館事件の成瀬仁蔵と内村鑑三―『成瀬意見書』の検討を通して―」『人間研究』53(2017)、3-16頁；新潟県プロテスタント史研究会編『明治教育秘史 新潟女学校と北越学館』新潟日報事業社、1990年。
- 49) 松村介石『信仰五十年』(警醒社、1926年；大空社、1996年)、39、167、267-268頁；片桐「北越学館事件の成瀬仁蔵と内村鑑三」、13-14頁；大森『成瀬仁蔵の婦一思想と女子高等教育』、34-41頁。
- 50) 松村の北越学館教頭就任は内村事件後の1889年4月である。本井『近代新潟におけるプロテスタント』(201頁)によれば、成瀬が後年もっとも信頼をおき、のちの日本女子大学第二代校長となる麻生正蔵に初めて留学の相談をしたのが1889年「秋冬の頃」とある。ちょうど留学一年前のことだった。
- 51) 成瀬仁蔵宛書簡4364「Newell, Horatio B. September 1890」(成瀬記念館所蔵)；中寫邦「新潟時代の成瀬仁蔵―成瀬宛書簡の紹介を通して―」『日本女子大学紀要 文学部』41(1991)、111-112頁；片桐「新潟女学校と成瀬仁蔵」、185頁。片桐は「成瀬のキリスト教信仰への動揺を示すものだった」「成瀬の中に漠然と生じてきた不安」と指摘する。
- 52) 学問事業は旅行の如し 旅行するに、或は坂あり、平地或は善道あり、悪しき道あり・・・学問事業も如是易々として進歩の連なる時あり・・・かつ進歩の更に見えざる事あり。然れども全力を尽さば必ず平坦の処くるべし・・・希望之地位に達すべし。「成瀬先生滞米日記抄」(1891年2月3日)(八)『家庭週報』No. 1562(1942年7月17日発行)。
- 53) 「成瀬先生日記抄」(1月26日)(四)『家庭週報』No. 1553(1942年5月8日発行)。「成瀬先生滞米日記抄」となるのは(六)以後である。(下線筆者)日記抄の編者中村政雄は「明治24年1月10日前の日記は総て記憶によって書かれたものと思われる」と記している。
- 54) 「成瀬先生滞米日記抄」(九)『家庭週報』No. 1566(1942年9月4日発行)。「成瀬先生滞米日記抄」(八)『家庭週報』No. 1562には2月8日付の宇宙の神が掲載されており、「成瀬先生滞米日記抄」(九)には人は審附を成すの義務ありの直後に「Universal God」が掲載されている。片桐は「成瀬仁蔵のアメリカ留学、タッカーとの出会い―婦一思想への道(1)」19頁に、『日本女子大学四拾年史』17-18頁には宇宙の神と「Universal God」の全文が日付なしに、『成瀬先生傳』141頁には同じく日付なしで宇宙の神全文と「Universal God」の項が一部省略されて引用されている、と指摘する。
- 55) 『著1』、14頁。
- 56) 「アメリカ留学時代のノート」、7頁。
- 57) 「新刊批評 成瀬仁蔵氏の新著『女子教育』」『六合雑誌』16巻184号(1905明治29年)49-52頁の書評に、「著者が宗教と教育との関係を論ずる処、甚だ公平にして頗る吾人の意を得たるものあり」とある。『六合雑誌』は教派を超えたキリスト教界の総合雑誌(1880-1921)。
- 58) 『傳』、108頁；「成瀬先生日記抄」(一)『家庭週報』No. 1552(1942年4月24日発行)。

上代タノ —若き日の欧米滞在経験と平和運動への道—

Tano Jodai: Youthful Days and Experiences in Europe and the U.S.
and the Road to the Peace Movement

高村 宏子
TAKAMURA Hiroko

1. はじめに

上代タノ（たの）は、1905年に島根県から上京し、創立間もない日本女子大学校英文学部予科に入学、学外の寮での生活を通じて英国聖公会の宣教師ミス・フィリップスに出会う¹⁾。フィリップスは、上代が国際的活動へと踏み出すきっかけをつくり、上代に大きな影響を与えた人物である。1907年、上代はフィリップスの紹介で新渡戸稲造と出会う。この新渡戸との出会いこそ、のちの米国ウェルズ・カレッジ留学（1913-1917年）、ミシガン大学大学院留学（1924-1925年）、さらに英国ケンブリッジ大学留学（1925-1926年）へと続く、上代の欧米体験に繋がる重要な出発点となった。

一方、フィリップスは、宣教師として寮生の精神的な支えであると同時に、キリスト教の精神と文化を寮生たちに伝える意味でも重要な存在だった。上代は、フィリップスの影響で1909年に洗礼を受け、キリスト教徒になっている²⁾。上代のキリスト教のバックグラウンドがクリスチャンの新渡戸との信頼関係、また平和活動に多大な影響を与えた婦人国際平和自由連盟の創立者ジェイン・アダムズら欧米の文化人との関係構築にも役立ったのではないだろうか。

順番が逆になったが、上代にもっとも大きな影響を与えたのは、日本女子大学校の創立者で校長だった成瀬仁蔵である。成瀬は、在学中から上代に目をかけ、大隈重信はじめ各界指導者を成瀬が訪問する際には彼女を同席させたりした³⁾。また、上代が卒業と同時に母校の英文学部予科で英語を教え始めた頃、成瀬は新渡戸と英文雑誌の発行を始めるのだが、ここでも成瀬は上代の語学力を買って、この雑誌の編集を任せていた⁴⁾。恐らくこの頃から成瀬はすでに、将来の後継者の一人として上代に期待していたのであろう。上代もまた、成瀬の意志を汲み取り、使命感を抱いていたことは、関係書簡からも明らかである。

その後、上代は欧米留学と滞在によって見聞を広め、同時に多くの人々との交流を通じて国際感覚を身につけていく。第一次世界大戦を経験した欧米の人々、とくに女性たちが平和を求めて活動する姿に刺激を受け、多くを学んで帰国した。これらの経験は、日本における女性の平和運動、そして第二次世界大戦後は核実験反対運動などをリードする基礎となった。

本稿では、上代と成瀬の交流を示す関係書簡、および欧米滞在中の1925年-1927年の上代自身の手帳ダイアリーなど未発表を含む資料の紹介を兼ねつつ、若き日の上代の経験とそこから生まれた平和運動に対する決意を明らかにしたい⁵⁾。

2. 関係書簡にみる成瀬仁蔵の期待と上代の使命感

上代が平和に対する強い思いを抱くようになった背景には、成瀬仁蔵の影響がある。成瀬の平和思想は、渋沢栄一らと始めた婦一協会の活動を通じて広められた⁶⁾。成瀬は、狭い宗教の枠を超え、

すべての宗教の統一を追求し、それによって人間相互の敵意、偏見差別などを取り除いて平穏な社会の実現を目指した。こうした成瀬の理想主義は女子教育の場にも反映され、上代にも影響を与えた。そして、上代にとって平和への道のりの第一歩となった⁷⁾。

成瀬から上代に宛てた手紙を一部紹介したい。1911年5月5日付書簡は、原稿を送るのでよろしく、寝る間もなく汽車の車中で仕上げたので校正の際に「ヒリップ氏に見せて」添削してほしい、という内容である⁸⁾。この年、上代は文部省の英語中等教員検定試験に合格しており、成瀬の信頼の厚さがわかる。たぶん、これに対して上代が返信したと思われる1911年5月10日付の成瀬宛書簡がある⁹⁾。「去る五月御認めの手紙たしかに拝見仕候先生には其後殊のほかの御繁忙中にも拘らず貴稿御送りのたまは誠にありがたく存じ候 一週間余り半日……(?)校正仕り／漸く一昨日第二の校正全部終了仕候(後略)」

この頃の上代の手紙には日付がほとんどなく、いつごろか推察するしかないのだが、成瀬宛書簡のうちアメリカ留学の直前に出されたと思われる一通が残っている。成瀬のところから戻ったばかりで手紙をしたためている様子で、いつになく気持ちが高ぶり、感傷的になっているように思える。一部を紹介したい¹⁰⁾。「……春まだ浅き昨日今日の宵は殊に静寂限りなく人はおのづから瞑想にふける。今夜も先生の御前に吾を忘れて語り候……幸の極に候……其の言葉は不完全なりとも吾が胸奥に受くる人生最高の印象は永久に吾が生を豊富ならしむるものに外ならず候 斬くて今も吾が想ひはますます深くながく今宵の夢も帰一の世界に遊ぶ事に御座候(後略)」

上代のウェルズ・カレッジ留学中、成瀬から届いた1915年5月23日付書簡は、要約すると、「元気に勉学に励んでおられることでしょう。……我が国の婦人会は益々素養深き人格を要し申合せっかく修養を積まれたのだから将来は十分お働きくださるよう切望に絶えない」とある¹¹⁾。さらに、翌1916年4月7日付の書簡では「一日も早く御帰朝母校の為め御尽被下度候」とあり、成瀬の期待の大きさがわかる。上代は1917年に英文学修士を取得して帰朝し、母校の英文学部教授に就任した。

このように、成瀬の期待と上代の覚悟が書簡から伝わってくる。その後上代は教育に携わると同時に国際問題に強い関心を寄せ、やがて新渡戸の助言で再び米国に渡るのだが、それは成瀬の死後、1924年のことである。

3. 手帳ダイアリー(1925年～1927年)にみる欧米滞在中の上代

上代が残した2冊の手帳ダイアリーは、スケジュールを書き込むためのものだったのか、それとも日々の記録を残すためのものだったのか、目的はわからない。しかし、ほとんど英語で几帳面に記された記録は、日によって分量に差はあるものの、1925年から1927年にかけて米国、英国、スイスのジュネーヴに滞在した記録は、日本人にとって海外が遠かった時代に貴重な経験を積んだ上代を知る手がかりとなる。1冊目はルーズリーフ式の小さな手帳で、1925年7月5日から始まり、1926年12月31日で終わっている。ルーズリーフ式のため紙面を補充し、講演会の内容、住所録や手紙の下書きも含まれている。2冊目は革製の手帳で1927年1月1日から12月31日までが収められている。

本稿では、(1)1925年夏に米国ハーヴァード大学のサマースクールに出席したあと、英国に渡り、ケンブリッジ大学の研究生として英国に滞在した1926年夏まで、(2)アイルランドのダブリンで開催された婦人国際平和自由連盟(以後 WILPF)の世界大会に日本代表として出席した1926年7月、(3)国際連盟で事務次長を務めていた新渡戸稲造とその家族とスイスのジュネーヴで過ごし、

任期を終えた新渡戸とともに日本に帰国するまでの1926年8月から1927年はじめの時期に分けて、上代の経験を探ってみたい。なお、雰囲気伝えるため引用は原文のままとし、原則として日本語訳はつけない。

(1) 米国から英国へ

1924年から1925年にかけて上代は奨学金を得て、米国のミシガン大学大学院に留学するが、新渡戸のすすめで、大学院で学位を取得するよりも広く欧米で見聞を広める道を選択した¹²⁾。1925年夏にはミシガンを離れてハーヴァード大学のサマーカレッジを経験し、さらに、英国ケンブリッジ大学の研究生になるため、英国に移動している。

日記は1925年7月12日から始まっている。この時期にはハーヴァード大学のサマースクールに出席しながら、週末には遠出して、米国東部の歴史的に重要な場所にまめに足を運んでいる。8月23日からは首都ワシントンに数日間旅行して議事堂ほか重要な場所を訪れている。この間にショッピングにもよく出かけている。ダブリンでの WILPF 世界大会にそなえてか、それともジュネーブでの生活にそなえてか、6月11日には“bought evening dress.”とある。また、秋からの英国行きにそなえて領事館に行ったり、旅行社でチケットを買ったりするなど準備を進め、9月3日にはトランクをニューヨークまで送ったと記されている。さらに、9月12日に英国に向けて発つ前の1週間は、ニューヨーク州内陸部を訪ねている。特別な名所でも観光地でもなく、かつてのウエルズ・カレッジ時代の友人でも訪ねたのか、目的は不明だが、かなりの距離を精力的に移動していることが日記から伝わってくる。

9月12日、いよいよ英国に向けてニューヨークを出航、フランス経由で9月19日に英国に到着した。途中、船が揺れて気分が悪くなった様子も記されているが、“went to bed earlier - thinking of my future plans & of my friend.”とある。久しぶりにゆっくり落ち着いて過ごせた時間だったのであろう。

英国到着の翌日9月10日は“The first Sunday in England”と記され、期待にあふれている様子がわかる。そして、到着早々にもかかわらず、近くの教会の早朝礼拝に出かけている。その後も、日記からうかがわれる上代の毎日は、さまざまな教会訪問と“tea”で占められていると言ってもよいほどである。“tea”の内容はほとんど明らかではないが、個人に招待されている場合のほか、学内のどこかで催された場合も多く、そうした機会にさまざまな人々と意見交換をして、ネットワークを広げていったと思われる。また、気分転換には近くの森や湖まで散歩をして、英詩の世界のような景色に感動している様子がしばしば記されている。

ついでに、新渡戸について触れておくと、上代はロンドンで新渡戸に会っている。このロンドンでの出会いは、新渡戸が上代に送った書簡(1925年11月10日付)と関係があると思われる。当時、新渡戸は国際連盟での公務が忙しく、上代の滞在しているケンブリッジまでは行けないので、「ロンドンで会いたい」¹³⁾と言ってきている。そこで、新渡戸の提案に対して、上代が出向いたと思われる。日記には次のように書かれている。

Nov. 11
Armistice Day (第一次大戦休戦記念日)
Tea at Saito San's
Went down to town - had supper

Dr. Nitobe's letter came.

Nov. 14

London -- to see Dr. Nitobe at Grosvenor Hotel, Victoria
Mrs. Saka met me at Liverpool,
Went to Chinese Restaurant near Charing Cross -
Garrick Theatre - Tess - Hardy

Nov. 15

Dr. Nitobe took me to Slough-Eaton College - Windsor Castle

Nov. 16

Said goodbye to Dr. Nitobe with Saka - did shopping
Chinese restaurant near Picadilly circus
Took 4:45 train back to Cambridge

(2) WILPF 第5回世界大会

ケンブリッジ滞在中の1926年7月7日から15日まで、上代はダブリンで開かれた WILPF の世界大会に出席し、各国の活動報告の場面では日本支部を代表して「婦人と世界平和」と題するスピーチを行なった。会議の全容については『家庭週報』に上代自身が詳しく書いている¹⁴⁾。では、日記にはどのように記されているのだろうか。WILPF 世界大会の前後を含め、手帳に何が書かれているか、拾い出してみよう。

日記によれば、上代は大会2日前の7月5日に船でダブリンに向かい、到着の翌日には役員会に出席し、そこで会長のジェイン・アダムズに会ったと記されている。上代がかねてより敬愛していたアダムズが、アジアからはるばる参加した上代に対し、特別に好意的であったことが、7月9日の記述から伺われる。

July 6 - reached Dublin - went to University in after to join the executive committee meeting - glad to see Miss Addams.

July 7 - Executive Committee meeting

July 8 - Executive Committee meeting in the morning. In the afternoon - delegates arrived.

July 9 - Reported for Japanese Section in the afternoon. Miss Addams introduced me so nicely - they gave me some extra time.

July 10 - reported on Economic Imperialism in Japan.....Plenary session - Miss Sheepshank's speech on Imperialism - excellent.

July 11 - got ready for my speech in the evening. Women and the World Peace.

July 12 - The mass meeting - in Japanese costume.

July 13 - joined the Commission - Arbitration etc. In the afternoon - Garden Party

July 14 - 白紙

July 15 - The last day of the Conference. Went in Japanese costume.



婦人国際平和自由連盟第5回世界大会（1926年）
前列中央ワンピース姿が上代タノ（成瀬記念館提供）

July 16 - Went to Quaker Meeting House for Executive Meeting - in the afternoon again.

July 17 - tidied my room & wrote letters and then took taxi to the United Arts Club to lunch with Capt. Casement.....

世界大会終了後は近隣の名所を各国代表らと見学し、7月20日にダブリンを発った。途中ロンドンまでは船酔いで不快だったとある。そして、翌7月21日には1日中横になっていた（rest）と記されている。

ダブリンで行うスピーチの原稿を出発前から用意していたことを示唆する記述がいくつかある。

June 26 - fine - worked over my paper & wrote some letters.

しかし、この前後にも上代はバスなどを利用して周辺各地の名所旧跡をあちこち訪ねている様子で、会議での報告を前に緊張している様子はない。

また、この頃の手帳の余白には挨拶する場面のために用意したと思われる下書きがみられる。

“I wish to join the other speakers in our hearty thanks for all what you have done and are going to do for us for this Congress.

“I am exceedingly happy to have this opportunity of expressing my hearty thanks for all that you, the Irish Section, have done and are going to do for us during the Congress.”

上代が初めて大きな国際会議に日本から一人で参加した心境はどうであったのか。『家庭週報』（1927年6月3日）によれば、「日本からの代表は私一人といふので、何かにつけて不便や、心細さ

を感じない [ママ] 場合もないではありませんでした。併し、もとよりさうは言うておられませんので、出来るだけ務を果すやうに努力致しました。」とある。しかし、日記にはそのような心境をうかがわせる表現はまったく見当たらない。

上代が国際的な大舞台で堂々とスピーチを行うことができた背景には、上代が師と仰ぐ新渡戸からのアドバイスが事前にあったことが大きい。上代の相談に対して新渡戸からは、国際総会で期待されていること、その心構えについて、1926年4月23日付の手紙（英文）で助言があった。つまり、「いわゆる一般論ではなく、日本支部としての立場を具体的に話すこと」と書かれていた¹⁵⁾。日記には、新渡戸からの手紙についての記述は確認できない。

会議で取り上げられた「世界に於る帝国主義的傾向、軍備縮小問題、殖民問題、経済問題」について上代は高い関心を示し¹⁶⁾、演説や意見交換の場に積極的に参加していたことが、手帳に詳しくメモされたその内容から理解できる。とくに、徴兵制に反対するアメリカ代表の意見に感銘を受けたいことも、手帳の詳しいメモ（1926年7月5日追加ページ）から理解できる。

“U.S.A. objects to any kind of conscription - civil service conscription - theory of conscription - fundamentally wrong - bec. (because?) in U.S.A. the government is trying to do that as an alternative - which is in reality - military service.”

上代は、世界各国の代表の平和に対する姿勢や取り組みにも強い関心を示し、日本の関係者に伝えたいと考えていた。帰国後、『家庭週報』で詳しく報告している。「各国の代表者中には私の如き貧弱な経験を持った者はありません。何れも、世界平和のために戦ひ、苦心を嘗め尽くした人ばかりで、……さういう人々に立ちまじり、自分の責任を思ふ時、屢々怖気を感じたのでありますが、そのためにかへってこちらが元気になる、割合に仕事がし易かったといふ感も持てます。』¹⁷⁾

(3) ジュネーヴでの体験

上代は、WILPF 第5回世界大会に出席後、ダブリンからケンブリッジに戻り、休息もそこそこに次の目的に向かって旅立ちの準備を始める。そして、8月4日にはジュネーヴに向けて出発している。ジュネーヴへ向かう列車の中で、ニューヨーク州立大学のアーサー・クレメント博士に会ったとある。到着後については、“Dr. Nitobe met me at the station.”とあり（8月4日）、新渡戸が駅まで出迎えてくれたことがわかる。

到着の翌日は、“Simply rested - doing practically nothing - went to town - passed by the League of Nations - Can enjoy a real rest here.”と、新渡戸の家族と合流したことで安心している様子がうかがえる。一方、国際連盟の近くを通りかかって、今後の活動にワクワクしている様子がわかる。8月9日には国際連盟本部内にある新渡戸のオフィスを案内してもらい、そこで新渡戸がこれまで7年間の在任中に使っていた机などに特別の思いが湧いたことを伝えている。“Fine - went to see the Secretariat of the League of Nations - the desk Dr. Nitobe worked for seven years -”

8月12日には新渡戸夫妻とともに講演会に行っている。“In the morning Dr. & Mrs. Nitobe took me down to Gland in their car. Began to attend the lecture by Dorothy Detger on Am, (American?) Peace movement.”ジュネーヴ滞在中の上代はひんぱんに講演会に出席しており、その場合、同行者や会場で知り合った人の名前がきちんと記録されている。名刺交換があったのかど

うか、綴りも正確に記録されていることに驚く。8月16日夜は“Anti-militarism in Japan”についての講演に足を運んでいる。軍国主義が強まりつつある日本を外から見る貴重な機会であり、こうした経験が将来のぶれない平和主義の背景にあったと思われる。

8月17日には、詳しい目的はわからないが、ジェイン・アダムズが来たことが記されている。こどもでもアダムズが上代に特別に目をかけていたことがわかる。

Jane Addams came in the afternoon - reception - the Nitobes, Iwao Iyesawa & his wife too. Miss Addams was so nice to me in the Hall and also mentioning (WILPF's) Jap. Section in her speech. The same impression I got in Dublin -

同19日にはアダムズが平和理論についてスピーチをしたとある。“What we need is concrete approach. Must reach the average people - or even below the average. She again mentioned Jap. Section - we must give (?) some definite step.”日本支部に対するアダムズの期待を受け止めた上代は、翌日アダムズの代表的な著書 *Peace and Bread in Time of War* を読んだと記されている。その後、上代とアダムズとは8月27日にもお茶の会で会っている。また、国際連盟総会でもアダムズと上代が顔を合わせる機会は何度かあった。

こうして国際的な視野が広がっていくにつれて、上代は日本と世界の隔たりを痛感してきたのであろう。日本の事情についての嘆きも散見される。アダムズの著書 *Peace and Bread* について感想を記したメモのあとには、日本政府の姿勢に対する不満の表現が出てくる。“In Japan the lack of intelligence in international affairs.” また、8月30日に開会した平和会議に行ってみると、日本の代表が出席していなかったと記されている。

さて、ジュネーブで上代は、新渡戸の家に滞在しながら、国際連盟の事務局や図書館を手伝って経験を積み、これが上代の将来につながるものとなった。これは、新渡戸が上代に働きかけて実現したものである。新渡戸から上代宛書簡（1926年4月23日付）には、「ケンブリッジを終わったらすぐにもっと長期滞在で来てくれるほうが良いとの結論になりました。ケンブリッジでの勉強がいつ終わるか、分かり次第教えてください（原文は英語）」とある¹⁸⁾。

ジュネーブ滞在中、上代は新渡戸の講演会にはしばしば出席し、毎回感銘を受けていたことがわかる。しかし、公務に忙しい新渡戸とゆっくり話をする機会はそれほど多くはなかったであろう。そんな中、上代がのちのちまで強く印象に残っている出来事として記されているのは、ある日曜日の朝の食卓での新渡戸との会話である。まず、上代の回想から紹介しよう（前田多門・高木八尺編『新渡戸博士追悼集』1936年）。

「まだゼネヴァにおられた1926年12月1日の私の日記を見ると朝飯の卓上で先生が未来に就いていたく真剣に語られた事が記してある。先生は善は不滅であることを深く信じて居られたが、悪については其の存在の目的が未だ不確実である。恐らく吾々が始めた仕事を成就するまでの存在として決して不滅のものではないといふやうに考へて居られた。……」¹⁹⁾

では、この哲学的な内容が当日の日記にどのように記されているのだろうか。

December 1 - At breakfast table - Sensei talked of the life after - Good lasts and evil

existies [ママ] ... - not immortal - because no clear purpose for it - but for a while to fulfill all things (?) we have started.

この朝食の席に2人以外にだれかいたのかは不明だが、かなり哲学的な内容の会話が交わされていたことになる。しかし、日記の文面だけから深い意味を理解するのは難しい。

上代が新渡戸の家族とどのような生活をしていたのか、日記を通じて明らかにすることは難しいが、新渡戸夫人、新渡戸の養女「こと」とその子供たち“the children”との接点があったことがわかる。養女の「こと」は、「おことさん」としてしばしば登場するが、年齢的に上代が妹のように思っていたのではないだろうか。いっしょに買い物に行ったりしている。1927年1月には新渡戸の国際連盟での任期が終了して、一家そろってジュネーブを離れ、船で日本へ帰国の途につくが、そのころ上代と Okoto San が夕食後に愛や結婚について話したことが、2月1日の日記に簡単に記されていて、興味深い。“After dinner - talked with Okoto San about many things - esp. (especially) of love and marriage.” ちなみに、上代が40歳、ことは36歳で2児の母であった。

4. おわりに

戦前戦後を通じて教育と平和運動に偉大な足跡を残した上代タノの20歳から40歳くらいまでを限られた資料に基づいて明らかにしたいと考えた。とくに注目されるのは、若き日の上代が成瀬仁藏、新渡戸稲造、ジェイン・アダムズなど、歴史上影響力の大きかった人物から並々ならぬ信頼を得て、直接指導を受ける機会が何度もあったことである。上代が能力に優れていただけでなく、それ以上に人間としての魅力があったからにちがいない。

手紙や日記から感じられることは、相手に対する敬愛の情と態度である。単に目上だからという理由ではなく、相手を心から尊敬していることが滲み出ている箇所が多く見受けられる。それゆえ、新渡戸は彼女を娘のように思って世話をし、アダムズは上代がはじめてのヨーロッパで困ることがないように気配りをしている。

アダムズが上代に WILPF 日本支部の将来を託したいと考えたのも、上代の人柄を信用したことが大きかったのではないだろうか。上代が1925年に米国からヨーロッパに渡るころ、アダムズは WILPF のヨーロッパ各支部宛てに紹介状を用意し、上代が見知らぬ土地でも受け入れてもらえるよう便宜をはかっている。「この紹介状を持参するミス・タノ・ジョーダイは W.I.L 日本支部で活躍していますが、1年間勉強したイギリスから日本に帰る途中、ヨーロッパ各地を旅行する予定です。私が日本を訪れた時、理事の一人としてのミス・ジョーダイと過ごした際、日本支部の尽力に私は非常に感銘を受けました。彼女に好意的に接していただければ大変ありがたいです。」²⁰⁾ 上代がはじめて訪れたヨーロッパに抵抗なく溶け込むことができたのは、このアダムズの心遣いも影響しているのではないか。

欧米滞在中の上代については、さらなる調査が必要である。手帳ダイアリーに記録された人々が、どのような人物であったか、上代のその後にどのような影響を与えたか、詳しく調べることによって、恐らく上代の国際的人脈の構築と平和運動の基盤が明らかになるはずである。今後の課題としたい。

最後に、資料の提供でとくにお世話になった日本女子大学成瀬記念館の岸本美香子、大橋有希子、是恒果琳の各氏に心からお礼を申し上げたい。

注

- 1) 上代の寮生活については、島田法子「上代タノと女子教育者への道」島田法子、中寫邦、杉森長子『上代タノ：女子高等教育 平和運動のパイオニア』（ドメス出版、2010年）31-32頁を参照。
- 2) 同上、32頁。
- 3) 同上、32-33頁。
- 4) 日本女子大学図書館友の会『上代タノ先生』7頁。
- 5) 関係書簡、手帳ダイアリー（1925年～1927年）はいずれも日本女子大学成瀬記念館に所蔵。
- 6) 中寫邦「女性の平和運動への触発—成瀬仁蔵の平和思想と活動」中寫邦・杉森長子編『20世紀における女性の平和運動：婦人国際平和自由連盟と日本の女性』（ドメス出版、2006年5月13日）25頁。
- 7) 婦一協会と成瀬については、桐原健真「宗教は一に婦すか 婦一教会の挑戦とその意義」見城悌治編著『婦一協会の挑戦と渋沢栄一』22-25頁、ミネルヴァ書房、2018年、および辻直人「成瀬仁蔵の婦一思想」、同上書、143-163頁を参照。
- 8) 日本女子大学成瀬記念館編『成瀬仁蔵関係書簡集 I』2019年。
- 9) 成瀬記念館資料、No. 4178。
- 10) 年不詳6月22日付、成瀬記念館資料、No. 3685。以下に手紙全文が引用されている。青木生子『近代史を拓いた女性たち—日本女子大学に学んだ人たち』講談社、1990年、78-80頁。
- 11) 『成瀬仁蔵関係書簡集 I』
- 12) 島田、前掲書、56-58頁。
- 13) From Inazo Nitobe to Tano Jodai, Nov. 10, 1925, (成瀬記念館所蔵)、島田法子「上代タノと女子教育への道」、島田法子、中寫邦、杉森長子編著『女子高等教育・平和運動のパイオニア 上代タノ』（ドメス出版、2010年）、59頁。
- 14) 上代たの「ダブリンに於ける婦人国際平和自由連盟大会に出席の報告：5月7日婦人平和協会総会に於て」『家庭週報』第891号（昭和2年6月3日）、6-7頁。
- 15) From Inazo Nitobe to Tano Jodai, April 23, 1926, (成瀬記念館所蔵)。杉森長子「上代タノと平和運動」、島田法子、中寫邦、杉森長子編著『女子高等教育・平和運動のパイオニア 上代タノ』（ドメス出版、2010年）、201頁。
- 16) 『家庭週報』第891号、6頁。
- 17) 同上。
- 18) From Inazo Nitobe to Tano Jodai, April 23, 1926, (成瀬記念館所蔵)、島田法子「上代タノと女子教育への道」、59頁に引用。
- 19) 日本女子大学英文科内上代たの文集編集委員会編『女性教育者の先達 上代たの文集』、1984年、120頁。
- 20) 筆者英訳。オリジナルは、『成瀬記念館』No. 34（成瀬仁蔵没後100年記念号）2019年、76頁に掲載。

20世紀初頭の田中孝子の足跡 —シカゴ大学の社会学、成瀬仁蔵、渋沢栄一との関連から—

Takako Tanaka in the Early Twentieth Century:
The Influence of Sociology at The University of Chicago, Naruse, and Shibusawa

高梨 博子
TAKANASHI Hiroko

1. はじめに

本稿では、草創期の日本女子大学に在籍した田中孝子（明治19（1886）年～昭和41（1966）年）について、特に明治42（1909）年の渡米から大正8（1919）年に帰国するまでの期間においてシカゴ大学で集大成した彼女の学績とともに、成瀬仁蔵や渋沢栄一との関わりに光を当てる。田中孝子については、『日本女子大学学園事典』に項目があるものの、その存在はほとんど知られていない。資料をもとに孝子の足跡を辿ってみたところ、孝子が当時最先端の学問の一つとして注目されていたシカゴ大学の社会学を学び、その根底にある「プラグマティズム」の思想を吸収していたことがわかった。「シカゴ学派の共通の知的風土」とされるプラグマティズム（中野 2003、p. 34）は、成瀬や渋沢の道德教育を基盤とする人格形成および社会観と共鳴するものである。また、プラグマティズムを教育哲学に導入したジョン・デューイ（John Dewey）、成瀬、渋沢の三者間において、さらには、彼らと孝子との間における交流も確認された。

2. プラグマティズムとは

孝子について考察する際に不可欠であるプラグマティズムとは、アメリカの「フロンティア精神」と清教徒の「プロテスタンティズムの慈愛の精神」の風土に芽生えた哲学である。プラグマティズムの哲学の創生に中心的な役割を果たした人物は、哲学者・数学者・論理学者のチャールズ・サンダース・パース（Charles Sanders Peirce）である。パースは、19世紀後半にハーバード大学の哲学研究グループ「形而上学クラブ」のメンバーだった。ダーウィンの進化論が発表されて10年余りであった当時、パースはほかのメンバーたちと共に、宗教と科学との両立について活発に議論したが、彼らは「宗教は宗教、科学は科学、としておのおのの領分をはっきりわけ、日常生活を可能にするさまざまな信念は、科学によってあきらかにされる真理にもとづくべきである」と考え、さらに、「実験とか実践、つまりひろい意味での行動を人生の中心におき、真理も信念も習慣も、すべて、行動をとおして形成され、修正され、破棄される」として、この思想を「プラグマティズム」と命名した（山田 1966、pp. 25-27）。しかし、パースの哲学は「論理主義の哲学」の域にとどまるものであり、同じ形而上学クラブのメンバーでプラグマティズムの名を世に知らしめたウィリアム・ジェームズ（William James）と同様に、社会問題に直接向き合うことはなかった。それに対して、のちにジョン・デューイ（John Dewey）は、プラグマティズムの流れを汲む哲学者として、社会的関心事一とりわけ、社会における教育と民主主義の問題一に取り組み、プラグマティズムを実践的な哲学に発展させたのである（山田 1966）。デューイが実践的哲学を展開した場所が、彼がシカゴ大学で教授をしていた1896年にシカゴ大学附属小学校として設置した「実験学校」である。こう

してシカゴ大学（1892年創立）を拠点に発展したアメリカ社会学は、「シカゴ学派社会学」と呼ばれている。シカゴ大学は、建学の当初から、当時ヨーロッパにおいても新しい学問だった「社会学」の研究機関として社会学科を備え、アメリカ社会学を誕生させたのである。それは、アメリカ社会が大きく変動した19世紀後半から20世紀前半の時期と重なり、シカゴ大学では、インタビューや参与観察などの質的調査を中心とした様々な調査方法を用いて、社会問題について実践的な研究が行われていた（酒井 2017）。

3. 草創期の日本女子大学とシカゴ大学

孝子は、20世紀初頭の明治末期から大正初期にかけて、プラグマティズムが発展していたアメリカの地で学問を修めた。日本女子大学校在学中に渡米し、スタンフォード大学を経てシカゴ大学大学院で学び、大正7（1918）年、同大学院で社会学の修士の学位（MA：Master of Arts）を取得している。草創期の日本女子大学の卒業生で留学した者の中には、井上秀、丹下うめ、大橋広、原口鶴子、上代たの、高良とみなどがいるが、このうち井上秀が、孝子よりも前に、明治42（1909）年から翌年にかけてシカゴ大学で社会学・経済学を学んでいる。大橋広もシカゴ大学大学院に留学し、植物学でPh.Dの学位を取得しているが、それは日本女子大学校の助教授になった後の大正11（1922）年から大正15（1926）年にかけてであり、孝子の帰国後のことであった。

4. 孝子の足跡

4.1 出生から渡米まで

孝子は、明治19（1886）年に千葉県野田町上花輪（現在の野田市上花輪）に、父高梨孝右衛門と母雪子との間に生まれた。雪子は渋沢栄一夫人兼子の妹であるため、渋沢栄一は孝子の伯父にあたり、このことが孝子の渡米の機会を切り拓くことになる。明治41（1908）年4月、孝子は日本女子大学校英語予科2年次に入学するが、この年の英語予科の科目表には、当時の「英文学部」の英語・英文学担当のフィリップス女史による英語会話や、成瀬による「実践倫理」（現在の「教養特別講義」の前身）があり、孝子もこれらの授業を履修した可能性が高い（成瀬記念館所蔵の資料より）。

英語予科に1年間在籍したのち、明治42（1909）年4月、孝子は日本女子大学校英文学部に入学する。日本女子大学校の創立が明治34（1901）年なので、孝子は9回生ということになる。ところが、入学して間もない8月に、孝子は渋沢夫人である伯母の兼子に付き添う形で、渋沢栄一を団長とする経済使節団に随行し渡米する機会を得る。使節団はその年の12月に帰国するが、孝子は学業を続けるために単身アメリカに残る決断をする。このことから、翌年明治43年（1910）年2月、アメリカに滞在したまま、孝子は日本女子大学校英文学部を退学することとなる。

ここで、孝子が随行した経済使節団の目的や出港時の様子について、渋沢栄一に関する資料から見てみたい。明治42（1909）年、当時69歳だった渋沢は、実業家とその関係者の合計53名から成る使節団の団長として渡米した。この渡米は、渋沢にとって7年ぶり、2度目のことであった。渋沢は幕末の慶応3（1867）年、27歳の時に、将軍徳川慶喜の弟徳川昭武に随行してパリ万博に赴いて以来、海外へ行くことはなかったが、還暦を迎えたのち、4回も渡米している（『渋沢栄一伝記資料』）。1度目は明治35（1902）年の5月から10月までの期間であり、兼子夫人同伴でアメリカとヨーロッパを視察に訪れている。この欧米視察は、公には日本の商工業を欧米諸国のレベルに引き上げるための実地調査を目的とするものであったが、渋沢本人は「特別な目的はない」と捉えて、むしろ、信頼にもとづく人的ネットワークの構築に専心した（鹿島 2013a）。晩年の渋沢は、実業

界よりも慈善事業、福祉、教育などの方面に活動の比重を移していったが、孝子が同伴した明治42（1909）年の2度目のアメリカ訪問も、日米の親交を深めることを主眼としていた。この時はとりわけ、アメリカにおける日本人移民の排斥が問題となっていた社会状況を踏まえ、日米関係を改善するための民間外交の役目を担っていたのである（鹿島 2013b）。

このような背景のもと、渋沢が率いる使節団がアメリカへ向けて出発する時の様子が、『渋沢栄一伝記資料』に記録されている。抜粋すると長くなるため、以下、必要箇所を引用しながら解釈していく。

渋沢栄一の「一番番頭」と呼ばれる^{やそじましかのり}八十島親徳の日録（『渋沢栄一伝記資料』第32巻、pp. 59-60）によれば、「渋沢男爵」（渋沢栄一は、明治33（1900）年に男爵の称号を与えられている）を団長とする「渡米実業団」は、8月19日、「新橋」駅から電車で横浜港へ向かった。新橋の「停車場の構内」は、「その中をあちこちと徘徊すれば卒倒でもしないかと思われるほど」、見送りに来た大勢の人たちの熱気であふれていた。発車前、渋沢夫妻は駅構内の「上の階の休憩室」で「見送りに来た人たちに会見していた」が、やがて出発時刻となり、「10時32分の臨時列車」は横浜港へ向けて出発した。横浜港に着いてからは、一行が乗船する「ミネソタ号」は「棧橋に停泊しないため」、連絡用の「小さな蒸気船（ランチ）」で棧橋からミネソタ号まで移動しなければならなかった。渋沢家の人々は「東洋汽船のランチ」を利用したが、ほかにも連絡用の小さな蒸気船がいくつかあった。「見送りの人たちのほとんどは波止場にとどまった」が、「本船のミネソタ号」まで見送りに行く人も大勢いて、「甲板の上は雑踏を極めていた」。八十島も「病体」に鞭打って「本船まで見送りに行き」、「親しく送別の挨拶」をした様子が記録されている。渋沢夫妻の部屋は、「船の最上階の最先端部」にあり、孝子の部屋も「同じ最上階の互いに近い」所にあったことが記されている。八十島が「船を降りようとする時」、真夏の蒸し暑さからも、「甲板の上は非常に大混雑で汗びっしょり」となり、「人にもまれ押され」ながら、やっとのことでミネソタ号を「無事に下船」して波止場に帰る連絡船に乗り込んだ。しばらくの間は海上で「蒸気船（ランチ）」に乗ったまま本船の付近を名残惜しく徘徊していたが、いよいよ本船のミネソタ号が「3時に出帆」する際には、船が「防波堤の外に行くまで見送った」。「ほかの見送りの（蒸気）船」の中には、演奏する「楽隊」を乗せたり、晴れやかな「彩旗」を掲げたりしているものもあり、たいそう賑やかであった。

この八十島の日記には、渋沢栄一の率いる使節団が、日米関係改善への国民の期待を背負い、華々しく出港する様子が描かれている。それは孝子にとっても、人生の新たな局面への船出であった。

当時23歳の孝子は、このような晴れ舞台に遭遇し、これから踏み出していく未知の世界への希望に胸を膨らませていたことだろう。成瀬は日本女子大学を創立する前にアメリカに渡り、彼の地の思想・社会・教育に大きな影響を受けたが、その成瀬が創立した日本女子大学の学生である孝子にとっても、使節団との渡米は、アメリカを自分の目で直接見ることができるチャンスだったのである。渋沢と成瀬は、アメリカにおけるキリスト教の「プロテスタンティズム」に、人の道として日本の「道徳や倫理」に通じるものがあることを見出していた。二人はまた、アメリカ社会学の「プラグマティズム」に、彼らが重んじる「実践や実学」と共通するものがあることを認識していた。渋沢は、成瀬の日本女子大学の建学の精神に深く共鳴し、支えとなったことで知られているが、孝子もまた、両者の影響を受けて、アメリカへの期待を募らせていたのである。

4.2 アメリカでの留学生活

4.2.1 スタンフォード大学

経済使節団が帰国したのちもアメリカに留まった孝子は、サンフランシスコ近郊のパロ・アルトハイスクールを経て、大正元（1912）年、スタンフォード大学に入学する。孝子は、大正7（1918）年、シカゴ大学大学院在学中に成瀬へ見舞いの手紙を送っているが（成瀬記念館所蔵の資料より）、その手紙には、孝子がスタンフォード大学在学中に成瀬と会ったことが書かれている。成瀬は、大正元（1912）年8月から翌年3月にかけて欧米を視察した際に、2度目となるアメリカを訪れている。孝子の手紙の冒頭には、「桑港にて御東行を送りまらせてよりはや数年」とある（「桑港」とは「サンフランシスコ港」のことである）ことから、成瀬が横浜港からサンフランシスコ港に入港し、スタンフォード大学を訪問してから次の目的地へ出発する際に、孝子が成瀬をサンフランシスコ港から見送ったことがわかる。

4.2.2 シカゴ大学大学院

大正4（1915）年にスタンフォード大学文学部を卒業したのち、孝子はシカゴ大学大学院に進学して社会学を学び、大正7（1918）年、同大学院社会学科修士課程を修了する。修士論文のタイトルは、“The Status of Women under Modern Conditions of Japanese Life”であった（シカゴ大学所蔵の資料より）。当時、プラグマティズムの社会哲学が目覚ましい発展を遂げていたシカゴ大学社会学科において、近代日本社会における女性の地位について研究したことがわかる。

ここで、先に紹介した孝子の成瀬宛ての書簡から、孝子がシカゴ大学の社会学をどのようなものとして捉えていたのか、そして、それをどのように活かしていきたいと考えていたのか見てみたい。繰り返しになるが、この手紙は大正7（1918）年1月12日付の成瀬への見舞いの手紙である（成瀬記念館所蔵の資料より）。成瀬は、大正6（1917）年12月から大正7（1918）年2月まで、腸チフスのために療養していた。手紙が送られたのは、成瀬が大正8（1919）年に亡くなるちょうど1年ほど前のことである。手紙の中で、孝子は見舞いの言葉や近況報告とともに、社会学の重要性について熱を込めて語っている。紙幅の制約上、全文を紹介することはできないが、孝子の考えを理解する上で有用な箇所について、順に抜粋しながら解説することとする。

（1）すでに御承知の御事とは存候へども私事は先年須代大学を卒業致し昨秋より市俄古大に参り市俄古大学大学院に席を置候須代大学にては英文学の側ら経済学社会学等を研究致し居候ひしが当大学へ参りてよりは社会学を専攻致し居候当校の社会学は米国一と呼ばれ居り

ここでは、孝子の近況が報告されている。「須代大学」（スタンフォード大学）では、英文学のほか、経済学や社会学を学んだことや、スタンフォード大学を卒業した後、前年（大正6（1917）年）の秋から「市俄古大学」（シカゴ大学）大学院で社会学を専攻していることが書かれている。スタンフォード大学在学中にはすでに、社会や経済といった世の中の仕組みへの関心が大きくなっていたことが窺える。第2節で触れたように、シカゴ大学は「シカゴ学派の社会学」と呼ばれるアメリカ社会学発祥の地であり、孝子は幸いにも、当時興隆していたアメリカ社会学の最先端を本場で学ぶ機会に恵まれたのである。

（2）斯学にて米国にての先鞭者たり且つオソリテーたるスモール博士並びに社会心理の大家

たるトマス博士等より親しく教を受け候事にて人一倍興味も深く存じ候

シカゴ大学社会学科は、1892（明治25）年にアメリカで初めて社会学の大学院教育を始めた社会学の「家元」であり、その初代学科長がアルビオン・ウッドベリ・スモール（Albion Woodbury Small）である。孝子がこの手紙を書いた1918年は設立から26年経っていたが、初代の「先鞭者たり且つオソリテー」であるスモール博士はまだ教鞭をとっていた。孝子はスモールや、「社会心理の大家たるトマス博士」ことウィリアム・アイザック・トマス（William Isaac Thomas）の教を直接受けていたのである。スモールもトマスも、シカゴ学派の社会学の「第一世代」の「ビッグ・フォー」に数えられる人物である（中野 2003）。

（3）只今の予定にては当年の夏にて学理の研究を終へそれより市俄古市の市営事業救済事業とを視察かつ実地研究致し更に一ヶ月程を紐育市に費し同市の社会事業研究の傍コロンビヤ大学の大家ギデング博士の講義をも聴き当年末又は明年早く帰朝の途に着きたくと存じ居候

今後の予定について、夏に修士課程を修了したあとは、シカゴ社会学を応用して「シカゴ市の市営事業や救済事業を視察かつ実地研究」し、そのあと紐育市（ニューヨーク市）に1か月ほど滞在して現地の「社会事業研究」を行いながら、コロンビア大学の「ギデング博士」（アメリカ社会学において、シカゴ学派に対してコロンビア学派の創設者であるフランクリン・ヘンリー・ギディングス（Franklin Henry Giddings）を指していると思われる）の講義を聞いたあと、年末か年明けに帰国すると伝えている。

（4）社会学はヒューマンアソシエーションの根本的要素並に人類の目的を探り現在の社会制度を保存しつつ国民改善の策を研究致候人類の発展を計りつつこれあり候

孝子は社会学について、人と人との連携において「根本的な要素」であり、また、「人類の目的を探り現在の社会制度を保存しつつ、国民改善の方策を研究し、ひいては人類の発展を図る」学問であるとの見解を示している。すなわち、社会学は、人が生きていく基盤となる共同体の向上を図る上で重要な学問であるとの見方である。

（5）近年来社会学部を建設せる大学校は数挙に暇なき斗りにて尚それ等社会部より起れる大学附属救済所なども大学生の活動の一として目ざましき斗りに候（中略）静に他文明国の経験を考へ且つ我国か将来を思ひ候に大日本婦人界の明星とし又最高の学府として立てる我女子大学に社会学の一部を加入致すの機又遠からずと存じ候

近年アメリカにおける社会学の台頭は目覚ましく、社会学部を設置する大学は枚挙に暇がないことのほか、社会学部から興る「大学附属の救済所」などが大学生の活動の一環として機能していることが述べられている。特にシカゴは、ジェーン・アダムス（Jane Addams）のセツルメント活動などが盛んであった町であり、先述の孝子の「市営事業、救済事業、社会事業」の実地研究も、そのような市民の生活改善のための活動の一端である。これは、「大学教育は、社会貢献を果たす義務を負っている」とする成瀬の考えや、渋沢の「論語と算盤」、すなわち、「経済や産業といった

活動は、民をあまねく豊かにするものでなければならない」との考えにも通じるものである。孝子は、日本における女子高等教育の最高機関であり、「大日本婦人界の明星」と評する日本女子大学でも、近い将来に社会学部を創設するのが望ましいとの考えを表明している。

(6) (前略) 人々が只己の責務を全て子弟を単に教育し学問を授けるに当らずその生徒が社会に立つ場合自国の益のみならず社会の発展を望むべき精神を経事より喜び (中略) 国民の思想は諸方面を通じて利己主義に流れず高き理想の許に成立つものとなるべきは論を待たざり候然してそれぞ文明の真の発輝、教育の真の目的たるべくと存じ候

教育の目的は、自己の利益を追求するのではなく、「社会の発展を望むべき精神」を培い、社会に貢献する人間を育成することであると断言している。これには、成瀬やデューイの「教育と社会」に対する考えが投影され、凝縮されている。デューイは教育について、「どこまでも民主主義の実現、民主的社会的成長を目的とする社会の自己機能」であると捉えている (山田 1966, p. 146)。また、「利己主義に流れない」という考えは、デューイの「教育とは道徳をバックボーンとして社会の成長をはかることであり、道徳とは教育を前面におしたてて社会の成長をたすけるものである」 (山田 1966, p. 148) との見方や、渋沢の「道徳を基盤にして成り立つ経済活動」との考え方も共鳴するものである。さらに、道徳を中心に据えた社会活動、および、その社会活動を担う民の教育というものは、女性であっても、「婦人として」よりも、先ず第一に「人として」教育することを唱えた成瀬の教育理念の神髄でもあった。このように、アメリカのプラグマティズムの社会学は、実際の社会的関心事を取り扱い、社会の改善のために経験的研究を行うものであったが、それがデューイ、成瀬、渋沢においては、共通して、彼らの道徳・教育・社会活動を統合させる理念と実践に合致していた。それはまた、渋沢の姪であり、成瀬の日本女子大学校建学の理念を礎にシカゴ大学で学んだ孝子にも、しっかりと受け継がれたのである。なお、この孝子の書簡は、成瀬が一日も早く回復することを祈る言葉で締めくくられている。

孝子の手紙に対して、成瀬は大正 7 (1918) 年 5 月 18 日付で返信している (『成瀬仁蔵関係書簡集 1』)。そこには、日本女子大学に就任する場合、当面の間は英文学や社会学ではなく、英語の語学の科目を担当してもらいたいということのほか、「御帰朝の上親しく御意見も承り又御相談も致して共々に母校教育の内容の充実と発展を図る事ニ努力致度希望ニ有之候」、すなわち、帰国した際は日本女子大学の発展のために話し合いたいと書かれている。成瀬の文面は、病床の身であるにも拘わらず、最期まで日本女子大学の発展のために力を尽くす覚悟と、共通の目的のためには一学生に対しても真摯に向き合う姿勢と温かさで溢れている。

4.3 アメリカから帰国して

4.3.1 帰国直後の成瀬・渋沢・デューイとの交わり

大正 8 (1919) 年、成瀬が他界する直前の 2 月には、成瀬、渋沢、デューイ、孝子の 4 人を結びつける一連の出来事があった。それは、デューイの訪日と成瀬の見舞い、そして、デューイの歌舞伎鑑賞への招待である。

デューイがシカゴ大学に移る前にミシガン大学で教授をしていた時、小野英二郎という日本人留学生在がミシガン大学で経済学を学んでいたが、この小野を中心として、デューイを東京帝国大学の特別講義に招聘する計画が持ち上がり、渋沢も協力して、この計画が実現する運びとなった。8 回

に渡る講義シリーズは、実際は、開催校の東京帝国大学よりも、シカゴ大学でデューイから哲学を学んだ田中王堂（同年夏に孝子と結婚する）が始めた「早稲田学派」によって熱心に受け入れられたと言われている（山田 1966）。

デューイは夫人と共に来日し、2月9日から4月28日まで日本に滞在した後、中国も訪問したが（河村 2003）、この日中訪問の期間にアメリカにいる子供たちに宛てて書かれた手紙が、のちに長女エブリンによって編纂、出版されている（*Letters from China and Japan*）。そのうち、2月13日と22日の間の、“Tokyo, February.”とだけ記されて日付のない手紙（pp. 20-25）には、日本女子大学に成瀬を訪問したことと、孝子に会ったことが書かれている。（下記の手紙の抜粋中の太字は筆者による。）

(7) Yesterday we visited the Women's University which is within walking distance of this house. The President, Mr. Naruse, is dying of cancer. He is in bed but is able to talk quite naturally. He has made a farewell address to his students, has said good-bye to his faculty in a speech, and has named the dean, who is acting in his place now, as his successor.

後に示す抜粋（9）の5行目に、“your father”との表現があることから、この手紙を書いたのはデューイ夫人であることが推測される。（7）の“the Women's University”は日本女子大学を指す。デューイ夫妻は新渡戸稲造の家に滞在していたため（山田 1966），“this house”とは新渡戸の家のことであろう。そこから歩いて日本女子大学を訪れ、「癌で余命いくばくもない」（“dying of cancer”）成瀬校長（“The President, Mr. Naruse”）を見舞ったと書かれている。成瀬は「病床に臥していたが極めて普通に話すことができる状態にあった」（“in bed but is able to talk quite naturally”）と描写されている。また、手紙にある“a farewell address”とは、成瀬が大正8（1919）年1月29日に成瀬講堂で行った告別講演のことである。

なお、成瀬の見舞いについては、成瀬の告別講演の日に孝子が成瀬を見舞ったことが、「日誌 成瀬家」に記録されている（大門 2019）。このことから、孝子は1月末までには帰朝していたことがわかる。同日誌の見舞い客の一覧によれば、渋沢については、1月22日、25日、28日、2月12日、13日の計5回、ジョン・デューイ夫妻については、2月17日に見舞った記録が残されているので、“yesterday”で始まるこの手紙は、2月17日の翌日、すなわち2月18日に書かれたことになる。それは、成瀬の告別講演から19日後のことであった。大門によれば、「訪日中のジョン・デューイも夫婦で見舞いに訪れた。（成瀬は）デューイとは1912（大正元）年8月から翌年3月にかけての欧米外遊の際に交流を深めていた」（大門 2019, p. 36）とある。この成瀬の訪米期間は、先述の孝子がサンフランシスコ港で成瀬を見送った時と一致する。アメリカで交流を深めた成瀬とデューイは、辛くも成瀬が亡くなる直前に、日本で再会を果たすことができたのだ。病床のため面会時間は短かったと思われるが、教育思想を共有し、尊敬し合っていた二人が直接心を通わせるのに、多くの言葉は要らなかつたらう。

この手紙の続きには、デューイは訪日中に、孝子とも交流があったことが記されている。手紙には、日本女子大学を訪問した翌日、つまり手紙が書かれた日の午後に、名前は“Miss T-”とイニシャルしか記されていないが、孝子と思われる人物が訪ねてきたことが書かれている。

(8) In the afternoon we had callers again, among them two women. Women are rare. (中略)

The second, Miss T -, has just returned from seven years in our country. I heard much of her at Stanford and brought letters to her.

孝子のアメリカ滞在期間については、デューイ夫人の手紙には7年と書かれているのに対し、実際は10年余りなので、一見齟齬があるように見える。しかし、渋沢の経済使節団に同行した期間やハイスクール時代を差し引いて、スタンフォード大学に入学した時から数えれば、孝子の大学および大学院での留学期間は7年であるので一致する。実際、手紙には「彼女（孝子）についてはスタンフォードでよく聞いており、スタンフォードから彼女宛ての手紙をたくさん預かってきた」（“I heard much of her at Stanford and brought letters to her”）とあるため、アメリカでの滞在年数は、スタンフォード大学時代から数えられていると考えるのが妥当である。さらに、“Miss T-”は「最近帰国したばかりである」（“has just returned”）という事実も孝子のケースと一致する。

手紙の続きを読み進めると、孝子と日本女子大学や社会学について書かれており、前掲の成瀬宛の孝子の手紙と内容が合致する。その内容とは、日本女子大学に就任することになったが、大学はまだ社会学を教える環境には整備されていないため（“the authorities are afraid the time has not yet come for her to start on sociology”）、英語を担当することから始め、いずれは社会学に移行していきたい考えである（“she will begin with the teaching of English and work into sociology by the process of ingratiating it into her classes”）、というものである。

(9) She has a chair in the Women's University. It is a chair of Sociology, but she says the authorities are afraid the time has not yet come for her to start on sociology, so she will begin with the teaching of English and work into sociology by the process of ingratiating it into her classes. She is an interesting personality. She was sent to me to say I might be lonely because your father was away so she was to take me, with any other friends I wanted, to the theater. As we had already been to the Imperial Theater and sat in the Baron's box it was finally arranged to go to the Kabuki, where we sit on the floor and see real old Japanese acting, which I am very anxious to do. I understand it begins at 11 in the morning and lasts until ten at night.

(9) の抜粋によれば、デューイ夫妻には、孝子はなかなか面白い人物として映ったようである（“She is an interesting personality”）。また、孝子の訪問理由としては、デューイ（ここでデューイ夫人は、子供たちに向けて“your father”と表現している）が講義などで忙しいことから、夫人をおもてなしするために送り込まれたのだと書かれている。これは恐らく、渋沢の取り計らいであろう。デューイ夫妻はすでに帝国劇場（“the Imperial Theater”）で観劇をしており、次は歌舞伎鑑賞に招待され（“it was finally arranged to go to the Kabuki”）、座敷から本物の古い日本の演劇を観ること（“we sit on the floor and see real old Japanese acting”）をとっても楽しみにしている（“which I am very anxious to do”）との内容で、この日の手紙は終えられている。なお、歌舞伎は午前11時に始まり、夜10時まで続くと言われているが、このあとに示す渋沢関連の資料には、実際は午後1時開始だったと記されている。

デューイ夫妻が歌舞伎に招待されたことは、『渋沢栄一伝記資料』の「資料」（第39巻、p. 175）にも記録されている。それによれば、デューイ夫人の手紙が書かれた6日前にあたる2月12日の午

後、デューイが、今回の訪日を計画した中心人物である小野英二郎と共に渋沢を訪問していること、そして、渋沢が2月21日の午後1時開始の歌舞伎（歌舞伎座にて）にデューイ夫妻を招待していることが記されている。なお、2月21日は、デューイが成瀬を見舞った4日後にあたる。

(10) 集会日時通知表 大正八年（渋沢子爵家所蔵）

二月十二日 水 午後二時 デューキ教授・小野氏来訪（兜町）

○中略。

二月廿一日 金 午後一時 デューキ博士・夫人ヲ招待（歌舞伎座）

渋沢がデューイ夫妻を歌舞伎に招待したことは、『渋沢栄一伝記資料』の「綱文」（第39巻、pp. 175-176）にも書かれている。

(11) 大正8年2月21日（1919年）

是日栄一、日米交換教授トシテ来日セルアメリカ合衆国コロンビア大学教授ジョン・デューイ夫妻ヲ歌舞伎座ニ招待ス。

ところが当日、渋沢は病気のために欠席し、渋沢不在のまま、孝子が山本梅子氏と共にデューイ夫妻をもてなしたことが『渋沢栄一伝記資料』の「竜門雑誌」（第39巻、p. 176）に記録されている。

4.3.2 その後の孝子

ここまで提示してきた資料から、孝子がシカゴ大学大学院で社会学の修士課程を修めてから、大正8（1919）年1月末までには帰国し、成瀬の告別講演の日に成瀬を見舞い、2月には来日したデューイ夫妻を歌舞伎座にお連れしたことがわかった。また、デューイの訪日や成瀬の見舞いに際して、渋沢、成瀬、デューイ、孝子の間に交流があったことが明らかとなった。

その後、孝子は4月に日本女子大学校英文科教授に就任し、8月には、アメリカのデューイのもとで学んだ早稲田大学の哲学者田中王堂（本名 田中喜一）と結婚する。王堂との結婚については、『読売新聞』（1919a、1919b）に紹介されている。同年秋には、政府の顧問として第1回国際労働会議 ILO（アメリカ、ワシントン開催）に出席し、翌年大正9（1920）年には、新婦人協会の評議員に就任する。それからの孝子は、しばらくは家事に従事していたが、やがて社会でいろいろな役職に就いて活動するようになる。昭和7（1932）年に児童擁護協会職員に就任し、昭和8（1933）年には、国策事業として設立された東京市結婚相談所の初代所長に就任する。さらに、昭和14（1939）年には、東京家庭裁判所の人事調停委員に選任され、参与・調停員を務める。また、これらの社会活動の知見を活かした評論や随筆を執筆するほか、昭和18（1943）年には『結婚相談』、昭和24（1949）年には『現代人の結婚』を、どちらも編著者として出版している。このように、帰国後の孝子は、とりわけ当時の日本社会に生きる女性に関わる問題に取り組むことによって、実践的なプラグマティズムの社会学に携わり続けた。晩年の孝子は、長女の未来と静穏に暮らし、昭和41（1966）年12月17日、80歳の生涯を終える。

5. 孝子の生き方と思想

孝子は、明治の終わりから大正の始めにかけて、10年余りの期間に渡り、単身でアメリカの地に

学んだ。きっかけは、伯父渋沢栄一の経済使節団への随行だったが、その後もアメリカに残って勉強したいという思いに孝子を駆り立てたものは何だったのだろうか。20世紀初頭のアメリカは、孝子の目にどのように映ったのだろうか。

孝子が強く印象づけられたアメリカの姿の一つとして、アメリカの女性が生き生きと活躍できる社会があったと思われる。このことを裏付けるものとして、1919年5月9日の『婦女新聞』の対談記事に次の一節がある。

(12) 女史は彼地の婦人方の献身的な尊い婦人らしい活動の数々をお話しくださいました。社会的にも、家庭的にも。

アメリカの女性が、家庭内だけでなく、社会においても人の役に立つ存在として活動していること、そして、それが実践できるアメリカ社会が、孝子にとって衝撃であったと同時に、大いに魅力的に映ったことだろう。

孝子には、アメリカに渡る前から、このように「女性が生き生きと社会で活動すること」に共鳴する素養が形成されていたものと考えられる。すなわち、経済の成長と社会の人々の生活を豊かにすることを共に目指す実学の人、渋沢栄一を身近な存在として育ち、成瀬の女子高等教育の理念を吸収していた孝子にとって、アメリカで見た光景は、彼女が思い描く理想の社会に近いものだったのだろう。また、孝子が学んだシカゴ大学を擁するシカゴという町は、当時急速に工業化が進み、移民、貧困、労働などのさまざまな社会問題を抱えていたが、ハル・ハウスの設立者であるジェーン・アダムス (Jane Addams) など、女性が人々の救済に尽力する姿を目の当たりにできる環境にあった。シカゴ大学とその周辺においては、アメリカの風土に根付くプロテスタンティズムの精神と、哲学や理念を実践する「プラグマティズム」が融合し、学問と社会生活が循環して機能する稀有な環境が形成されていたのである。そのような環境下で孝子が学んだ社会学は、彼女の人生に決定的な影響を与えることとなった。帰国後の孝子は、結婚相談所や家庭裁判所などの社会活動を通して、女性の自立とより良い社会の実現のために力を注ぎ、生涯「プラグマティスト」としての生き方を貫いた女性であった。

6. さいごに

本稿では、孝子がアメリカに渡ってから帰国するまでの期間に焦点を当て、留学先のシカゴ大学で学んだ社会学とプラグマティズムについて概観し、成瀬や渋沢、そしてデューイとの接点を明らかにした。

同時代を生きた成瀬、渋沢、デューイは、国境や宗教を越えて、「プラグマティズム」の実践的哲学と、モラルや人格を第一とする儒教的精神、および、それに通ずる「プロテスタンティズム」の慈愛の精神を共有していた。この点について、片桐は、成瀬が執筆した「女子教育之方針」についての論考の中で、次のように述べている。すなわち、アメリカで学校を視察した成瀬は、アメリカの学校が「『道徳心』と『慈善心』によって維持されていることに、強い印象を受けたであろう。女子大学設立のための、精力的な寄付金集めのエネルギーは、こうしたアメリカの精神に学んだ結果でもあった」(片桐 2017, p. 67)。鹿島 (2013b, p. 238) もまた、成瀬が「アメリカのプロテスタント的倫理観による女子教育の実態」に触れて大いに感化されたことについて述べている。成瀬とデューイとの間に交流があったことがこれまでも指摘されているが (河村 2003、大門 2019)、

成瀬がすでに展開していた社会・教育思想がアメリカのプラグマティズムと重なることに、デューイが驚嘆するとともに感服していることも興味深い（片桐 2017）。

近年、成瀬は、女性が学べる日本初の総合大学を創立した女子教育者としてだけでなく、実践を伴った社会学者としても認識され始めているが（河村 2003）、近代日本の資本主義経済の発展や文化・教育事業の充実などの多方面において、時代を塗り替えるような画期的な貢献をした洪沢もまた、思想を行動によって体現したプラグマティストと言えるだろう。

今回、孝子に関する資料を読み解いてみて、成瀬、洪沢、デューイとの間に、思想においても交流においても繋がりがみられること、そして孝子もまた、これらの人物たちとの交流から思想や生き方に影響を受けていたことが確認された。プラグマティズムの思想は、デューイの社会哲学や経験的教育理論の根幹を成し、成瀬の女子教育理論や、洪沢の実業家あるいは慈善事業家や民間外交家としての生き方にも共鳴し、それは孝子の人生においても活かされたのである。

謝辞

本研究の資料収集にあたっては、成瀬記念館の大門泰子様と日本女子大学図書館の矢吹さより様にご協力頂いたことに、心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

市山盛雄『野田の歴史』（崙書房、1975年）。

大門泰子「成瀬の病床を訪れた人々―「日誌」より」日本女子大学『成瀬記念館』第34号、2019年7月。

鹿島茂『洪沢栄一 上 算盤篇』（文藝春秋、2013年 a）。

鹿島茂『洪沢栄一 下 論語篇』（文藝春秋、2013年 b）。

片桐芳雄「女子教育之方針」「種子」（資料紹介）日本女子大学『成瀬記念館』第32号、2017年7月。

唐沢富美子編『大杉くま追想集やまゆり』（ソオル社、1970年）。

河村望『知られざる社会学者 成瀬仁蔵』（人間の科学新社、2003年）。

酒井千絵「観察する女性／観察される女性―シカゴ学派社会学におけるジェンダー」関西大学『社会学部紀要』第48巻第2号、2017年3月。

洪沢青淵記念財団竜門社編（土屋喬雄編纂主任）『洪沢栄一伝記資料』（デジタル版）（洪沢栄一伝記資料刊行会、2016年）、本編全58巻、別巻全10巻。<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main>（参照 2021-06-06）。

杉崎友美編『成瀬仁蔵関係書簡集1』（日本女子大学成瀬記念館、2019年）。

田中孝子編『結婚相談』（日本放送出版協会、1943年）。

田中孝子編『現代人の結婚』（関書院、1949年）。

中野正大「シカゴ学派社会学の伝統」中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』（世界思想社、2003年）。

『日本女子大学学園事典』（日本女子大学、2001年）。

『婦女新聞』第990号、1919年5月9日。

山田英世『J. デューイ』人と思想23（清水書院、1966年）。

「よみうり婦人附録」『読売新聞』1919年7月22日 a。

「よみうり婦人附録」『読売新聞』1919年8月25日 b。

John Dewey and Alice Chipman Dewey, ed. Evelyn Dewey, *Letters from China and Japan* (E. P. Dutton & Company, 1920).

1900年創立当時の日本女子大学校家政学について —シカゴ大学家政学と比較して—

Founding Principles of Home Economics at Japan Women's University: A Comparison with The University of Chicago

増子 富美
MASUKO Fumi

1. はじめに

日本女子大学の草創期における女性の自立と平和について、これまで注目されることが少なかったシカゴに注目をした。家政学の分野では、明治政府文部省は、1896（明治29）年、東京女子高等師範学校出身の安井哲（東京女子大学創立に関わり、2代学長）をイギリスに、1902（明治35）年、同校出身の大江スミ（宮川寿美子）（東京家政学院大学創立者）もイギリスに留学させた。日本女子大学校では、卒業生をイギリスではなく、アメリカへ留学させている。特に、第4代日本女子大学校校長 井上秀、第5代日本女子大学学長 大橋広はシカゴ大学（井上秀の場合は、コロンビア大学に留学、夏にシカゴ大学夏期に参加）に留学していること、井上秀、大橋広、上代タノらと交流があり、日本女子大学卒業生の平和思想に大きな影響を与えた平和運動家・社会事業家として名高いジェーン・アダムスが1889年シカゴに開設したセツルメント施設ハルハウスがイリノイ大学シカゴ校のキャンパス内あり、現在、博物館として公開されていることから、2019年9月末、シカゴ大学図書館の Special Collection Research Center にて1900年～1910年頃の学生便覧、履修便覧、卒業生の成績等の文献調査を行った。

図1「図1 シカゴ大学の家政学実験室」には、シカゴ大学の1905年夏期の履修便覧に掲載されていた家政学実験室の写真¹⁾である。エプロンをして実験に臨む姿が印象的である。図2「図2 日本女子大学校の家政学部・化学実験」には、図説日本女子大学の八十年²⁾に掲載されている家政学部の化学実験の様子である。ここでは割烹着を着て、実験をしている様子が写っている。この写真が撮影された場所は1908年設立した香雪化学館であり、中心にいる男性は長井長義教授である。これらのことから、この写真が撮影されたのは、1910年頃といわれている^{註1)}。シカゴ大学と日本女子大学校のこの2枚の写真は家政学の実験の様子を表しており、ほぼ類似していることから、日本女子大学校においても実験教育を重視していたことが示唆される。シカゴ大学には、創立者成瀬仁蔵、第2代校長麻生正蔵が視察に訪れており、シカゴ大学に注目していたのではないかと考え、シカゴ大学の家政学が日本女子大学校家政学部に及ぼした影響等について考察した。

2. シカゴ大学について

シカゴ大学は、1890年バプティスト教会とジョン・D・ロックフェラーの寄付により、特に、ロックフェラーは中部にも研究を主体とした大学が必要として設立された私立大学で、イギリス式の大学とドイツ式の大学院を兼ね備えた近代的な研究大学を目指したとされ、大学で最初の建物はオックスフォード大学で使われていたゴシック建築を模した建物であった、と沿革には書かれている。1892年から講義を開始している。シカゴ大学は、設立当時より “opportunities for all departments of



図1 シカゴ大学における家政学実験室¹⁾

“Bulletin of Information : The School of Education Summer Quarter 1905”
(The University of Chicago, 1905), pp. 8

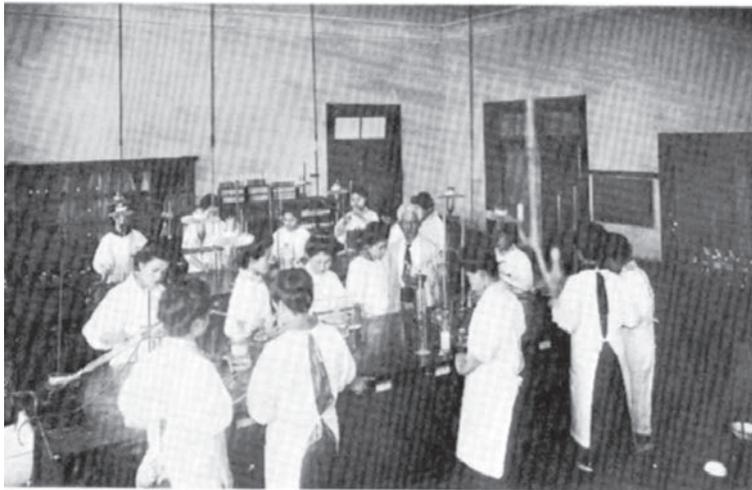


図2 日本女子大学校における家政学部・化学実験²⁾

青木生子『図説日本女子大学の八十年』(日本女子大学、1981年)、28頁

higher education to person of sexes on equal terms.”を掲げ、シカゴ大学で初めて博士の学位、Ph.D.を取得した人物は、浅田英次という日本人、1921年には、アフリカ系アメリカ人の女性が初めてPh.D.を取得するなど、男女の別なく研究教育の場であった。社会学を学問として全米ではじめて確立した大学である。日本女子大学校の創立は1901年と、シカゴ大学創立の約10年後である。教授には日本人もあり、家庭週報には渡瀬庄三郎、山内繁雄らの名前が登場している。また、1902年の履修便覧(大学院・社会・人類学専攻)の講義科目には、Japanという科目も存在していた³⁾。

麻生正蔵によると⁴⁾、1902年当時、校舎は31棟、教授数は350名、内女性は41名、大学は男女共学で、学生数^{註2)}は3,500名、内女子学生2,452名と女子学生が多い状況であった。1902年当時のシカゴ大学のST比（教員1人あたりの学生数）は麻生正蔵の報告から算出すると、10：1である。日本女子大学校の場合は、1901年開学時、入学者数510名、教授数は33名、ST比は15：1といえる。ST比から見ると、1901年日本女子大学校、1902年シカゴ大学との教育環境は比較的類似しているといえる。

3. 成瀬仁蔵、麻生正蔵、井上秀は、1900年初頭のアメリカの高等教育、特に家政学をどうとらえていたか？

創立者 成瀬仁蔵は、1890年末から1894年にかけてアメリカ・アンドーバー神学校・クラーク大学に留学するため、渡米した。サンフランシスコ到着後、シカゴを経て、ボストンに移動した。アメリカ滞在中、シカゴ大学、ハーバード大学等の他、マウントホリヨークカレッジ・スミスカレッジ・ウェルズリーカレッジ・ヴァッサーカレッジ・ラドクリフカレッジ等の女子大学も視察訪問している⁵⁾。特に、ウェルズリーカレッジからは招待を受け、1892年4月一週間滞在看学した滞在記が成瀬仁蔵著作集に収録されているが、大学の設立・位置・教授法・女子の智力等、詳細に記録され、成瀬仁蔵がウェルズリーカレッジを称賛していることが伺える⁶⁾。

麻生正蔵は、1904年から欧米各国の大学を視察し、家庭週報には第1号から麻生正蔵の近況と題して、行き先々の様子を伝えている記事が掲載されている。特に、シカゴ大学については、麻生学監から成瀬校長にあてた私信の抜粋という形で家庭週報第6、7号に詳しく紹介されている。1906年3月帰国後3月18日に開催された歓迎会の席上で講演した内容が家庭週報第55号⁷⁾、第56号⁸⁾に掲載されている。シカゴ大学では、家政学専門の女性教授に会ったこと、東部に行くほど別学であること、大学は別学であるが、大学院は共学であること、マサチューセッツ工科大学の教授が家政学を先導していることなどを紹介している。シカゴ大学附属中学を参観し、アメリカの教育は生徒に考える頭を作る一現在、注目されているアクティブ・ラーニングのようにしていることを紹介している。また、イギリスは、教育費が高額なので、中産階級以上でなければ、入ることができないこと、アメリカでは、高等教育も一般に開放されており、誰でもいつでも学ぶことのできる環境が整っていると述べている。このことは成瀬仁蔵も指摘している⁹⁾。アメリカでは女子は医者でも弁護士にもなれるが、イギリスでは今でも弁護士にはなれない。女子の職業としては、イギリスもアメリカも学校教師が多いことを紹介している¹⁰⁾。

麻生正蔵は、日本女子大学校については、下記のように言及している¹¹⁾。

「……私がかく欧米の諸學校を視察して、さて我校はと考へて見ますれば、其の教育の主義、方針に於ては決して誤つて居らぬ事を自信するに至つた。我が國では職業教育を授くる事は、西洋各國の様には急務ではないが、早晚其の必要が起るであらう。また我が校の家政科の如きは實に世界の女子教育界にはまだ類を見ぬものである。是非充分發達させ度きものであります。……」

また、家庭週報第61号・62号 英米教育視察談では、下記のように述べている。

「……我が女子大學の立場より見れば、これは家庭の物質の方面にのみ注意したものである。我が校の家政科は精神の方面を入れて居る。これが最も注意すべき事である。即ち児童に就て

も、其の教育と云ふ方面を注意して居る。物質的方面のみでは養育といふ事は考へても、教育といふ事に思ひ至らぬのである。余は經濟のみでなく、児童の教育までを含ませた方がよいと思ふ。……」¹²⁾

「教授法の大略 ……米國では學理にすぎて實際を輕ずる傾きがある。……然るに英國ではこれに反し、やや學理に輕んずる傾きがある。けれども家事科教授の原則としては、實際と理論とは必ず相伴はせなければならぬ、さもなければ、理論は空論となつて、實際は料理屋のするに異なる事なく、家事科としての価値はないのである……

わが國の女子も、衣食住の改良に務め、生存競争上に、いかに資すべきかを研究して、此大任を全うせねばならない。」¹³⁾

井上秀^{註3)}は1908年コロンビア大学に留学し、1912年シカゴ大学の夏期の講義に参加している。その井上秀が、日本女子大学校教授として、『女子大學家政講義』の中で家事を担当し、総論の中で下記のように記している¹⁴⁾。

「1. 家事科の範圍

これより此の欄において講じて参ります家事科は誠に範圍の廣い學科でありましてまづ一家の衣食住に關する事柄を始めてといたし、育児看護經濟道德社会及家庭の趣味等に到る迄種々なる方面に立ち入つて講じて参りますので、一言で家事科の範圍を申しますると人間社会にありとあらゆる方面を悉く含んでいる學科であると申してよからうと思はれます。かく多方面にわたつた研究を遂げますには、生理衛生化學物理經濟美術文學等の學問を基礎學科といたし、之を家庭の上に応用いたして参りますので此れのみならず、育児や家庭道德に立ち入りますには、自然に、心理學、倫理學、教育學等も基礎といたして参らねばならぬので、これ等の基礎學科から申しましても随分廣い範圍にわたらねばなりません。西洋では、これが分化的に發達いたして居りまして衣食住に就きましても衣服及住居に關する美術的方面は全く美術家の手によりまして特別なる題目の下に研究され、又衣服及食物住居に關する理化學的方面、生理衛生的方面及黴菌學顕微鏡學方面と皆それぞれ其題目を異にして全く分科的に各専門家によって深く研究されて居ります。我國では始めから全体を一學課と見まして凡ての方面を統一して講ずることになつて居りますので深く一の事に立ち入る事が出来ないと申す缺點はありますが、又家庭を中心といたして凡ての方面をよく配合調和して組織を立てて居ると申す長所は我が國の家事科にはあるのであると申してよからうと思はれます。……」

麻生正蔵は、欧米視察から、日本女子大学校の家政学、家事科については、欧米と比較して決して劣つてはいないこと、物質的方面だけではなく、精神的方面に充実していることを確信し、さらに充実を図らうと語っている。井上秀の「家事」が掲載されている女子大學家政講義の出版年は1911年である。井上秀は、この年の前年1910年にアメリカ・コロンビア大学に留学しており、この総論が、留学前に書かれたのか、あるいは留学中に書かれたのか、を知ることは重要だが、確認できていない。しかし、井上秀は、アメリカの家政学と日本女子大学校の家政学の方向性が異なることを認識していたのではないかと考えられる。

麻生正蔵、井上秀は、日本女子大学校の家政学は欧米に比較して決して劣つていないこと、精神面の充実があることなどを指摘している。

4. シカゴ大学のカリキュラム、特に家政学のカリキュラムについて

シカゴ大学の家政学について、学生便覧・履修便覧に記載されている授業科目名・授業概要・担当教官などから検討し、日本女子大学校の場合と比較検討した。

麻生正蔵は、シカゴ大学には、マリオン・タルボットという家政学の教授がいたことや、家政学に関しては、レイクプラシッド会議が開催されたこと等を紹介するなど、アメリカの家政学の動きに対して、多くの関心を寄せていた¹⁵⁾。マリオン・タルボットは1890年から1892年まで、ウェルズリーカレッジで家政学を担当しており、成瀬仁蔵がウェズリーカレッジを訪問した1891年には、タルボットは在職中であった¹⁶⁾。タルボットは、1892年、シカゴ大学に移り、社会・人類学部の創設時のメンバーの一人である¹⁷⁾。1902年の学生便覧¹⁸⁾を見ると、タルボットは、女性学部長の要職にあり、公衆衛生学の准教授と紹介されている。社会・人類学部では、担当科目は、「住居衛生」、「公衆衛生学ゼミ」等、年間4～5科目担当している。高山¹⁹⁾によれば、「タルボットは家政学の先駆者であり、……1904年に家政学部ができると、家政学部の所属になる」と書かれている。

家政学に関連する授業科目は、1901年のThe School of Education (Formerly Chicago Institute)の教育学校の夏学期の履修便覧²⁰⁾には、Home Economics (家政学)に「応用化学の講義と実験」(担当：アリス・P・ノートン)の授業(授業内容は、食に関するタンパク質・炭水化物等の化学)が開講されており、ここには、このほかに社会学の授業の履修を勧めるという文言が認められた。繊維、布、織、染色などを扱う「テキスタイル」の授業は、担当者はドメスティックアートの専門家で、応用芸術の1科目として提供されていた。1902年の学生便覧²¹⁾には、このThe School of Educationは、当初、研究所組織であったが、1901年シカゴ大学に統合され、The School of Educationとして、高度で専門的な教員養成の学校であった。校長が亡くなったことにより、1902年シカゴ大学教育学部になったと記されている。家政学の主たる教員として、アリス・P・ノートン家政学(Domestic Science)准教授、アドバイザーとして、タルボット公衆衛生学准教授の名前がこの学生便覧には書かれている。

1905年の「Circular of Information The Department of Arts, Literature, and Science The College」(芸術・文学・科学学部)の「Household Administration」(家政学科)²²⁾には、マリオン・タルボットの他に、専任教員アリス・P・ノートン、ソフォニスパ・P・ブレッキンリッジの2名が家政学の科目16科目(タルボット「住居衛生学」「住居管理」など5科目、ノートン「調理学・調理実習」など8科目、ブレッキンリッジ「女性の法的経済的地位」など3科目)を担当している。その他に社会学の教員4名(6科目)、化学の教員3名(6科目)、動物学の教員1名(1科目)、生理学の教員1名(2科目)、細菌学の教員2名(4科目)、教育学部の教員7名(13科目)が科目を担当している。教育学部の教員が、家政学教育法、住居のデザイン・装飾、テキスタイル、縫製などを担当している。The Department of Arts, Literature, and Science」(芸術・文学・科学学部)の大学院にも「Household Administration」(家政学研究科)²³⁾が置かれており、その教員構成、科目名、担当者、講義概要は、大学Collegeと同様であった。

「Circular of Information The School of Education The College, 1904-1905」²⁴⁾には、家政学はホームエコノミックスとして開講されている。教育学部では、講義と実験がセットにして授業が進められていることが特徴である。家政学の名称としては、レイクプラシッド会議でホームエコノミックスとしたにも拘わらず、教育学部ではホームエコノミックス、芸術・文学・科学部では、ハウスホールドアドミニストレーション、家庭管理と、家政学の呼び名が異なっていることは興味深い。また、シカゴ大学では、ドメスティック・サイエンスという語句も使われていたのが現状であ

る。アメリカでは、この時代、家政学の内容等が途上にあるといわれており、そのことが名称にも反映されているのではないかと考えられる。

5. 日本女子大学校の家政学部のカリキュラムについて

日本女子大学校の家政学に必要な科目の分野（括弧内は具体的な科目名）として、倫理及び社会学（実践倫理、倫理学、実践社会学）、心理及び教育（心理学、教育学、保育学、家庭教育、児童教育、童話研究）、生理及び衛生（生理学、衛生学、婦人衛生、家庭衛生、看病学、社会衛生）、応用理化（家庭応用理化、食品化学）、家政及び芸術（衣、食、住、女礼等、家庭美術、園芸等）、経済及び法規（経済学、家庭経済、帝国憲法、民法及び諸法規）、体操（普通体操、遊戯体操、教育体操、容儀体操）を掲げて、開校した²⁵⁾。第一次世界大戦前後の家政学の講義内容については、中野邦著「成瀬仁蔵研究—教育の核心と平和を求めて」²⁶⁾に詳しく書かれているが、開校当時の実際の授業内容については、シカゴ大学のような講義概要がないため、不明である。

6. まとめ

麻生正蔵が語った「……の物質的方面だけではなく、精神的方面に充実していることを確信した、……」、井上秀は「……西洋のように分割するのではなく、全体を一つとしてとらえるところに本学の特徴がある。……」ということ語っている。シカゴ大学と日本女子大学校の家政学のカリキュラムを比較すると、日本女子大学校の場合は、衣・食・住だけではなく、社会、経済等あらゆる方面を網羅していること、また、成瀬仁蔵の建学の精神「女子を人として、婦人として、国民として教育する」という人格教育を掲げ、研究教育を行っていたことが精神面の充実につながり、日本女子大学校の家政学の優位性を感じたのではないかと考えられる。ただ、シカゴ大学では、研究を主体とする学部と教員養成を主体とする学部では、同じ家政学でもその内容が異なっていることが重要である。日本女子大学校では、開校当初、職業教育、教員養成を念頭に入れていないこともカリキュラムに影響を与えているのではないかと、麻生正蔵が「……我が国で職業教育を授ける事は、西洋各国のように急務ではないが、早晚その必要が起こるであらう。……」と語っていることは職業教育の重要性を認識していること、井上秀のアメリカ留学から帰国後の師範家政学部創設につながっていくのではないかと考えられる。シカゴ大学での1904年の家政学部創設後の講義科目の変遷、教育学部のそれとの違いなどについては、今回は触れなかったが、今後の課題としたい。

註

- 1) 成瀬記念館研究員のご教示による。
- 2) シカゴ大学は、研究型の私立大学で、1902年当時すでに大学院を有しており、学生数には大学院の学生数も含まれている。
- 3) 井上秀については、「女子大學家政講義」では、著書 井上秀子と、秀子になっているが、本論文では秀とした。その理由は、シカゴ大学に所蔵されていた成績表の氏名欄には、Hide Inoue と書かれていたことによる。

引用文献

- 1) “*Bulletin of Information: The School of Education Summer Quarter 1905*” (The University of Chicago, 1905), pp. 8.
- 2) 青木生子『図説日本女子大学の八十年』(日本女子大学、1981年)、28頁。

- 3) “Circular of Information: The Department of Arts, Literature, and Science The Graduate Schools” (The University of Chicago, 1902), pp. 35.
- 4) 「シカゴ大学の實況」『家庭週報』第6号、1904年9月、3頁。
- 5) 大森秀子「成瀬仁蔵のアメリカ留学時代再考」『成瀬記念館2017』32号、2017年7月、68-75頁。
- 6) 成瀬仁蔵「(三) ウェズレー女子大學觀察略記」成瀬仁蔵著作集委員会 道喜美代編『成瀬仁蔵著作集第1巻』(日本女子大学、1974年6月)、221-226頁。
- 7) 「婦朝みやげ 其の一 麻生學監の談」『家庭週報』第55号、1906年3月、2-3頁。
- 8) 「婦朝みやげ (承前)」『家庭週報』第56号、1906年4月、2頁。
- 9) 「米國の教育英國を醒まさんとす (英米教育の比較) 成瀬校長の談」『家庭週報』第6号、1906年2月、2頁。
- 10) 前掲「婦朝みやげ (承前)」2頁。
- 11) 前掲「婦朝みやげ (承前)」2頁。
- 12) 「英米教育視察談 麻生學監談 (一) 米國に於る家政科の略史」『家庭週報』第61号、1906年5月、2頁
- 13) 「英米教育視察談 (承前) 麻生學監談 (一) 米國に於る家政科の略史」『家庭週報』第62号、1906年6月、2頁。
- 14) 井上秀子編『女子大學家政講義』(女子大學通信教育會、1911年3月)。
- 15) 前掲「英米教育視察談 麻生學監談 (一) 米國に於る家政科の略史」2頁。
- 16) 前掲「成瀬仁蔵のアメリカ留学時代再考」68-75頁。
- 17) 高山龍太郎「カリキュラムにみる初期シカゴ学派—1905年から1930年まで—」『京都社会学年報』第6号、1998年12月、139-231頁。
- 18) “Circular of Information: The Department of Arts, Literature, and Science The Graduate Schools”, op. cit., pp. 3, pp. 5, pp. 36-37.
- 19) 前掲「カリキュラムにみる初期シカゴ学派—1905年から1930年まで—」139-231頁。
- 20) “Bulletin of Information: The School of Education Summer Term 1901, July 1 to August 9” (The University of Chicago, 1901), pp. 6-7.
- 21) “Bulletin of Information: The University of Chicago School of Education 1902” (The University of Chicago, 1902), pp. 1.
- 22) “Circular of Information: The Department of Arts, Literature, and Science The Colleges April” (The University of Chicago, 1905), pp. 56-61.
- 23) “Bulletin of information for the year 1905-1906: The Department of Arts, Literature, and Science The Graduate Schools” (The University of Chicago, 1905) pp. 51-56.
- 24) “Circular of Information The School of Education The College, 1904-1905” (The University of Chicago, 1904), pp. 23-24.
- 25) 「第二章 成瀬校長時代 (その一) — 日本女子大學校の誕生」日本女子大学校編『日本女子大学校四十年史』(日本女子大学校、1942年) 74-76頁。
- 26) 中寫邦「第二章 女子高等教育の先駆け」中寫邦『成瀬仁蔵研究—教育の核心と平和を求めて』(ドメス出版、2015年10月)、184-187頁。

参考文献

- 1) 常見育男『家政学成立史』(光生館、1971年)
- 2) シカゴ大学ホームページ <https://www.uchicago.edu> (参照 2021.6.25)
- 3) 『家庭週報』第1号 (1904年9月)
- 4) 『家庭週報』第12号 (1905年11月)
- 5) 『家庭週報』第21号 (1906年4月)
- 6) 『家庭週報』第27号 (1906年7月)
- 7) 『家庭週報』第47号 (1907年1月)

- 8) 『家庭週報』 第52号 (1907年 3月)
- 9) 『家庭週報』 第54号 (1906年 3月)
- 10) 田中久子 『欧米における家政学』 (宝文堂、1965年11月)

草創期の日本女子大学へのジェーン・アダムズの影響

The Influence of Jane Addams on Japan Women's University in Its Early Years

牛山 通子

USHIYAMA Michiko

はじめに

ジェーン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) は、裕福な家庭に生まれながら、貧しい人々と自分自身を救済するために、ハル・ハウス (Hull House) をシカゴに設立し、社会事業家としてセツルメント運動を展開したソーシャルワークの先駆者である。また、女性参政権獲得のための運動を経て、世界初の女性平和団体、婦人国際平和自由連盟 (Women's International League for Peace and Freedom 略称 WILPF) の初代会長を務めた。そして、1931年 WILPF の指導とその社会改革に対してノーベル平和賞を受賞した。

1901年に日本女子大学校が開校し、1904年に『家庭週報』(編集人 小橋三四子 (1883-1922)) が発行された。アダムズについては、2度にわたって『家庭週報』で大きく取り上げている。最初は1908年、女性社会事業家として活躍をしている時期、二度目は1923年、平和運動家として来日した時である。それぞれの時期における『家庭週報』の記事を取り上げ、アダムズがセツルメント運動の拠点としてシカゴに設立したハル・ハウスの活動と日本女子大学校社会事業学部開設との関係について、及び WILPF の活動が日本女子大学校関係者に与えた影響について考察したい。



図1 ジェーン・アダムズ
提供：日本女子大学成瀬記念館

I ハル・ハウスと女性の活躍

1 1908年、『家庭週報』に掲載されたジェーン・アダムズの論文について

ジェーン・アダムズは、いつ頃から日本で知られるようになったのだろうか。木村活信は「明治時代には諸種の文献中にアダムズやハル・ハウスの記事が散見される。この時代には、すでにハル・ハウスを訪問し、アダムズに面談した人物がいたことも確かである」¹⁾と述べている。アダムズが『家庭週報』に初めて登場するのは、1906 (明治39) 年のことである。第55号、麻生正蔵 (1869-1949) の「帰朝みやげ」の中であり、麻生はシカゴにデューイ (John Dewey, 1859-1952) とアダムズを訪問したが会うことが出来なかったこと、アダムズがストライキの仲裁をしたことを報告している。

次にアダムズが大きく取り上げられるのは、1908年、『家庭週報』144号～147号²⁾、記事のタイトルは、『米国婦人界に最も名のあるミスアダムズの事業』である。記事の中で、アダムズの論文、「社会的殖民は如何なる必要によりて起こりたるか」(“The Subjective Necessity of Social Settlement”³⁾「セツルメントの主體的必然性」) を取り上げている。これはアダムズがハル・ハウ

スを始める動機について述べた注目すべき論文である。記事は、まず、アダムズが実践している社会事業について、

「一婦人の社会事業に関係することはいかなる必要によるか、また如何なる利益をもたらすものなのか、たまたま現今米国婦人界にその人ありと知られたるミスアダムズが、社会教育の機関としてその国に実施しつつある社会的殖民[ソーシャルセツルメント](教育ある人々が、無教養の人々と居を同うして、これを教え導き、その進歩を計らんとする活動)の起りし所以を説けるミスアダムズの論文「社会的殖民は如何なる必要によりて起こりたるか」に窺ひ得る所少なからず、ここに抜粋して読者の参考に供す」と説明している。この記事を取り上げたのは「アメリカで行われている新しい教育機関としてソーシャルセツルメント活動を紹介することで、読者に新しい知識を与え、進歩してほしい」という主旨である。

第144号に見られる主要な箇所を取り上げてみよう。「千八百八十九年九月創立せられたるハル・ハウスは、シカゴ市に於ける社会的殖民機関の先駆者なり、この事業は団体の手によりてなりしものにあらずして、わずか2人の婦人が友人の協力で基礎を置き拡張を計りたるものなり」と女性の力によって行われた事業であることが強調されている。アダムズの持論は「孤立するのではなくお互いにそばにいて助け合うことで、互いの良さを発揮し発達するものである」と述べている。また、「即ち社会的殖民は社会全体の活動に、民主主義を表さんとなり」、そうすれば「この時代の各階級の人々の長所をあらゆる人に分かちその発達を計る」ことが出来る。

第145号ではセツルメントは一つは若者の「教育的能力を発揮」させるため、もう一つは「キリスト教精神によるものである」と述べている。

第146号ではセツルメントは「大都会に於いて起こりつつある社会問題、労働問題の解決を助ける活動である」こと、また「人類は一致共同すべきという哲学をその基礎に置くべきである」と述べ、さらに「人種及び言語の相違せる処より互いに相隔れる隣人も人類としての価値を同等に見るべきである」と述べている。

第147号の論文の終りで、「社会的殖民的事業の動機はこの社会及び自らの救済をなさんと促がす吾人の心情に他ならざるなり」と結んでいる。「社会的殖民的事業の動機」が「社会及び自ら」、アダムズ自身を救済をしたいと思う気持ちに他ならないと述べている。「自分の気持ち」こそが「主体的必然性」と呼ばれるものである。論文の中でアダムズは、大学を出た女性たちの「方向を失った」生活は、「ほかの極貧にあえぐ大勢の人々と同じようにあわれに思われた」とさえ述べている。大学を出ても行き場のなかったアダムズを救ったのがセツルメント活動であり、また、セツルメント活動によって、貧しい人々が救われた。

アメリカでは、ハル・ハウスを舞台に女性が家庭から出て、大都会での社会問題、労働問題を女性の力で解決する方法を見出そうとしていた。そうした先駆者的女性の社会事業での活躍はやがて日本女子大学校にも影響を及ぼすことになった。

2 ハル・ハウスについて

ここで、アダムズの生きた時代とハル・ハウスでの活動について概略を述べたい。

19世紀末、世界大博覧会がシカゴで開催され、シカゴでの急速な都市化と工業化は多くの貧困層を生み出す原因となった。フロンティアの時代は終わり、大金持ちと貧民の生活の越えがたい溝が存在した。アダムズは国の富の8分の7を国民のわずか1パーセントが占有していることに疑問を感じていた一人であった⁴⁾。大都市にあぶれた移民は、大きな社会問題となりアダムズのセツルメ

ントの受益者になった。

当時、貧困を生む社会問題には2つの考え方があった。一方は、チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) の進化論の「適者生存」を「生存競争」と解釈し発展させたスペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の「社会進化論」という考え方だった。富者は経済競争における適者であり、勝者である。貧者が必要な能力と決断力があれば、貧者のままであるはずではないと社会進化論者は論じた。貧者も恐竜も、ともに競争に敗れた生存不適格とみなした。ダーウィンは、自然界を勝者と敗者に二分しようとしたわけではない。自然界における多様性こそを重んじた。他方で、アダムズのようにアメリカ社会の都市化、工業化による恩恵を理解しながら、それによって生じる社会現象の諸悪を認め、その人の社会的、経済的地位がどうあろうと、個人の尊厳はすべからず尊敬されるべきであるという考え方であった⁵⁾。貧困観には大きな差異があり、貧困は個人の責任であると解する COS 運動 (Charity Organization Society 慈善組織化運動) と貧困は社会的な要因が大きいとするセツルメント運動 (Settlement movement) は対称的であった⁶⁾。

ハル・ハウス開設当時は、博愛主義に基づく温厚な地域活動であり、アダムズと同様に高等教育を受けたにも拘わらず、自分のキャリアを生かせない裕福な女性たちがボランティアで熱心に参加した⁷⁾。アダムズは都市環境の美化のため塵芥監督官の肩書を得、年間1000ドルの収入を得た⁸⁾。ハル・ハウスの日課は、朝は保育園、昼は学童児のクラブ活動、夜は青少年、大人のクラスなどであった。また、デューイやミード (George Herbert Mead, 1863-1931) などのプラグマティズムの影響を受け、シカゴ大学の著名な学者たちも加わり哲学思想を話し合うディスカッションのクラスも実施された。労働問題、女性問題を話し合うこともあった。シカゴ大学とハル・ハウスは大学と地域を連結させる文字通りの大学拡張運動の実験ともいわれたほど密接なつながりがあった⁹⁾。後には、アダムズはハル・ハウスにおいて、児童労働保護運動、少年裁判所設置、児童相談所の設置、遊園地設置などと児童福祉の問題に最も力を注いだ¹⁰⁾。



図2 ハル・ハウス (ハル・ハウスにて牛山撮影)

19世紀末から第一次世界大戦ごろまでの、アメリカ全土にわたった大規模な改革運動の時期を革新主義時代と呼んでいる。セツルメント運動の盛衰もこの革新主義運動の盛衰に一致している。セツルメント運動と革新主義時代がピークになったのは、ともに1910年代初めである¹¹⁾。ハル・ハウスは革新時代の追い風に乗って一挙に躍進することになった。13の諸機能からなるビルと公園や野外施設を保有したシカゴのスラム街のハル・ハウスから全米に向けて社会改良へのメッセージを発信し続けた¹²⁾。

これに一役買ったエンゲルスの弟子であったフローレンス・ケリー (Florence Kelly, 1859-1932) がハル・ハウスの住人になった。ケリーの役割の第一歩はセンチメンタルな博愛主義を標榜する従来のハル・ハウスの活動に社会科学の視点を導入したことだっ



図3 フローレンス・ケリー (ハル・ハウスにて牛山撮影)

た¹³⁾。アダムズはケリーの社会主義の影響により思想的転換を図り、ハル・ハウスは博愛的事業から、社会改良を目指す社会的事業へと移行していった。シカゴのスラム街の問題を綿密に調査、世論を喚起し、法制化、アメリカ合衆国の問題として発展させた。彼女はハル・ハウスの運動に社会科学的な調査を武器にして婦人労働と児童労働の問題に大きく貢献した。ブースのロンドン貧困調査のアメリカ版とまで言われる社会福祉調査 *Hull - House Maps and Papers* は、ハル・ハウスとアダムズに学問の世界で高い評価を与えることになった¹⁴⁾。児童問題では、ハル・ハウスメンバーのジュリア・ラスロップ (Julia Clifford Lahrop, 1858-1932)、エディス・アボット (Edith Abbott, 1876-1957) が連邦政府で初めて創設された児童局の局長に就任した¹⁵⁾。

こうしたハル・ハウスの活動の結果、アダムズに関心が集まり、人々は「女性版リンカーン」、「スラム街の聖女」というイメージを持ち20世紀の「女性モデル」、「アメリカのヒロイン」として歓迎された¹⁶⁾。1879年に始まった全米慈善・矯正会議 (National Conference of Christies and Correction, NCCC) は、当時のアメリカの社会福祉の学会や協会において最も権威があった。1910年には、アダムズ50歳の時、第37代会長に就任した。この会議では女性が会長になったことはなく一部の保守系の当時の人々の猛反対にあったにも関わらず、アダムズはハル・ハウス開設20年にしてアメリカ福祉界の頂点に立った¹⁷⁾。

II 日本女子大学校社会事業学部開設

1 「社会事業の父」と呼ばれる生江孝之 (1867-1957)

(1) 生江孝之について

社会事業という分野がまだ日本に確立されていない時期に、社会事業に関心のある多くの日本人がハル・ハウスを訪問している。1900年には、生江孝之が、ハル・ハウスを訪れている。社会事業家では彼が最初の訪問者といえる¹⁸⁾。生江が「社会事業の父」といわれる所以を小笠原宏樹は次のように述べている。

社会事業の意味は、生活困窮者、障害者、老人、児童など、社会的援護を必要とする人々の救護を行うことを全般として指し、現在の社会福祉で扱う分野にそのまま重なっている。これを彼の残した業績と照らし合わせてみると、生活困窮者・浮浪者・出獄人の保護、保育・児童保護、住宅・都市環境の整備、衛生・医療機構の創設など社会事業のほぼ全分野で、その草創期に関連していたことが知られる。まさに「社会事業の父」と呼ぶのにふさわしい人物であった¹⁹⁾。



図4 生江孝之
提供：日本女子大学成瀬記念館

生江は社会事業家となる決心をした後、明治32 (1899) 年、33歳で青山学院神学部を卒業、青山教会副牧師に就任するが、翌年、慈善事業についての向学の念断ちがたく、先輩たちが発起人になり自ら留学のための寄付を東奔西走して集めアメリカへと旅立った。1900年のことである。

アメリカでは監獄改良、感化事業などとともに、当時のアメリカに新しく胎動しつつあった社会改良運動や里子制度を見学した。シカゴではハル・ハウスを訪れている。少年感化院を見学し

た最初の日本人であった。ニューヨーク慈善組織教会の慈善博愛事業従事者講習会及びボストン大学院へ出席、社会学、社会事業、神学などを学んだ。後の生江の社会事業論に影響を与えたアメリカ社会事業論の確立者 E. ディバインに直接師事した。引き続き、ヨーロッパに渡り、明治37(1904)年、38歳で帰国、神戸市の外事係長となった。明治41(1908)年、内務省の委託により2回目の外遊、帰国後、明治42(1909)年、43歳で内務省地方局の嘱託となり、慈恵救済事業事務取扱のため東京に赴任。嘱託として大正12(1923)年まで14年間務めた²⁰⁾。

(2) 生江の著書、『社会事業綱要』(1924)の中に見るハル・ハウス

アメリカでの隣保事業について、「此事業はその性質上労働者の地区内に会館を設け、之に寄宿して隣保の指導者啓発者たるべき多数の同労者と、また外部からの援助者とを要する。例えばシカゴのハル・ハウスに於いては寄宿同労者34人外来の援助者100人である。1906年の調査では米国斯業全体の専任幹事は600名以上に達し尚寄宿同労者は837人外来援助者4000人を数える。その中7割強は婦人」である²¹⁾。セツルメントで活動している女性は実に多数である。よって、「隣保相扶の情味を養ひ得べく自覚改善の気分を得、而して遂に能く相同化し融和して向上発展し、各自の天分を發揮するを得、上下貧富相和合して社会上幾多至難の問題をも解決し得るの鍵となるに至るであろうと思惟せらるる。而してその事実を徴するに予期の功績を収めてその住民を教化しその住区改善し得たるもの決して乏しくないのである。即ち市俄古に於けるゼン・アダムズの経営するハル・ハウスの如き、グラハム・テラー博士の主幹せるシカゴ・コンモンスの如きボストン市におけるウーズの経営するサウスエンドハウスの如きその最も顕著なるものである²²⁾と述べている。生江は、セツルメントの事業は救済される側にも救済する側にも共に人間的形成に効用あると考えていた。特に「隣保事業の副産的利益」として「常に公平なる考えを所持し得る」ことをあげて、「その人格、その学識その識見及びその度量に於いても頗る卓越せる者多き重なる一理由であろう」と述べ、優れた人格者としてアダムズを含む前述の人々の名を挙げている²³⁾。

生江は、ハル・ハウス出身で児童局局长になったラスロップを『家庭週報』の記事「米国における児童保護問題」²⁴⁾の中で、アダムズ同様高く評価している。

2 日本女子大学校社会事業学部開設

(1) 当時の日本での救民政策

明治時代の救民政策は、民間篤志家の個人的な慈善事業から始まった。これが大正時代にかけて社会事業と呼ばれる基幹的形態へと移行していく。明治から昭和初年にかけての60年間救民対策の中心は、明治7(1874)年制定の恤救規則であった。圧倒的多数の救民は親戚や隣保に頼るほかなく、この状況は昭和4(1929)年救護法制定まで変化がなかった。こうした救貧法規の貧弱さは、財政上の理由だけでなく、「貧困は自己の怠惰に原因するものである以上公費で取り扱うべきではない」と考える官僚の慈善的貧困観にも由来していた。しかし、明治20年代に、すでに東京、大阪にスラム街が発生。貧困は社会的原因により醸成されつつあった。産業近代化の初期の明治30年代には、経済恐慌と農村疲弊から都市へ流入集中する貧困層の存在は覆い難い事実となって現れていた。

日本の社会は、第一次大戦をへて、大正7(1918)年の米騒動は70万人に及ぶ参加者で、全国を震撼、これまでの政府の政策の転換を迫るものであった。寺内内閣が退陣し、国民宰相として原敬内閣が誕生した。その結果、社会事業対象者は特殊な脱落者でなく一般市民へと拡大一般的救貧立

法は恤救規則のままではあったが、職業紹介、借地法、借家法から軍事救護法、結核予防法、大正11年には健康保険法が成立する²⁵⁾。

(2) 女性が社会事業で活躍するために—社会事業学部開設

日本における貧困層救済は旧態依然としたままで、シカゴの貧しい移民同様、貧困層は増大していた。こうした時代を背景に、日本女子大学校は、社会事業学部設立に着手しようとしていた。麻生正蔵は「社会事業学部開設の趣旨」²⁶⁾の中で次のように述べている。趣旨は「世界大戦後、我が国に於ける社会的動揺変転は激甚を極め予想を絶し、人をして瞠目核心せしめるものがある」と始まる。欧米の先進国に比べ未発達な日本が、激動の危機に巻き込まれている状況下に、「国家の将来を幸福繁栄の一路に導くが為にはあらゆる方面から徹底的に尽力する方策を遺漏なく講じなくてはならぬ。これを一言にすれば、社会生活の整理改善のために、諸有手段を講じなくてはならぬ。而して直接に社会生活の整理改善に与える事業は、即ち所謂社会事業である」と説いている。

日本女子大学校の社会事業学部の目的は慈善事業から社会事業へと移り変わる時代に、貧困層の救済をするための高い専門的な知識を持つ女性の人材を養成し、社会に送り出すことであった。生江が報告しているように、アメリカではハル・ハウスをはじめ、社会事業の分野では多くの女性が働いていた。そのことは社会事業学部開設に大きな影響を与えていると思われる。麻生は、「この社会生活の整理改善は独り男子のみの事業でなく、同時にまた婦人の事業である。」それは、「婦人が社会において男子と共同者たるべき時期に達したばかりでなく、實際上社会状態が複雑微妙になった結果、女子の参加なくしては、十分にその整理改善の実を挙げ難くなったのである」と社会を整理改善するには女性の参加が不可欠であると力説している。社会事業に女性の適性があることを強調し、「現に欧米においては、婦人が社会事業の各方面に大いに其の実績を上げているのである。而して我国に於いても、今や既に婦人社会事業家の要求が盛んに現れてきた」と述べ、社会事業学部開設に自信を示している。

そうした麻生の熱意に応えた、社会事業学部第一回の入学者は62人であった²⁷⁾。『家庭週報』²⁸⁾には、社会事業学部が開設され、9月26日の始業式で、麻生校長は社会事業学部新設の理由を述べたことが掲載されている。其の概要で「第一、我が日本の国家社会は年々共に非常に社会事業を要望してきた。第二に、従来社会事業は一つの慈善事業として取り扱われたものであったが、今日では社会的な仕事になって来た。従ってその仕組みも複雑になってこの事業に携わる人は専門的な教育あり熟練ある人でなければならなくなった。第三に社会事業は男女何れに適するかというと、もちろん何れも必要であるが、特に婦人にはその俊つところが多いのである。第四に我が日本女子大学校ではかねてより桜楓会の事業として児童の預かり所を設け其の他種々社会的の仕事を営んで微力ながら社会のために貢献している。その点からも現在この社会この要求に対して袖手傍観することは出来ない」と述べている。欧米において、アダムズのような女性が社会事業分野で活躍していることを見聞し、日本女子大学校でも世に先駆けて、社会事業学部を開設し、そこで学んだ女性たちを社会事業の分野に送り出し活躍することを期待していた。

生江は、大正7(1918年)山室軍平(1872-1940)から日本女子大学学監であった麻生正蔵への推はんにより同校の講師となった後、成瀬仁蔵(1858-1919)、麻生正蔵の社会事業学部開設の願いにより、57歳で、わが国初の社会事業学部開設時の主任教授として迎えられた²⁹⁾。大正10(1921)年9月27日の『東京朝日新聞』には、「社会事業を女性で呼ぶ—米国倣うて研究に努力する女子大学 社会学部の新設」と題した記事が報道されている。

(3) 生江の継承者としての一番ヶ瀬康子 (1927～2012)

麻生、生江らの期待に応えるように、生江の薫陶を受けた日本女子大学校卒業生には、日本女子大学校理事大槻たか、東京市公立保育所に勤務し、戦後も乳児保育に率先して先鞭をつけた秋田美子、労働省婦人少年局長の二代目を勤めた谷野セツ、愛光女子学園長を務めた大平エツ、日本社会事業大学名誉教授五味百合子、元労働基準局長池田きみ枝、元厚生省児童局企画課長植山つるなどがおり、各分野で活躍をした。

日本女子大学教授となった一番ヶ瀬は、生江の教えが、「私自身の進路への、いわばテコとなった」と告白している³⁰⁾。一番ヶ瀬は生江の日本女子大学校最後の教え子であった。『生江孝之著作集 第6巻』の解説で、津曲裕次は一番ヶ瀬を以下のように述べている。

昭和18 (1943) 年日本女子大学校に入学した一番ヶ瀬は、生江の退職前最後の一年間、教えを受け最終講義にも立ち合った。一番ヶ瀬は、昭和28 (1953) 年4月、日本女子大学福祉学科助手に採用されると、昭和29 (1954) 年、91歳の生江を訪れ、口述筆記「生江孝之 社会事業講座25年間の思い出」(日本女子大学社会福祉学科『社会福祉』1号1954年)にまとめた。1957年に生江が亡くなると「生江先生を偲んで」及び「生江孝之先生の御生涯」(『社会福祉』5号1958年)を掲載した。その後、助教授になると「社会福祉事業概論」「近代社会史」を担当、名実ともに生江の後継者となった。教授になった一番ヶ瀬は、「生江孝之一社会事業一筋」(一番ヶ瀬他『人物でつづる近代社会事業の歩み』全国社会福祉協議会)など生江孝之に関する著作を多く残している。「一番ヶ瀬は生江の継承者として自他ともに認められている」と述べている³¹⁾。一番ヶ瀬の生江に関する多くの著作は、恩師への追想と敬意の表れであろう。

Ⅲ 平和運動と日本女子大学校

1 第一次世界大戦後の平和運動

(1) 世界初の女性平和団体：「婦人国際平和自由連盟」

(Women's International League for Peace and Freedom : WILPF)

1914年、第一次世界大戦が勃発した。1915年4月28日には、オランダのハーグで平和を願う女性たちの国際女性会議が開催された。呼びかけ人はオランダの女性参政権協会会長、医師アレッタ・ジェイコブス (Aletta Jacobs, 1854-1929) と IWSA (International Women's Suffrage Alliance = IWSA) の書記を勤めるスコットランド出身の女性弁護士クリスタル・マクミラン (Chrystal Macmillan, 1872-1934) であった。この会議の議長はアダムズが選ばれた。参加国は12か国、1136人が世界中から集まった。殆どの参加者は、アダムズにとっては女性参政権運動を各国で展開している同志であった。平和運動と女性参政権運動はしっかりと連携していた。今後もこのような国際的な平和活動を継続するために、各国から2人の代表を出し、「恒久平和のための国際女性委員会」(Women's International Committee for Permanent Peace = WICPP) が結成された³²⁾。

アダムズが平和運動を進める一方で、アメリカ参戦の機運が高まっていった。1917年、アダムズはアメリカの参戦を非難した。かつての「時代のヒロイン」は「最も危険な人物の一人として」当時FBIが警戒する思想犯のブラックリストのトップに載せられた。ケリーは「ロシア革命の共犯者」といわれ、ハル・ハウスも「赤の温床」として警戒されていた³³⁾。アダムズは、活動の場をハル・ハウスから婦人参政権運動、平和運動、へと軸足を大きく移動した。

1919年5月、ハーグで集まった女性たちはチューリッヒで再会し第二回「恒久平和のための国際女性委員会」を開催した。この会議に於いて、戦後の新たな状況に対応する国際組織として、婦人



図5 WILPF (ハル・ハウスにて牛山撮影)

国際平和自由連盟 (WILPF) が結成され、初代会長にアダムズが選出された³⁴⁾。

(2) 日本初の女性平和団体：「婦人平和協会」

成瀬は、1915年に WILPF から次回の国際会議に、日本の女性が参加できるように、日本の女性たちへの働きかけを依頼する手紙を受け取った。1916年、成瀬が WILPF 事務局に「日本の女性の参加を支援したい旨」の返事を出している³⁵⁾。

1921年、日本に於いても、漸く成瀬の期待に応えるように、神田一ツ橋の如水会館に約200人の

女性か参集し、「婦人平和協会」の発会式が行なわれた³⁶⁾。日本で初めての女性平和団体である。初代理事長は井上秀 (1875-1963) 日本女子大学校教授であった。

『家庭週報』³⁷⁾ に成立の詳しいいきさつを「日本に於ける婦人平和同盟」と題して協会理事長、井上秀子 (秀) が寄稿している。それによると、成瀬は、当時の欧州大戦を眼前にみる諸外国の女性団体から、加盟を求められたり、大会への参加を求められるが、日本にその用意が未だないことを遺憾に感じていた。井上はそうした恩師の思いを叶えたいとの思いもあったのだろう。また、「7月にビアナに於いて開かるる婦人国際平和会大会に出席を希望、参加の勧誘があり、麻生校長も同意され、順調に「婦人平和協会」は結成した」と述べている。

発足間もない、「婦人平和協会」は、2か月後、ウィーンで開催された第3回 WILPF 国際会議に初めて参加した。参加22か国、222人であった³⁸⁾。「日本がこの連盟に参加するのは今度が初めてであって、最近、日本に婦人平和協会の創立に尽力されたメリアン・アルヴィン姉、新渡戸まり子夫人、小橋三四子姉、滝沢、粕谷諸姉及び自分と都合六名が信任状を持って出発することになっている」³⁹⁾と高良とみ (1896-1993) は述べている。1921年の「会議の招待状がエレン・ケイ (Ellen Karolina Sofia Key, 1849-1921) やオリーブ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855-1920) などの諸女史にも出ていたが、二人とも欠席。ケイ女史からは手紙が来て、その中に、「女史 (ジェーン・アダムズ) の事を「この暗黒の空気の中で尚平和を叫ぶか! 驚くべき婦人!」と書いてありました」⁴⁰⁾と高良とみは報告している。

2 日本女子大学とジェーン・アダムズ

(1) 1923年、『家庭週報』に見られるジェーン・アダムズの来日関連記事

1923年、6月にアダムズが来日するのに先駆けて、『家庭週報』では来日に関する情報を報道している。「ジェーン・アダムズ女史の来朝」⁴¹⁾の記事によると「巴里会議によって定められた賠償金及び占領軍の撤廃に協力すべきこと」を世界に宣伝するための旅行であることが述べられている。「平和の母ミス、ジェーン・アダムズの来朝」⁴²⁾では、63歳で大変元気に旅行をしている」と報じている。しかし、一転して次の「ジェーン・アダムズ女史の入京」⁴³⁾では、体調を崩して聖路加病院に入院したことを伝えている。

(2) WILPF と日本女子大学校

アダムズの来日には、和田とみ (高良) が下関に迎えに行った⁴⁴⁾。どの新聞にも「平和の母」と

して大歓迎する記事が載った。また、数千人の聴衆に「婦人と平和」という講演会を行った。講演を貫くアダムズの思想の基軸は、非暴力、徹底した話し合いによる紛争解決、無償の愛による支援等、女性の本来の資質として洋の東西を問わず、高く評価されてきた柔軟な対応や話し合いの技術を駆使して女性たちが率先して手本を示し国際平和創出の努力を惜しまないことに置かれた⁴⁵⁾。

上代は、アダムズに会った時の様子を「私は新橋駅にお迎えした。ジェーン・アダムズとの出会いは、思えば私にとって「永遠の刹那」ともいうべきものであった」と感想を述べている。アダムズは東京に入って間もなく、聖路加病院で乳がんの手術を受け、その後日光で静養した。上代が日光にアダムズを訪ね、「婦人平和協会」について話すと日本の女性が平和のために活動していることを喜び、上代の手を取って離さなかった⁴⁶⁾。1923年上代らは WILPF への正式入会手続きを取り、1924年「婦人平和協会」名のままで、「婦人国際平和自由連盟 (WILPF)」に日本支部として加盟することが出来た⁴⁷⁾。1915年の WILPF からの手紙が契機となって、成瀬は国際的な平和運動へ日本の女性たちを参画させたいという思いが高まった。WILPF が、国際的平和運動を通して、成瀬、麻生、井上秀、上代タノなど草創期の日本女子大学関係者に与えた影響は大きい。

Ⅲ ジェーン・アダムズの遺産

1 ノーベル平和賞

1931年、アダムズはノーベル平和賞を受賞している。アダムズはすでに2年前に、1929年度のノーベル平和賞に推薦されている。その時の推薦者名が「婦人平和協会会報」(昭和4年6月発行)に掲載されている。日本女子大学校長の麻生正蔵も推薦人の一人であった。

アダムズの受賞を祝って、河井道子、ガントレット恒子、加藤高子、高良富子、市川房枝(1893-1981)が集まり「ジェーン・アダムズを偲び平和を語るの会」という座談会が1931年12月15日新宿中村屋で開かれた。市川房枝は1928年渡米した時にもノーベル賞の推薦運動の最中であったと述べた⁴⁸⁾。アダムズのノーベル賞受賞の機運は国の内外で高まっていたようだ。また、高良は九州大学総長にも推薦方を頼み、女史自身この賞金については「個人としてほしいとは思わぬが、婦人の平和運動を勇気づける為にはほしい⁴⁹⁾」と言っていた」とも述べている。そう述べた通り、賞金は WILPF 本部に寄付された⁵⁰⁾。

市川は「ハルハウスへは日本人は大抵たちよりませうね」「私もシカゴ滞在中、案内役で何度もゆきました。それからあすこの会合にも出たし、あの中劇場やカフェテリアの図書館も随分利用しました。『ハル・ハウスにおける20年』という書物が出ていますが、『その後の20年』も出版されたさうですね」と話している。平塚雷鳥(1886-1971)、市川房枝、奥むめ(1895-1997)をの三人で立ち上げた「新婦人協会」に関して、「大正八年平塚らいてう女史が「新婦人協会」を創設した最初の動機は、実はあの本にあるともいえるのですよ。平塚氏が山田わか氏の家で嘉吉氏からハルハウスの話を聞いたのが、新婦人協会のプログラムにかなり取り入れられたのです。勿論社会運動的な方面も入っていますが、土台はハル・ハウスにヒントを得たのです。そして平塚さんと二人で『ハル・ハウスの二十年』を読んだものです⁵¹⁾」と当時を懐かしんでいる。新婦人協会は短命で3年で解散している。

2 上代タノの愛読書

上代タノは、1924年にハル・ハウスにアダムズを訪ねている⁵²⁾。上代はアダムズによって人間と



図6 図書館の前の上代タノ
提供：日本女子大学成瀬記念館

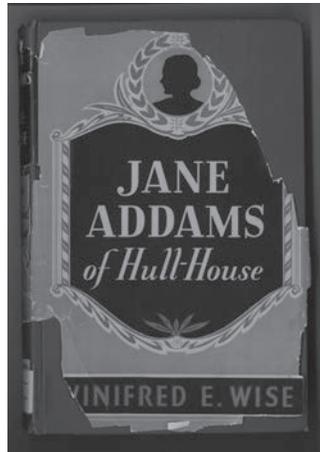


図7 手にしている本『ハル・ハウスのジェーンアダムズ』
提供：日本女子大学成瀬記念館



図8 村岡花子のサイン入り上代タノへの謹呈本(牛山撮影)

して女性として大きな影響を受けた。上代がアダムズの本を持ち図書館の前に立っている姿には深い敬愛の念を感じる。その本は『ハル・ハウスのジェーンアダムズ』(Winifred E. Wise *Jane Addams of Hull-House* HARCOURT, BRACE AND COMPANY, NEW YORK 1935) である。

さらに、上代のアダムズへの真摯な傾倒を表す一冊の児童書『ジェーン・アダムズの生涯』*City Neighbor: The story of Jane Addams* (1951) ジャッドソン作 村岡花子訳 岩波少年文庫 1953年4月【日本女子大学図書館、「上代たの文庫」所蔵】を紹介したい。

写真にあるようにこの本は村岡花子のサイン入り、上代タノへの謹呈本(1953年7月30日)である。原作者(クララ・イングラム・ジャッドソン)は有名な児童文学者である。木原は「1980年絶版になるまで21版を繰り返し、およそ8万部売れた。読者は少年、少女であったが、社会事業関係者も含まれていたと考えられ、戦後の日本の社会事業界における偉人としての「アダムズ像」を形成するに多大な影響をもたらしたのではないかと述べている。上代はすでに旧知の仲であるアダムズについての児童用の図書にも拘らず、興味のある個所にはチェックや傍線を引き実に丁寧に読んでいる。その本の中で村岡花子は翻訳することを勧めてくれた岩波書店編集部石井桃子に(英文科卒1907~2008)謝礼し、「小さい本ですが、わたしが最も感銘を受けた書物の一冊である」と述べている。1929年「婦人平和協会会報」(昭和4年6月発行)によると二人は婦人平和協会(WILPF 日本支部前身)に入会している。

終わりに

ジェーン・アダムズの記事が、『家庭週報』で二度、大きく掲載されている。社会事業学部開設には、アダムズのハル・ハウスの活動が大きく意識されている。麻生も生江もハル・ハウスを訪ねており、生江はハル・ハウスで働く女性の多さに感嘆し、『社会事業綱要』に記載している。日本の女性も何れこのように働くことが出来ると考えたに違いない。アメリカで女性の社会進出が阻まれていた時代の閉塞感を自ら打開するためにアダムズが始めたセトルメント運動は、社会変革へと開花した。日本女子大学校では、社会事業の担い手を育成するために社会事業学部を開設しそこで、専門的知識を学んだ多くの女性を社会に還元した。一番ヶ瀬は、「社会福祉と戦争」と題した講演

のなかで、「戦争は福祉の敵」と述べており、平和運動家としてのアダムズを紹介している⁵⁴⁾。戦争に反対する一番ヶ瀬は恩師生江の晩年の著作『社会教化事業概観』（1939）、第7章「其の他の強化事業と国民的運動」の中での生江の記述に関して、「時代への配慮であろうか、あるいは生江の思考の限界であろうか、戦時体制への協力を淡々と述べている」こと⁵⁵⁾に疑問を呈している。

アダムズは晩年、平和運動家として世界を舞台に活躍した。市川は「アダムズ女史の功績は、確かに社会事業家としてハルハウスを建設されたことより平和運動の方が偉大だと思ひます」⁵⁶⁾と述べている。市川の「平等なくして平和なし、平和なくして平等なし」の有名な言葉にもアダムズの影響が感じられる。福祉事業の仕事を通して、人々が抱えた問題は個人的に解決できる問題ではなく、社会構造自体を変えねばならず、そのためには女性の視点を政治の面でも発揮する必要があると考えた。さらに、自由、平等に生きる権利は平和でなければ保障されないという確信があった。井上秀、上代タノ、高良トミ、平塚雷鳥、奥むめを、小橋三四、石井桃子、一番ヶ瀬康子らはアダムズの影響を受けている日本女子大学校の卒業生である。彼女たちは、悲惨な戦争を繰り返さないように非戦、非暴力に共感している。そして彼女たちをアダムズへと導いたのは、成瀬仁蔵、麻生正蔵、上代が教えを乞うた新渡戸稲造（1862-1933）⁵⁷⁾などの平和思想家たちであった。アダムズは未来の人々に平和実現の種を蒔きながら、信ずる道をひたむきに切り拓いた稀有な女性であった。

昨年から世界的な広がりを見せている COVID-19の感染の収束は、一国では到底解決することは出来ない。アダムズは「人類は一致共同すべきという哲学をその基礎に置くべきである」と考えていた。世界が困難に陥っている時こそ、各国の情報の共有と相互理解、国際的協調が不可欠である。アダムズの平和構築の戦略はシンプルである。一番ヶ瀬は、先の「社会福祉と戦争」の中で、アダムズの言葉を引用している。「お隣りさんのことを考えるようにお隣の国を考えよう。そして、平和を実現しよう」⁵⁸⁾と。

注

- 1) 木原活信『J. アダムズのソーシャルワークの源流社会福祉実践思想の研究』（川島書店、1997年）、238頁。
- 2) 『家庭週報』第144号1908（明治41）年5月6日、第145号1908（明治41）年5月23日、第146号1908（明治41）年5月30日、第147号1908（明治41）年6月13日。
- 3) Jane Addams, *TWENTY YEARS AT HULL-HOUSE with autobiographical Note introduction and Note by James Hurt*. CHICAGO: University of Illinois Press, 1990, pp. 67-76 “The Subjective Necessity for Social Settlement”によると1892年のマサチューセッツ州プリマスで開催された倫理文化協会の夏期学校での講演である。
- 4) ロデリック・ナッシュ、グレゴリー・グレイヴズ 足立康訳『人物アメリカ史【下】』（講談社学術文庫、2007年）、110頁。
- 5) 前掲書、114-115頁。
- 6) 木原活信『シリーズ福祉に生きる16ジェーン・アダムズ』（大空社、1998年）66頁。
- 7) 前掲書、69-70頁。
- 8) 前掲書、83頁。
- 9) 前掲書、72頁。
- 10) 前掲書、71頁。
- 11) 前掲書、100頁。
- 12) 前掲書、102-103頁。
- 13) 前掲書、90頁。

- 14) 前掲書、92頁。
- 15) 前掲書、107頁。
- 16) 前掲書、110頁。
- 17) 前掲書、112頁。
- 18) 木原、『J. アダムズのソーシャルワーク』、244頁。
- 19) 小笠原宏樹『シリーズ福祉に生きる生江孝之』(大空社、1999年)、21頁。
- 20) 生江孝之、社会福祉古典叢書4 生江孝之集『社会事業綱要』日本女子大学一番ヶ瀬康子編・解説(鳳書院刊、昭和58年)、400-403頁。
- 21) 前掲書、162頁。
- 22) 前掲書、163-164頁。
- 23) 前掲書、166頁。
- 24) 『家庭週報』第543号、大正8(1919)年11月28日。
- 25) 小笠原、前掲書、108~112頁。
- 26) 『家庭週報』第625号、大正10(1921)年8月12日。
- 27) 『日本女子大学校四拾年史』日本女子大学校／編、1942年、214頁。
- 28) 『家庭週報』第633号、大正10(1921)年10月7日。
- 29) 生江、前掲書、403頁。
- 30) 小笠原、前掲書、134-135頁。
- 31) 生江孝之『生江孝之著作集第6巻生江孝之君古希記念 解説・略年譜』(学術出版会、2014年)、3-4頁。
- 32) 杉森長子『アメリカの女性平和運動史1889年~1931年』(ドメス出版社、1997年)、182頁。
- 33) 木原『シリーズ福祉』、115頁。
- 34) 杉森、前掲書、189頁。
- 35) 中島邦、杉森長子『日本女子大学叢書1 20世紀における女性の平和運動—婦人国際平和自由連盟と日本の女性』(ドメス出版、2002年)、31頁。
- 36) 前掲書、31頁。
- 37) 『家庭週報』595・596合併号、大正10(1921)年1月1日。
- 38) 中島、前掲書、年表。
- 39) 高良とみの生と著作第2巻社会への船出 1921-24、(ドメス出版、2002)、14頁。
- 40) 河井道子・ガントレット恒子・加藤高子・高良富子・市川房枝「ジェーン・アダムスを偲び平和を語るの会」(『婦選』第6巻第1号、1932年)、24頁。
- 41) 『家庭週報』第701号、大正12年3月16日。
- 42) 『家庭週報』第715号、大正12年6月25日。
- 43) 『家庭週報』第716号、大正12年7月6日。
- 44) 木原『J. アダムズのソーシャルワーク』、260頁。
- 45) 中島、前掲書、71-72頁。
- 46) 呉禮子「ジェーン・アダムズと新婦人協会・婦人平和協会」『らいてうを学ぶなかで(3)』2011年9月、144頁。
- 47) 島田法子、中島邦、杉森長子『上代タノ 女子高等教育・平和運動のバイオニア』(ドメス出版、2010年)、197-97頁。
- 48) 河井、前掲書、17頁。
- 49) 前掲書、25頁。
- 50) 『婦人平和協一会報』第6号。
- 51) 河井、前掲書、19-20頁。
- 52) 島田、前掲書、略年譜。
- 53) 木原、『J. アダムズのソーシャルワーク』、294-296頁。

- 54) 創価学会婦人平和委員会編 鶴見和子監修『女性と平和を考える』（第三文明社、1989年）、47頁。
- 55) 生江、『社会事業綱要』、410頁。
- 56) 河井、前掲書、19頁。
- 57) 島田、前掲書、177頁。
- 58) 創価学会、前掲書、54頁。

参考文献

- Addams Jane, *Peace and Bread in Time of War. Introduction by Katherine Joslin*. CHICAGO: University of Illinois Press, 2002.
- Addams Jane, *Twenty Years at Hull-House with Autobiographical Notes. Introduction and Notes by James Hurt*. CHICAGO: University of Illinois Press, 1990.
- 麻生正蔵著作集 日本女子大学、1992年
- 一番ヶ瀬康子『アメリカ社会福祉発達史』光生館、1989年
- 小笠原宏樹『シリーズ 福祉に生きる29生江孝之』大空社、1999年
- 亀井俊介、鈴木健次編『自伝でたどるアメリカン・ドリーム』河合出版、1992年
- 河井道子、ガントレット恒子、加藤高子、高良富子、市川房枝「ジェーン・アダムズを偲び平和を語るの会」『婦選』第6巻第1号、1932年
- 木原活信『シリーズ 福祉に生きる16ジェーン・アダムズ』大空社、1998年
- 木原活信『J. アダムズのソーシャルワークの源流社会福祉実践思想の研究』川島書店、1998年
- 呉禮子「ジェーン・アダムズと新婦人協会・婦人平和協会」『らいてうを学ぶなかで（3）』、2011年9月
- ジェーン・アダムズ著 財団法人市川房枝記念会・縫田ゼミナール訳『ハル・ハウスの20年』財団法人市川房枝記念会出版部、1996年
- ジャッドソン作 村岡花子訳『ジェーン・アダムズの生涯』岩波少年文庫、1953年
- 島田法子、中島邦、杉森長子『上代タノ 女子高等教育・平和運動のパイオニア』ドメス出版、2010年
- 杉森長子『アメリカの女性平和運動史1889年～1931年』ドメス出版、1997年
- 創価学会婦人平和委員会編 鶴見和子監修『女性と平和を考える』第三文明社、1989年
- 中島邦『人物叢書 成瀬仁蔵』吉川弘文館、2002年
- 中島邦・杉森長子編『日本女子大学叢書 120世紀における女性の平和運動—婦人国際平和自由連盟と日本の女性』ドメス出版、2006年
- 生江孝之『社会福祉古典叢書4 生江孝之集 日本女子大学 一番ヶ瀬康子編・解説』鳳書院刊、1983年
- 生江孝之『生江孝之著作集第六巻 生江孝之君古希祈念 解説・略年譜』学術出版会、2014年
- 日本女子大学研究プロジェクト平田京子編『「社会に貢献する」という生き方』ドメス出版、2017年
- 『日本女子大学学園事典 創立100年の軌跡』日本女子大学、2001年
- 『日本女子大学四拾年史』日本女子大学校編、1942年
- 野口啓子、山口ヨシコ編著『アメリカ文学にみる女性改革者たち』彩流社、2010年
- マーガレット・H・ベイコン 岩田澄江訳『フェミニズムの母たち—アメリカのクエーカー女性の物語』未来社、1993年
- ロデリック・ナッシュ グレゴリー・グレイヴズ 足立康訳 人物アメリカ史【下】講談社学術文庫、2007年

マリオン・タルボットの家庭のヴィジョン： シカゴ大学の家政管理学科

Marion Talbot's Vision of Home: The Department of Home Administration at The University of Chicago

三神 和子
MIKAMI Yasuko

(1)

1890年創立のシカゴ大学には草創期の日本女子大学とゆかりがある。成瀬仁蔵はアメリカ滞在中、シカゴ大学を訪れており、1904年から07年にかけて欧米を視察した麻生正蔵はシカゴ大学を訪問し、学長、教授にも面会し、授業、寮などを見学している。また、草創期の卒業生がシカゴ大学へ留学、その後日本女子大学に戻り教鞭をとっている¹⁾。とくに大橋広は1922年から26年にシカゴ大学で学んだあと、日本女子大学で家政学部の教授となり、学部長を務めた後、第5代学長として日本女子大学に貢献している。これらの者たちにとってシカゴ大学の経験は何らかの影響を与えていると推測される。

その影響を考えると、おそらく麻生正蔵がシカゴ大を訪れたとき、大学や学生生活の説明からその存在を知ったであろうとそして大橋広が留学中に授業などで直接教えを受け、また生活面での指導を受けたであろうと推測される人物がいる。彼らが訪ねた時期に教授として教鞭をとり、また女学生部長として女子学生の指導に当たっていたマリオン・タルボット (Marion Talbot, 1858-1948) である。麻生正蔵は日本女子大学の大学機関紙『家庭週報』に「英米教育視察談」として米国における家庭科の略史を掲載し、その中でタルボットについて触れ、「シカゴ大学の家政科の主任」と述べている²⁾。

マリオン・タルボットはシカゴ大学に1892年に社会科学・人類学科の助教授として就任、1904年に家庭管理学科 (Department of Household Administration) を創設し、家政学を従来の家事学から社会科学的な学問へと大きく展開させた人物の一人である。もちろん、家政学の祖はタルボットがMITで師事したエレン・スワロウ・リチャーズ (Ellen Swallow Richards, 1842-1911) であるが、そして、家政学 (Home Economics) の名前が統一学科名として決定されたのは1899年のレイク・ブラシッドにおける会議 (エレン・スワロウ・リチャーズは招集者3人のうちの1人である) であるが、タルボットは家政学を社会の中の重要な学問として位置付け、家政学を大きく成長させた。また、タルボットは、1899年から退職する1925年まで、シカゴ大学の女学生部長 (Dean of Women) のポストに就き、学生の学問上の問題から学生生活上の問題まで、女子学生のすべての事柄の統括責任者となった。当時は男子学生を統括する部長 (Dean of Men) と女子学生を統括する部長とが分けられていることが多く、名物女学生部長も多く出現したが、この区分けはやがて消えていった。シカゴ大学以外でも、彼女は1882年、エレン・スワロウ・リチャーズとともにアメリカ大学婦人協会 (American Association of University Women) の前身となる大学女子卒業生協会 (Association of Collegiate Alumnae) を立ち上げている。

このように彼女は女性の高等教育に尽力した人物である。では、彼女はどのような考えをもって

女性の高等教育へ尽力したのであろうか。彼女の活躍の根底にある考えを探ってみる。幸い、女性と高等教育に関して述べられている1910年に出版された『女性のための教育』(*Education of Women*)と自伝である『伝承以上を』(*More than Lore*) (1825年)が入手可能であるので、これらの本を手掛かりに彼女の考えを探り、考察してみる。

(2)

まずは、タルボットの人生を概観してみる。彼女は1858年7月にスイスに生まれた。両親がヨーロッパの長い旅行をしているときに生まれたのだ。育ったのはアメリカ、ボストンである。父親はボストン大学医学部の学部長であり、母親は元教師で、女性に大学教育の準備をさせるための教育機関、ガールズ・ラテン・アカデミー (1877年創設 *Girls Latin Academy*、現在は男女共学で *Boston Latin Academy*) の創設に尽力した人物として名高い。このような両親のもとで育ったタルボットは、ボストン大学に入学、1880年に AB (教養学士) を取得、1882年に AM (文学修士) を取得したのち、MIT で BS (理学士) を1888年に取得した。この MIT で彼女はエレン・スワロウ・リチャーズのもとで公衆衛生学 (*sanitary science*) を学んだ。そしてまだ学生であったにもかかわらず、彼女はエレン・スワロウ・リチャーズとともに大学女性卒業生協会を共同創設、1895年まで事務局長を、1895から97年まで会長を務めた。大学女性卒業生協会は男女平等のために、女性の大学への入学率を上げ、大学で受けた教育を生かす機会を広げ、教育のレベルを男性と同レベルにすることを目指す団体である。その間彼女は1890年から1892年まで、ウェズリー・カレッジで公衆衛生学、家事学、栄養学などを教える教職に就く³⁾。そのころ新しくできたシカゴ大学から、公衆衛生学の助教授兼女学生部長の誘いを受ける。そして1892年彼女はシカゴに移り、家政学科 (*domestic science*) がなかったため、社会科学科に属し、公衆衛生学を教えることになった⁴⁾。1904年に教授に昇任している。

シカゴ大学はイリノイ州シカゴにある男女共学の私立大学で、従来の学問の伝統に縛られず、新しい分野に柔軟な姿勢を示していた⁵⁾。彼女の教える公衆衛生学は人間の健康をその人の暮らすコミュニティとの関連の中で考える科目である。エレン・スワロウ・リチャーズが創始し、大学女性卒業生協会でリチャーズ、アリス・ベルベット、そしてタルボットが作った公衆衛生倶楽部 (*sanitary science club*) が基になっている⁶⁾。従来のアカデミックな分類を超えた学際的な、かつ実用的な側面を持つ研究がなされる新しい科目である。このような科目に対して、シカゴ大学は開かれた姿勢を示していたのだ。

このシカゴ大学の寛容な姿勢に勢いづいて、1904年タルボットは新しい学科を提案する。家政管理学科 (*Department of Household Administration*) である。実はこの学科に先立ち、彼女は家庭技術学科 (*Department of Household Technology*) を考えていた。「社会における家庭を広く見据え社会の単位としての家庭を合理的かつ科学的に管理する」ためのコースである⁷⁾。男子学生と女子学生の両方に提供するつもりである⁸⁾。この提案をハーパー学長 (*President Harper*) に提出すると、この案は有力なものだが、今は資金が足りないと言われた。それで彼女はこの案を温め続けるばかりか膨らまして、機が熟するのを待った。この間、彼女は多くの賛同する教授陣をあつめ、提供するコースをよりよいものにするために、さまざまな人の意見を聞いた。なかでもソフォニスバ・ブレッケンリッジ (*Sophonisba Breckinridge*, 1866-1948) の協力を得たのは大きい。ブレッケンリッジはウェズリー大学卒業後、数学の教師になったが、やがて、故郷のケンタッキーで父親の法律事務所法律を勉強し、弁護士になった。しかし女性弁護士を依頼する客があまりに少ない

ために、1895年ケンタッキーを飛び出し、シカゴ大学でタルボットの女学生部長職の秘書になった。同時に大学院に入り、1897年にはPh. M.そして1901年には政治科学経済でPh. D.を取得。1902年には女学生部長補佐になり、翌年には講師になっている。1904年に、彼女はシカゴ法律学校(University of Chicago Law School)の女性初の卒業生になった。1907年にはハルハウス プロジェクトに参加し、ジェイン・アダムズと社会改善に力を注いでいる。ちなみに、彼女は1915年のハーグにおける女性平和会議にアダムズの助手として参加している。そのブレッケンリッジが家庭の法律および経済的側面に関心を持ち、新しい学科ではこれらに関する科目を強調することを勧めた。確かに、タルボットとブレッケンリッジは目まぐるしく変化する産業や社会の中で法律や経済的側面がどんどん重要になってきており、それらと家庭の係わりを重視したいと考えた。そして学科を練り直し、名称も変えることにした。家庭技術学科という名称では、新しく提供しようと考えている科目が無視されているとは言わないまでも、くすんで見えると考えたからである⁹⁾。そこで、新しい学科が家庭と社会の関係に関する研究に重きを置いていることを強調するために、家政管理学科と名称を改めた。ブレッケンリッジが家庭に関する法律と経済の学科を担当し、タルボットは家庭にかかわる公衆衛生に関する科目を教えることになった。

大学公報は家政管理学科の設立を告げ、次のように説明している。「シカゴ大学は家政管理学科を設立する。」この学科は「家庭の経済的、法的、社会学的、公衆衛生、食物、そして美的関心を論理的に扱いながら、実践的な、しかし大学レベルの仕事と共にを行うコースである」¹⁰⁾。この点においてシカゴ大学は「産業、政治、社会組織の変化が家族生活のための訓練の変化に対応した初めての機関となった。家庭は急速に生産の中心というよりも消費の中心になってきている。このことは、産業や政府のサービス提供機関を通して、家庭を預かる女性が家族と家庭のためにより効率的な世話ができるようになるためには、自家製造の方法についての研究をより少なく、産業や政府機構についての研究をより多く必要とすることを意味する」(Lore 152)¹¹⁾。

The University of Chicago announces the establishment of a Department of Household Administration Theoretical courses dealing with the economic, legal, sociological, sanitary, dietetic, and aesthetic interests of the household will be supplemented by practical work, all to be on a strictly collegiate basis.¹²⁾

(3)

確かにこの学科の設立は意義深い。アメリカにおいて家政学が家事学の出現から始まったことを考えると、なおさらである。家政学の歴史をごく簡単に振り返ってみる。家政学は1829年のキャサリン・ビーチャー(Catherine Beecher, 1800-1878)の女性の家政を科学的・実践的に学ぶ必要性の提唱から「家事学」(domestic science)や「家事経済」(domestic economy)などの科目として始まったと考えられるが、実際には1862年のモリル・ランド・グラント法(Morrill Land-Grant Act)によって無償で公有地を付与された西部、中西部の大学(男女共学)において、料理術(cookery)、裁縫(sewing)、家事学(domestic science)、家事技術(household arts)などが女子に適切な科目としておかれることで大きく広まった¹³⁾。いち早く取り入れたのはイリノイ、カンザス、アイオワである。これらのモリル・ランド・グラント法によって設立された大学は「各地の農業諸団体の農業教育の要求に応えたもので」、「農業や機械技術に関係のある学問分野を教えることを主目的とした」¹⁴⁾実践的な科目の提供である。この考えは女子に家事学のような実践的な科目を

提供することを正当化した。大学は最良の方法や論理的根拠を学ばせることで、農業や産業で科学的で効率性の高い生産を生み出す人材（男性）を輩出する。同時にその男性に見合う家庭を切り盛りし、夫が生産した作物をよりよい加工品、例えば、バター、チーズ、ジャム、などの保存食を製造できる方法を学んだ女性を輩出しようとしたのである。たとえば1872年にはアイオワ大学で家庭科の科目が設置され、料理、裁縫、家事洗濯などが教え始められている。これ以降実践的な科目の教授としての「家政学」を設置する大学は増えていった。この点、中西部の大学は女性に大学への門戸を開放していなかった南部の州立大学、リベラル・アーツの大学として男子と同一の教育を目指していた北東部の名門女子大学（バーナード、プリンマー、マウント・ホリヨーク、スミス、ラドクリフ、バッサー、ウェズリー・カレッジ）とは大きく異なる。中西部では男女共学の大学として女性に門戸を大きく開放してはいたが、女性には女性用の実用的な家事学であった「家政学」を提供していたのである¹⁵⁾。

しかしながら、世紀末になると、エレン・スワロウ・リチャーズが現れ、家事学を家政学（Home Economics）へと転換する。エレン・リチャーズはバッサー女子大学を卒業した後、MITに初めての女子学生として入学し、1873年 MIT より BS を取得する。彼女の関心は人間の日常生活と人間を取り囲む環境（水、空気、食物）であり、彼女は水、空気、食品の汚染や品質調査を実施した。そしてその調査研究から科学を家庭内の事柄、良質な栄養、混ぜ物のない食べ物、質のよい衣類、身体の健康、衛生、そして女性に料理や掃除以外のことに時間をを使わせることのできる効率的な実践方法に应用することで、人間と環境をより健全なものにしたいと考えた。彼女は家事や家庭の仕事に科学を応用するべきであると考えた。そして女性が家庭と家族の栄養に責任があるので、すべての女性は科学を教育されるべきであるとも考えた。それで、彼女は1899年メルビル・デューイ（Melvil Dewey, 1851-1931）¹⁶⁾ とともに、家政学分野の指導者をレイク・プラシッドに招き、この学問分野の全体的な教育システム、理念、目的を話しあった。第1回レイク・プラシッド会議である。この学問の名称決定も大きな目標であった。初めリチャーズはホーム・サイエンスという名称を希望したが、会議で話し合う中で、ホーム・エコノミックスという名に決定した。どのような食品を買うか、どのような衣類を買うかなど、家庭なかで女性が消費を担っていることで、消費という経済を扱っていることから、家庭生活と経済を研究する学問、ホーム・エコノミックスということになったのである。このレイク・プラシッド会議は1908年の第10回まで続き、この会議においてアメリカ家政学会の設立が決定。リチャーズが初代会長となる。この会議によって、家政学は実用的な家事学から、アカデミックで体系化した学問へと転換する。

もちろんタルボットの家政管理学科は、エレン・スワロウ・リチャーズとレイク・プラシッド会議のホーム・エコノミックスの延長上にある。ただ、タルボットがブレッケンリッジと話し合っ学科の名称を家庭技術学科（Household Technology）から家政管理学科（Household Administration）に変更したように、この学科は家庭が社会・産業・政治機構と直結していることを強調し、法律や経済の研究をより前面に出した学科である。リチャーズの科学・化学的側面から家庭を考える視点もさることながら、タルボットの学科は社会全体の法律や経済学の側面から家庭を考えることを強調している点で新しい。ブレッケンリッジが担当した「小売市場の組織」、「生活水準」、「公的機関による保育基準」、「女性の法的経済的位置」、「困窮家族の保護」などは¹⁷⁾、この学科の法律や経済的側面を表し、タルボットが担当した「健康要因としての家」などの科目は家庭の科学的側面を表している。両者が提供されていることは、この学科が法律・経済と科学・化学が合体していることを物語る。

(4)

では、このような学科設立を支えているタルボットの考えはどのようなものなのであろう。それは端的に言えば、家庭礼賛の考えである。もちろんこの家庭礼賛の考えはイギリス・ビクトリア朝の「家庭礼賛」の考えとは異なる。ビクトリア朝の「家庭礼賛」の考えは、社会で利益拡大のために戦う夫が安らぎを求めて帰る場所としての家庭の礼賛である。その家庭では妻である女性は「家庭の天使」として、ひたすら夫を癒し慰め勇気を与える役を務める。妻は家庭の外でも内でも働かず、つまり、収入のある仕事につかず、家事と子供の教育は使用人に任せて有閑夫人としてひたすら優しく天使のように振る舞い、大木である夫にすがる蔭のように自己主張せず、家庭を夫の明日への活力を与える憩いの場にする役目を担う。このビクトリア朝の家庭礼賛の姿勢は19世紀の中産階級が生み出した価値観であり、家庭内に家事使用人が最低一人はいるというイギリス中産階級の発想である。この家庭の礼賛は、確かにイギリスの経済成長に大いに貢献したが、男性中心の家父長制社会の強化および女性の束縛と社会的降格をもたらした。この家庭礼賛では、家庭を切り盛りする、つまり家政を取り仕切る「アメリカの主婦」の出番はない。

タルボットの家庭礼賛は自ら家庭を取り仕切る女性・主婦・世帯主を対象とする。彼女は家庭を社会の核となる「単位」であると考え¹⁸⁾、その家庭をより良いものにするために、社会は家庭を中心として展開するべきであると主張する。社会の中心としての家庭礼賛である。家庭はもはや日用品を製造する場ではなく、日常に必要なものは工場で作られ、家庭はそれを消費する場となった。家庭は消費の中心となり、その家庭での消費の管理を受け持っているのは95%が女性である¹⁹⁾。もちろん、家庭が行うのは製品の購入・消費ばかりではない。電力の消費、水道の消費、排水管の使用など、家庭は社会の提供する様々なサービスの利用者でもある。つまり、家庭のヴィジョンは新しくなり、その管理統括者としての女性には、その新しい任にふさわしい知識と訓練が必要である。

タルボットの考える新しい家庭には二つの種類がある。一つは今述べた家庭内における消費・使用であり、もう一つは家庭から出て社会・コミュニティで行われる消費・使用である。前者はエレン・スワロウ・リチャーズが着目し、よりよいものにするために調査・考察した側面の延長上にある。後者はタルボットたちがさらに踏み込んでいった側面である。どちらも家庭を社会から分離独立したのではなく、社会と密接にかかわり直結している存在であると捉えている。

まず、前者から考えてみる。エレン・スワロウ・リチャーズとタルボットは大学婦人協会を共に1882年に結成したが、その後その協会内に「公衆衛生倶楽部」(Sanitary Science Club)を作り、「家庭と家族の幸福」のための研究にとりかかった²⁰⁾。リチャーズがリーダーとなるこのクラブの目的は科学・化学的に家庭や家庭を取り囲む環境を調査することである。前述したように、人間の日常生活と人間を取り囲む環境(水、空気、食物)に関心のあるリチャーズは、水や空気の汚染、食品添加物や品質の調査を実施した。良質な栄養、混ぜ物のない食べ物、質のよい衣類、有害物質を出さない材料でできた建物、きれいな水と空気こそが、人間の身体の健康と衛生のために家庭が提供できるものだと考えたからである。タルボットも、もちろんこの考えと同じである。公衆衛生学を担当していることは、まさに彼女がこの考えを受け継いでいることを物語っている。しかし、タルボットはこの考えを一歩進めて、法律的、経済的な視点を付け加える。家庭に入ってくる工場で作られ商店で売られる製品や市や町が提供する水や下水などに関する安全基準があるのか、法律でその基準が決められているのか、また、それらが労働者の長時間労働や、安すぎる賃金、児童労働などで作られていないか、きちんとした効率的な製法や労働でできているのか、労働者を守るために、そして社会全体を守るために科学的・化学的視点に加えて、法律的、経済的な視点からの考

察が必要だと考えるのである。自分の家庭ばかりでなく、社会全体の、コミュニティ全体の視野にたって、個々の家庭の幸せは社会・コミュニティを構成する人々の幸せのうえに成り立つと考えるのである。

後者においては、タルボットは家庭の幸福は家庭内だけでなく、家庭の外においても実現されなければならないと考える。購入や供給によって家庭に侵入するものばかりでなく、家庭の一員が、つまり家族が家庭から出て、社会・コミュニティにおいて消費・使用するものが安全、清潔、快適さ、利便性、経済性の点でよいものでなければならないと主張する。鉄道やバスなどの交通手段、町の通り、病院、学校、公園、公共図書館、美術館、ホテル、サマーハウス、劇場など、家族が利用するものが、それぞれ安全で清潔で、合理的で、効率的で、経済的で、環境汚染を引き起こさず、また、それに係わって働く人間の賃金や労働時間が合理的で無理のないものでない²¹⁾。

She demands clean streets, parks, and playgrounds, sanitary laws and inspection, public baths, libraries, kindergartens, vacation schools and manual training, pure food and water, protection from contagious diseases and well-equipped hospitals, juvenile courts and model tenements, municipal art and civic service.²²⁾

もちろん家庭の幸福が社会に要求するものの中には社会福祉も入っている。タルボットの『女性の教育』には「社会福祉の変化」という章がわざわざ設けられ、慈善活動がただの施しから組織だった慈善活動および行政による救済・援助を必要とするものへと変容したことが力説されている。そして家庭はそのような福祉が行われることを要求する。おそらく、この彼女の社会福祉論はブレッケンリッジの影響を受けていよう。前述したように、タルボットとタッグを組んでいるソフォニスバ・ブレッケンリッジは貧困層の援助に関心を持ち、1889年にジェイン・アダムズ (Jane Addams, 1860-1935) がエレン・ゲイツ・スターとともに設立したハルハウス (Hull House) のセツルメント活動に1907年から参加している。そこでますます社会福祉に関心を抱いた彼女は友人のエディス・アボット (Edith Abbot, 1876-1957) とともにソーシャルワーカーのパイオニアとなり、貧困者の援助は個人ではなく市や国がおこなうべきであり、それに携わる者たちは特別な訓練を受けた者になるべきだと考えた。彼女たちは1910年にはシングルマザーのための年金プログラムを促進し、シングルマザーとその子供たちへの国家による初の財政援助に成功した。1920年にはシカゴ大学に社会奉仕運営学部 (the school of Social Work Administration) を設立した。1924年にはアボットが学部長になっている。タルボットもブレッケンリッジの社会福祉の考えを分けもっている。

このように家庭と社会・コミュニティは相互作用関係にあり、決して家庭は社会から分離独立しているものではない²³⁾。タルボットが「家庭は玄関で終わっているわけではない」(the home does not stop at the street door) というのは²⁴⁾、この意味においてである。このように家庭は生産の場から消費・使用の場へと変容し、社会の中心として家庭の役割は重要になった。

The intelligent woman recognizes that no household is any longer independent. she sees that the conditions which she desires for her own household are in large part determined by the community as a whole. She leads in the public demand that every improvement

which modern science can provide shall be incorporated in the activities of the city.²⁵⁾

女性は社会・コミュニティの状態や活動が自分の家族の幸せに直結していることを知っているからこそ、社会・コミュニティに対して要求し、人々の需要 (public demand) を先導する。

したがって、この家庭を管理運営することは、以前のように簡単なことではない。それなりの訓練を受け、能力を身に着ける必要がある。新聞に掲載された広告や商品のラベルを鵜呑みにするのではなく、商品の材料や製造方法を知り、それが法律によって規定された水準に達した適正なものなのかを確かめ、場合によっては、労働者の労働条件や効率、商品の値段の合理性、環境破壊の有無などを確かめる必要がある。子供を公園やリゾートに連れていくときには、その場所の安全性や衛生、空気や水の汚染の有無、行き帰りの交通手段の便宜性などを知っておかないとならない。これらすべてを吟味する眼識を備えていないとならない。そしてその訓練を受けるべきなのは、家庭を預かってる女性なのである。「世界の商品の消費は95%が女性によって管理されており、家庭はこの消費の中心になっているのだ」²⁶⁾。

It is estimated that the consumption of 95 per cent of the world's goods is 女性 directly controlled by women, and the center of this consumption is the home.²⁷⁾

女性が家庭で行う肉體労働は以前よりもかなり少なくなった。しかしそれは女性を責任から自由にするものではない。女性の肩には新しい責任と義務が負わされる。

The result has been to lessen materially the amount of work demanded of the woman in the home in order to meet certain physical needs of her family. But the result is not to free her from responsibility; on the contrary, there arises here a new duty for women, that of intelligently and effectively co-operating with the other members of the community for the welfare of the individual households.²⁸⁾

この責任と義務を果たすために、女性には新しい訓練が必要であるとタルボットは言う。

This is a new and serious responsibility, requiring a training quite different from that demanded by the woman who distributed among the members of her family the products of her own and their labor.²⁹⁾

たとえば、その訓練には次のようなことが含まれている。

Such training should include a knowledge of fabrics and other materials, of methods of production, of law governing different industrial processes, of standards of fitness in article and of efficiency in the workman. I should also include such an appreciation of human needs as will help determine the conditions under which goods are produced, and will demand workshops free from disease, prohibition of child labor, reasonable hours and decent wages for the workman, simplicity, beauty, utility, and genuineness in every product. At the

present time girls are receiving no training to meet these new duties commensurate with their importance....³⁰⁾

彼女の創設する「家政管理学部」はこの訓練を施すところなのだ。女性と同じく男性にもこの学部が提供する授業を履修してほしいと彼女は言っているが³¹⁾、彼女が女性代名詞を使用しているのを考えると、やはり、彼女はこれらの科目を教える対象として女性をイメージしている。

(5)

したがって、家政管理学科を設立し家庭と女性と社会における重要性を主張するタルボットは、それほど声高ではないものの、女性参政権の獲得を主張する³²⁾。なにしろ女性は家庭の安心・安全・快適を預かるいじょう、社会を改善し質を高めていかななくてはならない。女性は人々の需要 (public demand) を分け持つばかりでなく、先頭を切って主導しなければならないのだから³³⁾、男性と同じように政府の指揮・監督をしなければならない。

This larger social spirit also manifests itself in the movement looking toward co-operation in government control through suffrage, a movement which has assumed proportions indicated by the facts that there are four states which grant to women the same political rights as to men, viz., Colorado, Idaho, Utah, and Wyoming, and that the right to vote to women on some or all school questions is granted to women in Arizona, Colorado, Connecticut, Delaware, Iowa, Illinois....³⁴⁾

悪い政府に苦しむのは家庭を預かる女性であり、よい政府に関心があるのは女性である³⁵⁾。彼女は政府を家庭から見つめ、政府のなすことを水道やガス、交通、図書館、学校といった家族や子供の問題として捉える。その政府を司る政治を監督し、自分たちの要求を直に形に結び付ける参政権を女性に与えるべきだと考えるのだ。アメリカでは連邦としての女性参政権付与は1920年だが、それより以前に州ごとに女性の政治参加への考えは異なり、上記にあるように州によっては女性に参政権が付与されていた。たとえば、ワイオミング州は1869年である。このタルボットのこの著書の執筆時期ははっきりしないが (発行は1910年)、上記の4州であったのだろう。1910年にはワシントン州、1911年にはカリフォルニア、オレゴン、カンザス、アリゾナ州で女性参政権が認められている。教育委員会への女性の投票権はもっと多く、タルボットは27の州をあげている。

この女性参政権獲得の理由は興味深い。20世紀初頭は1993年のニュージーランドを皮切りに、1902年のオーストラリア、1906年のフィンランド、1913年のノルウェー、1915年のデンマーク、1917年のソビエト連邦、1918年のイギリスという具合に女性に参政権が与えられ始めた時代であるが、これは女性たちによる獲得運動の賜物である。その参政権獲得運動において女性たちが掲げた大義は、大きく分けると、二つある。男女同質の視点にたつものと、平等ではあるものの、男女の違いを認め、女性ならではの特質を活かそうとする視点にたつものである。家庭中心主義の視点からの参政権要求として、タルボットの視点は後者の政治世界への女性の視点の必要性という主張のグループに入る。この点において彼女の考えは、女性を家事労働から解放しようとしたシャーロット・パーキンズ・ギルマン (Charlotte Perkins Gilman, 1860-1935) の考え方と対照をなす³⁶⁾。

(6)

このように、タルボットは家庭の管理・運営者であることで、女性の能力を社会で発揮させようとした。家政を社会を展開するときの核心であり、その家政を担う女性を社会の重要な社会の担い手とみなした。この意味でタルボットの考えは女性の権利拡張に大いに貢献したと言える。

麻生正蔵も前述の『家庭週報』において、タルボットについて触れた際、タルボットやエレン・リチャード・スワロウたちが家政科を大学教育上の科目として十分価値のあること、また家政学を経済学の一部と見なし、家庭が一個人を有効な人物に、すなわち社会の一員となりえる存在であると考えたことを力説している³⁷⁾。タルボットが日本女子大へ、特に家政科に与えた影響は非常に大きいと言える。

また、さらに言えば、この家庭崇拜の考え方は、タルボットをもっと革新的な考えに導いている。すなわち、家庭を重視するために、彼女はこの担い手を男性にまで広げている。確かに、前述したように、家庭の管理・運営者を女性代名詞で語っており、『女性のための教育』では家庭の管理・運営者のイメージは女性として描かれているが、そして表立っては論じられているわけではないが、彼女は家庭の管理・運営者を女性に限ってはいない。家庭技術学の設立構想の時に男女にこのコースの履修を提供するつもりであると言っているように³⁸⁾、そしてもはや家庭は「女性の領域」ではないといっているように³⁹⁾、彼女の頭の隅では、男性も家庭の管理・運営者になる必要があると考えていることが窺える。彼女の潜在的な思考においては男性も女性も家庭を・管理・運営する時代を予見している。なんと先進的な予見であろう。女性の家事労働からの解放としての共同キッチン、家事労働の賃金化などの要求の過程を飛び越えて、男性の家事・育児参加、男女共同の家庭管理・運営の必要性を彼女は早くも予見していたのだ。彼女の家庭重視の考えは、現代社会に生きる思想である。彼女を現代の男女平等参画の先駆者としてもっと光を当てる必要がある。

註

- 1) たとえば、第4代学長・井上秀、第5代学長・大橋広、高梨孝子があげられる。
- 2) 麻生正蔵、日本女子大学機関紙、「家庭週報」明治39年5月9日、第61号、p. 2。
- 3) 竹俣初実、「家政学運動と女性の家庭の役割——アメリカ女性史の視点から——」『アメリカ研究』、1990 (24)、143-162、アメリカ学会、p. 152。
- 4) Talbot, Marion, *More Than Lore*. 1925, p. 147.
- 5) *More Than Lore*. p. 151.
- 6) *More Than Lore*. p. 145.
- 7) *More Than Lore*. p. 149.
- 8) *More Than Lore*. p. 149.
- 9) *More Than Lore*. p. 150.
- 10) *More Than Lore*. p. 151.
- 11) *More Than Lore*. p. 152.
- 12) *More Than Lore*. p. 151.
- 13) 竹俣、p. 45。
- 14) 竹俣、p. 45。
- 15) 竹俣、p. 48。
- 16) メヴィル・デューイは図書館学者。十進分類法を提唱。
- 17) *More Than Lore*. p. 152.
- 18) Talbot, Marion, *The Education of Women*. Chicago: The University of Chicago Press, 1910, p. 15.

- 19) *The Education of Women*. p. 14.
- 20) *More Than Lore*. p. 145.
- 21) *The Education of Women*. p. 15, 31.
- 22) *The Education of Women*. p. 32.
- 23) *The Education of Women*. p. 32.
- 24) *The Education of Women*. p. 31.
- 25) *The Education of Women*. p. 32.
- 26) *The Education of Women*. p. 14.
- 27) *The Education of Women*. p. 14.
- 28) *The Education of Women*. p. 30-31.
- 29) *The Education of Women*. p. 14.
- 30) *The Education of Women*. p. 14-15.
- 31) *The Education of Women*. p. 31
- 32) *The Education of Women*. p. 48。
- 33) *The Education of Women*. p. 36.
- 34) *The Education of Women*. p. 48-49.
- 35) *The Education of Women*. p. 32.
- 36) タルボットは『女性のための教育』においてギルマンを2箇所引用しているが、どちらもギルマンに対して好意的な引用である。p. 39、55。
- 37) 麻生正蔵、p. 2。
- 38) *More Than Lore*. p. 149.
- 39) *More Than Lore*. p. 5.

アジアの女性の自立に向けた調査研究
—家政学からのアプローチ—

Asian Women's Independence thorough the Perspective of Home Economics

天 野 晴 子 AMANO Haruko
(研究代表者 日本女子大学家政学部家政経済学科教授)

飯 田 文 子 IIDA Fumiko
(日本女子大学家政学部食物学科教授)

佐々井 啓 SASAI Kei
(日本女子大学名誉教授)

高 増 雅 子 TAKAMASU Masako
(日本女子大学家政学部家政経済学科教授)

田 中 俊 子 TANAKA Toshiko
(元日本女子大学大学院家政学専攻客員教授)

望 月 一 枝 MOCHIZUKI Kazue
(元日本女子大学大学院家政学専攻客員教授)

目 次

- I 研究の目的及びブータン王国への訪問調査 天野 晴子
- II ブータン王国の概況及び女性支援の組織 天野 晴子
- III 食に関する JICA 女性支援活動への提案
アジアの女性の自立に向けた調査研究～家政学からのアプローチ 飯田 文子
- IV ブータン王国におけるウェルビーイング：
職業自立をめざす学校の事例を中心に 望月 一枝
- V 伝統織物による女性支援 田中 俊子・佐々井 啓
- VI 女性支援に向けた商品開発
—職業訓練校の女子学生による生活雑貨の商品化— 高増 雅子

I 研究の目的及びブータン王国への訪問調査

天野 晴子
AMANO Haruko

1. 目的及び方法

本研究は、個人・家族・コミュニティの最適で持続可能な生活を目指す家政学的見地から、アジア地域の開発途上国の女性の自立に向けたニーズの把握・分析を行い、現地で教育や地域社会活動に貢献できる手法の検討と構築を目指すものである。

筆者らは、本学を拠点に文部科学省・JICA等との国際協力活動を行ってきた。これらの経験の蓄積を通して得た知見をもとに、この度、新たな調査地としてブータン王国を対象とした。

調査方法は、ブータン王国への訪問調査を実施し、ニーズ把握と分析に基づく提案を行い、現地でのフィードバックと検討を重ね、成果につなげた。具体的には、ブータンの都市部及び農村部の生活の実態を把握し、同国におけるニーズ分析とともに生活課題と女性の自立に向けた改善方法を析出した。さらに、地域の状況に適応できるような女性の生活の質の向上につながる方策の検討を行った。

これらの成果は、日本女子大学における国際貢献活動・研究の一環として、国際家政学会、アジア地区家政学会等を通じて、国内だけでなく広く世界に発信することを期している。

2. ブータン王国の訪問調査

本研究では、2018年度および2019年度に、それぞれブータン王国への訪問調査を行った。当初の計画では、2020年度も訪問予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、渡航がかなわなかった。

1) 2018年度

2018年度は、現地調査の前に、9月25日にJICA 東京を訪問し、ブータン王国に駐在していた専門員にヒアリング調査を行った。

2018年度の訪問調査（2018年10月19日～25日）の日程、訪問先は以下の通りである。

◇10月19日 出発

◇10月20日 バンコク（タイ）経由でパロ（ブータン王国）着
ティンブーへ

* 「道の駅」視察

* チョキアートスクール（伝統美術学校）訪問

校長夫妻と打合せ、ブータンにおける女性とDV問題についてヒアリング

* サブジマーケット（センチュリーマーケット）王制100周年記念市場調査

◇10月21日 標高3150mのドルチェ峠を中心に近隣の環境・農業等視察、市内の書店・資料購入

◇10月22日

* 公立ジムミロセル小学校訪問調査

- * NCWS (女性と子ども国家委員会) 訪問、所長及び担当者にヒアリング調査
- * JICA ブータン事務所訪問、担当官若林氏・ジェンダー関係担当島田氏にヒアリング調査、JICA 現地採用女性職員にインタビュー調査
- * 国立伝統織物博物館訪問、館長リンゾン氏にヒアリング調査
- * バスステーションで女性支援団体の講習を受け売店を経営する女性達にインタビュー調査

◇10月23日

- * カサペ チョキアートスクール訪問視察、校長夫妻へ追加インタビュー調査
- * 有機野菜を栽培し道の駅に出している女性にインタビュー調査
- * ティンブー市内店舗見学
- * 伝統織物製造・販売の女性経営者訪問

◇10月24日 パロ

- * ブータン王立大学教育学部訪問、プグエン教員にヒアリング調査
- * パロ市内の公設市場及び販売店調査
⇒出国⇒バンコク経由

◇10月25日 帰国

2) 2019年度

2019年度の訪問調査は、2019年9月1日～6日に実施した。訪問先は以下の通りである。

なお、現地調査の前に、来日中のチョキ伝統美術工芸学校の校長夫妻に現地の状況についてヒアリングを行うとともに、訪問調査の打合せを行った。

◇9月1日 成田空港出発

◇9月2日 バンコク(タイ)経由でパロ(ブータン王国)着 ティンブーへ

◇9月3日～5日 チョキ伝統美術工芸学校における訪問調査と実技指導実践、ジグミ・ロセル小中学校及び郊外の小中学校の訪問視察

◇9月6日 ティンブー→パロ発 バンコク経由

◇9月7日 成田空港帰着

3) チョキ伝統美術工芸学校における調査と実践

ブータン王国への訪問調査を通し、本研究のカウンターパート的な位置づけとなったのが、チョキ伝統美術工芸学校および同校長夫妻である。チョキ伝統美術工芸学校で修得する技術は、チベット仏教と密接にかかわる。ブータンは、チベット仏教を国家が保護しており、敬虔な仏教国である。各地の行政の中心は、ゾンと呼ばれる城塞・政府出張所・僧院を兼ねた大建築が中核となっており、ラカンと呼ばれる多数の寺がブータン社会の中心的存在となっている。これらの伝統建築や民家では、壁に蓮や雲、宝石、厄除けの守護獣(虎・雪豹・ガルダ・龍)等が描かれ、装飾や調度品にも同様の図柄の彫刻や織物、絵、刺繍等が施される。また、日常的に民族衣装を着用し、伝統的織物文化が定着している。したがって、農業・林業・電力(水力発電)を主要産業とする同国において、伝統美術工芸は、職業的自立に結びつく重要なスキルの一つといえる。

チョキ伝統美術工芸学校は、女性の校長が運営する私立の職業訓練学校である。授業料は無償で個人の寄付による経営で成り立っている。校長の夫は、元政府官吏で、現在はブータンにおいて近年増加している女性に対するDV問題を中心に広く活動を行っている。

2018年度に実施したブータン王国の各行政組織や諸機関・諸団体の訪問調査を通し、筆者らの研究調査活動において、先方のニーズにマッチしつつ、メンバーの貢献も期待できるカウンターパートとして、チョキ伝統美術工芸学校を選定した。

4) チョキ伝統美術工芸学校生徒の技術習得体験の実施

チョキ伝統美術工芸学校の生徒の作品は販売も行っている。現地でその状況を検討し、いくつかの課題もみえてきた。たとえば、作品の付加価値を高める完成度や需要に合った作品制作、販売方法等である。

そこで、同校の女子生徒を対象に、被服分野と調理分野において、経済的自立支援に結び付く技術指導と実践を試みた。具体的には、被服分野では、手芸小物の提案と見本・説明等を行った。調理分野では、現地食材を使ったそば粉クッキーの実習・マーケティング要素を加えた工夫と販売用のラッピング等の体験学習を行った。

3. 研究成果の報告・公表

本研究課題の成果については、以下の報告・公表をおこなった。

1) 2018年度

「アジアの女性の自立に向けた調査研究—家政学からのアプローチ」と題し、2019年1月23日(水)(13:30~16:00、七十年館6階階段教室)に公開研究会・講演会を開催した。主な内容は、1. 報告「ブータン王国の訪問調査報告—女性支援活動を中心に—」 1) 訪問調査の概要、女性支援の組織(天野晴子)、2) 職業自立をめざす学校の事例(望月一枝)、3) 食に関するJICA女性支援活動への提案(飯田文子)、2. 講演「ブータン王国における先行調査から学ぶ」ブータン王国での薬用植物探索と水資源保全を支援するための環境教育教材開発について(講師:中部大学応用生物学部教授 南 基泰氏)、3. 質疑、意見交換 である。

また、2019年に開催されるアジア地区家政学会での報告要旨作成及びエントリーを行った。

2) 2019年度

①国際学会での報告

アジア地区家政学会(Asian Regional Association of Home Economics)第20回大会(The 20th Biennial International Congress 2019、中国杭州で開催)において、研究成果報告“Study of Women’s Independence in the Kingdom of Bhutan—A home economics approach”を行った。

②総合研究所研究発表会

2019年11月30日(土)開催の標記発表会において、中間報告を行った。

③公開報告会

「2019年度 ブータン王国訪問調査報告」と題し、2020年3月5日(木)(15:30~16:40、百年館低層棟3階大学院講義室)、公開報告会を開催した。

④2020年度にU.S.Aで開催される国際家政学会世界大会での報告要旨作成及びエントリーを行い、受理された。

3) 2020年度

追加調査を実施する予定であったが、新型コロナ感染拡大で渡航不可となった。また、成果については、4年に一度開催される国際家政学会世界大会（IFHE、2020年度にアトランタで開催）で発表し、参加者との意見交換を行い、まとめに反映する予定であったが、新型コロナ感染拡大で国際家政学会世界大会が延期され、同学会発表にエントリーを行い審査の後受理されたものの、発表や意見交換を年度内に実施することがかなわなかった。

中間発表の成果として、『総合研究所ニュース』No.31（2020年3月）に、「アジアの女性の自立に向けた調査研究～家政学からのアプローチ（ブータン王国訪問調査を中心に）」が掲載された。

Ⅱ ブータン王国の概況及び女性支援の組織

天野 晴子
AMANO Haruko

1. ブータン王国の概況¹⁾

ブータン王国は、ヒマラヤ山脈の麓に位置する王国で、7000メートル級の山々がそびえる高地にある。中国とインドに接し囲まれており、ネパールやバングラディッシュも近く、首都はティンブーである(図Ⅱ-1-1)。面積は約38,394km²で、日本の九州とほぼ等しい。人口は約75.4万人(2018年・世界銀行)で、チベット系、東ブータン先住民、ネパール系等の民族を有し、宗教はチベット系仏教およびヒンドゥー教等が主である。



図Ⅱ-1-1 ブータン王国の位置

出所：外務省 HP ブータン王国 (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/index.html>)

主要産業は農業、林業、電力(水力発電)で、名目 GDP は24.5億米ドル、一人当たり GDP は3,243米ドル、経済成長率は3.0%である(2018年世界銀行)。

経済概況としては、次のように示される(外務省 2020)。

- (1) ブータン政府は、1961年以降、5年ごとに策定される開発計画に基づく社会経済開発を実施。2013年7月からは、第11次5ヶ年計画が開始された。就労人口の多くが農業に従事しており農業が重要な位置を占めているが、近年は水力発電所の建設や周辺国への売電を含む電力セクターの開発により、工業部門の GDP に占める割合が上昇している。
- (2) ブータンは、国内市場が小さく、ほとんど全ての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、慢性的な貿易赤字を抱えている。インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要

な課題となっている。

- (3) 開発の原則として、国民総生産（GNP）に対置される概念として、国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）という独自の概念を提唱している。経済成長の観点を過度に重視する考え方を見直し、(ア) 経済成長と開発、(イ) 文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、(ウ) 豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、(エ) 良き統治の4つを柱として、国民の幸福に資する開発の重要性を唱えている。

2. ブータン王国における女性支援の組織

ブータンの男女・経済セクター別就労人口の割合は、表Ⅱ-2-1のようになっており、女性の地位は、他の開発途上国と比べて相対的に高い地位にあるとされる。

表Ⅱ-2-1 ブータンの男女・経済セクター別就労人口の割合

	単位：%		
	女性	男性	計
農林業	30.5	27.5	58.0
鉱業	0.1	0.5	0.6
製造業	3.7	2.8	6.5
電気・ガス・水道	0.2	0.6	0.8
建設	0.3	1.5	1.8
卸売・小売業	4.6	3.2	7.8
ホテル・レストラン	1.2	1.1	2.3
交通・金融・通信	0.3	3.3	3.7
金融	0.2	0.5	0.7
不動産など	0.3	0.7	0.9
公務員・軍関係	1.8	7.4	9.2
教育	1.6	1.7	3.3
保健・社会福祉	1.1	2.9	4.0
その他	0.5	0.0	0.6
計	46.4	53.6	100.0

出所: NSB, 2016, *Statistical Yearbook of Bhutan 2016*

しかし、訪問調査で把握した限りでは、都市部と農村部での格差や、民族や宗教等の違いを背景とした地域特性も大きく、一般化できない状況であることがわかった。たとえば、JICA (2017) によると、ブータン国内を大きく中西部・南部・東部に分けると、例外はあるもののおおよそ表Ⅱ-2-2のような違いが示される。すなわち、中西部では、仏教を信仰するチベット系民族のンガロッパが多く、そこでは母系社会・母権社会のシステムで世帯主は女性の場合も多い。南部ではヒンズー教もしくは仏教を信仰し、社会システムとしては父系社会・父権社会でカースト制度がみられ、世帯主は男性である。東部には先住民族のシャチョッパが居住しており、仏教を信仰し、父系社会であるが一夫多妻制もみられる。

表Ⅱ-2-2 ブータンにおける地域特性

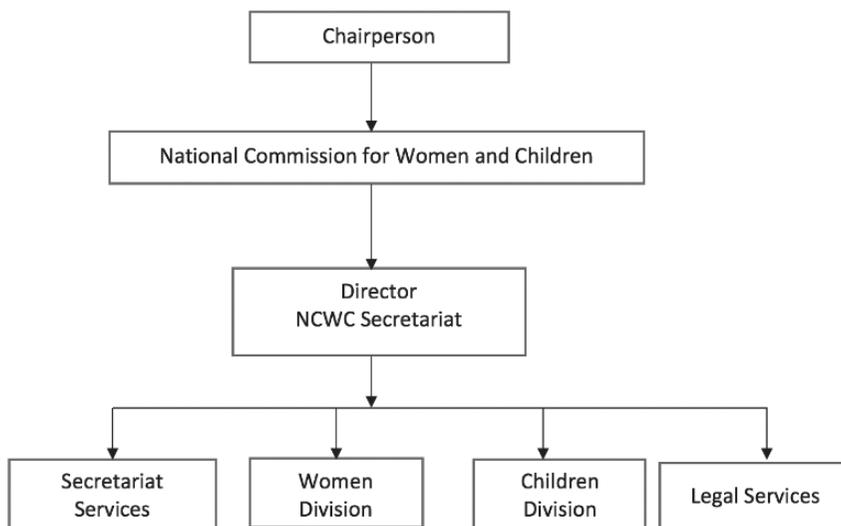
	中西部	南部	東部
主な人口構成	ンガロッパ (チベット系)	ローツァンパ (ネパール系)	シャチョッパ (先住民族)
宗教	仏教	ヒンズー教/仏教	仏教
社会システム	母系社会 母権社会	父系社会* 父権社会 カースト制度	父系社会* (一夫多妻制)
世帯主	女性	男性	女性/男性

*一部例外あり。

出所: JICA (2017) 国別ジェンダー情報整備調査

国際的には、「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する状況（CEDAW）」に関する報告書において、ブータン社会において一特に家庭や職場などに存在している一、より見えにくいジェンダー格差の存在にも目を向けることの重要性が指摘されている。

ブータン王国における女性支援の政府組織には、NCWC（National Commission for Women and Children；女性と子どものための国家委員会）がある。NCWCの組織は、図Ⅱ-2-1のようになっている。



図Ⅱ-2-1 NCWCの組織

NCWCを訪問し実施したヒアリング調査からは、ブータン王国において現在の大きな課題としてDVや子どものケアがあげられること、DVに対しては緊急サポートのシェルターの設置やRENEW（女性支援のNGO）との連携をしていること、育児放棄の対応を行っていること、相談窓口の状況等が明らかとなった。



図Ⅱ-2-2 NCWCの概観と訪問調査

注

1) データ等は主に外務省（2020）による

引用・参考文献

- ・外務省「ブータン王国（Kingdom of Bhutan）基礎データ」（2020年）<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html>（参照2021-05-20）
- ・JICA『国別ジェンダー情報整備調査』（JICA、2017年）

Ⅲ 食に関する JICA 女性支援活動への提案

アジアの女性の自立に向けた調査研究～家政学からのアプローチ

飯田 文子

IIDA Fumiko

1. ブータンの食

ブータン王国人は敬虔な仏教徒（チベット仏教）であり、殺生を好まない。つまり、命を奪った食品である、生肉や釣った魚を食すのは嫌われる。通常は国外から輸入される干し肉や魚の干物が主流であり、肉を扱っている店はインド人が経営している（図Ⅲ-1-1）。自国でと畜せず、インドから輸入した肉なら良しとされる。

そこで、たんぱく源が不足するため、乳製品から摂るのが伝統的でチーズはよく食べている（図Ⅲ-1-2、図Ⅲ-1-3）。野菜も従来は不足していたが、日本人の西岡京治（ケイジ）が、はじめは JICA 専門家（1964-1992）として、期間が終了しても継続的にダイコン・キャベツ、1972年からは米など栽培技術を支援した。近頃は新鮮な野菜が栽培されているがその昔は唐辛子が野菜替わりであった（図Ⅲ-1-4）。伝統的な料理としてエマダツツイ（唐辛子とチーズの煮込み）がある。



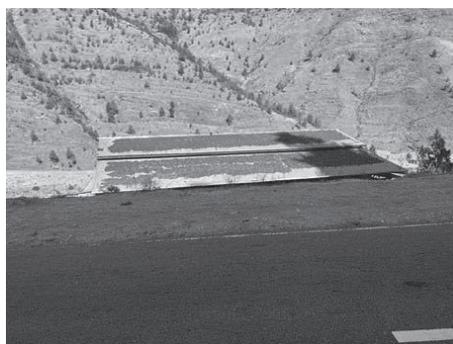
図Ⅲ-1-1 市場の干した魚



図Ⅲ-1-2 市場で売られるチーズ製品



図Ⅲ-1-3 つる下げた乾燥チーズ（チュゴ）



図Ⅲ-1-4 屋根の上に干した唐辛子

2. アジアの仏教と食

紀元前後のインド文化圏はインドの原語サンスクリットで書かれている。インドからガンダーラ（現パキスタン）を経てアフガニスタンから中央アジアへ伝播した。漢の武帝が西域の経路に乗り出し、シルクロードから中央アジアを経て中国に伝わる。肉食禁止は「因果応報」三世輪廻の思想からで、日本における肉食禁止も同様である。殺生をしているとそれに応じた生まれ変わりをすると、この思想から動物をと畜することは嫌われた。肉食禁止による菜食主義では、肉に代わるたんぱく質源が必要となる。日本では、畑の肉と称される大豆製品が発達したように中国や日本では、豆腐として、インドでは、乳製品（乳腐）として食された。腐とは乳製品の胡語に対する宛て字で、固体であって柔らかく弾力のあるもの、という意味である。日本でも奈良時代に乳を煮詰めた（蘇）や乳腐（醍醐）が大陸から伝わった記録が延喜式にみられる。

3. 仏教の3つのグループ

1、漢訳の東アジア仏教圏（ベトナムも入る）

2、チベットからモンゴルに伝播したチベット系仏教圏（ダライラマ）（図Ⅲ-3-1）

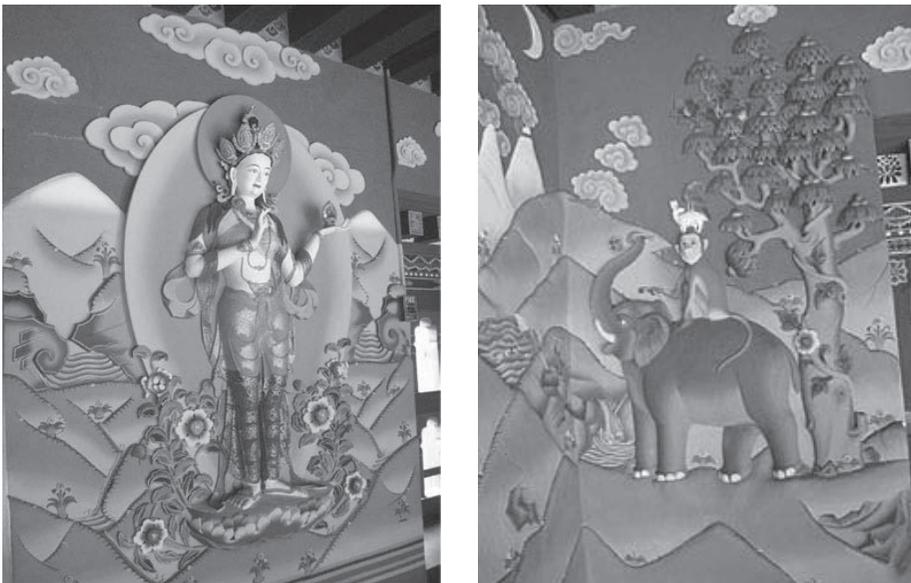
上記2つは大乘仏教

3、スリランカを中心に東南アジアに広まった南方仏教圏（タイ仏教、インドのパーリー語で書かれた阿含（あごん）の経典をバックボーンとする）

3は上座部仏教。

上記仏教の中で、肉食に対する考え方が異なる。上座部仏教で禁止されていないのは、三種浄肉である。三種の浄肉とは、①我が目がその殺すを見ざるもの、②我が為に殺したると聞かざるもの、③我がために殺したるやと疑わざるものであり、自分の目の前や自分のために殺したものでなければ肉食は可能と考える。

ブータンは大乘仏教系なので、やや厳しい肉食禁止思想となる。



図Ⅲ-3-1 寺院（公共機関）にみられるチベット仏教にまつわる宗教画や彫刻

4. 市場にある野菜や乾燥肉・魚

ブータン市場の野菜はインドからの輸入品に比較し新鮮で農薬等も少ない（図Ⅲ-4-1、図Ⅲ-4-2、図Ⅲ-4-3）。



図Ⅲ-4-1 西岡氏のおかげで現在は豊富になった野菜の種類



図Ⅲ-4-2 無造作におかれた干物
(ニャッカム)



図Ⅲ-4-3 ヤクの骨
(乾燥肉シッカムも置いている)

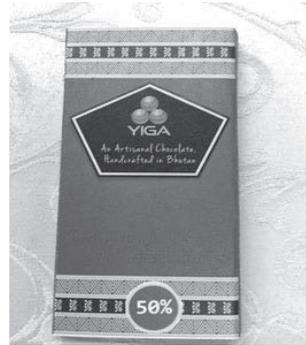
5. 食品の販売に対する試み

上記のような市場の食品は、お土産などの海外への輸出には向かないので、ブータンの食材を利用した加工品の可能性を模索してみた。現存する長期保存に耐える食品として、唯一街中に JICA 支援（加工技術指導）のヘルシーフードの店があった（図Ⅲ-5-1）。

店には、乾燥品として、きのこ、フルーツ（リンゴ）、瓶詰めとしてジャムや澄ましバターがあった（図Ⅲ-5-3、図Ⅲ-5-4）。菓子ではクッキーやチョコレートもあった（図Ⅲ-5-2、図Ⅲ-5-6）。購入し、試食してみると、蓋の密閉が甘く、バターは酸化臭がした。色の変色しているものも平気で売られていたが、既にカビが生えていたと推察される。バターの酸化度を測定してみると、図Ⅲ-5-5のようにバターの酸化がみられた。つまり、JICA の指導はあってもまだレベルは低いと考えられた。



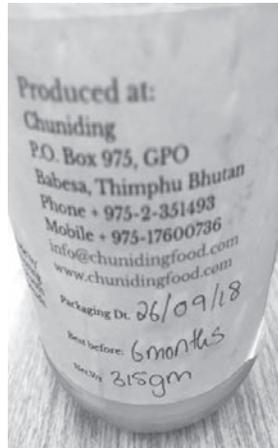
図Ⅲ-5-1 JICA 支援（加工技術指導）のヘルシーフード店



図Ⅲ-5-2 チョコレート



図Ⅲ-5-3 りんごジャム



図Ⅲ-5-4 澄ましバター



図Ⅲ-5-5 POV（過酸化価値）測定



図Ⅲ-5-6 市中のスーパーのクッキー

6. ブータンの素材を利用した提案

1) クッキーの提案

JICA の指導の店や空港でもそば粉などのクッキーは売られているが、ほそほそしていて、あまり甘味が無く、食べにくい。一方、街中に可愛いクッキーがあり、こちらは日本におけるクッキーと大差は無かった。小麦粉は、ブータン製は炒って売られており（図Ⅲ-6-1）、日本のはったい粉のようなもので、グルテンが失活しているので、まとまりにくい。通常小麦粉はインドからの輸入となる。またそば粉は甘いタイプと渋いタイプの2種が売られている。上記のバターに臭みがあったため、ブータンにも市販されているカルダモンという香辛料を使用した（図Ⅲ-6-2、図Ⅲ-6-3Ⅲ）。香辛料はインドに近いこともあり、抵抗がない食材と考えられる。



図Ⅲ-6-1 穀物売る風景



図Ⅲ-6-2 カルダモンクッキー



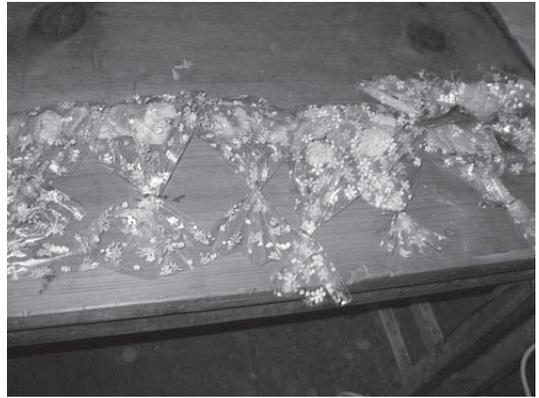
図Ⅲ-6-3 ブータン小麦粉のクッキーとそば粉入りクッキーの2種*

* 2種のクッキーのレシピは以下の通りである。

バター 50gと粉砂糖 40gを混ぜ合わせ、ブータン小麦粉 100g（またはその中でそば粉を50%入れる）とシナモン1ts をふるって、混ぜ合わせ、5mm厚さに延ばし型抜きする。150度のオーブンで20分焼いて出来上がり（図Ⅲ-6-4、図3-6-5）。



図Ⅲ-6-4 チョキアートスクールの女子学生



図Ⅲ-6-5 作成したクッキー

2) ブータン茶

バター茶（スジャ：重曹を入れて泡立てる）などとして飲用にされているブータン茶（図Ⅲ-6-6）は紅茶のような色と味はあるが、香りが少ない。そこで、現地ではレモンミントティーなどになっているが、ブータンで売られている乾燥リンゴとシナモンやクローブを入れたスパイスティー（お好みでミルクを入れて）も提案したい（図Ⅲ-6-7）。



図Ⅲ-6-6 ブータン茶



図Ⅲ-6-7 ブータンのミルクティー

Ⅳ ブータン王国におけるウェルビーイング： 職業自立をめざす学校の事例を中心に

望月 一枝
MOCHIZUKI Kazue

1. はじめに

2018年10月19日、成田からバンコク経由で天野晴子教授代表の調査チームは10月20日パロ空港へ到着した。パロから車でブータン王国首都ティンプーに入り調査を開始した。調査の目的は、個人・家族・コミュニティの最適的で持続可能な生活を目指す家政学的見地から開発途上国の女性の自立に向けたニーズの把握・分析を行い、現地で教育や地域社会活動に貢献できる手法の検討と構築を目指すことである。具体的には、ブータン王国の女性の自立に向けた取り組みを調査することである。

2. 調査の背景

1) ブータン王国

ヒマラヤ山脈東部に位置するブータン王国は、山岳高地に清流が流れ、家々の屋根には赤トウガラシが干してあり、棚田や山並みのなかに、多くの死者を弔う白い旗がはためいていた（写真Ⅳ-2-1）。「ダルシン」（経文旗）と呼ばれる白い旗は、誰かが亡くなると、その供養のために108本のダルシンを立てるといふ。白旗がはためくことが死者への供養であり祈りであり、墓はなく土葬するとの説明を受け、ここは死者と共に生きることが日常の風景になっていると感じた（写真Ⅳ-2-1）。

ブータンは比較的人口の少ない国で、21世紀初頭の人口増加率は世界平均に近いものとなっている。最も人口の少ない地域は、寒くて険しい大ヒマラヤ地域と、ドゥアルス平野に接するマラリア地域である。この2つの地域の物理的条件が悪いため、人口のほとんどは、ブータン中央部と西部の肥沃で集約的な農業が行われている小ヒマラヤの谷間と、インド国境に近い南西部の2つの地域に限られている。大規模な都市センターや町の中では、デュアズ平原にあるブンツォリンが最も重要で、ティンプーからの主要な高速道路の南の終点であり、人口の多い小ヒマラヤの谷間への入り口として機能している。町の中心部では活発な商業活動が展開されている。ブータンの首都ティンプーは、1960年代には単なる家々の集まりに過ぎなかったが、その後、大規模な町に発展した。由緒あるゾン（僧院）は再建・増築され、ブータン政府の事務局が置かれている。「ゾン」は、行政を司る県庁でありつつ同時に僧侶が住む祈りの場である。政治と宗教が並列している建物であり、ブータンの人々を守っている。

パロはティンプーに次いで、ブータンで最も成長著しい町である。1980年代半ば以降、パロとインドのコルカタ（カルカッタ）、ニューデリー、バングラデシュのダッカ、タイのバンコク、ネパールのカトマンズとの間に定期航空便が就航している。人口は若く、約3分の1が15歳未満、約5分の3が30歳未満である。出生率、死亡率ともに世界平均を下回っている。平均寿命は女性が72歳、男性が70歳である。

外務省ホームページの基礎データによれば、ブータン王国は、17世紀、この地域に移住したチベットの高僧ガワン・ナムゲルが、各地に割拠する群雄を征服し、ほぼ現在の国土に相当する地域で聖俗界の実権を掌握した。19世紀末に至り東部トンス郡の豪族ウゲン・ワンチュクが支配的郡長として台頭し、1907年、同ウゲン・ワンチュクがラマ僧や住民に推され初代の世襲藩王に就任、現王国の基礎を確立したという。1952年に即位した第3代国王は、農奴解放、教育の普及などの制度改革を行い、近代化政策を開始したが、1964年、地方豪族間の争いに起因する当時の首相暗殺や、その後任命された首相による宮廷革命の企み発覚を契機に、首相職が廃止され、国王親政となった。1972年に16歳で即位した第4代国王は、第3代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、王政から立憲君主制への移行準備を主導。2006年12月、第4代国王の退位により、現国王（第5代目）が王位を継承。2007年12月及び2008年の総選挙を経て、2008年4月に民選で選出されたティンレイ政権が誕生し、5月には国会が召集され、7月に憲法が施行し、王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主制に移行した。2008年11月に、現国王の戴冠式が行われた。2013年には、第2回総選挙が実施され、また、2018年11月の第3回総選挙を経てロティ・ツェリン・ブータン協同党（DNT）党首が首相に就任した。立憲君主制を取っている。

インド、世界銀行、国連、アジア開発銀行からの資金によって、1961年から始まった一連の5カ年計画の成功は、インドからブータンへの定期的な資金の流れと、インド人技術者の確保に大きく依存している。開発予算の多くはインフラの整備に費やされてきたが、5カ年計画では農業資源や電力資源の開発も重視され、20世紀後半以降、経済は全般的に上昇傾向にある。その原動力となったのが、チュカ・ハイデル水力発電プロジェクト（1987-88年完成）であり、これにより自国のエネルギーを賄うことができるようになっただけでなく、日本外務省のブータン王国基礎データ（2021）によれば、ブータン政府は、1961年以降、5年ごとに策定される開発計画に基づく社会経済開発を実施している。2013年7月からは、第11次5ヶ年計画が開始され、就労人口の多くが農業に従事しており農業が重要な位置を占めているが、近年は水力発電所の建設や周辺国への売電を含む電力セクターの開発により、工業部門のGDPに占める割合が上昇しているという。ヒマラヤ山脈からの清流がブータンの自然と経済を支えていると言えよう（写真Ⅳ-2-2）。ブータンは、国内市場が小さく、ほとんど全ての消費財や資本財をインド及び他国からの輸入に依存しているため、慢性的な貿易赤字を抱えているが経済成長を優先せず、死者と共に生きる日常が豊かな観光資源の保全をもたらしている。インドとの輸出入が圧倒的なシェアを占める中で、インド・ルピー以



写真Ⅳ-2-1 山岳地帯にはためく白い旗（ダルシン）筆者撮影



写真Ⅳ-2-2 豊かな清流と村々 筆者撮影

外の外貨収入を得る手段として豊かな観光資源の開発も重要な課題となっている（日本外務省2021）。

2) ウェルビーイング

国民総生産（GNP）に対置される概念として、ブータンでは、国民総幸福量（GNH: Gross National Happiness）という独自の概念を提唱している。それは、経済成長の観点を過度に重視する考え方ではなく「持続可能で公平な社会経済発展」である。第一に経済成長と開発、第二に文化遺産の保護と伝統文化の継承・振興、第三に豊かな自然環境の保全と持続可能な利用、第四に、良き統治の4つを柱として、国民の幸福に資する開発の重要性を唱えているという。

学校を訪問したときも、国王家族と僧侶（高僧）の肖像画が並んで掲げられ、国王と宗教が共に教育を支えていることが見て取れた（写真Ⅳ-2-3）。人々が休日に訪れ、おしゃべりを楽しむという寺院が公共的な空間を提供していて、周りの風景となじんで時間がゆったりと流れている。



写真Ⅳ-2-3 小学校には国王家族と僧侶（高僧）の肖像画 筆者撮影

Biswas (2015) ら研究によれば、心理的なウェルビーイングの指標を見てみると、ブータン人のスコアは世界各国の中間に位置している。心理的幸福度が特別に高いわけではなく、また、シニカルな考えのように、心理的幸福度が明らかに低いわけでもない。しかし、ブータンの人々は十分な心理的幸福を享受しており、地理的にも経済的にも似たような国の人々よりも、一般的に幸せな生活を送っているように見える。絶対的な意味でも、相対的な意味でも、ブータンは中程度にうまくいっていると言える。興味深いことに、他のタイプの幸福、特に社会的、環境的な幸福を調べると、ブータンの幸福はもう少し複雑に描かれている。Biswas らは、調査の2つの項目について、ブータン人の回答者は非常に高いスコアを示した。具体的には、ブータンは、環境的ウェルビーイングではどの国よりも高く、社会的ウェルビーイングではデンマークとオランダを除く他の候補国よりも高いスコアを出している。このことは、ブータンが所得や地理的条件で相対的に優れていることが、社会的・環境的変数に関連している可能性を示唆している (Biswas ら2015)。これらの変数におけるブータンの高さは、心理的ウェルビーイングの例外的な高さには直結していないと考えられるが、社会的・環境的な要因が、経済発展の面で地域的に格差が少なく、所得的にも格差が少ないことが、人々の生活の質を担保し、ブータンの人々を守っているのかもしれない。特に、ブータンが高度に経済的に発展した国ではないことに留意する必要がある。ブータンの回答者のうち、テレビを持っていると答えた人は約4分の3しかおらず、前年に飢えた人は6%であった。このように、やや貧弱な物質的な状況を踏まえると、国民の社会的、心理的、環境的な幸福度は予想以上に高いと言える。

ブータンにおける生態系サービスの価値を、利益移転の手法を用いて推定し、人間の福利に対する全体的な貢献度の初期評価を行った結果、ブータンにおける生態系サービスの総推定価値は、約155億ドル/年(7,600億円/年)であった。この価値のほとんどは森林に由来するもので、地表の74.5%を占め、推定価値総額の93.8%を占めている。耕作地は2番目で、全体の3.7%を占めているが、土地面積の8.0%に過ぎない。全体の利益の53%はブータン国外の人々にもたらされており、主に気候調節(年間35億ドル)と観光・レクリエーション(年間25億ドル)に起因する。また、全体の47%が国内の人々にもたらされている。ブータンの人口70万人を前提に、生態系サービスから得られる恩恵を一人当たり10,400ドル/年(NU511,000/年)と推定している (Biswas ら2015)。

ブータン王国では、教育と医療がブータン国民に無料で提供されるだけでなく、観光に訪れた者も医療が無償で提供される。偶然、天野晴子教授代表の調査チームメンバーが転んでケガをした時も、周りにいたブータンの人々が駆け寄り、病院への搬送を積極的に担ってくれた。また、そのメンバーのレントゲン撮影を含む医療費も無償で提供された。

3) 本調査の目的と背景にある世界観

本調査の目的は個人・家族・コミュニティの最適で持続可能な生活を目指す家政学的見地からアジア地域のアジア地域の開発途上国の女性の自立に向けたニーズの把握・分析をすることである。今回、天野晴子教授代表の調査で考察されたことは、豊かな自然環境の保全と持続可能な利用によるブータン王国の在り方であった。これは経済学者宇沢弘文(2000)がゆたかな社会の基本的諸条件の第一に「美しい、ゆたかな自然環境が安定的、持続的に維持されている」ことをあげていることや「すべての人々の人間的尊厳と魂の自立が守られ、市民の基本的権利が最大限に確保できる」ことという重要な観点である(宇沢2000:2)。加えて、公共哲学及び科学哲学者の広井良典(2015:40)が資本主義と近代科学の共通する世界観を示したものが世界に広がっていること(表

IV-2-1) をふまえるならば、本調査目的の意義が浮かび上がる。

広井 (2015) の表 1 が市場経済と近代科学の帰納的な合理性には、共同体からの個人の独立が背景にある世界観があることに對して、筆者 (表 IV-2-2) はブータン王国では自然を残しつつ、水力発電や観光による持続可能な経済を志向し、それを支える政治と宗教があり、背景の世界観は、家族を水平的垂直的に広くとらえた共同体と個人のつながりがあると考えた。広井 (2015) の表 IV-2-1 に示したように GNP を掲げて経済の拡大・成長を追求する現代社会では「法則」を追求し、背景には自然を支配しようとする人間と自然との切斷の世界観があるとした。これに對して、筆者 (表 IV-2-2) はブータン王国では、国民総幸福量 (GHN) を掲げてゆるやかに公平な経済成長を志向し、教育と医療という社会共通資本を無償化して、人間と自然の共生を企図して、生と死が森にダルシンがはためくという日常の風景となっていると考えた。

表 IV-2-1 資本主義と近代科学の比較—共有する世界観

資本主義	近代科学	背景にある世界観
市場経済	帰納的な合理性 (ないし要素還元主義)	共同体からの個人の独立
拡大・成長	「法則」の追求	自然支配 (←人間と自然の切斷)

広井良典 (2015)、40頁より

表 IV-2-2 ブータン王国の国民総幸福量 (GNH: Gross National Happiness) を支える世界観

持続可能で公平な社会経済発展	立憲君主制	背景にある世界観
自然を残しつつ、水力発電や観光による経済	政治と宗教 (仏教)	共同体と個人のつながり (家族概念が広い)
ゆるやかに公平な経済成長	教育と医療の無償化	人間と自然の共生 (生と死が日常の風景に)

筆者作成

本研究のフィールド調査によって、明らかにされたことは、ブータン王国では、家族や地域の共同体が現代社会より広く時空を超えて存在し、人間と自然がゆるやかにつながっていたことがある。家族も現代の日本と比べて、親族や先祖を含む空間も時間も大きな家族概念が日常的であり、「6. 伝統織物による女性支援」で述べられている女性の正装キラや男性の正装ゴにもその家族概念の広さと時間を超える深さが見て取れた。例えば、首都テンプーのタシチョ・ゾン (Tashichho Dzong) に出かけたときの男性の正装と女性の正装の例がある (写真 IV-2-4)。男性は祖父から譲られた白い麻の布をまとい、女性は夫の姉が丹精込めて織ったキラを肩にかけていた。ブータン王国の重要な場所に訪れるとき、祖父や義理の姉の思いが織り込まれた服装をまとして、祖父や義理の姉の思いと共に参っていたのである。

タシチョ・ゾン (写真 IV-2-5) は、ティンプーの中心から少し北側にあり、国王の執務室があり、周囲に王宮や国会議事堂などの重要施設が集中している。この建物は、1950年代にブータン第3代国王ジグミードルジワンチュクの名により建造され、釘を一本も使用せず、木組のみで建てられており、ブータンの伝統的な建築様式である。ブータンの宗教における総本山の役目も果たしながら政治の中心でもある。人々はゾンを訪れるときは、家族の思いのこもった布をまとして、参っていた。



写真Ⅳ-2-4 筆者撮影 男性の正装ゴ（白い布は祖父から譲られたもの）と女性の正装キラ（精巧な織物は親族の織物名人の義理の姉からのもの）



写真Ⅳ-2-5 タシチョ・ゾン
筆者撮影

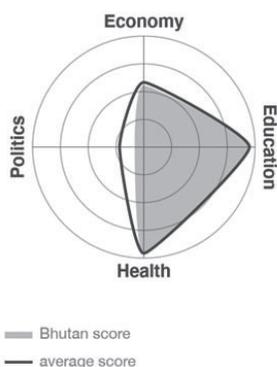
ただし、表Ⅳ-2-2に示したようにブータン王国は一見すれば、持続可能で公平な社会であるように見える。しかし、本調査の家政学的見地からみると共同体のなかで女性が「その先天的、後天的資質と能力とを十分に生かし、それぞれのもっている夢とアスピレーションが最大限に実現できるような仕事にたずさわり、その私的、社会的貢献に相応しい所得を得て、幸福で、安定的な家庭を営み、できるだけ多様な社会的接触をもち、一生をおくることができるような社会」（宇沢2000：2）に十分な社会ではないことに着目した研究である。

グローバル化の波はブータン王国にも押し寄せ、人々はスマートフォンを持ち、英語を話せることから世界の情報に簡単にアクセスできる。また、ユニクロの服が街で売られ、それは寒さをしのぐためには軽くて温かくスマートなものとして重宝されていた。しかし、女性の経済や政治参加はつぎのように遅れている。

世界経済フォーラム（World Economic Forum: WEF）が2021年3月、「The Global Gender Gap Report 2021」を公表し、各国における男女格差を測るジェンダーギャップ指数（Gender Gap Index: GGI）を発表した。この指数は、「経済」「政治」「教育」「健康」の4つの分野のデータから作成され、0が完全不平等、1が完全平等を示している。ブータン王国は156か国中130位に位置している（図Ⅳ-2-6）。なお、日本は120位である。

4）本研究の特徴と意義

世界フォーラムのジェンダーギャップ指数によれば、ブータン王国の女性は、健康と教育に関する指数は高いが、経済と政治に関する指数が低いことが顕著である。すなわち、本調査は、持続可能で公平な経済を維持し発展しつつ、個人・家族・コミュニティ（共同体）とのつながりを重視し、女性がどのように資質能力を生かしていけるのかを調査・提案できるところに特徴がある。具体的には、ブータン王国の女性が経済的な力をどのようにつけていけばよいか、そのためにはどのような課題があるかを調査チームの生活経営、食、被服、教育の専門性を生かした多角的な家政学的見



Global Gender Gap Index	2006 score		2021 score	
	2006 score	2021 score	2006 score	2021 score
Economic participation and opportunity	n/a	-	130	0.639
Educational attainment	n/a	-	117	0.954
Health and survival	n/a	-	131	0.963
Political empowerment	n/a	-	137	0.082

図Ⅳ-2-6 ブータン王国におけるジェンダーギャップ指数（世界経済フォーラム2021より）

地で分析検討できること、調査者が全員女性であり、女性の視点という共通性を生かして調査分析するところにある。本調査の意義は、持続可能で公平な経済を保持しつつ、女性がエンパワーされる具体的な方策を提示できることにあると考える。

3. チョキ・トラディショナル・アート・スクール訪問調査と結果

2018年10月23日 CHOKI TRADITIONAL ART SCHOOL を訪問した（写真Ⅳ-3-1、写真Ⅳ-3-2）。この学校は個人の寄付で運営する私立の職業訓練学校で、169名の学生（女学生約20名）が寮と学校を行き来しながら暮らしていた。1999年設立チョキ・トラディショナル・アート・スクール（伝統美術学校）は、ブータンの恵まれない若者たちに伝統的な芸術・工芸品のトレーニングを提供する唯一の民間慈善団体である。この学校では、授業料、食事、宿泊施設を無料で提供し、ブータンの豊かな文化遺産の普及に努めている。平山（2016）によれば、ブータンにおける初期近代教育では、チベット仏教を基本とするエリート教育が宿舎と学校を共にすることで実施され、それは男子のみの学校であった。本調査チームが訪問した小学校では男女が学んでいたが、男女に入学が許される国立の職業訓練学校に入るには、家族の支援が必要であり、きょうだいが多い場合、男子が優先されてしまうことが少なくない。その意味で、チョキ・トラディショナル・アート・スクー



写真Ⅳ-3-1 チョキ・トラディショナル・アート・スクール 筆者撮影



写真Ⅳ-3-2 チョキ・トラディショナル・アート・スクール 筆者撮影



写真Ⅳ-3-3 本調査チームの高増教授の講演を熱心に聞く女生徒ら 筆者撮影

ルで女子学生を受け入れていることは女性の経済的自立に資することが大きいと考える（写真Ⅳ-3-3）。

1) 職業的自立を目指して

チョキ・トラディショナル・アート・スクールでは、女性が縫製、刺繍、織物、絵画の技術を身に付け職業的（経済的）自立を目指していた。例えば、2018年 Manisha Rai さんは、2012年に本学校に入学し7年間の修行を経て女性で初めての Thanka painter（宗教的絵巻を描く絵師）として卒業した（写真Ⅳ-3-4）。Manisha さんは6人姉妹だったので、この学校があったから自分の興味関心を職業的自立に結びつけることができたという。ブータン王国には政治と宗教の中心であるゾンや寺院が多く、その建物を飾る絵画の技術は主に男性によって担われてきた。緻密で形式にのっとった宗教絵巻を描くには、長い修行と才能が相まって、Thanka painter となっていくのだが、Manisha Rai さんは国立美術学校に通うには、家の事情でかなわなかったがチョキ・トラディショナル・アート・スクールでは、授業料、食事、宿泊施設を無料で提供しているので、Thanka painter となることができた。7年の修行を支える生活費や居場所の提供も含めて無償であったからである。



写真Ⅳ-3-4 Manisha Rai さん 筆者撮影



写真IV-3-5 各教室に表示されているレベル 筆者撮影

2) 教育課程

チョキ・トラディショナル・アート・スクールは、レベル1～7に分かれて、女性が縫製、刺繍、織物、絵画の技術、男性は、木彫、絵画の技術を学んでいた（写真IV-3-5）。

① 縫い物の授業

1年生は小物を縫っていた（写真IV-3-6）。



写真IV-3-6 小物を縫う1年生 筆者撮影

2年生は寺院で使う物をミシンで縫っていた（写真IV-3-7）。



写真IV-3-6 小物を縫う1年生 筆者撮影

② 織物の授業

織物の授業は高度で難しい技術を要する。どこにどのような色の糸でどのように織り込むのかを頭のなかに正確に描き計算し、美しく織り上げるためには、高度で難しい技術・技能と粘り強い丹念さ、高度な暗記力が必要になる。そのため、修行期間を長くすればできるというものではなく、



写真IV-3-8 織物の授業 筆者撮影



写真IV-3-9 22歳レキチョレン ハンバンから来て3年目 筆者撮影



写真IV-3-10 織物を織る孤独を支える窓からの景色 筆者撮影

ある意味の難易度が高い知的・技術的才能が必要となるので、選ばれた女性が担っている（写真IV-3-8、写真IV-3-9、写真IV-3-10）。これは街の織物店で聴き取ったことであるが、一つの織物を仕上げるための根気と暗算のようなことを繰り返すので、頭がおかしくなるほどの粘りと体力と高い知性と才能が必要であり、集中力が大事だという。そのためには孤独な作業を続けていくことが不可欠となる。

③ 刺繍の授業

刺しゅうの授業は難易度の低いものから、高いものへと訓練することで、身に着く授業であった。最初は糸の引き具合が適切ではなく、土台となる布がゆがんでしまうことも少なくない。これは例えば刺しゅうの木製の枠組などを提供することで解決できるのではないかと考えた（写真IV-3-11）。



写真IV-3-11 刺しゅうの授業 筆者撮影



写真IV-3-12 刺しゅうの授業 仏画を刺しゅうで描く 筆者撮影



写真IV-3-13 模写をする絵画の授業
筆者撮影



写真IV-3-14 模写をする絵画の授業
筆者撮影



写真IV-3-15 模写をする絵画の授業
筆者撮影



写真IV-3-16 レベルが高くなると描く
絵画が大きくなる 筆者撮影

刺しゅうの高い難しいものとしては仏画を刺しゅうで描くということがあり、刺しゅうも仏教とつながって職業的自立を支えていた（写真IV-3-12）。

④ 絵画の授業

絵画の授業は男女共修で、ひたすら模写を難易度の低いものから高いものへと繰り返すこと、同じクラスの仲間の描き方から学ぶという手法で行われていた（写真IV-3-13、写真IV-3-14、写真IV-3-15、写真IV-3-16）。

3) 作品の販売

生徒の作品を訪問者に販売し運営資金にしていた。販売する作品は仏教に関するものだけでなく、マフラーやブックカバーなどの日用品も展示されていた（写真IV-3-17、写真IV-3-18）。

これら店内の作品群を見たとき、調査チームでは、日用品として改良を提案できる小物デザインや店内の展示方法を観光客の購買意欲をそそるように展示する改良案（ディスプレイ案）などができるのではないかと考えた。

4) 結果と考察

ブータン王国訪問調査とチョキ・トラディショナル・アート・スクール調査からみえたもの
個人・家族・コミュニティの変化と技術革新

医療と教育が無償で、宗教が政治と同様に大きく人々の幸せな生活を支えていたブータンにもグ



写真Ⅳ-3-17 Exhibition and Sale Room 筆者撮影



写真Ⅳ-3-18 さまざまなものが並ぶ店内筆者撮影

ローバル化の波は押し寄せている。農村部の女性は15歳から16歳で結婚するが、スマホが普及して SNSなどで知り合った恋人がいることなども珍しくないという。若年結婚なので、子どもが多く、女性の経済的自立が難しく夫からのDVなどの問題も少なくない。離婚も多く、子どもたちの生活基盤が不安定になっている。

CHOKI TRADITIONAL ART SCHOOLは女性たちに技術を身に付けさせるだけでなく、衣・食・住を提供し女性たちの生活を支えている。現在の授業は需要のある仏教に関する絵画や刺しゅうや織物の技術だが、今後は持続可能な経済を維持しつつ、観光資源などを活かした社会の変化に応じた作品づくりのデザイン技術やコンセプト、デモンストレーションなどの技能が必要となるだろう。特に伝統的な高度な技術を活かすデザインや作品の現代化が望まれる。

また、今回のブータン王国訪問調査では、ブータン王国の伝統や歴史をどこまでも重視しながら、不可視化されていた女性の資質能力を開発して、より持続可能で公平なブータン王国の発展をどのように語るのかが問われた。グローバル化の波に吞まれて世界中が画一化しつつある現在、ブータン王国は独自の経済指標を用いて、大自然の恵みを維持する政治や宗教を日常の暮らしの風景や人々の習慣として維持していた。家族の人数が年々減少し個人化している日本では、経済成長が順調なときは、個人の支出や選択ですべて解決できるように見えたが、コロナパンデミックでは経済がストップしたとき、脆弱な個人や家族や女性の状況が浮かび上がった。ブータン王国では、家族



写真Ⅳ-3-19 校長先生夫妻と先生たちと日本女子大学訪問チーム



の範囲が親族をも含む広い範囲で交流があり、先祖とも日常的につながり具体的な暮らし方にしてきた。このような個人・家族・コミュニティの在り方から私たちが学ぶものが大きいと考察できる。コロナパンデミックのブータン王国では、中間集団が多様にあることが人間の脆弱性を守ることに、持続可能な公平な経済の在り方との関係がどのような様相を見せたのか、渡航が可能になったときの課題としたい。

引用・参考文献

- ・ 宇沢弘文『社会敵共通資本』（岩波書店、2000年）、2-3頁。
- ・ 日本外務省「ブータン王国（Kingdom of Bhutan）（2021）基礎データ」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bhutan/data.html#section2>（参照2021-5-20）
- ・ 平山雄大「ブータンにおける初期近代教育事情の解明—近代教育50年史」『ヒマラヤ学誌』（京都大学ヒマラヤ研究会2016年）No.17、pp. 162-173.
- ・ 広井良典『ポスト資本主義 科学・人間・社会の未来』（岩波書店、2015年）、40頁。
- ・ Biswas-Diener, R., Diener, E., & Nadezhda Lyubchik, N.. "Wellbeing in Bhutan" *International Journal of Wellbeing*, 5 (2), (2015), pp. 1-13. doi:10.5502/ijw.v5i2.1
- ・ 世界経済フォーラム「ジェンダーギャップ指数2021」http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf（参照2021-5-20）

V 伝統織物による女性支援

田中 俊子・佐々井 啓
TANAKA Toshiko, SASAI Kei

1. はじめに

ブータンは緻密な美しい織物で知られている。Royal Textile Academy of Bhutan（以下 RTA と記す）は貴重な伝統的織物の消失を危惧し保存活動を行うとともに技術の継承・発展を意図した活動を盛んに行っている。その一環として織りの研修コースを実施している。織手は殆どが女性であることから、この研修コースは女性の自立支援に現実的な役割を果たしているという。

ティンプー市にある RTA を訪問、見学・調査し、博物館長、学芸員に面談し、貴重な活動の拠点となっていることが確認できた。以下報告する。

2. Royal Textile Academy of Bhutan

RTA は第 4 代国王の第 4 王妃のサンガイ・チョデン・ワンチュク ギャルウム（Her Majesty the Queen Mother Sangay Choden Wangchuck）の後援の下に 2005 年 5 月に非政府組織の非営利団体として設立され、2011 年 6 月には市民社会機構のブータン法 007 に沿って市民社会組織として登録された。サンガイ・チョデン・ワンチュク陛下は現在も総裁を務め、この下理事会がおかれて運営されている。

ブータン王国では公的な場での民族衣装のゴ（男性）とキラ（女性）の着用が義務付けられている。材料である織物は技術的に高度な、美しいものが多い。その織手は女性で、伝統織物技術を身に付けて織れば生活が可能になるため、従来女の子は目の良い子供の頃から織を家で習い、織手として成長し収入を得て生活が可能となっていた。ところが近年はインド製の廉価な織物の普及と学校教育の普及で、通学のため伝統技術を継承する者が減少してきた。このため伝統技術の伝承に危機感を感じ、この危惧を受けて RTA が設立された。

設立の主な目的は下記の 2 つである。

- ①失われかけている古い伝統的染織品の保存。
- ②伝統的織物技術の継承・発展により殖産興業を図る。

目的①のためには、下記 2) の織物博物館の建物が設置され染織品が展示され一般の見学に供されている。海外に流出した貴重なアンティーク織物の買戻し品の寄付を受け入れるなどもしている。

収蔵品の保存・修復のためには下記 3) の織物保存センターが設立されている。

目的②のためには織物教習所（下記 1）を設置し活発に活動し、女性の自立支援の実をあげている。

また、伝統技術の継承と発展を図り、その結果として伝統産業振興のための様々な活動を行っている。下に代表的なもの挙げる。

- ①フェスティバルの開催。毎年 10 月に実施。20 の県から 2 人ずつの優れた織り手を選び実演販売

を行う。

②織物コンクールの実施。キラ部門、ゴ部門、モダン部門を設けそれぞれの優勝者に賞金を出し、入賞も表彰される。ブータンでは、技術的に優れた織手であっても社会的な地位は高くないため、受賞・表彰が多少なりとも織手が社会的に認められるきっかけになれば良いと考えられている。

③様々な染や織のワークショップ

1) 織物教習所 The Weaving School

織物教習所では、研修生に伝統的な織り、糸染めの技術、デザインと色の組み合わせに関する現代的なスキルを教習し、併せてビジネスと簿記法の基礎も訓練している。

2016年6月現在で200人以上の研修生からなる11の組がこの教習所の研修を修了した。

この研修は3ヶ月以上にわたり、研修生は平織り木綿、絹織り、ヤトラ織りの訓練を受ける。スキルレベルに応じてシンプルな模様や複雑な模様を織る。初心者は通常木綿の平織りから始め、徐々にシンプルな模様織を学んだ後、絹糸や複雑な模様織に進んで学ぶようになっている。

私たちの調査の帰国後に入った情報では、昨年11月から、労働・人事省の支援を受け、失業者や海外からの帰国者などの求職を希望するもの20人に、給付金を受けつつ3か月の研修がうけられるコースが実施されたということである。

2) 織物博物館 Textile Museum

織物博物館には、ブータンの豊かな織物の伝統と生活様式の理解をさらに深めるための展示がされ一般の見学に供している。2階部分が常設展ギャラリーとなっておりブータンの地方と民族ごとの服飾の展示がされ、1階部分は企画展のギャラリーとなっている。1階の1部屋ではブータンの伝統織物についての紹介DVDの上映がされていた。館内では織物の実演や販売コーナーがあり、研修生の製作品もおかれていた(図V-2-1、図V-2-2)。



図V-2-1 織物教習所 (RTA ホームページより)



図V-2-2 織物博物館 (RTA ホームページより)

3) 織物保存センター The Textile Conservation Center

織物保存センターは、貴重な織物や工芸品の保存と修復を国際的に認められている方法と技術で行う国内で第1の施設である。現在、主として織物に焦点を当てているが、織物だけでなく金属、木工、絵画などのコレクションも増えたため、これらの芸術作品や遺品も含むように保存部門が拡大するということである。

また、当博物館収蔵品の保存を担当しているだけでなく、要望に応じてブータン各地の寺院や修道院の収蔵品の補修作業も引き受けている。僧侶を対象に保管に関する研修などの提供もしているとのことであった。

4) その他

敷地内に他の建物と同様の伝統様式の新築の建物が完成していた。オフィスビルとして貸出すので RTA は賃貸料収入を得て寄付に頼らない運営を目指すとして報告している。日本の JICA ブータン事務所も数日中にこの建物に移転するとのことであった。

3. ブータンの衣装と織物

ブータンは、ち密で素晴らしい織物が注目されている。伝統的な衣装は、この織物の特性を生かした形である。

男性はゴという衣服である（図 V-3-1）。ゴは、衿が着物のような衿が付いた打ち合わせ型の衣服で筒袖であり、身頃は幅が広く、深く打ち合わせている。身頃の部分を膝までたくし上げ、帯で結ぶ。たくし上げた部分はポケットのようになっており、そのなかに日用品を携帯している。下には白いシャツを着用し、袖口に広く折り返している。ハイソックスと靴を履く。男性の織物は、赤や茶系の縞柄が多くみられる。

女性はキラという衣服であるが、3枚の布を接いで130～230cmにして、腕の下から横に巻き、前部三重、後ろ二重になるように巻く（図 V-3-2）。肩の部分で2か所、コマというブローチで留める。細帯でウエストのあたりを締め、キラの下にはブラウスを用いる。キラの上にはジャケット風の上着を羽織る。

近年では、ハーフ・キラといい、着装に便利なスカート状のキラと上衣を組み合わせたスタイルが定着しつつある（図 V-3-3）。

このようなブータンの衣装の基本となった織物は、伝統的な天然繊維を天然染料で染めた糸を地機、高機を使用して織る。織の種類は片面縫取織、両面縫取織、平織、浮き織、綾織などの技法が用いられる。

現在、伝統的な織の技術者であるジャンベ・チョデン氏は、手織りが盛んな東部地域の出身で、村では小さいときから織の技術を学び、1年間に1枚程度しか織れない手の込んだ片面縫取織を2枚織りあげて首都に持っていき、その代金で生計を立てていた典型的な織り手である。時には王族からの注文も受けたそうで、RTA のコンクールの伝統デザイン部門で数回、入賞した経験のある、優れた技術保持者である（図 V-3-4、図 V-3-5）。

織り手はほとんどが女性で、近年は学校に行くことから、年少での訓練の時間があまりとれなくなったそうである。また、化学染料や合成繊維の使用など、伝統を受け継ぐことが次第に難しくなってきた。また、優れた織り手であっても、その地位は低く、単なる職人としてしか認められない現状があるそうである。

女性の自立のためには織物は重要な役割を果たしていたが、今後、RTA の活動による技術の普及を目指した研修プログラムや、デザインコンテストなど、ブータンにとっては観光を目指した国造りにおいて、伝統的な高い技術を持った織物は重要な資源であるが、現状ではなかなか難しい問題であろう。今後、織り手の地位の向上や継続的な技術の評価がなされることが、女性支援に大きな意味を持つのではないかと、と思われる。

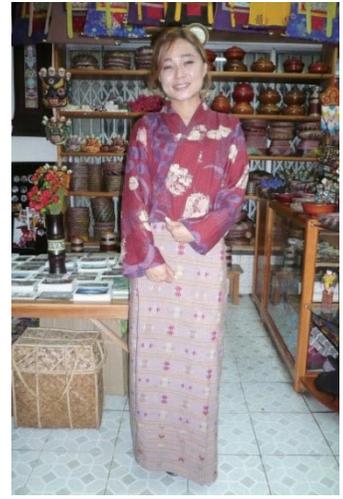
なお、首都の染織品や手芸品を扱う店舗では、女性が営業をおこなっているところが多くみられた。また、屋台風の販売所も道路に面して設置されており、ここでも女性の起業が目立っていた。



図V-3-1 ゴ



図V-3-2 キラ



図V-3-3 ハーフ・キラを着た織物店の女性



図V-3-4 ジャンベ氏



図V-3-5 機織り実演

VI 女性支援に向けた商品開発 —職業訓練校の女子学生による生活雑貨の商品化—

高増 雅子
TAKAMASU Masako

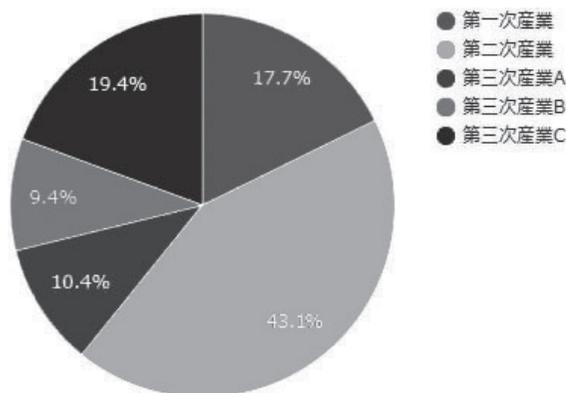
1. はじめに

1) ブータンの産業と経済

ブータン国内の産業をみると、GDP 構成比では、第一次産業（農林水産）が17.7%、第二次産業（鉱業、製造、建設、電力）43.1%、第三次産業 A（卸売、小売、運輸）10.4%、第三次産業 B（飲食、宿泊）9.4%、第三次産業 C（情報通信、金融、不動産、その他サービス）19.4%である。また、主要産業には、セメント、木材製品、加工果実、アルコール飲料、炭化カルシウムなどの生産業がある。

ブータンの経済において、第一次産業の農林水産業の GDP 構成比に占める割合は少ないが、国民の多くは、農業に従事している。ブータン国民にとって、農業が一番主要な生計の手段で、畜産業がそれに続く。チーズやバター、ミルクといった乳製品は、農民の主食となっているだけでなく、収入源にもなっている。ブータン農林省が推進している農民の共同組合によって、自分たちで生産した農作物を簡単に取引できる場所が、整備されてきている。主な穀物は、米、トウモロコシ、小麦、ソバ等であるが、現金収入を目的として、ジャガイモ、リンゴ、オレンジ、カルダモン、生姜、唐辛子などの野菜や果物も、作られている（図VI-1-1）。

ブータンは森林資源にも恵まれているので、古くからその資源を活用しており、籐や竹でできた製品はブータン人の収入源となっている。こうした多様な製品は、都市部の住人や旅行者に向けて生産されているものが多い。現在、ブータン経済に大きく貢献している産業は、第三次産業の観光産業である。1975年に国が率先して観光開発を始めてから、ブータンの観光産業はめざましく拡大化してきている。ブータンは、観光産業によって収益を得てきただけでなく、教育を受けた人材の雇用の場を観光産業が生み出している。

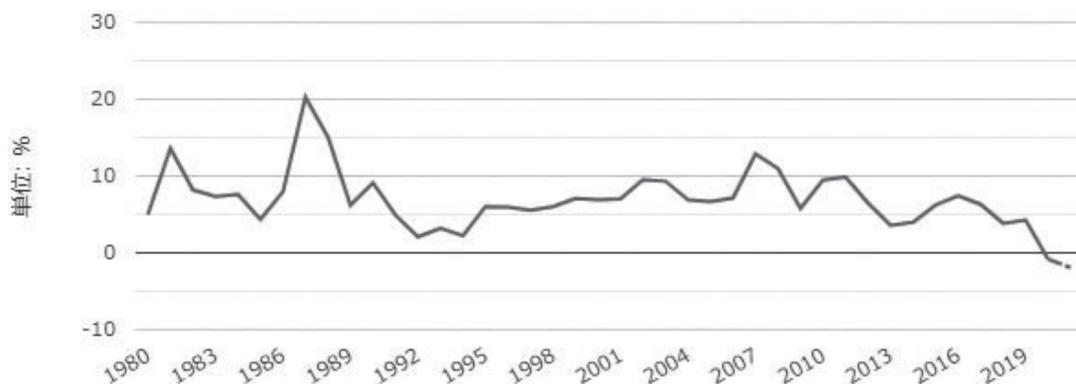


図VI-1-1 ブータンの産業別 GDP 構成比 出典：CIA “The World Factbook” 2018

しかし、ブータンの財政に最も大きく貢献しているのは、第二次産業の電力部門である。Chhukha 水力発電会社、Tala 水力発電会社、Baso Chu 水力発電会社、Kurichu 水力発電会社は、Druk Green power Corporation の傘下であり、1500メガワットの電力を生産する巨大事業となっている。生産された電力は、ほとんど隣国のインドに輸出されている。

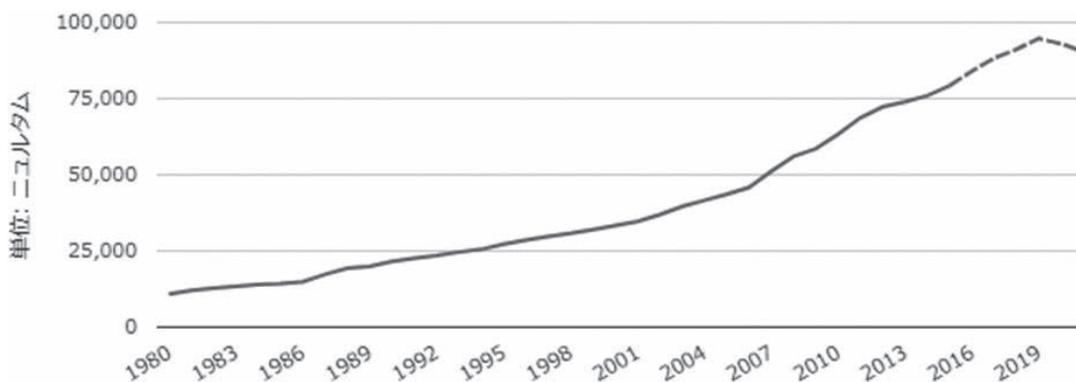
その他の主要産業の一部は Pasakha で生産されており、セメント、炭化カルシウム、スチール、フェロシリコン、材木産業などである。急激な経済成長の結果、ブータンの一人当たり国民所得は、南アジアの中では高い水準に位置しており、US\$1,321である。また、ブータンの経済成長率の推移を見ていくと、2020年度は、-0.82%で、世界順位で見えていくと192か国中、41位とわりに高い位置にある。しかし、実質 GDP（自国通貨）は、693億ニュルタム、GDP（US ドル）換算では90億 US ドル、世界で192か国中159位にある（2018年）。

ブータン政府の統計年鑑（2016年）によると、2015年の労働力参加率は女性55.9%（2014年は54.8%）、男性は71.2%（2014年は71.0%）となっている。失業率（2015年）は女性3.1%が男性1.8%を上回り、特に青年女性（20～24歳）の失業率が圧倒的に高くなっており、青年女性が新たな就職先を見つけることが難しくなりつつある（図VI-1-4）。



図VI-1-2 ブータンの経済成長率の推移

出典：IMF “World Economic Outlook Databases” 2021 SNA に基づいたデータ



図VI-1-3 ブータンの一人当たりの実質 GDP(自国通貨)の推移

出典：CIA “The World Factbook” 2018



図 VI-1-4 ブータンの失業率の推移

出典：IMF “World Economic Outlook Databases” 2021

2) 女性の就労について

ブータンの女性は、家事だけではなく仕事もち、家庭での主な収入源となりつつある。近年、女性も政治や政治に参加するようになってきた。ブータン政府の中にも、レッドスカーフダシヨスを含む多くの女性政府高官が在籍している。リヨンポ女史は、2013年に第一代女性大臣に就任した。女性の職業としては、医師、歯科医、技術者、パイロット、法執行機関、および公務員と、種々様々な業種に拡大してきている。ツェリング・トブガイ首相は「ミート・ザ・プレス」セッションで、2016年、ブータンの公務員26,954人のうち、35.5%が女性であると述べた。これは10年前と比較すると、77%の増加になっている。

しかし、女性の失業率は男性の失業率1.8%に比べて3.1%と高く、また同じ仕事についても、男性と比較すると昇級が遅い傾向にある。また、女性は公務員全体の35.5%を占めているが、役員や専門職を務めた女性は、わずか10%に過ぎない。

2015年の労働力調査報告書によると、男性184,574人に対し、約159,919人の女性労働者であった。この調査では、労働力としては男性71.2%、女性が55.9%であったので、労働力の面でも、男女格差が見られた。報告書では、女性の職種として30.5%を占める農業や林業などの低賃金のセクターで働いている女性が多いため、男性の雇用と比較すると、賃金が低くなる傾向があると分析していた。

ブータンの開発に、女性の社会参加を意識的に含めることは、1981年に設立されたブータン全女性協会 (NWAB) の第5計画 (1981-1987) に、記載されている。NWABは、女性の起業家、協同組合、経済コミュニティグループを奨励することによって、女性にエンパワメントをつけることを目的としている。それは機織りのための織り手の職業訓練を開始し、また、女性が経済活動を行うのを支援し、活動を支えるためのプロジェクトを立ち上げている。

2012年、ブータン女性エンパワーメントネットワーク (BNEW) は、市民社会組織として登録され、ブータンの行政でのリーダーシップ、対等なパートナーとして参加する女性のネットワーキングとリーダーシップを強化するために、積極的な役割を果たしているといわれている。

3) 職業教育と伝統工芸

ブータンでは、子どもたちに11年間の基礎教育が無償でおこなわれる。しかし、ブータン成人女性の識字率は、男性71%に対し、55%と低い(2015年)。一方、女子の初等教育における修了率は、男子の91%に比べ100%と高く、女子の初等教育の達成率に関しては、他の開発途上国とは異なっている点でもある。

基礎教育終了後の職業訓練として、ブータン国内に職業訓練校が8校あり、希望する生徒は中等教育レベル終了後に職業訓練校に入学しているが、女子は男子の半分以下の入学数である。職業訓練校の女子に向けての専攻科目としては、機織り、衣服制作、調理、美容などの技術を指導し、女性の自立を支援する教育がされている。しかし、そのような教育を行っている職業訓練校は、主として都市部での訓練校に限られている。

職業訓練校では、ブータンで昔から守られてきた13の伝統芸術・工芸の技術が伝承されているが、正式に分類がなされたのは、ブータン第4代目の統治者、Gyalse Tenzin Rabgayの時代と言われている。

女性が多く携わっている伝統工芸の一つに、Troe ko(装飾)がある。ブータンの女性は装飾を様々な場面や儀式で使う。装飾を作る伝統は現代でも盛んにおこなわれており、美しい装飾を作る職人は、Tro Ko Lopenと呼ばれ、尊敬されている。職人は、珊瑚やターコイズや金や銀を使い、美しい装飾を作り、ネックレス、バンドル、イヤリング、指輪、ブローチ、儀式で使う魔除、ビンロウの入れ物など、色々なものがある。

Tzhem zoとして知られる仕立ての工芸は、ブータン人にとって親しみ深いものではあるが、本来、他国では女性の仕事とされる分野が、ブータンでは男性の職業として、伝統後継の継承を担っている。Tzhem zoは、Tshem drupと呼ばれる刺繍の工芸品、Ihem drupと呼ばれるアップリケの工芸品、そしてTsho Ihamと呼ばれるブータン人の伝統的なブーツの工芸品に分類することができる。刺繍やアップリケの工芸品は、主に男性の修行僧によって受け継がれている。これらを使って、彼らはThangkasという巻物を作っている。伝統的なブーツも、主に男性が作っている。公務員が特別な行事や集まりのときに履くブーツは、皮と布でできており、ブーツ作りは古くからの伝統工芸であるが、その起源は知られていない。田舎の村で特別に許可された職人のみが、なめしていない皮を使ってシンプルなブーツを作る。この習慣は、今ではすっかり村では見られなくなってきたが、最近になって都市部にある職業訓練センターで、政府の支援をうけて、ブーツづくりが取り上げられ始めている。

三つ目のカテゴリーとして、ブータン人の伝統的な服を縫って作る、仕立ての工芸がある。ゴーヤキラとして知られており、これは、女性の伝統的な仕事となっている。

Thag zo(織物)は、ブータン人の生活の一部にもなっている仕事でもある。織物工芸は、ブータンでは広く家庭で受け継がれており、特に東ブータンの女性は織物の技術が高く、彼女たちが作った織物の一部は、高い値で売買されている。以前、織物は現金の代わりに政府に税金として納められており、西ブータンの人々は織物を買うために、サムドップジョンカルまでの道のりを、わざわざ旅してきたといわれている。織物は、綿、生綿、絹を材料に作られ、入り組んだモチーフが描かれているものが多い。

機織機には四つの種類があり、東ブータンではブラックストラップというタイプの機織機が主流になっている。他のタイプの機織機がチベットからもたらされたものである一方、ブラックストラップタイプの機織機は、ブータン固有のものとされている。

4) チョキ伝統工芸美術学校

チョキ伝統工芸美術学校は、ブータンの首都であるティンブーの郊外カサペの農村地域に位置している。現校長 Ms. Sonam Chok の父 Thrimdep Choki Dorji 氏が1999年に始めた私立の職業訓練学校で、全世界から寄付を募り、学生への教育は無償で行われている。

現在、学生は169名在籍しており、女子学生は全学生の28%にあたる47名が在籍しており、15歳から25歳の学生が、6年間の寄宿舎生活を送っている。男子中心であった職業訓練を、女子にも門戸を開いたのは、ブータンではチョキ伝統美術学校が最初である（図VI-1-5）。

在籍している女子の数は、まだまだ男子と比較すると少ないが、農村部の女子に技術を習得できる学校というのは、ブータンにはまだ少なく、また無償で教育する学校も少ない。そのような中で、チョキ伝統工芸美術学校は、女子の伝統工芸技術の習得により、卒業後の現金収入の道を作るとともに、女子の地位の向上にも、貢献しているとのことであった。

学生の一日は、午前5時30分に起床し、身支度をしてから朝のお祈りをする。お祈りの後、彼らは「多目的ホール」で朝食を食べ、その日の準備をする。学生は、専攻するクラスごとに授業を受け、ブータンの伝統工芸技術を時間をかけて学ぶ。昼休み後は、伝統工芸クラスの外、英語、ゾンカ、数学の授業があり、学生が自ら卒業後の生活設計するためのスキルを身につける学習も、行っている。夕食後は、学内清掃などの奉仕活動をしたり、スポーツをしたりするための自由時間となっている。

今回、女子学生による生活雑貨の商品化プログラムに参加してくれた学生、チョキ伝統工芸美術学校の子学生は、伝統的な刺繍の工芸品、アップリケの工芸品、仕立ての工芸品、織物の技術を



図VI-1-5 機織り実演チョキ伝統工芸美術学校で学ぶ女子学生達

習得するために、毎日寄宿生活を送りながら学生生活を送っている学生たちである（図VI-1-5）。チョコアートスクールの校長である Ms.Sonam Choki は、つねに「女性に伝統的な工芸技術の習得を」という教育方針をもつ校長であり、今回の女子学生による生活雑貨の商品化プログラム実施にも、快く承諾をしてくれた。

2. 女子学生による生活雑貨の商品化プログラムへの準備

1) ティンパー市内での市場調査

女子学生による生活雑貨の商品化プログラムは、開発途上国における女性や若者が、生活向上や現金収入を得るための技術や知識の伝達等の教育の場である職業訓練所等で、女性支援の視点で販売し利益を得ることのできる商品を開発するためのプログラムで、今回は、プログラムの内容と可能性について、実証研究を通して検討することを目的とした。

通常、商品開発の流れとしては、

1. 消費者のニーズの収集
2. 経験者に聞く
3. 商品計画を立てる
4. 商品の試作
5. 価格の設定
6. 試作品の評価
7. 新商品の決定

の順に計画を進めていく。今回も、この手順に従ってプログラムを作成した。

また、開発した商品の製造販売に向けては、

- ・衛生管理に細心の注意
- ・法令、規則の遵守、
- ・安定した品質
- ・原価計算、
- ・売れる商品作り

など、商品開発に当たっては、考えなければいけない事項は多々ある。



図VI-2-1 NCWC 主催の講習会参加者の店主への聞き取り調査



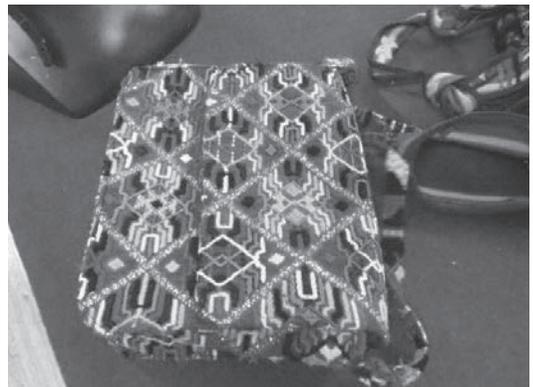
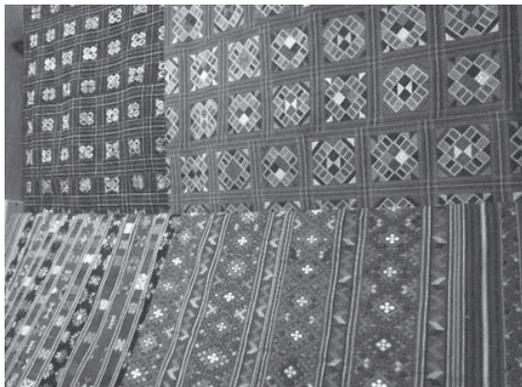
図VI-2-2 市場調査(ティンブー市内クラフトマーケット)

2018年に、ブータンでのNPO、NGOによる女性支援の現状や、そこで扱われている商品について、市場調査を行った。

具体的には、ティンブーを中心に、保健省公衆保健局や国立伝統織物博物館、NCWC事務所、JICAより紹介されたバスステーションで、女性支援団体の講習を受け売店、有機野菜を栽培して道の駅に出している女性たちに、インタビュー調査を行った。また、ティンブー市内飲食店・サブジマーケット(センチュリーマーケット)王制100周年記念市場、中規模スーパーマーケットを調査し、そこで購買中の若者たちの行動調査も行った。

ブータンの都市部であるティンブーやパロの土産物店で売られていた商品は、美しい模様と独特の色使いの織物が多くみられた。冬場などに女性が家でする手仕事から生まれたそうだが、民族衣装の「キラ」などは何年もかけてつくられるそうだ。価格も、日本円に換算すると2000円くらいのものから、30万円以上するものまでと、価格の幅の広いものであった。また、織物を使った大判のスカーフやポーチ、クッションカバーなどの雑貨が、割に安価な値段で、土産物として多く売られていた。

織物以外では、ブータンにたくさん自生している竹で作った竹細工も、伝統工芸品として販売されていた。丁寧にしっかりと編まれた竹細工は、「バンチュン」というお弁当箱としても、現地ではよく使われている。バンチュンは、フタつきのものや、縁をレザーで補強してあるもの、カラフルに彩られたものなどバリエーションが色々あり、弁当箱だけではなく小物入れとしても、使用で



図VI-2-3 老舗ホテルの外国人向け店舗での商品

きるものであった。

竹細工の他に、木工品もプータンの伝統工芸品として売られている。中でも、「ツェチュ」という祭りで使われる木彫りのお面は、インテリア用から実際にお祭りで使用されるものまで、様々なサイズやデザインのお面が土産物店で売られていた。また、チベット仏教を信仰している人々が多数を占めるプータンでは、至るところで仏像などの仏具が売られている。中に経文を取めて回すと、お経を唱えたのと同じ功德があるという「マニ車」も、ハンディサイズのものから大きなものまで、土産物店で売られていた。

土産物として、販売している店が多く立ち並ぶのは、ティンプーやパロの街中である。路上の左右に大小さまざまな店舗で、同じような土産物を売る店が立ち並んでいる。ティンプーのホテルタージ・タシの近くで、竹で編まれた小屋が立ち並んでいる。ここは、クラフトマーケットといい、政府の管轄の国営マーケットになる。扱っている商品の質はそれぞれであるが、数多く様々な店が出店しているので、色々と品物を比較するには、最適なマーケットである（図VI-2-2）。

一方、プータンでも老舗ホテル内の土産物売り場をみると、外国人向けの品の良い商品が多々並んでいた。ただし商品の価格は、ティンプー市内の土産物店の2倍近い価格となっていた（図VI-2-3）。

2) ブータン土産としての食品

食品のブータン土産物は、ブータンで作られている農産物と畜産物を主原料としたものが主となっている。ティンブーの大型のスーパーに行くと、酒類をブータン土産物として勧められる。ウイスキーは、南部の退役軍人のための事業として製造されている「スペシャル・クーリエ」「KS」のウイスキーや、ブータンで作られているピーチブランデーなどがあり、価格は安く、味もよいと評価されている。

価格が安くて、軽い商品としては、乾燥唐辛子や乾燥松茸、乾燥チーズなどの乾物がある。ブータンの特産品の中でも、一番日本人の間で話題になっているのは松茸である。日本では高級品の松茸ではあるが、ブータンでは安価で質のいい松茸を手に入れることができる。乾燥マツタケでも、日本産のものに、ひけを取らないくらいの香りの高さをもっている。ただし、乾燥松茸を喜んで買うのは、日本人だけとも聞いた。乾燥マツタケは100gで2500Rs. (約4,250円) 前後、生マツタケは1kg、100ドル前後で販売されていた。

道の駅などで売られているのが「チュゴ」である。この白い塊は、干しチーズで、ヤクの乳から作ったカッテージチーズを干したものである。干してある姿を見ると、高野豆腐や氷餅を連想してしまう。食味は、ほんの少し牛乳とは違ったクセがあり、ごく自然な乳の食をじんわり味わうことができる商品である。「チュゴ」は、石のように固く、口の中に入れてもなかなかとげづらい。4000メートル近くの高地でヤクを放牧し、その乳から作られるのが「チュゴ」である。



図VI-2-4 ティンブーで売られている土産物用食品 (右上がチュゴ) (再掲図Ⅲ-2-3)



図VI-2-5 ティンブー市内の有機農産物の販売店と店内の様子（再掲図Ⅲ-5-1）

ブータンのはちみつは、無添加で加熱処理を行っておらず、19%以下の水分量を維持している。主な産地は、ブータンのプムタン地方（中央ブータン）ジャカル（Jakar）のあたりで作られており、主にそばの花からとったはちみつが多い。

スーパーなどで売られている「ザウ」は、水でふやかしたお米を、フライパンなどで炒ったもので、ブータンのお茶請けのお菓子である。「ザウ」は、香ばしい素朴な味わいで、日本の「あられ」に近い味がする。スーパーで売られている「ザウ」は、安価なので、購入して、ブータン土産として小分けにして配るのも良いのではと思った。スーパーや土産物店、道の駅で売られている食品に関して言えば、あまりこれと言ってブータンのお土産として買いたいと思うものは、少ないのではと感じた（図VI-2-4）。

日本のJICAの支援で、ティンブー市内で有機農産物及び加工品を扱う店を見学した。店内は、他のスーパーや商店とは異なり、棚や陳列の方法もすっきりとしていた。商品も手に取りやすく、また比較することもできた。ただし、商品の価格は、街中の土産店やスーパーと比較すると1.5倍位の価格であった。手作りの菓子類は、前出のスーパーのものとあまり変わらない風体であった。本来、商品には欠かせない内容物の表示、生産日、生産者の住所表示等の情報が、手作りながらシールで商品に貼られていた（図VI-2-5・図VI-2-6）。



図VI-2-6 有機農産物販売店で販売されていた菓子類（再掲Ⅲ-5-6）

3. 女子学生による生活雑貨の商品化プログラムの実施

1) プログラムの内容

主にティンブー、パロの外国人を対象とした土産物店やスーパー等で、ブータンの生活雑貨で、外国人向けのお土産になりそうな商品調査を行った結果、あまり買って帰りたいと思うお土産が少ないことが判明した。

この結果を踏まえ、2019年度は、チョキ伝統工芸美術学校で、女子学生による生活雑貨の商品化の提案を行った。これまでも、伝統工芸美術学校では、生徒の作品を校内の売店で、学校を見学に来た欧米やアジアの観光客を対象に販売していたが、売れる商品は、男子学生が作成した仏教にまつわる壁掛けや彫刻が主であった。女子学生が作る鍋敷きやコースター、ペンケース、葉、エコバック等は、型紙もないままに、フリーハンドで作るものが多く、規格化はされておらず、なかなか購買意欲がわく商品には、ほど遠いものが多かった。

そこで、本学被服学科の教員に、消費者のニーズの収集の仕方、商品について経験者に聞く、商品計画を立てるといふ、商品のデザイン・消費者ニーズ等について、女子学生対象に、講義をしていただく。

それとともに、本学食物科及び家政経済学科の教員により、簡単に作れる商品を決め、商品の試作を行い、価格の設定をするとともに、試作品の評価を行うという行程を実際に女子学生に体験し

てもらう。

実習とともに、商品の製造販売に向けて、衛生管理に細心の注意や法令、規則の遵守、安定した品質、原価計算、売れる商品作りについての講義、およびディスカッションも行っていく。

一方、途上国においてコストをかけずに商品化するものとして、一番多く行われている食品加工については、旅行者からの聞き取りで、「ばらまき用の個別包装されていて、プータンらしさが伝わる商品を」というニーズが挙げられていた。確かに、ティンプーやパロの土産店では、ばらまき用と思われる商品は、あまり見かけることがなかった。

試作する商品として、昨年、有機農産物を扱う販売店からのヒントで、プータン特産の安価なそば粉とバターを使った簡単なクッキーづくりを、女子学生に体験してもらうことを提案した。また、女子学生の中にはヒンズー教徒や仏教徒も多いことから、ベジタリアン用とノンベジタリアン用のクッキー2種を試作することを提案した。

プータンでは、商品に対する情報、内容表示や賞味期限・消費期限の表示・製造責任者の住所表示等が表記されていないので、そのことについても、どのように表記したら買ってくれた人に情報が伝わるか、また、どのようなパッケージにしたら、購入したいと思うかについても学生に考えてもらうこととした。

2) プログラムの実施

学生たちは、調理実習というものを経験したことがなく、またその設備もチョコキ伝統工芸美術学校にはなかった。そのため、事前に現地で調理用具、材料を購入するとともに、オープン等を旅行社のコーディネーターの方に用意してもらった。また、包装用の小物等は、日本より持参した。

学生達に、講堂に集ってもらい、まずは、本学被服学科の教授による講義を行った。自分たちが作った商品と、日本から持参した商品との違い、もちろん文化の違いはあることが前提ではあるが、商品のデザイン性や機能性の必要性・消費者が買いたいと思うポイントについて、ディスカッションを行った。女子学生は、実際に日本で商品化されたブックカバーやバック等を手に取りながら、自分たちで作る商品、その製法、デザイン等について、ディスカッションしていったが、あまりはっきりと自分の意見をみんなの前で積極的に話す学生は少なかった。しかし、仲間同士や講師に対して、興味を持ったこと等について質問したり、意見をいう学生が少しずつではあるが見られ



図VI-3-1 生活雑貨のデザイン性や機能についての講義の様子



図VI-3-2 女子学生によるクッキーづくり



図VI-3-3 女子学生による製作物の評価

た。ただ、このようなディスカッションの進め方に慣れていないせいか、自分たちでの商品のアイデアや現在作られている商品への改善案は、学生の方からはあまり出てこなかった。

続いて、商品化の具体例として、クッキーづくりの説明を行い、実習を行った。学生たちには、まず制作にあたり衛生面の徹底（手洗い）、作業のしやすい環境づくり、パッケージの工夫について簡単に講義を行った。何よりも、作っていて楽しいという感覚を実感してもらうため、学生主体の実習を行っていった。クッキーづくりは生まれて初めて行う学生がほとんどであった。戸惑いがある中で、学生たちは、もともと伝統工芸を行っているせいか、とても手先が器用であり、クッキーの形も自分たちが思いつくブータンらしい模様や形で作っていた。会場となった講堂は電圧の不安定であること、人数のわりに、使用できるオープンが小さなもの2つしかないなど、制作には、少々手間取っていたが、学生たちは、とても楽しそうに作業を行っていた（図VI-3-2・図VI-3-3）。

時間はかかったが、出来上がったクッキーを前に自分たちで評価を行い、実食をもらった。その後、商品化ということで、パッケージ詰め及びシールの作成を行った。



図VI-3-4 女子学生によるクッキーのパッケージ詰め（再掲Ⅲ-6-4）

4. おわりに

今回、女子学生がわりに多く集まってもらえるチョコキ伝統工芸美術学校で、プログラムを実施した。以前、JICAのプログラムで日本に來日している途上国の方たちを対象に、地場産物の商品化というプログラムを行った。その時にも感じたことではあるが、自分たちが食べておいしいというものを作りたいという気持ちはよくわかるが、材料はというと、小麦粉を使った製品が多くなり、パンを作りたいという意見が多くです。しかし、自分たちの住んでいるところで小麦粉が生産できるのかというと、海外から輸入してきた小麦粉を使ってと安易に考える方が多かったです。やはり、持続可能性の問題や商品の単価、利益率等を考えると、自分たちの住んでいる地域で生産されている農産物を使うということが、商品化の大前提になる。このことを講義では話させてもらったが、果たしてどのくらいの学生が心にとめてくれたかは、わからなかった。

プログラム実施後、「家族や知人にも作ってあげたい」という学生の意見も多く聞かれた。今回は、こちらからの提案で行ったプログラムであったが、クッキーのデザインについては、ボタンらしい形を作ったりしているのを見ると、商品化できるのではと感じた。しかし、商品化するためのパッケージや売り方については、学生達自身で、もう少し考える時間が必要なのではと感じた。

今後の女性支援としての商品開発の課題として、ハードの整備（オープン・製菓器具の充足）、資料・情報の収集（テキスト・関連誌等で情報の収集）、マーケティング（自分たちの作れるもの



図VI-4-1 女子学生が作った織りや色彩のすばらしさを商品に！

ではなく、消費者のほしいものとは何かを考える)、スキルの形成(質の良い製品とはなにかを考える)、販売意欲等が挙げられるのではと考える。

ブータンの女子学生には、素晴らしいスキルが備わっており、手先も器用で、技術の習得も早い。このような加工食品の制作はほぼ初めての学生が多かった中、今回のプログラム実施した結果を踏まえ、2021年には、女子学生の意見をもっと取り入れながら、学生のみで製作でき、実際に店頭で販売し、利益を上げられる商品開発へとつなげていきたいと考える。

参考・引用文献

- ・独立行政法人国際協力機構『国別ジェンダー情報整備調査(ブータン王国)』2017
- ・Ugyen Wangchuk Punap “*BHUTANESE COOKBOOK*” JOMO Publications, 2014
- ・UNICEF, WHO and the World Bank Group “*Levels and trends in child malnutrition UNICEF / WHO / World Bank Group Joint Child Malnutrition Estimates Key findings of the 2019 edition*” 2019
- ・UNICEF, WHO and the World Bank Group “*Levels and trends in child malnutrition UNICEF / WHO / World Bank Group Joint Child Malnutrition Estimates Key findings of the 2020 edition*” 2020
- ・IMF “*World Economic Outlook Databases*” 2021

〔編集後記〕

日本女子大学総合研究所は、1995年4月1日の発足から、27年経った。発足以来、本学固有の研究及び学際的協働研究の推進を図るために、毎年、公募して本年度までで、すでに79件の研究課題を採用し、各プロジェクトは、それぞれ2～3年にわたる研究の成果を「紀要」に掲載してきている。

今年度も、研究課題68の「日本女子大学・附属校の服装規範の変遷—女子学生の服装と制服、イギリス、フランスの「女らしさ」と比較して—」では、日本女子大学・附属校の制服規範の変遷を、イギリスやフランスの制服との比較を行っている。研究課題70の「日本女子大学の草創期における欧米思想の受容—女性の自立と平和の結びつきをめぐって—」では、今まで研究対象とされてこなかったシカゴ大学と本学草創期の同窓生（田中孝子、井上秀、大橋広）、及び本学との結びつきについて浮き彫りにしている。研究課題71の「アジアの女性の自立に向けた調査研究—家政学からのアプローチ—」では、個人・家族・コミュニティの最適で持続可能な生活を目指す家政学的見地から、ブータン王国の女性の自立に向けたニーズの把握・分析を行い、現地で教育や地域社会活動に貢献できる手法の検討と構築を行っている。

今後も、本研究所は、これまで掲げてきた目的をより徹底して遂行するとともに、グローバル化している学問・研究の今日的状況を鑑み、より広い視野に立つ研究の拠点ともなりうるよう衆知をあつめ、研鑽を積んでいかなければと考える。大方のご教示・ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。 高増雅子、橋本のぞみ、古澤彩子、井田真理奈

日本女子大学総合研究所紀要 第24号

2022(令和4年)年2月28日 発行

発行人 高増雅子

発行所 日本女子大学総合研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号

電話 03 (5981) 3277 (直通・FAX)

印刷所 メディア・パック

〒178-0061 東京都練馬区大泉学園町6丁目13番20号

電話 03 (5947) 9135
